

国士舘大学審査学位論文

「近代国民国家の形成と博覧会の役割

—西洋、日本及びインドネシアの比較研究—」

M.ジャクファル・イドルス

平成 30 年度 博士論文

専修科目 アジア地域研究

指導教授 佐藤 圭一 教授

論題

近代国民国家の形成と博覧会の役割

—西洋、日本及びインドネシアの比較研究—

The Formation of Modern Nation-State and The Role of Exhibition

—Comparative Study on Western Countries, Japan and Indonesia—

国士舘大学大学院 政治学研究科 博士課程

平成 22 年入学

学生氏名 M.ジャクファル・イドルス

M. Jakfar Idrus

近代国民国家の形成と博覧会の役割

—西洋、日本及びインドネシアの比較研究—

序論—問題の所在	1
博覧会の種類について	5
第 I 部 西欧における博覧会の開催とその役割	6
第 1 章 万国博覧会前史：西欧における「知」の確立と博物学的空間の誕生	6
第 1 節 西欧における近代国家の形成と西欧勢力の拡大	6
第 2 節 西欧国家による「世界発見」と博物学的施設の登場	11
第 3 節 西欧における博物学の確立と博物学空間の意味	17
第 2 章 西欧国家における産業博覧会の展開とその性格	23
第 1 節 西欧近代国家の展開と博覧会の特徴	23
第 2 節 1851 年イギリス大博覧会と万国博覧会の展開	34
第 3 章 西洋帝国主義国家における万国博覧会の流行とその意味	39
第 1 節 帝国主義国家による万国博覧会の拡大	39
第 2 節 1851 年ロンドン大博覧会以降の西欧における万国博覧会の展開	46
第 3 節 20 世紀西洋における帝国主義の拡大と万国博覧会の役割	57
小結	70
第 II 部 日本における博覧会の開催とその役割	74
第 4 章 近代日本における国家の課題と博覧会の位置付け	74
第 1 節 明治期日本の国家政策と博覧会博物学政策	74

第2節	使節団の万国博覧会経験とその世界認識	78
第5章	近代日本の万国博覧会への参加と国内博覧会の開催	85
第1節	明治日本の万国博覧会への参加とその意味	85
第2節	日本国内における博覧会の開催とその性格	97
第6章	日本帝国における博覧会の展開とその政治的役割	113
第1節	第2次世界大戦前期における日本帝国の展開とその課題	113
第2節	日本における内国博覧会開催とその性格	115
第3節	帝国主義日本における博覧会の変容とその役割	126
	小結	146
第III部	オランダ領東インドにおける植民地政策と博覧会	149
第7章	オランダ領東インドにおけるオランダ植民地政策と植民地国家の成立	149
第1節	東インド諸島とオランダの進出	149
第2節	19世紀オランダ領東インドにおける植民地政策と社会構造 ..	154
第3節	20世紀植民地政策の転換と東インド植民地国家の成立と「インドネシア」の民族意識	159
第8章	オランダ領東インドにおける博覧会の開催とその内容	165
第1節	オランダによる植民地政策の展開と博物学的政策	165
第2節	万国博覧会におけるオランダ領東インドの演出	171
第3節	オランダ領東インドにおける博覧会の開催とその内容	184
第9章	インドネシア・ナショナリズムと博覧会	198
第1節	国際博覧会の開催とその役割	198
第2節	国内博覧会の開催とその役割	201

第3節 植民地からの開放と博物館・博覧会	205
小結	215
第10章 結論	217
参考文献	224
付録	236

序論―問題の所在

第二次世界大戦後、世界各地には次々と国民国家が誕生し、まさに 20 世紀は「国民国家を規範原理とした時代」であった。しかし、これら国家の多くは、その領土的基盤を植民地時代に求めて成立したという背景もあり、潜在的に文化的・宗教的・民族的対立を内包していた。東西冷戦体制の崩壊後には、さらに緊張が激化し、世界各地の国内紛争にまで発展する事例も少なくなかった。国民国家を再定義する必要性に迫られたのは、それまでの国民国家の基盤が揺らぎ、その理論やシステムに歪みが生じ、従来の定義を用いた解釈が極めて困難となった結果である。

旧来の政治理論では、国民国家とは歴史や文化を共有する地域的政治共同体が自然に発展した結果として形成されたものであると定義されることが多かった。しかし、このような国民国家論は今では多くの研究者によって強く批判されるようになっていく。その批判に共通している考え方は、国民という概念が極めて新しく、また一定の政治的意図の下に作られたものであるという点にある。ベネディクト・アンダーソンによる「想像の共同体」論はその先駆的業績の代表例である。アンダーソンによれば「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体であり、それは本来的に限定され、かつ主権的なもの―最高意思決定主体―として想像される」¹とし、また「歴史家の客観的な目には国民が近代的と見えるのに、ナショナリストの主観的な目にはそれが古い存在と見える」と国民という概念の虚構性について論じた²。

18 世紀にヨーロッパで近代市民社会の形成とともに近代国家システムとして国民国家が誕生した。19 世紀末までに、ヨーロッパの主権国家のほとんどは、植民地支配を軸とした帝国主義国家体制の下で国民国家に生まれ変わった。第 2 次世界大戦後になると、アジア・アフリカなどの各植民地は帝国主義やそれに続く植民地支配に代わり、民族主義独立運動、脱植民地化などによって独立

¹ ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』書籍工房早山、2009 年、24 頁。

² 同上書、22 頁。

国家が次々と誕生した。その結果、この国民国家は世界で承認された規範原理として南極大陸を除いて世界各地に拡がり、分割している³。

主権国家として独立し、国家の主権者は国民であり、国民になる集団的主体が存在しているという、国民国家が成立するための三つの条件において、「国民」という存在は必要不可欠である⁴。しかし、国民国家において必要不可欠な要素であるはずの「国民」という存在は、確実に存在しているが、同時に曖昧な存在でもある。このような現状から考えると、国民という存在は非常に不安定なものとならざるを得ない。その結果、国民国家を形成し、それを存続させて行くためには可能な限り安定した存在としての国民を創り出すことが重要な課題となる。そのためには、異なった文化的価値観を持ち、あるいは異なる階級にある人々の対立によって生じる国家分裂の危機を克服するため、人々をひとつの歴史的運命共同体に結集させる必要があった。そのため、それらの国々は国民共通の言語としての「国語」を制定し、国の地理・歴史を中心とした義務教育制度を確立し、愛国教育を含めた国民教育の普及やナショナリズムの運動を通して、人々のなかに「国民」意識をより強く「イメージ」させ、促進し、定着させて行く政策を採用する。

アンダーソンは国民国家の形成過程において重要な役割を果たすさまざまな要素を挙げている。そのなかで、アジア、アフリカの植民地世界における公定ナショナリズムが人口調査、地図、博物館といった制度の相互作用により、植民地国家がその支配領域を想像する仕組みの基礎を築いたことを指摘している⁵。

博物館や博覧会という視覚に訴える文化的「装置」はこうした国民形成の機能をもつ重要な政治的機関として重視されてきた。また、西欧列強による植民地分割によって「国境」という概念が登場し、地図によって境界が視覚化されることによって国民意識が形成されていく。地図が国民形成のシンボルであり、

³ 土屋健治「ナショナリズムと国民国家の時代」『講座現代アジア1—ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会、34-36頁参照。

⁴ 山影進「ナショナリズムと国民国家」『民族に関する基礎研究』総合研究開発機構、1993年、74頁。

⁵ ベネディクト・アンダーソン、前掲書、274頁。

「地理的身体（ジオボディ）」⁶をイメージさせる表象の「装置」としての役割を担っていることを表している。

本論文では、こうした国民国家の形成の過程において博覧会が果たした役割に焦点を当てる。博覧会という「装置」が発想された西洋帝国主義国家、西洋に大きく遅れて近代化を始め、西欧各国を目標として西欧に並ぶ近代国家・帝国主義国家の達成に全力をあげた日本、西欧帝国主義国家オランダ植民地であったオランダ領東インドから独立を達成したインドネシアを事例として検討を行う。

19世紀から20世紀にかけて、僅か一世紀の間で世界の構造は大きく変化を遂げた。この時代は帝国主義時代であり、強者と弱者、先進と後進、「野蛮」と「文明」といった世界のカテゴリー化など、オリエンタリズムを底流として西欧中心とした世界の一元化がみられた時代でもあった。このような構造はさらに拡大し、20世紀初頭まで、世界が少数の帝国主義国家によって植民地として分割もしくは再分割され、支配・被支配者の構図が形成されてきた。その構図は、思考・行動様式を含めた「文化」や、血のつながりや、地域共通性による「科学」や「歴史」を拠り所として「聖性」を付与され、強化され浸透していくのである。ヨーロッパ諸国による帝国主義や植民地主義の思想は、この「聖性」という正統性を生み出した一つの「知」による「無知」の支配であった。ヨーロッパ社会において形成されてきた「知」は、とりわけ視覚的表象という装置を用いながら、西欧的概念で世界を覆っていったのである。そして、この視覚という効果がもっとも効果的に活用され、「聖性」を形成する「場」として機能したのが博覧会であった。

博覧会の内容と性格から考えれば、万国博覧会の時代は3つの区分に分けられる。(1)近代博覧会が誕生し基本的な形式が整う1780年代から1851年、(2)外国から出品者が参加し国際的な色彩を帯びる1851～1900年、そして(3)植民地分割が一段落し列強が植民地を博覧会展示物に積極的に組み込んでいく

⁶ トンチャイ・ウィニッチャクン（著）、石井米雄（訳）『地図からつくったタイー国民国家誕生の歴史』明石書店、2003年参照。

1901～1940 年である。

一方、日本は西欧列強に遅れて近代化を始め、明治維新以降、西欧の近代国民国家・帝国主義国家を目標として急速に国家基盤の整備を図っていく。明治期の日本は「文明開化」を通して西洋の文明を導入し、摂取しようとした。なかでも、博覧会を「文明開化」のシンボリックな出来事として捉えた明治政府は開国当時西欧で流行していた万国博覧会に対して西欧視察という目的で幾度も使節団を派遣した。また、日本は明治初期の 1873 年ウィーン万国博覧会以来、西欧各国で開催された万国博覧会に積極的に参加し、国内においても各地で博覧会を開催した。

万国博覧会を世界の各国「文化の比較観察の場」として理解していた日本は、出品物が近代的・西洋的なものが中心であった中で、日本の文化の主体性と個性を中心に据え、伝統的な工芸品を出展した。博覧会という「場」を通して、「日本（文化）とは何か」という自己像の形成と、自己像形成のための他者像についての認識を深めることを重視したのである。万博における日本展示は、日本文化の優秀さを海外諸国に宣伝することが目的であり、出展品は日本文化を代表する物でなければならなかった。そうした出品物が展示されることは、「われわれ」の文化であるという意識を広く普及させ、また、日本ブームやジャポニズムのように高い評価を得たことは日本文化に対するアイデンティティの形成に大きな影響を与えた。しかし、それは近代的工業製品の出品が困難であったため、西洋のオリエンタリズムを受け入れざるを得ないという側面もあったといえる。

これに対して、インドネシアはオランダ植民地政庁によって、ジャワとして万国博覧会に展示された。これはオランダ植民地政策を維持するために、ジャワの人間、ジャワの風景、ジャワの伝統芸能など前近代的かつ非文明的な世界として展示することによって、オランダはジャワに「劣等性」や「未開」というイメージを付与し、西洋の「文明」や「優秀性」を証明するための「材料」とした。まさに博覧会はオランダの植民地支配を正当化する「場」となっていたのである。

本論は、こうした西洋から発信された帝国主義的博覧会文化を、近代国民国家を目指して遅れて出発した日本、オランダ領東インドという植民地状態にあった中から後に共和国として独立してインドネシアとなった、国民国家を形成するインドネシアがどのような形で受容したのかという点に焦点を当てる。

博覧会の種類について

本論では、18 世紀中葉の初期博覧会から 20 世紀の万国博覧会までを扱う。博覧会の名称は、言語そのものの違いとは別に、様々である。本論において中心的に取り上げる「万国博覧会」についても、1851 年のロンドン大博覧会は“Great Exhibition”であり、フランスでは“Exposition Universelle”という名称が用いられ、必ずしも“International”に相当する言葉が掲げられているわけではない。また、特殊な展博覧会として、例えば、アムステルダム国際植民地および輸出産品博覧会“Internationale Koloniale en Uitvoerhandel Tentoonstelling te Amsterdam”など植民地に焦点を当てた博覧会もある。本論では、議論の便宜上、「複数の国家が参加した国際的な博覧会」を「万国博覧会」というカテゴリーとして一括して扱う。ただし、植民地など特別なテーマのある博覧会については、適宜その名称も用いる。

第I部 西欧における博覧会の開催とその役割

第1章 万国博覧会前史：西欧における「知」の確立と博物学的空間の誕生

本章では、博覧会という「装置」が発明され、国民国家がそれを利用していくことになる歴史的、政治経済的背景を議論する。とりわけ、大航海時代から始まる世界の一体化によりヨーロッパ世界が新大陸やアジアなど外の世界と繋がったこと、ルネッサンスによって世界の文物を人間の理性によって捉えようとする精神が生まれたこと、そしてそれらを前提として世界のあらゆるモノを分類し系列化しようとする博物学が、そしてその分類と系列を可視化する博物学的空間が誕生したことに注目する。

第1節 西欧における近代国家の形成と西欧勢力の拡大

地中海世界、ヨーロッパ世界、イスラーム世界、南アジア世界、東南アジア世界、東アジア世界など世界史上の文明圏は、隣接しあう文明圏同士の交流や、ユーラシアの内陸交通路、海上交通路などを経た交渉や交易を行っていたものの、基本的には自己完結的に存在していた。文明圏には時代によっては膨張した時期もあるが、中国の王朝や日本の鎖国のように外部の文明との対等な交渉を拒否することもあり、バラバラに存在していた⁷。そのような世界の一体化は、15世紀末に始まり16世紀に展開されたヨーロッパ・キリスト教国の大航海時代に本格的に始まり、ルネサンス時代の科学的知見の拡大、航海技術の発達などを経て一段と進んだ。

15世紀から16世紀にかけて展開され17世紀の中頃にかけて、ヨーロッパ諸国は新航路や新大陸を発見した。ヨーロッパ勢力のアジアやアフリカ、南北アメリカの新大陸への進出が始まったことは、同時期にルネサンスおよび宗教改革とともに世界史上に大きな転換をもたらし、「近代」への道を開いた。

大航海時代は、アフリカの有力な商品、とくに黄金、香料、象牙そして奴隷

⁷ ウィリアム・H・マクニール（著）、増田義郎、佐々木昭夫（訳）『世界史（上）』中央公論新社、2012年、207-211頁。

などの産地に、北アフリカのイスラーム商人の手を経ずに直接到達することを目的にしたポルトガルはアフリカ西海岸進出に始まり、更にインド航路の開拓を成功し、それに対抗したスペインがアメリカ新大陸を「発見」し、さらにマゼランの世界周航でピークに達した⁸。それ以後は、主としてポルトガルによるインド・東南アジア進出、スペインによるアメリカ新大陸の支配が展開される。この「大航海時代」が開始されたことの要因、または背景としてあげられることは次の4点である。

- (1) ヨーロッパにおけるアジアに対する知識の拡大
- (2) 羅針盤・快速帆船・緯度航法など、遠洋航海術の発達
- (3) ヨーロッパでの肉食の普及にともなう香辛料の需要の増大
- (4) キリスト教布教熱が高まっていたこと

この動きはインドなどアジア諸国と、アメリカ新大陸の原住民に大きな変化をもたらしただけでなく、ヨーロッパ本土にも大きな変革が生じた。商業革命や価格革命がおこり、西ヨーロッパの商工業の発展と人口増加にともなって東ヨーロッパでは西ヨーロッパ向けの穀物生産に産業が特化して、農奴制が逆に強化されて半辺境化し、また新大陸のインディオに対してはスペインの強制労働が課せられて辺境化する、という世界的な「分業化」が進むこととなった。このような「近代世界システム」の成立は16世紀の大航海時代に見いだすことができる。大航海時代によってもたらされた「世界の一体化」とは、このような「世界分業システム」の成立であった⁹。

近代世界システムの発展の中で、大航海時代を先導したスペインとポルトガルは半辺境され、イギリス、オランダ、北フランスが先進的な中核地域となっていた。政治的には国境で区切られた領土を排他的に有し、統一的な国家権力が統治し、官僚機構や常備軍を持ち、国内の経済活動を保証すると共に国家が体系的な租税を徴収するという主権国家が形成され¹⁰、1648年のウェストフ

⁸ 増田義郎「大航海時代の構図」『亜細亜大学国際関係紀要』第7巻第2号、1998年、5-6頁。

⁹ I. ウォーラーステイン(著)、川北稔(訳)『近代世界システム：農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立：I』岩波書店、1981年参照。

¹⁰ ヨーロッパにおける領土獲得のための抗争、海外領土の獲得競争、宗教対立などが複

アリア条約によってヨーロッパの主権国家体制がほぼ確立した¹¹。

このような政治的経済的な変化と同時に新たな世界観が生まれ、西欧の近代的な「知」が成立していく。そして、この「知」こそが後に博覧会を生み出す博物学的空間を構成していく。

17世紀に入って、ヨーロッパでは自然科学研究の内実が著しく変化した。ルネサンス・宗教改革に伴ってそれまでの神中心の世界観の重しを取り除かれ、大航海時代の展開によって圧倒的な知識情報量の増大がもたらされ、また主権国家間の抗争は戦争を通じて新たな科学技術の開発に迫られたことを背景として、17世紀に自然科学の革新がもたらされた。また文化・思想面では、ルネサンスを経て、中世から近代へと移行する転換期であり、次の18世紀の産業革命と市民革命の始まりを準備した時代でもあった¹²。

イギリスに始まる産業革命で産業資本家が形成されると、資本家を中心とした新しく誕生した市民たちは経済活動の自由と政治的な平等を求めて、市民革命を起こす¹³。これはヨーロッパに拡大し、特にフランスが先頭に立ち、絶対主義王権が倒されたことによって、国家主権の主体は国民にあることが自覚され、次第に「国民国家」の形成が意識されるようになる。その結果「国民国家」の形成を目ざす運動として国民主義（ナショナリズム）が起こるようになる¹⁴。この過程で王権神授説に変わる国家理念として、イギリスでは17世紀前半にホッブズ、17世紀後半にロックが現れて社会契約説が説かれるようになり、18世

雑に絡み合いながら、イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガルなどで主権国家体制が形成された。ドイツは全体としての統一は遅れ、三十年戦争の後にプロイセンとオーストリアが分立する。三十年戦争を終結させた、1648年のウェストファリア条約によって、ヨーロッパの主権国家体制は確立したとされる。イタリアは外国勢力の支配と干渉を受け続け、主権国家の形成は最終的には18世紀中頃となる。また東方のロシアは18世紀に主権国家を形成した。このように各国は国境で区切られた領土を排他的に有し、統一的な国家権力が統治し、官僚や常備軍を持ち、国内の経済活動を保障するとともに国家が体系的な租税を徴収するというしくみをもった国家が主権国家といわれるものである。主権国家が形成されるようになるにつれその構成要素として「国民」が意識されるようになったが、16～18世紀段階の主権国家は、主権を国王が持ち、国王に権力が集中する「絶対王政」という政治形態を持っていた。近藤和彦（編）『西洋世界の歴史』山川出版社、2005年、132頁。

¹¹ 同上書、132頁。

¹² 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社、1994年参照。

¹³ Eric Hobsbawm, *The Age of Revolution 1789-1848*, 1st Vintage Books, 1996, p. 39.

¹⁴ Ibid., p. 53.

紀フランスのルソーによって人民が主権国家の主権者として位置づけられた。この理念は、アメリカ独立革命とフランス革命という市民革命によって実現し、この市民革命は他のヨーロッパ諸国にも広がっていくこととなる。

このように、主権国家の誕生、科学革命による近代世界観の変化、啓蒙思想による市民と文化の成長、経済社会、政治社会が西欧近代社会を形成してきた。その中心となったのは市民階級、とりわけブルジョアであった¹⁵。

18世紀のヨーロッパでは次第に農業社会から商業社会へと変化しつつあった。地域によって商業社会化の程度と進行速度は違っていたが、啓蒙の拠点となったのは、このような商業社会化が進んできた都市であり、そこで啓蒙の文化装置が生み出されていった¹⁶。宮廷のサロンは貴族が主催者であるが、そこでの役者は作家であり、音楽家であり、詩人であり、哲学者であった。アカデミーができ、議会、裁判所、大学、図書館、劇場、博物館、美術館、公園、広場、市場、プロムナード、公道、橋、カフェ、居酒屋などに人びとが集まり、保養地も栄えるようになり、サロンやクラブのような空間も生まれる。様々な書物が求められ、出版業が発達し新聞や雑誌の発行も盛んになる。様々な演技、見世物、大道芸なども登場する。これらの文化的装置がヨーロッパにおける市民的文化の基盤となった。

18世紀後半のイギリスから、綿工業（木綿工業）での手工業に替わる機械の発明、さらに蒸気機関の出現と導入、それにともなう石炭の利用という生産技術の革新とエネルギーの変革が始まった。木綿工業から始まった技術革新は、機械工業、鉄工業、石炭業といった重工業に波及し、さらに鉄道や蒸気船の実用化という交通革命をもたらすこととなる。このような工場制機械工業の成立という技術革新はヨーロッパ社会において大きな変化を生みだし、資本家と労働者という社会関係からなる資本主義を中心となる社会を確立させた¹⁷。

この産業革命もまた市民革命のように他のヨーロッパ諸国に広まっていった。

¹⁵ 田中秀夫「ヨーロッパ啓蒙—共和主義と世界市民主義を中心に—」『調査と研究：経済論叢別冊』京都大学、第34号、2010年4月、7頁。

¹⁶ 同上書、7頁。

¹⁷ 中山治一『帝国主義の展開』講談社、1990年、40-46頁。

1830 年にオランダから分離独立したベルギーが産業革命の段階に入った。さらにフランスの産業革命が続き、ついで 1840 年代にドイツの産業革命、1860 年代にアメリカの産業革命が産業革命期を迎えた。イギリス以外の国における産業革命は内在的に発生したのではなく、イギリスの技術を学びながら国家的な事業として展開された。1870 年ころから、科学理論と系統的に結びついた最新の発明が行われるようになり、産業革命は新しい広がりを見せた。こうして、西洋の工業諸国が、経済面でも軍事面でも、富と力を手に入れ、急激に増大していった¹⁸。

産業革命を達成したイギリスをはじめとする西欧諸国で成立した企業は次第に資本蓄積を進め巨大化し、大規模な原料供給地と市場を求めた。その答えは、植民地獲得であった¹⁹。これらの西欧諸国の植民地獲得はすでに 17 世紀から進んでいたが、重商主義段階の特権会社による金銀や貴重な奢侈品、嗜好品の獲得と言った活動から、企業の自由競争のもとで、自国工業の原料を安価に獲得し、さらに自国工業製品を独占的に売りつける市場としての植民地の獲得をめざし、各国が競争する時代となっていく。その植民地は本国における工業の原料の安価な供給地とされ、特定の農作物の生産に特化したプランテーションが本国人によって経営され、現地人はその労働力とされると共に、本国の工業製品の市場として二重に収奪された。

19 世紀末から 20 世紀には、資本主義がさらに膨張してホブズボームのいう帝国主義の時代にはいると、西欧諸国家における資本が過剰な状態になった。そのため投資先、より安価な労働力の供給先、そして石炭や石油などエネルギー源の確保などの目的で各国は植民地のさらなる拡大を始めた²⁰。

この帝国主義段階では、世界の一体化が急速に進み、大陸における鉄道網の建設、海上における蒸気船の実用化、電信の普及などによって世界が時間的に

¹⁸ ウィリアム・H・マクニール（著）、増田義郎、佐々木昭夫（訳）『世界史（下）』中央公論新社、2012年、200-201頁参照。

¹⁹ 中山治一、前掲書、53-54頁。

²⁰ 機会を動かすために石炭と石油は欠かせないものであり、鉄道、電車、船などを製造するのに鉄、鉛、銅などが重要なミネラルであった。特化した生産物の例としてマレー半島とスマトラ島はゴムと鉛、ブラジルはコーヒー、キューバは砂糖を生産した。Eric Hobsbawm, *The Age of Empire*, pp. 63-68.

縮まることとなった²¹。そのことは工業化を達成し、植民地を持っている国—イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、ベルギー、アメリカ—が植民地をより効率よく支配することが可能になり、植民地として搾取される側はモノカルチャー化のもとで貧困にさらされるという格差が拡大し、世界は支配する世界と支配される世界で二極化することにもなった。

20世紀にはいると、西洋帝国主義諸国家による植民地分割は最終段階に達し、もはや地球上には植民地として条件の良いところを残っておらず、他国の植民地を奪い取るしか拡張の方法はなくなった²²。この植民地獲得競争では、先行していたイギリス、フランス、アメリカに対して、遅れて帝国主義国家として登場したドイツ、イタリア、日本が挑むという植民地再分割の争いが始まる。

以上、大航海時代から植民地再分割に至る時代の西欧を中心とした世界の一体化を概観してきた。そこでは主権国家の成立、市民社会の成立、西欧的な近代「知」の成立、産業革命や科学技術の進歩を基盤とした資本主義社会の形成、そして植民地支配の発展と変質が確認された。こうした時代背景の中で博覧会に繋がる「知」の成立を次節から詳細に検討して行く。

第2節 西欧国家による「世界発見」と博物学的施設の登場

1. 大航海時代と博物学

前節で述べた一体化された近代世界が形成されたのは、封建制度の強化と人口増加によって生じた土地不足や食糧難という問題を抱えた15世紀ヨーロッパ諸国が、航海技術の向上、天文学、地図製作などの発達を背景に、その打開策として国外に新天地を求めた結果であった。大航海時代の到来は西欧社会が新たな情報と物を地球規模で流通させることを可能にし、それは新しい世界の「発見」をもたらした²³。その第一歩として踏み出したのは、地理的条件として

²¹ 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成』岩波書店、2005年、71-73頁。

²² 1800年に西洋列強は地球表面のおよそ35%を領有したが、1878年までに占領比は65%に拡大した。そして1914年までに、ヨーロッパは地球のほぼ85%を植民地、保護領、属領、自治領、連邦として維持することとなった。エドワード・W. サイド（著）、大橋洋一（訳）『文化と帝国主義1』みずず書房、1998年、38-39頁。

²³ 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社、1992年、6頁。

大西洋に面し、遠距離貿易に経験があり、そしてジェノヴァ人から投資の支援を得たポルトガルであった²⁴。1415年のポルトガルのエンリケ航海王子にはじまり、その後スペイン、オランダ、イギリスへ次々大航海時代が到来してきた。ついに1488年にバルトロメオ・ディアスが喜望峰を発見、1498年に、バスコ・ダ・ガマがインド航路を発見したのである。そして、1492年にコロンブスが「新大陸」を発見したのは決定的な出来事であった。また1499年にはアメリゴ・ヴェスプッチの南アメリカ大陸発見、1513年にはバルボアの太平洋発見、1522年にはマゼランによる世界一周などが行われた。

1492年コロンブスによるアメリカ大陸の地理上の「発見」後、経済的価値のある金銀とともに、トマトやジャガイモ、とうもろこしなどの無数の植物がヨーロッパに持ち込まれて、また、新大陸へはさまざまな穀物や野菜、そして家畜などが持ち出された。アジアやアフリカからも、新種の動植物が大量に西欧世界に持ち込まれた。そのなかに、人間そして自然界の珍しいものも入っていた。

この新世界の「発見」というプロセスを通じて様々な制度や概念が形成されるようになった。例えば、コロンブスは、「インド」を発見した証明として樹木や鳥類など「標本」を持ち帰った。1521年にメキシコを征服後、フェルナンド・コルテスも多数の鳥類や動植物などスペイン宮廷やローマ教皇庁で「見本市」を開いた。植物と動物、そして人間までも発見された「自然のもの」の一部として記録され、分類され、ヨーロッパの人々の前に配置、展示されていった²⁵。このような多様な「自然」のイメージや未知の世界との出会いによるその精神世界の拡大の結果、「異文化」や「他者」などの新たな概念の誕生がもたらされ、当時のヨーロッパの人々が認識していた「世界」の相貌は大きく変化していくことになる²⁶。この新しい世界からの「もの」を分類・分析・説明の活動から生まれた新しい学問は博物学であった。

²⁴ ウォーラーステイン、I.(著)、前掲書、41-51頁。

²⁵ 吉見俊哉、前掲書、7頁。

²⁶ 同上書、4-5頁参照。

2. ルネサンスと博物学の誕生

西欧世界における博物学の芽生えの、もう一つ要因として考えられるものはルネサンスであった。ヨーロッパ人にとっての外的世界を大きく広げたのが大航海時代の地理上の発見ならば、ルネサンスは内的な世界を大きく広げた。ルネサンスによってそれまで宗教信仰中心であった西欧の人々は、次第に教会以外にも関心を寄せるようになった。それは、一方ではキリスト教以前の古典ギリシアとローマの偉大な文明の遺産にたいする関心であり、もう一つはヨーロッパ以外の世界の自然や、異国の珍しい風習や産物に対する関心であった。ルネサンスによって人々はギリシア・ローマの復興を試み、外なる自然や世界を編成しようと努力を傾けた²⁷。ルネサンスが西欧博物学の発展と強く結びついていくことになる。

ルネサンスの運動において博物学の誕生に繋がる最初の具体的な過程は 16 世紀にまずイタリアで、ついでドイツでみられた。とくにドイツにおけるこの新しい動きは顕著であり、1530 年代から 40 年代にかけて発行された新しい植物学書がその証である。まず現れたのはストラスブルクの教師オット・ブルンフェルスの『植物活写図』である²⁸。それまで作成されたものと明確に異なるのは植物図の精巧さと正確さであった。西ヨーロッパでは、かつての植物など自然物についての書物はほとんど本草の書物であった。従来出回った貧弱な図の本草書物と比べて、ブルンフェルスが作成したものは写実的で細部まで精密に描かれていたことに加えて、当時ヨーロッパでもっとも版画印刷技術が進歩したドイツで印刷された結果、大成功におさめた²⁹。これに刺激されて、その後、より精密で多様性のある動植物の図版が回を重ねて出版された他、オランダ語、フランス語、スペイン語、などに訳され、ヨーロッパ各地に拡大するようになった。

これ以降、従来見られなかった新しいタイプの図譜が次々制作され、ヨーロ

²⁷ 西村三郎『文明のなかの博物学-西欧と日本(上)』紀伊国屋書店、1999年、234頁。

²⁸ オット・ブルンフェルス(Otto Brunfels)マインツ近くのブラウンフェルスで生まれ、マインツ大学で学ぶ。ルター派の巡回説教師として各地をまわった。1524年以降シュトラースブルクで私立学校を開きながら、神学と植物学と医学を研究する。同上書、239頁。

²⁹ 同上書、234-240頁。

ッパの人々に好評に受容され、ヨーロッパの自然観に大きな変化をもたらした。例えば、植物の場合、従来、本草・薬物として扱われていたにすぎなかったが、新しい図譜によって自然のなかに存在するモノ自体として研究され、その形状や生態などが記録された。その成果は発達した出版技術によって大型図版を含む植物書あるいは植物図譜として出版されることが可能になった。これが当時の博物学の特徴であった³⁰。

このように博物学の芽生えは西欧における人々の宗教意識の変化に裏打ちされていた。すなわち神によってもたらされた秩序ではなく自然を合理的に観察する意識が支配的になっていった。

3. 博物学的施設の登場

ルネサンス期には、科学や文芸などの見直しによって西欧世界の認識や「知」が大きく変化した。中世には、「自然における人々の見る眼が擬人的であり、しばしば魔術的・オカルト的であったのに対して、16世紀の終わり頃からそれが次第に変わってきて、次の17世紀には、そうした曖昧さと不透明さとをできるだけ排除して自然と世界とを冷静で明晰な眼で見ていこうという姿勢が優勢になっていた」³¹という波が西欧世界に押し寄せた。

17世紀中頃には更に、それまで多様性と類似性を通してあらゆるものを解釈するという手法から、対象をカテゴリーの中に配列すること、すなわち多様性を同一性と相違性³²に基づき秩序付ける「タブロー化」³³という新たな解釈手法が用いられるようになった。こうした分類と配列が博物学的視線生み出し、徐々に博物学的空間を西欧諸国全体に成立させていった。

大航海時代の後、新大陸やアジアとの繋がりが強まり、またルネサンスによりギリシア・ローマが再発見されると、ヨーロッパ人の関心と好奇心が一挙にそうした地域や時代の珍貴品に向かった。とくに非ヨーロッパ地域からのモノや自然界を含めた非宗教的なモノを中心として、具体的には、彫像、絵画、金

³⁰ 同上書、247-248頁。

³¹ 同上書、329-330頁。

³² 吉見俊哉、前掲書、10頁。

³³ ミッシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と賞罰—』新潮社、1977年、153頁。

銀宝石の細工物、陶器、メダルなどはもとより、古代の遺物、貴重な写本、コイン、武器から、異民族の民具、さらに珍奇な動植物の標本、非ヨーロッパ産の貝殻、変わった植物の実、動物の胎児や奇形、化石や鉱物などの自然物に至るまで収集された³⁴。

その結果、西欧社会に植物園や動物園を始めとして「珍品陳列室」や「驚異の部屋」とよばれる施設が次々と登場してきた。収集された珍奇物が特別に設けた収納棚（Raritätenkabinet 珍品収納棚）、あるいはそのための特別につくった一室（Raritätenkammer 珍品陳列室）のなかなどに収納され、陳列された³⁵。

これらの施設は、ほとんど全ヨーロッパの王侯貴族の間で流行していた邸宅内のコレクションであった。その代表として規模と多様性がヨーロッパではもっとも評判だったのはプラハ宮殿におけるルードルフ2世のコレクションであり、その他、トスカーナ大公国のコジモ1世とフランチェスコ1世、バヴァリア公アルベレヒト5世、ハプスブルク家のフェルディナント1世、ザクセン選帝侯のクリスティアン1世らのコレクションが有名だった³⁶。

王侯たちが珍奇物収集やコレクションに力を注いだのは、人間界・自然界における高貴物および珍奇な物に対する驚きや好奇心が動機として働いたのだが、同時に、これらの博物学的施設は自分の権力と財力を誇示し、個人の富と権力を象徴する場ともなった³⁷。そこでは、人工か自然かにもかかわらず地球上に存在するものすべてを、展示方法も博物学的手法によるものというよりは多種多様な品として一堂に集めて、陳列し、そのコレクションが個人的な普遍的支配の証拠として示していた。

16世紀以降、西欧社会において商業が発達し、裕福な市民階層が生まれると、珍品収集やその陳列室という博物学的施設が王侯貴族だけでなく富裕な商人

³⁴ 西村三郎、前掲書、266頁。

³⁵ 同種の施設として、イタリアの「ステュディオオーロ（studiolo）」、ドイツ語圏内では「美術陳列室（Kunstkammer）」がある。吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店、1999年、12頁。

³⁶ 西村三郎、前掲書、267頁。

³⁷ 荒俣宏「博物学」『現代思想』13巻2号、1985年参照。

や知識階級のあいだにまで広がっていった。

ヨーロッパ各国の宮廷、名家、貴族などは、権勢の証とするかのように古代ギリシア・ローマの彫像を精力的に蒐集し始めた。とりわけヴァチカンにつながるファルネーゼ家 (Farnese)、バルベリーニ家 (Barberini) またメディチ家 (Medici)、ボルゲーゼ家 (Borghese)、ルドヴィッチ家 (Ludovici) などの名家のオリジナルや複製のコレクションは、啓蒙時代の後期にも令名をはせていた。イギリスではチャールズ一世 (Charles I) の彫像蒐集が名高いが、王は最良の彫像は当時すでに石膏複製やブロンズなどの模型にしか求められないことを知っていたため、古代彫刻を含めてさまざまな複製の制作を奨励していた。鑑賞用として、あるいは観察用として制作される複製の重要性は、啓蒙時代を通じて広く認識されるようになり、やがて美術教育に不可欠のものとなっていく³⁸。

上流階級あるいは支配階級から裕福な商人などに広がった博物趣味や珍品収集は、さらに医師や医学生などの知識人に広がり、その他に、学校教師や聖職者、薬種商、庭師などにも自然物コレクションを持つものが多かった。ローマのヴァチカン宮殿の庭園管理者であったミケーレ・メルカーティ (Michele Mercati)、ナポリの薬種商人フェランテ・インペラート (Ferrante Imperato)、ヴェローナの薬種商人フランチェスコ・カルチェオラーリ (Francesco Calzolari) による珍品コレクションは 16 世紀のイタリアで有名な施設であり、17 世紀ではイエズス会士アタナシウス・キルヒャー (Anatashius Kircher) による有名な陳列室「キルヒャー博物館」(Museo Kircheriano) がその代表であった。ロンドンでは 17 世紀に国王の庭師であったトラデスカント親子による「トラデスカントの方舟」(Tradescant's Ark) という珍品室がよく知られていた³⁹。これら最初のコレクションの陳列方法は、本草学の専門家、医師や学者による自然界の標本の陳列方法との並行性が多く見られた⁴⁰。

³⁸ 西山清「変貌する社会構造と万国博覧会」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第21号、2011年3月、66頁。

³⁹ 西村三郎、前掲書、269頁参照。

⁴⁰ 吉田憲司、前掲書、19頁。

こうしてギリシア・ローマ古典の再発見と復興によって生まれた、世界の文物を分類し、体系化しようという博物学的意思是、古代ギリシア・ローマ文化そのもの、そして新たに「発見」された非西洋世界に対象を広げていった。そして、この博物学的意思是、18世紀以降、近代的「知」へと結晶化していくことになる。

第3節 西欧における博物学の確立と博物学空間の意味

1. 啓蒙主義と博物学の確立

「啓蒙」とは、「蒙（無知蒙昧の蒙、物事に暗いこと）」を「啓（ひら）く」ことで、無知を有知にする意味である。18世紀フランスに起こった啓蒙思想での「無知」とは、封建社会の中で教会的な世界観の中に閉じこめられていた人々のことを言い、彼らに対して「人間」や「社会」、あるいは「世界」や「自然」の真実を教え、無知から解放することが「啓蒙」であった。

啓蒙は、古代とイスラームの遺産を受けついでルネサンス以来の合理主義・科学が成熟点をむかえた17世紀末～18世紀に、西洋世界の知を成り立たせた。これは西欧文明が、近世に新しく拡大した世界のすべてを理解しなおそうという欲した渾身の自己了解の試みであり、古代以来の知を組みかえ、展開すべき先端哲学であり、総合科学である。理性に照らしあわせてみずからの非合理的なものを敗走とした実学であり、歴史や伝統、そして信仰を相対化する普遍主義であり、知と理性を信じ、現在の文明に自負をもち、未来を楽観する進歩思想であった。これは基本的に世俗合理主義であり、キリスト教の枠内にとどまる場合は理神論にかたむいた⁴¹。

この時期の啓蒙主義をめぐる状況とその特徴を、本論において重要なものを主に、以下に概観しよう。

第一に、情報ネットワークの拡大を背景とした世界市民性（コスモポリタニズム）の成立が挙げられる。

ホブズは人文主義者でもあり、合理主義者でもあり、コスモポリタンな旅

⁴¹ 近藤和彦『文明の表象 英国』山川出版社、1998年、127-128頁参照。

行者でもあった。ヴォルテールはイギリスやプロイセンに滞在し、ディドロはペテルブルクに旅行し、ヒュームはパリの大使館に勤務した。人間性と文明のあり方を批判したアダム・スミスがルソー、ケネーらと文通していたころ、ギボンがローザンヌとイギリスを往復し、ネッケル夫人と恋愛し、ローマの廃墟で『ローマ帝国衰亡史』を着装した。このような知識人だけでなく、ユグノーやフリーメイソン、そして普通の商人が全ヨーロッパ的・環大西洋的に活動した。芸術ではドイツのレッシングが熱心にイギリス文学を紹介し、ヴィヴァルディの楽譜がアムステルダムで刊行され、バッハがそれを研究した。モーツァルトはザルツブルクに生まれ、マンハイム、ミュンヘン、パリ、ロンドン、アムステルダム、イタリアの諸都市をまわり、ウィーンで死んだ。フランクリンやトーマス・ペインのようにヨーロッパとアメリカの英領植民地の双方で活躍した。

第二に、啓蒙主義が実学としての性格を併せ持っていた。啓蒙主義は文芸的であると同時に、政治的出版、世論・公論の発達と表裏一体であった⁴²。アンシャン・レジームのもとにあったヴォルテール、モンテスキュー、ルソーはイギリスの立憲政治や中国の文物を表象として捉え、宗教や諸制度の非合理を批判した。『人生論』のヒューム、『モラル感情論』のアダム・スミス、『経済表』のケネーも文通、相互批判をしながら社会と経済を分析した。スミスの『諸国民の富』と同じ1776年に刊行された『統治論断片』でベンサムは「最大多数の最大幸福」を論じ、その著作はフランス語にも翻訳され、全ヨーロッパに普及した。

最後に、啓蒙主義の中から先端総合的な学問としての博物学が生まれたことである。新しく獲得された非ヨーロッパのめずらしい文物を知り、理解するための調査・学問が発達した。これは場合によって自然史、自然誌とされ、場合によって生物、地学、地理、考古学ともされた、自然界すべてを対象とする総合学である⁴³。重要な役割を果たしたのはスウェーデン人カール・リンネ⁴⁴、及

⁴² 近藤和彦（編）、前掲書、150頁。

⁴³ 同上書、150頁。

⁴⁴ カール・リンネはスウェーデン南部のスモーランドのロースフルトで牧師補の子とし

びパリの王立植物園長ジョルジュ・ルクレール・ド・ビュフォン⁴⁵であった。リンネが人間をはじめ、動物、植物、キノコ・カビ類などこれまで発見され、そして将来発見される地球生物すべての種に属名と種小名という統一的な名称を付け、属性を確定し、その名称のもとに地球の自然の目録に登録するという自然を秩序化する概念、いわゆる自然の体系化(natural classification)を考え出した。リンネの体系は、地球上に見られる動物界、植物界、鉱物界のそれぞれを綱、目、属、種と、高いランクから低いランクへ順次細分しながら体系づける、いわゆる階層分類(hierarchical classification)であり、高から低へ向かう下向分類(downward classification)であった⁴⁶。つまり、リンネによって自然は多様でありながら、無秩序ではなく、神の創造行為による大いなる秩序が存在するとされた。このリンネが考えた博物学がヨーロッパに拡大し、博物学趣味をもたらした。ありとあらゆる自然物を『自然の体系』や『植物の種』などによって名前を調べ、体系のなかにおける位置を確認し、もしなければ新しい学名をつけて体系のなか位置づけることは当時の博物学の内容であった。この博物学は、学界だけでなく、王侯貴族から聖職者、知識人、ブルジョア、商人から一般庶民にいたるまで、社会の各階層の人々の間に広い範囲に浸透した⁴⁷。

一方、ビュフォンの『博物学』の考案、大胆な仮説、想像力豊かな表現も18世紀的知識の普及に大きな役割を果たした⁴⁸。ビュフォンは神の創造行為を認めず、世界像の中心になるのは人間であると認識した。ビュフォンの記述の基本は「人間の自然誌」、それは人間の心理、成長、発達、生理、人種誌などについて詳細でまとまった記述を行い、いわゆる人間を中心＝出発点とし、ついでその後、人間との関係のなかに実用関係の強いものから弱いものへ、中心から

て生まれる。レント、ついでウプラサ大学の医学部に進み、博物学に熱心した。1735－1738年にかけてオランダへ留学、医学博士後を得た。『自然の体系』が重要な著作として知られた。

⁴⁵ ビュフォンはディジョン近くのモンバールで、法服貴族の長子として生まれる。26歳でパリ科学アカデミーの会員に選ばれ、その5年後、王立植物園長に就任された。

⁴⁶ 西村三郎、前掲書、21-28頁参照。

⁴⁷ 同上書、34-36頁参照。

⁴⁸ 近藤和彦（編）、前掲書、150頁。

周辺へすすんでいくという方針であった⁴⁹。

このように「人間の博物学」⁵⁰とも名づけうる新たな概念が生み出される結果となり、モノと動物以外に、人類をも分類し、序列化することが可能であるという意識がヨーロッパ社会に広がっていった。このことは、人間の「劣性」を「科学的」に証明する有効な手段として「野蛮」と「文明」という分類方法によって、二極対立の構図を生み出し、そのなかに優劣をつけていくようになる⁵¹。

こうした啓蒙主義の三つの側面の集大成として生まれたのが百科事典の編纂である。最初に 1728 年にはロンドンで、E・チェインバース(Ephraim Chambers)の『百科事典』が刊行され、フランスではディドロ、ダランベールらによる『百科全書—科学・芸術・職業の理論的な事典』が 1751 年から刊行が開始された。『ブリタニカ百科事典』は 1768 年から刊行が始まり、その改訂は今に続いている。

この百科辞典などの書物を通して博物学が社会に拡大すると共に、かつて王侯貴族や裕福な商人、知識人たちに流行した珍品や芸術品の陳列室が博物学的な公共空間として生まれ変わり、次第に一般公開されるようになって西欧社会において博物学の大ブームを巻き起こした⁵²。博物学的空間は一気に西欧社会全体に広まり、浸透していった。博物館・植物園が造られたのもこの時期であり、膨大な博物学的標本、考古学的遺物、文書、図書からなる大英博物館は 1753 年に開設され、王立植物園は 1759 年に設立され、1793 年にルーブル博物館が公開された。ウィーン、ペテルブルク、パリにも博物館、美術館、図書館が開設された。

こうした博物学的空間ないし世界観は、意識的であるにせよそうでないにせよ、西欧の価値観を普遍的価値と見なすものであった。その普遍的価値に基づいて世界を分類・展示することを通じて「世界の一体化」を遂行するのが博物

⁴⁹ 同上書、42-46頁参照。

⁵⁰ P.J.マーシャル、G. ウィリアムス（著）、大久保桂子（訳）『野蛮の博物学誌—18世紀イギリスが見た世界』平凡社、1989年、139頁。

⁵¹ 吉見俊哉、前掲書、14頁。

⁵² 吉田憲司、前掲書、13-17 頁参照。

学であったとも言える。

ヨーロッパ諸国による植民地進出が活発になり、ヨーロッパに大量に「異文化」の人間も流入し始めた。そこには、自己と他者、西洋と非西洋との間の根深い区別が行われるようになった。例えば、リンネの示した人類の分類は、人類の内に、「ヨーロッパ人」や「アメリカ人」や「アジア人」、「アフリカ人」と並んで、「野生人」(ホモ・フェルス)や「奇形人」(ホモ・モンストゥロス)を含んでいる。また、ヨーロッパ人は「白い肌、多血質、知的」、アメリカン・ネイティブは「赤い肌、胆汁質、頑固」、アジア人種は「黄色い肌、黒胆汁、剛直」、アフリカ人は「黒い肌、粘液質、怠惰」といったように、人間の生理学的分類がそのまま道徳的分類に重ねあわされている⁵³。

そのため、西欧という地域に限定された価値概念であったものが次々と普遍的価値概念として標準化されていった⁵⁴。その結果として、西欧の人々の中に「白人」と「黒人」、「西洋人」と「東洋人」、さらに「民族」というカテゴリーが形成されていく⁵⁵。

こうして形成されたカテゴリーは、思考・行動様式を含めた「文化」と血のつながりや地域的共通性による「科学」や「歴史」を拠り所として西欧市民社会の「正当性」が主張されるようになっていく。西欧諸国による帝国主義や植民地主義の思想は、サイードの指摘した「オリエンタリズム」にその正統性を見出した西欧の「知」による非西欧世界の「無知」に対する支配であった⁵⁶。

西欧社会に形成されてきた「知」は、絶大なる効果を持つ「視覚」(「見た」ことが「証明」に繋がるかのような錯覚をもたらす)を活用することで、西欧市民社会で生まれた「知」の正当性を国民に証明する場として博物学的空間を必要としたのである⁵⁷。

このようにかつてモノを中心に關心の対象にした博物学は、次第に「人間」

⁵³ P.J.マーシャル、G. ウィリアムス(著)、大久保桂子(訳)、前掲書、369頁。

⁵⁴ 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2009年、11頁。

⁵⁵ エドワード・W. サイード『オリエンタリズム』平凡社、1997年、121-123頁参照。

⁵⁶ 同上書、2-6頁参照。

⁵⁷ Paul Greenhalgh, *Ephemeral Vistas-The Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fair, 1851-1939*, Manchester University Press, 1988, p. 7.

もその対象に含めるようになった。人類を分類し、序列化することはヨーロッパ社会に浸透した。人間や社会の発達段階を科学的に実証しようとし、「野蛮」と「文明」という二極対立の構図、すなわち「西欧世界」は文明化した世界である一方「非西欧世界」は野蛮であり、発達が遅れている非文明世界であるという分類が有効な実証手段とされたのである。また、当初個人的な趣味の施設であった博物的空間は国家的装置として展開することになる。このような西欧の「知」による世界の解釈は、植民地主義・帝国主義による国家の政策と密接に関係し、それはその国家の政策（場合によって国家自体の存在）の正当性を広く国民に実証する場として博覧会という博物学的空間を生み出し、発展させていくことになる。

第2章 西欧国家における産業博覧会の展開とその性格

前章では西欧における博物学が成立した背景と、博物学的空間の誕生と発展、そして博物学が人間を含めたあらゆる自然物をその対象とした過程を確認した。本章では、その博物学的空間を国家が積極的に活用する場として生み出された博覧会の形成と展開を論ずる。とくに、博覧会の走りとして盛んに催された産業博覧会に焦点を当てる。

第1節 西欧近代国家の展開と博覧会の特徴

18世紀半ばの産業革命と工業化は新しい技術力と軍事の発展をもたらし、それは西欧列強による新たな市場や植民地の獲得競争を激化させた。この時代に帝国主義によってヨーロッパ各国は国民の意識高揚と自国の地位を強化することが重要な課題となった。

イギリスで始まり、イギリスを世界で最も豊かな工業国に発展させた⁵⁸産業革命は19世紀以降を他の欧米諸国に伝播していった。各国は技術や機械の開発で凌ぎを削り、それらを内外に示す場として産業博覧会を開催するようになった。産業博覧会はまた人々の発明熱や新たな機械と技術の普及を促進する効果をも持っていた。

世界の工場となったイギリスで産業博覧会は「発明」された。一方、後発のフランスはイギリスを越える規模と回数で産業博覧会を開催した。この二国における産業博覧会の展開を以下で論ずる。

1. イギリスにおける初期産業博覧会の開催とその特徴

近代的な博覧会の源流はイギリスで1756-1757年に開催された芸術協会の博覧会（タペストリーや絨毯、磁器製品の見本に賞を授与）と王立アカデミーの美術展覧会（絵画、彫刻、版画）にある。さらに、1754年に新技術や機械と発明を奨励する目的で設立された「美術・製造・商業奨励協会」（The Society for

⁵⁸ 平野繁臣『国際博覧会歴史事典』内山工房、1999年、5-7頁。

Encouragement of Arts, Manufacturers and Commerce)⁵⁹によって1760年に開催された産業博覧会が大博覧会の始まりと言われた⁶⁰。この協会の設立された目的は産業への美術の適用を奨励することであり、産業の発達に美術の向上につながるという考えに基づいていた。そのためにこの博覧会では絵画や彫刻などの優れた作品から、発明品と分類されたポンプや紡績機まで展示された⁶¹。当時の協会の関心は自国の産業の発展であり、例えば多大なる出費をもって輸入しているコバルト、セイヨウアカネ等染料を国産化できないかというテキスタイル産業の不利益な状況を解消する発明などであった。そのため協会は産業博覧会を重ねて開催し、国益をもたらす発明は表彰した⁶²。

19世紀初期に入って協会の活動が衰退すると、その代わりにイギリスの工業都市が機械と製品の博覧会を活発に開催した。特に1830年代には職工専門学校が博覧会を開催し、ブームを起こした。労働者に対する教育的目的をもって大規模な製品展示会がバーミンガム、シェフィールド、リーズなどの地方工業都市で開催された⁶³。1829年から3年ごとに王立ダブリン協会は、芸術、科学、製品博覧会を開催した。また1849年にバーミンガムで行われた博覧会は、広範な製品を展示し、民間団体が立案、実施、運営するという点で、後の大博覧会の形に近い。しかし、中央政府の協力と共同という点では1844年のパリ万国博覧会まで待たなければならない。これを契機に、イギリスで政府主導の大博覧会開催への動きが開始されたからである⁶⁴。

⁵⁹ 芸術協会は、芸術展覧会の主催という先駆的な活動をおこない、設立当初から産業振興のほか、美術教育の必要性を早くから認識していた。その芸術展覧会に参加し、芸術協会と密接な関係を持っていたレノルズ(Joshua Reynolds)やホガース(William Hogarth)、ケインズバラ(Thomas Gainsborough)ら芸術家たちは自主的な組織として、イギリス芸術家協会(Society of Artists of Great Britain)を1760年に結成した。同年以降、自前の展覧会を数回開催した後、レイノルズら指導的立場にあった一部の芸術家は1768年に国王に直訴し、王立芸術アカデミー(The Royal Academy of Arts)を設立した。この二つの組織はイギリスにおける近代博覧会の誕生に重要な役割を果たした。Derek Hudson and Kenneth Luckhurst, *The Royal Society of Arts 1754-1954*, John Murray, 1954, pp. 6-8.

⁶⁰ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p.7.

⁶¹ 吉見俊哉、前掲書、33頁参照。

⁶² 竹内有子「水晶宮の展示：1851年大博覧会とヘンリー・コール」『表象文化研究』第4巻第2号、2004年、49頁。

⁶³ Jeffrey Auerbach, *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*, Yale University Press, 1999, p. 14.

⁶⁴ *The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, Volume 1*, London, 1851, pp. 1-2.

その間ロンドンでは、応用科学展示促進協会が機械や科学発明の模型などを展示・実演したが、これは珍奇な見世物でもあった。また、その後には新たに設立された機械工学研究所 (mechanic institute) ⁶⁵による教育活動が続き、科学知識の普及に役割を果たした⁶⁶。これによって大衆は展覧会というものに慣れ親しんだ。観客を生み出したという点でこの時期は後の大博覧会の準備段階と位置づけられる。1840年代に入ると芸術協会の大博覧会開催に向けた活動が活発化し、その大きな原動力となっていく。

このような芸術協会の再興に大きな役割を果たしたのが、アルバート公であった。公が1844年に総裁に就任し、協会は大きな方向に転換した。アルバート公は「科学と芸術を産業目的に合致させること」を目的として、積極的に応用美術を推進する⁶⁷。機械技術と高級芸術の融合を新たな方向とした協会は1845年に競技会と産業美術展覧会を開催することを決議した。芸術協会はこれまで農業機械などを中心とした発明品や模型などの博覧会を行ってきたが、手工業製品の展覧会が開催していなかった。フランスやドイツでは既に行われていたこのような博覧会が各国の産業を刺激していることは、イギリスに大きな影響を与え、イギリス国内に活発に開催されるようになった⁶⁸。

1846年と1847年に博覧会を開催するための協議会が開かれ、「イギリス製品と装飾芸術の精選品展覧会」の開催が決められた。この展覧会には200点ほどの出品があった。展覧会の目的は、デザイナーと製造業者の技術的な価値を強調し、観客が陳列品を見て比較する自由主義的な教育方法を確立することにあった⁶⁹。博覧会には2万人が入場し、これが国家的博覧会に発展していくきっかけとなった。1848年の第2回博覧会には700点の展示品が集まり、7万人の観客が入場した。翌年の第3回展覧会は10万人という規模に拡大し、この成功

⁶⁵ 1820年代から地方工業都市に設立した教育機関あるいは研究所であった。1851年にはアイルランドを含めてイギリス全国で700以上の機械工学研究所が存在した。Steven Shapin, Barry Barnes, "Science, Nature and Control: Interpreting Mechanics' Institutes", *Social Studies of Science*, 7(1), 1977, p. 33.

⁶⁶ オールティック『ロンドンの見世物II』図書刊行会、1990年、69-100頁参照。

⁶⁷ Auerbach, *The Great Exhibition of 1851*, p. 14.

⁶⁸ Ibid., p. 11-12.

⁶⁹ Hudson and Luckhurst, *The Royal Society of Arts 1754-1954*, p. 193.

により、協会は国家的博覧会をフランスに倣って4年ごとに開催することとした。このような経緯で、芸術協会は大博覧会として第1回万国博覧会開催の実現へ向け、国内を回り製造業者らの参加や寄付金の協力要請、費用の試算など様々な活動で計画の実行に向けて準備を進めた⁷⁰。

博覧会にはそれと並行して様々な珍品の展示や見せ物興行も併設され、各地の博覧会の開催にあわせて巡回するものも多かった。機械工学研究所 (mechanic institute) の主催する展示会 (博覧会) には、科学や機械の発明とその原理の展示・実演に珍品や見せ物が併設されていたが、さらに美術品の展示も行われていた。それらの「美術展」は何の基準もテーマもなく玉石混交の状態、ほとんど無秩序・無差別に行われていたことが特徴であった。全国的に著名な芸術家の作品も地方の名もない作家の作品も一律に肩を並べて展示されているという状況であった。

こうした機械工学研究所の主催する博覧会は、18世紀後半にマンチェスターで最初に開かれてから1851年の第1回ロンドン万国博覧会まで全英各地の都市で次々と開催され多数の入場者を集めている。これらの博覧会の開催は、新たな知識や技術の普及伝達に大きな効果をもたらすと同時に、一般大衆の教育に対しても重要な役割を果たした。

マンチェスターで開催されたほか、その後、サザーランド、ニューカッスル、リーズ、シェフィールド、ダービー、バーミングハム、プレストン、ハリファクス、ノッティンガム、リヴァプールなどイギリスの各都市で同様の博覧会が開催されるようになると、博覧会ブームと呼べるような現象が起きるようになる⁷¹。

これらの博覧会は規模が小さく、地域色が強かった。しかし、イギリス社会全体に重要な意義をもつものでもあった。科学技術や機械の展示・実演を通して、労働者を始めとした観客を教育する目的を持っていた。それは当時の産業を支えた労働者の働く意識を高めたのである。また、第1回ロンドン万国博覧

⁷⁰ Auerbach, *The Great Exhibition of 1851*, pp. 15-22.

⁷¹ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p.8.

会開催の基盤を準備するという側面も持っていた。しかしながら一方で、見世物や美術品の展示などいまだ雑多な要素を併せ持つものであった。

こうしたイギリスの博覧会に対して産業博覧会を継続的な国家の政策として確立していったのはフランスであった。フランスの産業博覧会は、生産者の競争心を煽り、訪れた消費者の購買欲を促進させ、自国産業を活性化させるという目標を掲げていた⁷²。フランスが開催した初期博覧会はイギリスで行われた初期博覧会と比較して、どのような特徴、またどのような意味をもつのか、そしてどのように発展して行ったのか、以下検討する。

2. フランスにおける初期国内博覧会とその特徴

政府主導で最初に開催された博覧会は 1798 年にパリで開催された「フランス産業博覧会」であった。当時はフランス革命によってフランスの産業が大きな打撃を受け、停滞していた。そのためイギリスの製品がフランスに溢れて、フランス国内産業を脅かした。1797 年にダベーズ侯 (Marquis d'Aveze) がかつての王立工場再建の監督官に任命され、タペストリー、陶器、カーペットなどの製品在庫をサン・クルー城で販売した。翌年、ダベーズ侯は 2 回目の即売会を計画したが、内相ド・ヌフシャトー (F. de Neufchateau) が、産業復興に有効であると考え、パリで「産業博覧会」を開催することを計画し、国家事業として利用することとした。彼はダベーズの販売方針を排除して展示品はすべて非売とされ、新しい性格の展示方式を定めた⁷³。博覧会の最も基本的な性格と特質の一つは、この「商品を見る」ということであり、売買を目的とせず「見られるための商品展示」が主役になった。また、優れた製品には審査により賞を授与するといった近代博覧会の体系が成立し、英国の産業製品に対して競争できるすぐれた製品を生み出すことを目指した⁷⁴。この博覧会は 1798 年 9 月 19

⁷² 吉見俊哉、前掲書、29頁参照。

⁷³ John Tallis, J. G. Strutt, eds., *History and Description of the Crystal Palace and The Exhibition of the World's Industry in 1851*, London: J. Tallis and Co., 1852, pp. 235-238.

⁷⁴ The Committee of General Literature and Education, *Industry of Nations as Exemplified in the Great Exhibition 1851*, London: The Society, 1852, p. 16.

日から 21 日の 3 日間にわたり行われ、パリのシャン・ド・マルスに新設された会場に産業殿堂とそれを囲む 68 のアーチが建てられた。野外では、革命戦争で大活躍した気球の上昇実演、屋内では全国から最新の製造品の展示が市民の人気を集めた。そこにフランス王室が所有していた三つの工場の製品（タペストリー、カーペット、陶器）を中心にしながら、パリとセーヌ地域のその他の工業製品にも出展を呼びかけて、計 110 の出品者が参加した⁷⁵。

フランス政府の本来の目的は各種工業製品を展示することに加え、それによって国民の意識を高めることにより自国の産業を繁栄させることであった⁷⁶。また、自国産業の活性化を通して、国家間の競争に打ち勝つことも狙いとなっていた⁷⁷。1798 年のパリ産業博覧会の成功を機に、同様の博覧会が定期的で開催されるようになる。産業博覧会が自国の産業に与える効果に着目し、継続的な国家の政策とし、博覧会の規模も次第に拡大していった。1849 年まで約 50 年間で 11 回の産業博覧会がパリで開催された⁷⁸。これらの博覧会の内容について以下に詳しく述べていく。

1798 年のパリ産業博覧会はフランスにおける博覧会の基礎を形成する重要な最初の産業博覧会であった。この博覧会は、フランス共和国の誕生を記念する行事として、国民の祝祭と共に開催され、共和政のイデオロギーを表現する役割を果たした⁷⁹。共和国の確立を祝福し、その素晴らしさを賞賛すると共に、国家帰属への新しい意識を築き、徐々に宗教儀式およびアンシャン・レジーム（旧体制）の伝統儀式に代わる革命後の共和政祭典の概念を国民全体に広げたのである⁸⁰。

例えば、博覧会の開会式典は、共和国祭典の舞台となった、シャン・ド・マル

⁷⁵ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, pp. 4-5

⁷⁶ 吉見俊哉、前掲書、39頁。

⁷⁷ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p.5.

⁷⁸ Ibid., p. 6.

⁷⁹ Julia Kostova, *Spectacles of Modernity: Anxiety and Contradiction at the Interwar Paris Fairs of 1925, 1931 and 1937*, Dissertation, Graduate School-New Brunswick Rutgers, The State University of New Jersey, May 2011, p. 31.

⁸⁰ Mona Ozouf, *Festivals and the French Revolution, 1789-1799*, Cambridge: Harvard University Press, 1988, p. 106.

スで行われたことも偶然ではない⁸¹。開会式典での軍事パレード、音楽、公式演説などが君主的な意識から共和制主義への価値観の転換のために行われた。これは、伝統的国家から国家の権力と国民の権利の組み合わせという新しい国民国家体制に変化させた 1789 年のフランスを認識させたのである⁸²。

第 1 回の成功に力を得て、ナポレオンの支配下でフランス政府は引き続いて第 2 回を計画した。第 2 回内国産業博覧会は 1801 年 9 月 19 日から 24 日まで 5 日間にわたり、ルーブル宮で行われた。220 企業が参加し、羊毛、綿、絨毯、磁器製品、革細工、印刷、コンテ画材⁸³、ジャカルシルク織機、農業機械、アルコール製品などが展示された⁸⁴。この博覧会はナポレオンに強く支持され、彼はフランスを敵国イギリスにまさる工業国とすることを目指していた⁸⁵。そのために、ナポレオンはフランス各地方における主要な工場やアトリエなどを自ら訪れ、この博覧会開催の目的とその重要性を説明し、出展を呼びかけたのである⁸⁶。

その後 1802 年に第 3 回国内博覧会が開催された。この博覧会の最も顕著な特徴は、機械および化学の進歩を産業の改善のために応用する展示が行われたことである⁸⁷。この年に産業奨励協会が設立され、この期間が設置する審査会によって出品物の審査とメダル授与が行われていくことになる⁸⁸。次に 1806 年の博覧会はアンヴァリッド（廃兵院）を会場とし、1422 点の出品の多くは工業

⁸¹ シャン・ド・マルスは、もともと連兵所であったが、1790年7月14日にここで初めて連盟際が開催され、それ以来繰り返し祭典が開催された地である。1792年に第一共和政が成立し、革命暦が設定されると第1月（9月3日）共和国祭典が開催されることになった。さらに1798年7月にもイタリア戦役の戦利品としてナポレオン1世がフランスにもって帰った「ラオコーン」の群像をはじめとする美術作品が展示され、民衆の記憶に新しかった。

⁸² Eric Hobsbawm, “Mass-Producing Traditions: Europe, 1870-1914” in *The Invention of Tradition*, ed. Eric Hobsbawm and Terence Ranger. Cambridge: Cambridge University Press, 1983, p. 271.

⁸³ コンテは、1795年に画家であり化学者でもあったニコラ・ジャック・コンテにより発明された。当時、ナポレオン戦争でフランスはイギリスに海上封鎖を受けており、輸入が止まってグラファイトが不足したため、それを有効利用できる方法として粘土とグラファイトの組み合わせを編み出した。

⁸⁴ Morna Daniels, “Paris National and International Exhibitions from 1798 to 1900: A Finding List of British Library Holdings”. *eBLJ*. Article 6, 2013, p. 2.

⁸⁵ 吉田光邦（編）『図説万国博覧会史1851－1942』思文閣出版、2004年、7頁。

⁸⁶ Charles Boutell, “General Introduction” *The Illustrated Catalogue of the Universal Exhibition*, published with the Art Journal (1867-1868), p.17

⁸⁷ The Committee of General Literature and Education, *Industry of Nations*, p. 17.

⁸⁸ 吉見俊哉、前掲書、30頁。

品と芸術品であり、前回と比べて多様な出品になっていた。中でも、鉄鋼製造業者からの出品は、着実かつ急速な進歩を遂げたことを表した⁸⁹。会期は24日間と規模を大幅に拡大させた。

革命後、二つの帝政の時代をへて、フランスにおいて国民統合が強化され、第3共和政の時代には、国内では共和政が徹底される一方、植民地では帝国主義的支配が強化された。このことは国民国家が帝国形成と強く結びついたものであることを示す⁹⁰。政治体制がめまぐるしく転換したにも関わらず、博覧会の開催は政権の経済策として継続的に行われた。ブルボン王朝が復活した復古王政期にルイ18世により1819年に第5回内国産業博覧会が開催された。この博覧会はルーブル宮で35日間開かれた。

第7回内国産業博覧会は1827年8月1日から62日間に渡って、ルーブルで開催された。1695という多数の出品者によってテキスタイル、家具製品、紙を始め、新しい作品の数々が展示された。報告書には、開催の背景が説明されている。まず、イギリスでは労働者向けの住宅が良く整備されていること、安価で高品質なイギリスの商品の魅力がイギリスの貿易を向上させ、国民の福祉をもたらしていることが指摘されている。また、フランスにおける通関税がフランスの商品が高価になる原因として批判されている。このようにイギリスを意識しながら博覧会が開催されたのである⁹¹。

1834年にルイ・フィリップのもとで第8回内国産業博覧会が開かれた。この博覧会はパリの中心部、チュイルリー公園とシャンゼリゼ通りに挟まれて位置するコンコルド広場で、5月1日から60日間に渡って開催された。会場には臨時パヴィリオンが建てられた。2,447の出品者が食品、テキスタイル、美術品、農業や家庭用の金属製品を展示した。蒸気機械やゴム製品が珍品として出品された⁹²。この時から出品物を分類することがはじまり、9つの部門が設けられた。

第9回内国産業博覧会は1839年5月1日に開会され、7月31日に閉会され

⁸⁹ Ibid., p. 17.

⁹⁰ 松本彰、立石博高（編）『国民国家と帝国—ヨーロッパ諸国民の創造』出川出版社、2005年、4-5頁。

⁹¹ Daniels, “Paris National and International Exhibitions”, p. 4.

⁹² Ibid., p. 4.

た。会場としてエリゼ宮に長さ 200 メートル、幅約 100 メートルの四角の建物が建てられ、中央に蒸気機関が展示された。3,381 の出品者が、テキスタイル、絨毯、金属製品、食品、楽器、飾り物、革製品、ゴム製品、などを出品した。

第 10 回内国産業博覧会は 1844 年 5 月 1 日から 6 月 30 日までエリゼ宮で開催された。3,960 の出品者がテキスタイル、金属物、時計、染織、砂糖、ゴム、紙、などを出品した。機械として蒸気機関やそれを利用した掘削機なども展示された。パリと北部地方の展示品が中心となったが、ボルドー、トゥルーズ、ライン地方からの出品物も見られた⁹³。この博覧会は、国家の平和と継続的な安定を主張すると共に、会場の広さや展示内容及びその分類という点でこれまでの博覧会と比べて最も顕著な進歩を示したものであった⁹⁴。

第 11 回内国産業博覧会は 1849 年にエリゼ宮で開催された。この博覧会でアルジェリアをはじめとしてフランスの植民地が参加するなど、国際的規模に達した⁹⁵。博覧会は 6 月 1 日に開会され、6 ヶ月間開催された。長さ約 206 メートル、幅約 100 メートル、5 エーカー程の臨時会場に、4,494 の出品者があった。この展示は、7 区画、つまり (1) 畜産、(2) 機械、(3) 化学製品、(4) 金属製品、(5) パリの製品、(6) 羊毛製品、(7) 園芸、となっていた。この博覧会はフランス国内に向けて開催されたが、それは多くの外国人にも大きな関心を喚起した。

パリで開催されたこれらの博覧会の成功を機に、フランスの各都市に同様な博覧会が開催されるようになった。1827 年にナントで、1835 年にリールで、1835 年と 1845 年にボルドー、1836 年にトゥルーズとディホンでと、フランス各地で次々と行われた⁹⁶。

表 1 初期フランス国内産業博覧会

	年月	期間	場所及び関連事項	出品者
	1798 年 9 月	5 日間	シャン・ト・マルスに新設の工業宮	110 人

⁹³ Ibid., p. 6.

⁹⁴ The Committee of General Literature and Education, *Industry of Nations*, p. 19.

⁹⁵ 吉見俊哉、前掲書、31頁。

⁹⁶ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p. 6.

	1801 年 9 月		ルーブル宮 紋様織機（ジャガード）金メダル受賞	220 人
	1802 年		ルーブル宮 産業奨励協会が組織される	600 人近く
	1806 年	24 日間	アンヴァリッド前庭 コークス製錬・鋼製造法が受賞	1400 人以上
	1819 年	35 日間	ルーブル宮	
	1823 年	50 日間	ルーブル宮	約 1700 人
	1827 年	62 日間	コンコルド広場に展示場	
	1834 年		シャンゼリゼで開催。出品物の分類による展示方法が始まる（9 部門）	
	1839 年			4381 人
	1844 年		国内産業博覧会の完成	3960 人
	1849 年	6 ヶ月	シャンゼリゼ新会場	4494 人

出典：Daniels, Morna., ‘Paris National and International Exhibitions from 1798 to 1900: A Finding List of British Library Holdings’ *eBLJ* Article 6, 2013: 1-49 を下に筆者作成。

以上、見たように、工業製品を近代的な博覧会の形で一般人に向けて展示したのは、1798 年にパリにおいて政府主導で開かれたものが最初だった。その後もフランスは、1801 年、1805 年、1806 年と続けざまに博覧会を催している。対英戦争に加えオスマン・トルコとの緊張の高まりという背景を考えれば、国内産業の育成と成果の開示に加えて、国力の誇示、戦意高揚という意味もあったことは否定できない。もっとも、啓蒙主義の総決算という側面から見れば、展示物の意味と機能を体系的に分類、整理して公開するようになったのは、ウィーン体制という復古的、強権的な政治力学によって、ヨーロッパの国際秩序が形式的には整い始めた 1819 年の博覧会以降のことであった。そして、1830 年の七月革命後にはフランスでも産業革命が軌道に乗り始め、イギリスと同様に経済繁栄と社会格差を抱えこんだまま 1844 年のパリ博覧会が大きな成功を収める⁹⁷。

⁹⁷ 西山清、前掲書、60頁。

フランスの国内博覧会の特徴としては、(1)展示品は全て非売とする (2) 審査委員会を設け優れた製品・商品を顕彰する、(3)産業奨励協会を組織する(1802年)、(4)出品物を分類する (9 部門に：1834 年から)、(5)会期を 6 ヶ月間とする (1849 年)、という万国博覧会のスタイルがほぼ成立し、それは 1851 年のロンドン以降の万国博覧会に引き継がれていったのである。

こうしてイギリスにおける初期の段階ではその地方の技術を集めて交流することが目的であった博覧会は、フランスにおいて国家主導で次第に国内のすべてを対象とする「国の博覧会」へと成長していった。それでもなお、その時代の最も進んだ技術や新しい製品の出品を求めて、同種の技術や製品を比較するためには、国境の枠を越えて他国からも可能なかぎり広範囲の地域から多数の出品が必要となってくる。

以上、見てきたように近代博覧会の登場とその発展はイギリスやフランスを中心に展開してきた。その後、ヨーロッパの各地で博覧会が開催されるようになると、自国内の技術や新製品だけの出品ではその時代の本当の先端技術に触れることはできないという状況が生まれてくる。

フランスでの産業博覧会の発展は西欧帝国主義諸国を刺激し、その後 19 世紀前半まで、西欧各国で自国の産業振興を目的とした博覧会が、頻繁に開催されるようになった⁹⁸。その理由は、フランスと同様に、イギリスの工業製品が自国に浸透するのを防ぎ、国内産業を育成し、自国の産業の力をアピールするという政治的思惑と結びついたものであった⁹⁹。その中で、1830 年のブリュッセル博にはオランダが国家として正式に参加したことで、博覧会は国際化し始める。また、「全ドイツ博覧会」と名づけられた 1844 年のベルリン博は、ドイツ国家の政治的アイデンティティを宣伝するという帝国主義的博覧会¹⁰⁰の性格を強くもつものであった。また、1849 年のパリ産業博はフランスがヨーロッパの中心であるというイメージを印象づけようとする帝国主義的意図が表れてい

⁹⁸ 1808年にトリエステ博、1818年にミュンヘン博、1823年ストックホルム博、1824年にトルネー博、1825年にハーレム博、1826年にダブリン博、1827年マドリード博、1829年モスクワ博・ペテルスブルグ博などである。

⁹⁹ 寺本敬子『パリ万国は博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版、2017年、42頁。

¹⁰⁰ John Allwood, *The Great Exhibitions*, Studio Vista, 1977, pp. 9-12参照。

た。

パリ産業博覧会の成功をきっかけにして、博覧会を開催する動きがヨーロッパ各地に広がって行く。この頃から博覧会の目的は商品の展示会から帝国主義イデオロギーの展示の「場」へと変容を遂げていくことになる。博覧会が、産業革命による工業化の進展と共に、商品開発や発明を促進させる目的で、国民に競争意欲をかきたたせるようになる。このようにして博覧会は工業政策としての重要な政治的、経済的、文化的役割を持つようになる¹⁰¹。

第2節 1851年イギリス大博覧会と万国博覧会の展開

最初の近代的な国際博覧会がイギリスのロンドンで開催されたのは1851年のことである。19世紀中頃には「世界の工場」とも呼ばれ、世界の産業をリードしていたイギリスにおいては最初の国際博覧会が開催されたのは決して偶然ではない。

最大の理由は、イギリス以外の国では開催するのが困難であったことである。産業革命の進行が遅く、国内産業の保護を必要としている段階の国々において、産業博覧会の開催は、必然的にイギリスの参加を意味するものであった。そのことはイギリスの技術力の高さをさらに国際的に宣伝するものになった。それは工業力の高さをイギリス国民に示すと共に他国との国力の差を見せ付けることでもあった。一方、国民の意識高揚を重要な課題としていた他の国々にとって、イギリスの参加は自国の技術水準の低さを国民に示すことになるため到底認められるものではなかった。その結果、他国の製品が出品されても困らないイギリスで最初の大規模な国際博覧会が開催されたのである¹⁰²。

一方、国家としての博覧会の開催目的はなにより産業振興であったことはイギリスの政府に強く認識された¹⁰³。しかし、実際には、19世紀半ばのイギリスといえどもその社会には全面的に工業化が浸透しているわけではなかった。そ

¹⁰¹ Marieke Bloembergen, *Colonial Spectacles-The Netherlands and the Dutch East Indies at the World Exhibitions, 1880-1931*, Singapore Univ. Press, 2006, pp.11-13.

¹⁰² 吉見俊哉、前掲書、33頁参照。

¹⁰³ *The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851 vol. 1*, pp 3-4.

ここで政府は新しい文明の様態としての工業化という方向性を国民に示す同時に、その目的に向かって国民意識を統一する必要があることが大きな政治的課題となっていた。その手段としてイギリス政府は博覧会に目をつけた。当時のイギリスでは上流階級は産業に対して無関心な態度をとり、中産階級はそれを推進し、そのため労働者たちを産業に適応させる必要性があった。それゆえ、社会的融和と一致協力は国家発展に不可欠要素であると認識があった。博覧会を主催した政府は労働のすばらしさを国民に訴えると同時に娯楽的要素をもって国民全体を調和する方法として博覧会を有効に利用できると思ったのである¹⁰⁴。

1851年に開かれた英国大博覧会はロンドンのハイド・パークに、5月1日から10月11日までに開催された。会場として広さ10.4ヘクタールの敷地に、全長約563メートル、幅は約22メートル、袖廊部分を足すと最大で約124メートル、高さ約19メートルという大規模な鉄とガラスの建築物「クリスタルパレス（水晶宮）」が建設された。造園家ジョセフ・パクストンが設計したこの建物はイギリスの工業力を誇示する新しい建築空間であった。場内には13,750の出品者によって、約10万点もの製品が展示され、そのうちの約半数以上は大英帝国と植民地の展示品であり、残りが諸外国32カ国からの展示品であった。

会期中に博覧会に訪れた人は6,039,195人にのぼり、当時のロンドン人口の約3倍に相当した。入場したものの多くは下層及び中産階級であったと推測された。博覧会の目的の効率的達成のために入場料に関する規定が設けられ、段階的に引き下げられた¹⁰⁵。この料金設定の引き下げは、政府側の階級融和への意向を表している。この600万人以上という入場者数は、労働者階級を排除しては考えられない人数であった。その労働者や学生達は、地方から出来たばかりの鉄道を利用して、ロンドンにやってきた。雇用主や教師たちはこの博覧会を「産業の学校」と位置づけ、参加を奨励したのである¹⁰⁶。これは労働者たち

¹⁰⁴ Jeffrey Auerbach and Peter Hoffenberg, *Britain, the Empire, and The World at the Great Exhibition 1851*, Ashgate, 2008, pp. 35-40.

¹⁰⁵ 5月1日の開会式に参加できることが付与する定期券が男性3.3ポンド、女性2.2ポンドで、5月2日・3日は1ポンド、4日が5シリングと設定された。5月26日より月曜日から木曜日が1シリング（シリング・デー）、金・土曜日が2シリング6ペンスとなった。

¹⁰⁶ 全国493の学校から、35,540人が入場した。*The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851 vol.1*, pp. 92-100.

の自発的な行動だけでなく、産業教育を目的とした上からの動員があったことを示している。このように、主催者側にとって、水晶宮は秩序に基づく訓育の場として想定され、そして機能したのである。

陳列品は珍奇なもの、手動式機械、最新の蒸気機械、手工芸品など驚く程の多様性に富んでいた¹⁰⁷。こうした出品物は（1）原材料部門（2）機械部門、（3）製品部門、（4）美術品部門に分類されていた¹⁰⁸。

まず美術品部門は最後のクラスに分類されていたが、その展示はかなりの制限を受けた¹⁰⁹。これは博覧会の目的が第一義的には工業の職能と産業生産物いわば生活技術にかかわる標本をすべて展示することにあるためであった。それでも、展示された8千点あまりの作品は博覧会全体の引き立て役になると同時に、巨大な建物の内と外で巧みに配された数々の彫像のように、それ自体が興味の対象となるものであった¹¹⁰。美術部門においては限られた美術品の展示によって展示美術の重要性を示し、労働者階級を中心とした観客に美術に接する貴重な機会を与えた。

（1）から（3）の部門こそは産業博覧会の核心をなすものであった。（1）機械部門はいち早く産業革命を成し遂げたイギリスの工業力を見せ付けるものとなった。機関車、発動機、紡績機などの機会が現地で実際に稼動していた。紡績機はとくに重要な存在であり、原綿から布に製品化される一連の作業工程が展示された。例えばハイバート・プラットアンドサン（Hibert Platt & Sons）会社は、一箇所に数十台の紡績機械を実演する壮大のものであった。そのほかにも封筒製造機や、新聞の印刷機などが展示された。これら最新の機械や技術を用いた機械部門の展示場は最も人気のある区画のひとつであった¹¹¹。

製品部門では、家具や室内装飾品類がさらに29クラスに分けて展示された。この部門の「展示品は、時間と金銭の大量消費の証拠を表し、装飾品の多くは

¹⁰⁷ 重富公生「19世紀なかばイギリスの商品世界—1851年ロンドン万国博展示品を中心に—」『ヴィクトリア朝文化研究』No.1、2003年、5-23頁。

¹⁰⁸ The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851 vol. 1, p. 89.

¹⁰⁹ Ibid., p. 15.

¹¹⁰ 西山清、前掲書、65頁。

¹¹¹ 竹内有子、前掲書、56頁。

宮殿の一室にあるようなものである。クラス全ての外観は国家繁栄の度合いを表し、製造業者の技術と趣味の展示は陳列品を使用する人の富と家庭生活の向上を明らかに示すもの」¹¹²と説明されている。装飾品は勤勉という美德に結び付けられ、国民の性格を反映するものとして捉えられていた¹¹³。

原材料部門の展示では、陳列見本が発見・採取・利用されるのかという過程がグラフや地図や模型を用いて解説された¹¹⁴。この部門では製造業者に見本を提示することで、地質学や材料調達とその製品化に関する知識を与えるという意図があった。カタログにも産出地の地図などが掲載され、これまで明らかでなかった商品の製造に必要な情報と科学的知識を提供したのである。その一つが、原材料の学名の明記で、これは世界的な商取引時に有用であるよう配慮したものであった。そして、このような情報や会場に展示された解説見本は、科学的知識を入場者に与えるだけでなく、原料を提供する植民地とイギリスの関係を提示することによって、帝国意識を育む役割を果たした。その結果、原産地・新市場としての植民地の価値が改めて注目されることになった¹¹⁵。

この大博覧会は、産業振興というテーマを掲げながら、国民に新しい「知」のあり方を提供する場であった。国家別配置によって、会場全体は世界権力地図の様相が可視化したことは大きな効果を生み出した。イギリスと植民地の製品が会場の半分を占めたことで、観客が展示区画の広さと陳列品の多さを、国力の表象と受け止めた。実際に、この水晶宮に展示されたイギリスの品物自体がその国力の賜物だったのである。イギリスが推進してきた自由貿易は商業と製造システムの拡張であったが、その意味するところは産業による帝国主義であった。イギリスの植民地の区画が、会場中央の良い位置を占めているのは植民地の重要性を位置づけようとする意味があったと考えられる。

初めての国際博覧会として、フランス、ベルギー、オーストリア、チリ、エジプト、アメリカ合衆国、ポルトガル、メキシコ、ロシア、などの32カ国が参

¹¹² 松村昌家『ロンドン万国博覧会1851年新聞雑誌記事集成』1巻、本の友社、1996年、729頁。

¹¹³ 竹内有子、前掲書、56頁。

¹¹⁴ Auerbach, *The Great Exhibition of 1851*, p.95.

¹¹⁵ 竹内有子、前掲書、56頁。

加した¹¹⁶。

産業革命が起きたイギリスで産業振興のために産業博覧会が生まれた。最初
は地域色が強く雑多な展示がなされた原初的なものであった。この産業博覧会
を国家主導で大規模に開催するようになったのがフランスであった。産業革命
が遅れたフランスでは国内の産業育成を目的とすると共に誕生したばかりの共
和国の国威発揚のために産業博覧会を利用した。また、フランスは博物学以降
の知的習慣に従い原材料、機械、美術品などを分類して展示した。フランスに
おける大規模産業博覧会の成功をみたイギリス政府は国際的な産業博覧会を
1851年に開催した。この博覧会は、国別の展示を通して産業部門におけるイギ
リスの国際的優位を見せ付けると共に原材料の展示を通してその植民地の地球
大の広がりをも示すものであった。こうして、展示物を分類して提示し国際的
に出品者が参加する展覧会の雛形が完成した。これが万国博覧会に発展してい
くことになる。

¹¹⁶ The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition, vol. 1 (London 1851) を参照のこと。

第3章 西洋帝国主義国家における万国博覧会の流行とその意味

第2章で見たようにイギリスで生まれた産業博覧会はフランスを経て大規模化、展示物の分類、国際化という特徴をおびえるようになった。この産業博覧会が雛形となり、文化的政治的性格の強い博覧会に発展していく。その際にはあらゆる展示物が博物学的な徹底さをもって分類序列化されていく。

19世紀後半から20世紀にかけ、僅か一世紀の間で世界の構造は大きく変化した。この時代は、帝国主義国家によって世界が強者と弱者、「先進」と「後進」を基準として分類される「帝国主義の時代」であった。その結果、帝国主義は植民地を軸として世界を支配する側と支配される側の二つの世界として地域区分を行った。それは西欧を中心とした世界の一元化の時代でもあった¹¹⁷。西洋中心に世界システムが拡大すると共に、博覧会を通して、世界を序列化し、西洋の経済的・政治的・文化的支配下においた非西洋世界を「他者」として区分し、分類して視覚的に表象するようになる。そうした西欧による世界のカテゴリ化と一元化はさらに拡大し、1876年から1915年までの僅か40年間足らずの間に、地球の表面積の約四分の一が少数の西欧帝国主義国家によって植民地として分配され、編成された。ここで、世界が支配者と被支配者という近代的な枠組みで認識されるようになる。

こうした帝国主義の時代における博覧会の発展と特徴を本章では議論する。

第1節 帝国主義国家による万国博覧会の拡大

20世紀初頭に帝国主義的な意味の植民地を所有していた列強は、イギリス、フランス、オランダ、ロシア、アメリカ、ドイツ、イタリア、ベルギー、日本の併せて9国であった。これら列強は、1876年から1914年までの間に、約2億7000万人の住む2730万平方キロメートルの植民地を新たに手に入れ、それ以前に領有していた分に加えると、地球の総面積の半分以上を占め、世界人口

¹¹⁷ Eric Hobsbawm, *Age of Empire 1875-1914*, Vintage Books, New York 1989, pp.54-58.

のほぼ3分の1が住む土地を植民地として支配することになった¹¹⁸。

イギリスは1776年アメリカ合衆国の独立によって北米の植民地の多くを失ったが、なおも北米大陸にカナダ、ジャマイカなどの西インド諸島、さらにアジアのインドとその周辺などに植民地または勢力圏を拡大し、広大な資源を有する植民地帝国を形成していた¹¹⁹。イギリス経済の世界制覇は、本国の工業製品と、インドの綿花、中国の茶とアヘン、絹織物などを結ぶ三角貿易という形で展開された。自由貿易を掲げるイギリスは1840年にはアヘン戦争で清朝を屈服させて香港を獲得、1857年にはインド大反乱を鎮圧し、1877年にインド帝国として植民地化を達成、その他東南アジア・アフリカにも進出する。19世紀後半からは自由貿易の拡大から植民地そのものを獲得する帝国主義的拡大の時代に入った。それに対してインドの民族運動の活発化など、イギリスも新たな対応を迫られていく¹²⁰。

19世紀には工場制機械工業が普及し、マンチェスターやバーミンガムなどの工業都市が発展し、またリヴァプールは工業製品の積出港として繁栄するようになる。産業革命を他に先駆けて達成して、文字通り「世界の工場」として工業生産を一手に引き受けていた。特に1840年代には鉄道が急速に普及し、蒸気船の普及とともに交通革命が起こった。次第に産業の重点は重工業に移るようになり、それによってもって資本の淘汰が行われ、従来の商業資本が金融資本に支配されるようになり、巨大な独占資本が出現し、国家と独占資本の結びつきが強まって、1870年代からは帝国主義国家としてますます拡大していた¹²¹。その象徴が、1875年のディズレーリ内閣によるスエズ運河会社買収であった。さらにロシアとトルコ戦争に介入し、1878年のベルリン条約ではキプロス島の管理権を獲得し、西アジアからインドー帯を支配する為の拠点とした¹²²。

しかし、19世紀中期に産業革命を進行させたドイツとアメリカがイギリスを

¹¹⁸ Ibid., p. 59

¹¹⁹ 松本彰、立石博高（編）、前掲書、127頁。

¹²⁰ 秋田茂『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』中公新書、2018年、113-126頁

¹²¹ 長島武之、柳澤伸一、大津正道（共編）『新考・西洋の歴史』南窓社、1998年、139-140頁。

¹²² 秋田茂、前掲書、116-117頁。

急迫するようになり、イギリス独占資本を上回る巨大な独占資本が両国で生まれ、イギリスはおびやかされることとなり、ついに 19 世紀末に工業生産世界第一位の座をアメリカに奪われることとなる。

自由貿易主義の理念からは、植民地を拡大することは必ずしも合致せず、植民地を維持することの負担を無くし、植民地を独立させて自由に貿易をした方がよいという、植民地不要論も存在した。しかし、帝国主義列強の世界分割（植民地囲い込み）競争から撤退することはできず、イギリスも植民地支配強化、拡大にむかった。1900 年までの大英帝国の植民地をまとめると以下のようになる¹²³。

- (1) アイルランド：「イギリスにとって最古の、最も手強い植民地」であり、アイルランド問題の係争が続く。
- (2) 地中海地域：ジブラルタル、マルタ島、キプロス島
- (3) アジア地域：インド、ビルマ、香港、威海衛、マレー半島、北ボルネオなど（他に中国長江流域を勢力圏とする）、クウェート
- (4) アフリカ地域：南アフリカ戦争で南アフリカを獲得。他にエジプト、スーダン、ローデシア、ナイジェリアなどを支配。
- (5) 中南米地域：ギアナ、ジャマイカ、ホンジュラス、トリニダードトバゴ、フォークランド諸島、南シェトランド諸島など
- (6) 自治領：白人入植者中心のカナダ、オーストラリア、ニュージーランド（1910 年からは南アフリカ連邦）。

17 世紀には帝国の再編成が進行する中で、オランダは積極的な海外進出に乗り出し、。ネーデルラント連邦共和国はオランダ東インド会社を設立、東インドに進出して 1610 年代にポルトガルから香辛料の産地を掌握した¹²⁴。さらにオランダ西インド会社も設立するなどしてアフリカ・東南アジア・台湾などを獲得し、植民地を拡大し、世界経済の中でも先進的な地位を占めることとなった。特にジャワ島を中心とした現在のインドネシアはオランダにとって最も重要な

¹²³ 木畑洋一、南塚信吾、加納格（著）「帝国と帝国主義」『シリーズ「21世紀歴史学の創造」第4巻』有志舎、2012年、244-286頁参照。

¹²⁴ 近藤和彦、前掲書、176頁。

オランダ領東インドを形成していくこととなる。こうして首都アムステルダムは世界金融の中心地として栄え、近代世界システムの中核となった。1623 年アンボyna事件でモルッカ諸島からイギリスを追い出し、東南アジアでの独占的な立場を獲得した。アフリカ南端にケープ植民地を開いて、インド航路の主導権を握る一方、1630 年にペルナンブコを拠点にブラジルにも進出して世界中に商業ネットワークを張り巡らせた。

植民地をめぐる一連の争いで、オランダはブラジルを失い、次に北アメリカのニュー・アムステルダムをイギリスに取られた¹²⁵。さらに南アフリカの植民地も超大国に成長したイギリスに敗れて失うなど、列強としてのオランダの国際的地位は凋落していった。この時期では長崎出島での日本との独占貿易権が東アジアでの唯一の牙城であったが、続くナポレオン戦争での敗戦によりオランダの海外覇権はほぼ消滅する。

カリブ海の島々の領有権をめぐるのはオランダ、イギリス、フランスが激しく争ったが、1814 年のロンドン条約でイギリスと、1815 年のパリ条約でフランスとの間に領土が確定した。最終的には、オランダ領東インドとオランダ領ギアナ（スリナム）などの植民地が残り、20 世紀半ばまで保持していた。

一方フランスは 1870 年代に第三共和政の下に、資本主義が急速に成長し、政治的にも安定し帝国主義段階を迎えていた。この時期に、普仏戦争敗北からの国力の回復、国際社会への復帰を目指し、1880 年代までに大資本と結んだ共和派による政治がほぼ確立した。しかし、普仏戦争で失ったアルザス・ロレーヌ地方の奪回など、対独強硬論を唱える右派と軍部の台頭、一方の労働組合主義（サンディカリズム）の台頭、フランス社会党の進出という労働運動、社会主義勢力の成長もあって、共和政は左右双方からの攻撃を受けて常に動揺した。

他方、この時期はフランスの工業力も発展し、フランスも帝国主義の段階に入り、勢力も増した。19 世紀末にアフリカ分割に加わってアフリカ横断政策を展開した。フランスはアルジェリアを占領し、1881 年にチュニジアを保護国化した。その後、西アフリカへ進出し、1886 年には大陸東岸のマダガスカル島

¹²⁵ ウィリアム・H. マクニール、『世界史（下）』、前掲書、156頁。

を併合し、東西植民地の構想が現実になった¹²⁶。また、すでに東南アジアでは1884年には清仏戦争で苦戦しながらベトナムに対する清の宗主権を排除し、インドシナ半島の植民地を拡大した。また日清戦争後、ロシア・ドイツとともに三国干渉を行って日本に遼東半島を還付させ、清の弱体化につけ込み、1898年の中国分割では広州湾を租借し、鉄道敷設権などを得た。

ドイツも19世紀末には国力を強化していた。小国の集まりであったドイツは、ビスマルクによって統一国家となり、商工業はイギリスと肩を並べるまで発展し、またドイツの銀行資本はラテン・アメリカや東洋まで勢力を及ぼした。ドイツは他の列強に比べ植民地競争には遅れを取っていたが、1900年にはアフリカと太平洋に若干の領土を獲得し、ヨーロッパでは最強の軍隊を持つようになった。1887年～1890年のビスマルク体制は、フランスの孤立によってヨーロッパの平和を演出したが、19世紀末から20世紀初頭になり、ロシアとフランスの同盟、イギリスとフランスの接近により、ドイツは逆に他の列強に包囲されることとなった。

イギリスの19世紀の伝統的外交政策はヨーロッパ列強間の勢力バランスを保ち、自国はどこの国とも同盟関係を持たず、ヨーロッパ的政界帝国であり続けようとしたものであったが、1902年の「日英同盟」で大転換することになる。これ以降イギリスは、ほぼ5年間に、フランス、ロシアと協商を結び、ドイツを中心とする三国同盟（オーストリア、イタリア）と対決することとなり、この関係は1914年第1次世界大戦の両陣営の基盤になる¹²⁷。

1900年頃の世界各地の植民地競争状況は、ドイツは主としてアフリカ南部とトルコ（イギリスと接触）、フランスはエジプト、チュニジア、モロッコなど北アフリカや地中海、さらに東南アジアや太平洋、インド洋マダガスカル領有でイギリスと対抗した¹²⁸。

そのなか、近代日本植民地帝国における海外進出の出発点は日清戦争であった。日清戦争の日本勝利の結果、清王朝は1895年の下関条約によって朝鮮の独

¹²⁶ 長島武之、柳澤伸一、大津正道（共編）、前掲書、142-143頁。

¹²⁷ 木畑洋一、南塚信吾、加納格（著）、前掲書、287頁。

¹²⁸ 長島武之、柳澤伸一、大津正道（共編）、前掲書、143頁。

立、遼東半島、台湾および澎湖島の割譲などを承認させられ、通商上の特権を日本に奪われた。その後、日本は 1910 年に朝鮮の併合を断行した¹²⁹。

イギリスはロシアの進出を警戒して、1902 年に日英同盟を結んだ。こうして日清戦争後のアジアの国際情勢は、ロシアと日本の対立を軸に展開されることになる。1905 年の日露戦争に勝利した日本は朝鮮半島の支配に国際的に承認され、「満州」経営へと大陸進出を具体化した。そして 1937 年以降日本帝国は中国本部への侵略を開始し、さらに 1941 年以降「南方圏」への軍事進出と「大東亜共栄圏」建設を目指すことになる¹³⁰。

ロシアはバルカン、小アジア、両海峡などトルコ分割、またペルシア、アフガニスタン、チベットなど中央アジアで、そして中国大陸ですべてイギリスと対抗している。

このような背景の下、この時代の博覧会は、1851 年のロンドン大博覧会以降、国際的な性格をもつようになると共に、政治情勢を反映して産業を越えたより国家的・政治的意味合いを深めていく。植民地拡大の意欲を背景に、帝国主義イデオロギーを維持するための政治的目的が強い万国博覧会が成立するのだ。

こうした万国博覧会がヨーロッパ各国や米国で頻繁に開催されるようになっていく。19 世紀後半には 42 回開催され、20 世紀に入ると第二次世界大戦までの開催回数がかえって 25 に減少するほど、また 1883 年、1894 年に各 3 都市、1887 年に 4 都市、1888 年ではじつに 5 都市に及ぶように、同一年に複数都市が万国博覧会を開催するほど、万博は流行した¹³¹。

19 世紀の万国博覧会は、イギリス、フランスのパリを始めオーストリア、ベルギー、オランダなどヨーロッパ国に加え、新大陸のアメリカ合衆国で開催された。さらにフランスはパリで集中的に開催し、イギリスは植民地を含めて大

¹²⁹ 小林多加士『海野アジア史—諸文明の「世界＝経済」』藤原書店、1997年、223頁。

¹³⁰ 日本は対露戦争勝利によって対フランス接近をもたらした。フランスは仏領インドシナにおける「反仏武力抵抗」が日本の勝利によって力付けられたうえで、同盟国ロシアの威信低下に見舞われていた。その結果、1907年6月に日仏協約が調印され、日本にとっては「満蒙」に加えて台湾対岸の福建省の領土権を保持するための特殊権益がフランスに認められることであった。大石嘉一郎（編）『日本帝国主義Ⅰ—第一次大戦期』東京大学出版会、1985年、33－34頁。

¹³¹ 田淵晋也「フローベールとゴンクール兄弟の見た万国博覧会：19世紀後半期におけるヨーロッパ文明の一樣相」『大阪府立大学紀要』39号、1991年、31頁。

英帝国内の各地で開催（12 回）し、米国は民間中心による主要な都市での開催がその特徴であった。

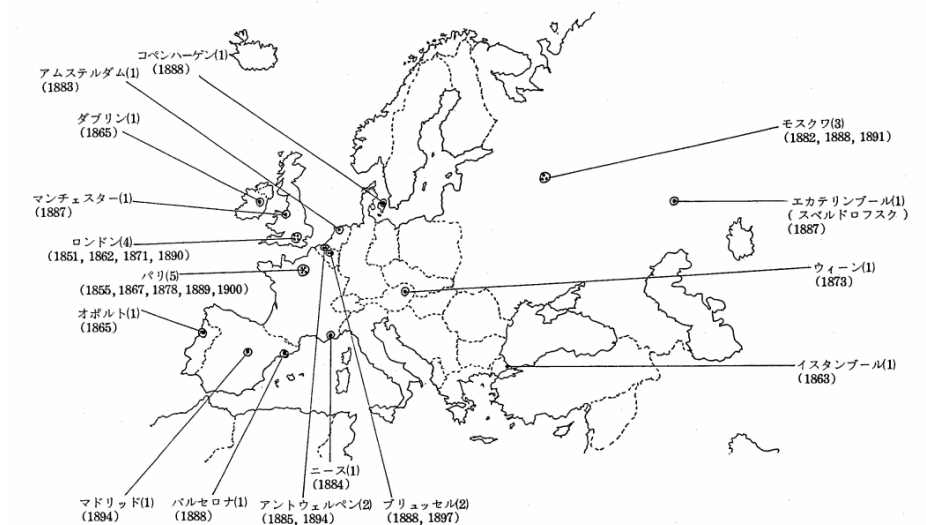


図 1 1851 年～1900 年ヨーロッパで開催された万国博覧会

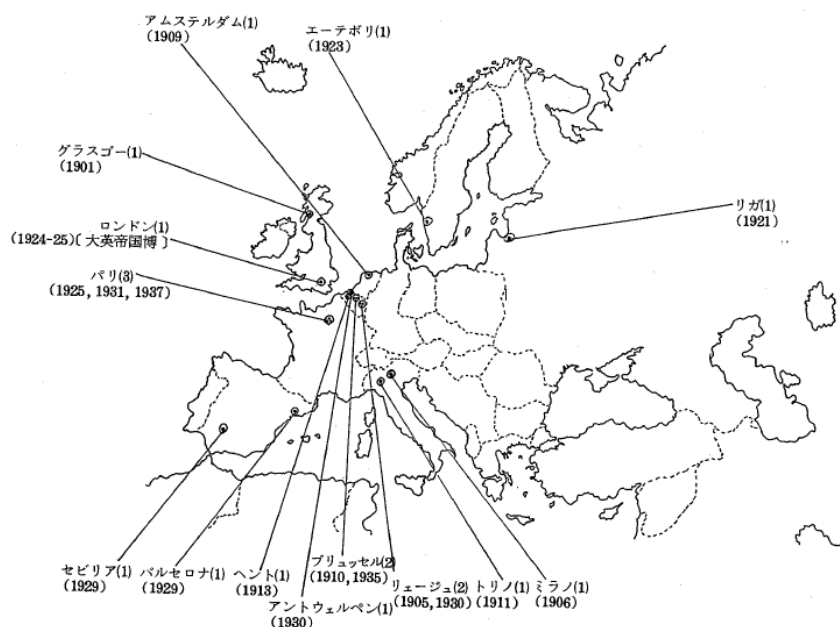


図 2 20 世紀における万国博覧会の開催地域

出典(図 1、図 2)：田淵晋也、「フローベールとゴンクール兄弟の見た万国博覧会：19 世紀後半期におけるヨーロッパ文明の一様相」、『大阪府立大学紀要』、1991 年、39 号、35 頁。

図 1 と図 2 の地図から、ドイツでは第 2 次世界大戦以前には万国博覧会が開

催されなかったことがわかる。また同じくイタリアでの開催も 20 世紀に入って北部工業都市で 2 回開催されたのみである。両国の統一の遅延、各都市の分離・独立的性格、あるいは、産業革命の遅れのため国際規模の博覧会を早期に開催することが困難であったと考えられる。

ドイツは、自国開催は遅れたものの早くも第 1 回ロンドン万国博覧会から、プロシアあるいは関税同盟（ドイツ諸邦）の資格で積極的に参加し、さらにクルップ社の製鉄・鑄造技術と巨砲はほとんど全ての博覧会に出品した¹³²。ドイツの統一後も、1873 年ウィーンをはじめとする各都市会場において、巨大な展示場面積を占め成功をおさめた。また、ドイツ国内では万国博覧会ではなく様々な特殊博覧会が、政府主催により開催された。たとえば、1880 年に漁業博覧会（ベルリン）、1881 年に鉱泉学博覧会（フランクフルト）、1889 年に商業博覧会（ハンブルグ）、1911 年に衛生博覧会（ドレスデン）が開き、成功させた。ナショナリズムを高揚したナチス・ドイツも、1937 年のパリ万国博覧会では黄金の鷲を屋上に据えた壮大なドイツ館を建設し注目を集めた。前年にはベルリン・オリンピックを開催していたが、万国博覧会はついに開かなかった。

第 2 節 1851 年ロンドン大博覧会以降の西欧における万国博覧会の展開

第 2 章で述べた 1851 年大博覧会の開催以降、国内を対象にした博覧会は海外まで対象を広げた「国際博覧会」、すなわち万国博覧会へとその構造性格を変化させ、同時に規模も拡大していくことになる。そのため、1851 年ロンドン大博覧会は最初の万国博覧会と位置づけられ、しばしば第 1 回ロンドン万国博覧会と言及される¹³³。

イギリスはその後 1862 年に第 2 回ロンドン万国博覧会を開催した。第 2 回ロンドン万国博覧会（The International Exhibition of 1862 London）は、サウス・ケンジントンにある王立園芸協会庭園の隣接地で、1862 年 5 月 1 日から 11 月 15 日に開催された。入場者数は約 621 万人であった。展示会場の面積は

¹³² 三宅宏司「クルップ社の 19 世紀—二人のクルップ・万国博覧会・日本—」、吉田光邦（編）『万国博覧会の研究』思文閣、1986 年、104 頁。

¹³³ 吉見俊哉、前掲書、28 頁。海野弘『万国博覧会の二十世紀』平凡社、2013 年、8 頁

23 エーカーで 1851 年の第 1 回ロンドン万博の会場となった水晶宮の 19 エーカーよりも大きかった。展示会場は、イギリスと諸外国で折半されていた。参加した諸外国の数は、39 か国であった。大英帝国の植民地諸国の展示場は、イギリスに割り当てられたスペースに組み込まれていた。この万博は、大英帝国の国家主義が強く打ち出されたため、後述するライバルのパリ万国博覧会を強く意識して軍需産業品や最新の工業製品等が広く展示されたと共に植民地各地からの産品が大量に展示された。さらにパリを意識して美術・工芸品や文化財の展示にも力が注がれた。ヴィクトリア中期の大英帝国や世界の最先端の科学・技術が展示された¹³⁴。

19 世紀後半になると最初に産業革命を実現したイギリスの工業力の絶対的優位は徐々に弱くなり、その後は帝国主義国家の競争時代が到来するようになる。イギリスにおける博覧会は 1865 年にダブリンで、1879 年にシドニー、1880 年と 1888 年にメルボルンで、1884 年にカルカッタ、1886 年にエディンバラ、1887 年にボンベイとアデレード、1901 年にグラスゴー、などのイギリスの植民地あるいは大英連邦国で開催され、世界各地で分散的に行われるようになる。

ヨーロッパ地域における万国博覧会の主役はイギリスからフランスに代わった¹³⁵。以下にフランスが開催した万国博覧会の特徴について検討を行う。

1. 1855 年第 1 回パリ万国博覧会

1851 年ロンドン万国博覧会の成功に刺激されて、それまで 5 年ごとに国内産業博覧会を開催してきたパリは、1855 年に「Exposition Universelle」¹³⁶という名の下で、初めての万国博覧会を開催した。

パリ万国博覧会は、1851 年のロンドン万博とは次の点で大きく異なっていた。ロンドン万博では美術品展示が必ずしも充分とは言えなかったのに対してパリでは美術展示のための「美術宮」という専用の展示館が重視された。そのため

¹³⁴ The International Exhibition of 1862: Illustrated Catalogue of The Industrial Department, London; Printed for Her Majesty's Commissioners, 1862.

¹³⁵ 吉田光邦(編)、前掲書、13頁。

¹³⁶ 正式には「農業・工業製品及び芸術万国博覧会」(Exposition Universelle des Produits de l'Agriculture, de l'Industrie et des Beaux-Arts de Paris) という名称であった。

パリ万博ではロンドン万博にはなかった本格的な美術展示のためのパヴィリオンをモンテーニュ大通りに始めて建設した。また、海外植民地の文物展示をそれまでにない規模にするなどの新機軸を打ち出した。シャンゼリゼに建設した産業館は幅 108m、長さ 250m、高さ 35m と、ロンドン万博の水晶宮の半分に満たない大きさだったため、宝飾品は隣接する円形会場に収容された。セーヌ川沿いに設けた長さ 1,200m の機械館には工業製品を展示し、労働者への実物教育という観点から、蒸気機関車、蒸気船等の大型機械が実際に稼動している様子を見ることができるようになっていた。

参加国は 25 カ国にのぼり、フランス国内からはおよそ 10,000 の出品者、イギリスとアイルランドからは 2,000 の出品者、オーストリア帝国から 1769 の出品者が参加するなどその盛大さは世界から注目を集めた¹³⁷。

クリミア戦争(1854-1856)中であったが、パリ万博は皇帝ナポレオン三世の強力な支援で進められた。皇帝はパリ万博によって帝政の正当性を誇示し、政治基盤を強化することを目指した。また、万博を主導した経済学者シュヴァリエ(M. Chevalier)、ル・プレー(P. G. F. Le Play)らは社会を科学的、実証的にとらえるサン・シモン主義者であり、万博を通じてフランスの芸術産業と科学技術の国際的競争力の強化を目指し、自由貿易の世界で指導者になることを目指したのである。パリ万国博覧会の開催は国際社会におけるフランスの優位性を誇示し、政治的、経済的、文化的に強い国家としてアピールする場となった¹³⁸。

2. 1867 年パリ第 2 回万国博覧会

1855 年のパリ万国博覧会の成功を受けて、1863 年 6 月、ナポレオン三世から万博開催の勅令が下り、パリ第 2 回万国博覧会の開催が決定された。会場には、シャン・ド・マルスの 14 万 6,000 平方メートルという広大な敷地があてられた。

主催者は万博を成功させるため十分な準備の下で継続的に展示方法を検討し、

¹³⁷ Daniels, “Paris National and International Exhibitions”, p. 6.

¹³⁸ 平野繁臣、前掲書、15頁。

全産業の総合的な見取図に従って展示を行った。会場は中央の温室庭園を囲んで7つの回廊が同心円状に広がる巨大な楕円形の展示会場が建設された。それぞれの回廊は特定の展示部門に対応しており、内から芸術作品、文化教養(リベラル・アーツ)関係品、家具、などと並び、6番目の最大の回廊には機械工業関係が展示された。また、円の中心から放射状に、展示品が国別に並べられていた。そのため、円の中心から(あるいは中心に向かって)通路を歩けば、国ごとに出品物をまとめて見ることができた。そしてメイン会場の外周には100軒を超える各国の展示会場、売店や遊園地、レストランなどが立ち並び、人気を博した¹³⁹。円心状に配置された分類を見ると、外側に衣食住という生活に必要とされる要素のグループが配置され、中心部に行くにつれて知的に必要とされる性質の作品群へと連なっていく構造になり、最後に美術・芸術作品が配置されている構造であった。

こうした構造は第2回パリ万博が最初の試みであったが、娯楽施設を重視した明るい祭典としての万国博覧会は、その後の万国博覧会のモデルとなった。出品者数は6万にのぼり、4月1日から10月1日にかけての会期の入場者数は906万人に達して1851年の第1回ロンドン万博を凌ぐものとなり、大成功を収めた。

第2回パリ万博は、第1回のパリ万博の開催に大きな貢献していた産業の組織化を唱えたサン・シモン主義者であるル・プレー(P. G. F. Le Play)が万博の組織委員長を務め、また、シュヴァリエ(M. Chevalier)が国際審査委員会の議長に任命された。フランス第二帝政に強い思想的影響力を及ぼしていたサン・シモン主義者たちによって統括されたこの万国博覧会は、第二帝政の象徴的存在となった¹⁴⁰。

1855年第1回パリ万国博覧会で行われた展示を続いて、今回の万博ではフランス各地の農村の伝統衣装が登場すると共にさまざまな民族(国民)の衣装の

¹³⁹ 吉田光邦(編)『図説万国博覧会史1851-1942』思文閣出版、2004年、33頁。

¹⁴⁰ このような夢を宣伝するために、ナポレオン3世はヴィクトル・ユゴーなどの著名な作家や哲学者の協力を得た。Anna Jackson, *Expo International Expositions 1851-2010*, V&A Publishing: South Kensington, 2010, p. 17.

展示室が設けられ、フランスからだけでなく、他の参加国からの各地方、各国の民族文化が展示された¹⁴¹。フランスのブルターニュ、アルザス、オーヴェルニュ、ノルマンディーなどの衣装が展示された。このような展示によって各地方の独自性が国家の民族的豊かさに繋がるという考えがあった。ここでアメリカ合衆国、ロシア、スペイン、スウェーデン、トルコ、イタリアなど十数カ国の展示との対比によってもフランスの民族的豊かさを提示した¹⁴²。

また、この万博の目的は、ナポレオン 3 世による第 2 回ロンドン万博への挑戦として国民にフランスに対する愛着意識（ナショナリズム）を引き起こすことにあった。そのため、ナポレオン 3 世はフランスの首都パリを世界文明の中心に、引いてはパリを首都とするフランスを世界の中心に位置付けようとした

¹⁴³。

3. 1878 年第 3 回パリ万国博覧会（1878 年 5 月 20 日～11 月 10 日）

普仏戦争（1870－1871 年）とパリ・コミューン（1871 年）の蜂起と鎮圧を背景として、第三共和政政府はフランスの威信にかけて 1878 年に第 3 回万国博覧会を開催した。このときには、会場は、前回のパリ万博の会場となったシャン・ド・マルスに加え、トロカデロの丘まで拡張された。シャン・ド・マルスには長さ 760 メートル、幅 350 メートルの長方形の展示会場が、トロカデロの丘には中央のホールから左右に円弧を描いて伸びる翼廊を持つトロカデロ宮殿が建てられた。セーヌ河をはさんでシャン・ド・マルスの対岸にある高台にトロカデロ宮殿が建設された。この宮殿にはフランス各植民地からの出品物が多数展示された。フランスは第二帝政期の 1850 年台以降、それまでの西インド諸島やアフリカ大陸に加え、インドシナに植民地を確保・拡大し、フランス帝国の拡大政策が強くなっていった。

¹⁴¹ Bjarne Stoklund, “The Role of the International Exhibitions in the Contruction of National Cultures in the 19th Century”, *Ethnologia Europaea* 24, 1994, p. 40.

¹⁴² Francois Duscuing, (ed), *L'Exposition Universelle de 1867 Ilustree*, Publication Internationale Autorisee Par La Commission Imperialeを参照。

¹⁴³ Walter Benjamin, “Paris-Capital of the Nineteenth Century”, ed. Howard Eiland, Michael W. Jennings (editors), *Walter Benjamin Selected Writings Volume 3 1935-1938*, Harvard University Press, 2002, pp. 36-37.

フランスはこの万博を通して、フランスに成立した第三共和政を世界に宣伝し、フランスが再び文化の中心として復活したことを誇示しようとした。その理由はこの万博以前に勃発した普仏戦争で 1871 年にプロイセン(ドイツ)に敗北し、アルザス＝ロレーヌ地方を割譲させられ、50 億フランもの賠償金を支払った敗戦国であったからである。ドイツ帝国がフランスから正式に招待されないことは両国間の競争と緊張関係が博覧会に強く反映した結果である。

この万博では、前回の万博よりも更に強く科学技術と芸術が結び付けられた。トロカデロの会場内には電車が走り、セーヌ川から汲み上げた水によって 4 つの噴水が造られた。この水は、機械館の床に通してクーラーとしても使われた。トロカデロの本館ではフランスの美術品が展示されると共に、一方では様々な国際会議が開かれた。

万国博覧会の会場では、アルディ (L. A. Hardy) が設計した巨大な建物の外観が印象的であった。機械館では、巨大な機械が並べられた他装飾を施された家具や芸術品などが展示された。巨大な蒸気機関と芸術品はこれまでのように人目を引く出展品であった。シャン・ド・マルスには、「自由の女神」の頭部が建設された。毎日、何百人もの見物人が、自由の女神の頭部に登るために列を成した。また、日本もシャン・ド・マルスに日本館を建て、トロカデロ会場にも、古物館への出品の他、茶室や日本庭園を持つ日本式家屋を建てて参加した。

4. 1889 年第 4 回パリ万国博覧会 (1889 年 5 月 6 日～11 月 6 日)

1889 年の第四回パリ万国博覧会は、フランス革命から 100 周年記念として行われた万博である。1878 年第 3 回のパリ万博会場であったシャン・ド・マルス公園とトロカデロの丘、それに加えてセーヌ川左岸およびアンヴァリッド前庭が会場になった。シャン・ド・マルスには約 312 メートルに達するエッフェル塔が建てられ、その後ろにボザール館、自由芸術館、機械館が建設された。

当初、開催に関しては、前回のパリ万博で巨額の赤字が出たことから、反対する意見があった。また、「フランス革命」の 100 周年に行われる記念万博¹⁴⁴で

¹⁴⁴ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p. 36.

あったため、立憲君主諸国は参加には積極的ではなく、フランス政府からの招待を正式に受理したのは、アメリカ、メキシコ、ギリシア、モロッコなど 29 カ国にとどまり、イギリスやロシアなどはフランス政府に対して公式に抗議をしていた。日本は立憲君主国家ではあったが、博覧会が日本の宣伝の場に有効と考え正式に参加を決定した。最終的にはこの博覧会の参加国は 42 カ国に増加した。また民間からの参加が著しく増加したものの博覧会からである。

このような状況下の開催では、何か呼び物になる展示やモニュメントが必要であった。そこで最大の呼び物として建設されたのがエッフェル塔であった。エッフェル塔は 700 近くの設計案から選ばれたエッフェル社により建設された。

シャン・ド・マルスに建設された機械館は、幅 115 メートル、高さ 45 メートル、長さ 420 メートルの大建築であり、これまでの建築方法では作り得ない巨大な空間であった。従来から用いられてきた、石造アーチや鉄骨半円アーチとは全く違う「三鉸アーチ」という方法が用いられ、これは、アーチを支える壁体や柱なしで組み立てられるもので、鋼でできたアーチを用いることにより可能になった技術だった。19 世紀後半の工業技術と製鋼法の発展により成し得た偉業であった。

一方、セーヌ川を渡ってトロカデロの丘には、オランダのチューリップ畑や日本庭園、薔薇園などが展示され、セーヌ川左岸に沿った細長い展示場およびアンヴァリッドには、諸外国の展示館が約 50 棟設けられた。会場内ではシャン・ド・マルスから小型電車が 10 分おきに発車し、周辺約 3 キロの会場を電車から見て回ることができた。エッフェル塔は夜には三色のサーチライトでライトアップされ、会場はエディソンが発明した白熱電灯で照明され、夜間開場が万博史上初となった。毎日シャン・ド・マルスの庭園で噴水と照明による華やかなショーが催された。

このパリ万博では初めて数々の国際会議が平行して行われた。そのテーマは「芸術・文学・科学・経済・社会」であった。パリ万博では産業博覧会、祭典としての博覧会という性格に加え、同時に開催される国際会議が新たに加えられた。もう一点、民族学による陳列が重要な要素になり、より重要な新しい特

徴はアジア、アフリカ、オセアニアにおけるフランスの植民地の風俗を再現したパヴィリオンの存在と植民地からの原住民の展示である¹⁴⁵。このパヴィリオンでは植民地にあるバザールなどが開催され、フランス各植民地から連れて来られた原住民が民族固有の服装をして展示された。観客たちは初めて観るフランスが支配する植民地の原住民の姿に好奇のまなざしを注いだのである。

このパリ万国博覧会を先例として、その後の万国博覧会では植民地原住民の生活を展示することを重要な目的として開催されるようになった。当時学界でも社会でも人気が高まりつつあった野蛮から文明という社会的進化論によって、当初は植民地の原住民による産物を中心に博覧会の展示が行われた。しかし、それは次第に人間（民族）の誕生とその習慣など異なる側面も展示対象とされるようになる。それは遂にはさまざまな人種や民族（原住民）が異なる発達段階に位置づけられるという理論を証明するための材料として展示されたのである¹⁴⁶。

5. 1900 年第 5 回パリ万国博覧会の開催とその内容（1900 年 4 月 15 日～11 月 12 日）

1900 年の万博は、19 世紀を締めくくり、20 世紀への展望する、パリ万博史上最大規模の博覧会となった。1889 年の万博会場に加え、セーヌ川右岸、ヴァンセンヌの森も会場とされた。シャンゼリゼに新たにグラン・パレとプチ・パレが建設され、セーヌ川対岸のアンヴァリッドとの間は壮麗なアレクサンドル三世橋でつながれた。

ドイツやアメリカが重工業部門によって目覚ましい発展をとげていた 1890 年代、フランス共和国政府の関心はテクノロジーから高級な手工芸・装飾芸術へと方向転換した。国際競争においてフランスの優位を実現できるような万博を開催し、フランス本来の特質とされる洗練された優美さを武器にファッションや織物、装飾品、家具の分野を世界のリーダーになることに焦点が当てられ

¹⁴⁵ Stoklund, “The Role of the International Exhibitions”, p. 41.

¹⁴⁶ Anna Jackson, *Expo International Expositions 1851-2010*, V&A Publishing: South Kensington, 2010, p. 76.

た。そして、これが後のアール・ヌーヴォーの興隆に繋がっていった。

展示の方法については、国別の陳列ではなく、展示品の種類の分類を中心に芸術、農業、機械など 18 分野に大きく分け、それを更に 121 部門に細分化することで、様々な会場内で展示が行われた。また、参加国は 40 カ国を越え、アンヴァリッド橋からアルマ橋に至るセヌ左岸には各国のパヴィリオン群があり、世界の縮図といった感じであった。これら西欧列強によるパヴィリオン建築は単なる建物の展示だけでなく、その建築様式によって各国の国民文化の特徴の表現で注目された。建物は展示物として、各国の国際的地位とナショナル・アイデンティティを誇示する重要な手段と認識されたため、設計や展示のために著名な設計者や画家やアーティストなどを動員した¹⁴⁷。トロカデロにはアフリカ、南米、アジアの風景がジオラマで紹介された。また、植民地のパヴィリオン群もあり、それと並んでロシアや中国、日本のパヴィリオンなどもここにあった¹⁴⁸。

パリ万博は回を重ねるごとに、出展品を展示するだけでは人々の注目を引くことはできなくなっていたので、新しいアトラクションを必要としていた。そこでこの第 5 回パリ万国博覧会に登場したのが、「電気」を使ったアトラクションであった。「動く歩道」やそれと平行して走る電車が人気を呼んだ。また「電気館」はこの万博の中心的な建造物となった。電気は動力ではあったが、人々を喜ばせたのは光としての魅力であった。「電気館」正面には「電気の精」の彫像が取り付けられ、照明は様々な色に変化し、その前の噴水を美しく照らした¹⁴⁹。

このパリ万博はフランスの芸術分野での優位性が強調され、万博を機にアー

¹⁴⁷ アメリカ合衆国は共和制の古典的な様式で、ハプスブルク帝国の諸国を含むオーストリア館はアルフォンス・ミュシャからウィーン・ゼツェッション（分離派）までが動員され、アール・ヌーヴォーやフォーク・アートにあふれるアレンジになっていた。イタリア館はヴェネツィアのサンマルコ広場を再現していた。ベルギー館は保守的で、スウェーデン館は遊園地のおとぎ城のような楽しさで、版画家アンデルス・ゾルンとイラストレーターのカール・ラーソンが参加した。スペイン館はクラシックで、フィンランド館はエリエル・サーリネンの設計で、モダンであった。ノルウェー館はアクセル・カレン・カレラが壁画を描き、アール・ヌーヴォー風であった。海野弘、前掲書、31-32頁。

¹⁴⁸ 同上書、33頁。

¹⁴⁹ 吉田光邦（編）『図説万国博覧会史1851－1942』、前掲書、106頁、124頁。

ル・ヌーヴォー¹⁵⁰が流行したという点や、人々に様々な娯楽も同時に提供したという点でこれまで開催されたパリ万博の中では最も華やかで大規模なものであった。

第6回パリ万国博覧会は1937年にパリで開かれた万国博覧会の最後となった。このときには、かつてのトロカデロ宮殿に代わって、アール・デコ調のシャイヨー宮殿が建設された。この万国博のさいには、シャイヨー宮殿の前にソ連館とナチス・ドイツ館が向かいあって建ち、それぞれ巨大な鎌と鉄十字を掲げた。

6. 19世紀のパリ万国博覧会の開催とその役割

フランスにとって博覧会の開催は政治的観点から重要な意味を持っていた。それは外交的孤立の危機から脱するため、第二帝国と第三共和国の新政権の正当性を、博覧会を通して強調することである¹⁵¹。一方で、1855年の博覧会は、ナポレオン3世が国内世論を支配し、国民の意識を統一し、彼の体制を維持する手段として開催された。

そのため、フランスは、西欧諸国に対して「文明の帝国」として「文明化の使命」を担う国家であるというイメージ戦略をとったのである¹⁵²。フランスは文明の中心であり、その文明的な優位をほかの西欧諸国に見せようとした。これは17世紀から続く認識で、帝政から共和政への明確な連続性を提供した自己認識であった。

フランスの優秀な文化的優位性を示すための目的を実現するため、博覧会では象徴的な表現の2つの主要な展示方法を利用した。それは、フランスの職人による美術作品の精巧な展示と産業展示の極端な強調、そして、それに関する比較解説である。美術品は1851年のロンドン万国博では展示部門の中から排除

¹⁵⁰ 19世紀末から20世紀初めにかけてフランスを中心にヨーロッパで流行した新たなデザイン様式であった。アール・ヌーヴォーと呼ばれる様式の特徴は、既存の素材を新しい素材と組み合わせ、素材の特質を極限まで探求する点にある。また、曲線的、曲面的なモチーフ、特に動植物に由来するモチーフが好んで用いられた。ジャポニズムとして日本の浮世絵や陶器が影響を与えた。

¹⁵¹ Wolfram Kaiser, “Vive la France! Vive la Republique? The Cultural Construction of French Identity at The World Exhibition in Paris 1855-1900”, *National Identities*, Volume 1: 3, 2012, p. 229.

¹⁵² 松本彰、立石博高（編）、前掲書、5頁。

された。ナポレオン 3 世は即座にこの特徴的な戦略を利用し、大規模な美術品展示を万国博覧会の中心に取り入れた。フランスの歴史、さらにはフランスの国民のテーマとなる美術品を扱うことによって、フランスは国家の偉大さを強調したのである¹⁵³。もう一つは、家具や香水などフランス職人による高品質の製品の展示によって、文化的優位性を示そうと試みた。このような保護的政策の理由は社会的に、工業化によって恐れを感じた社会層を奨励し、経済的に、第一次世界大戦以前のフランスの経済発展の特徴であった研究主導の大規模産業や大量生産へのより遅い移行を合理化することである¹⁵⁴。このような方法は、イギリス、そして後には米国の産業の優位性を対抗し、ナショナリズムの精神を保つためで継続的に利用された。

2 つ目の展示の意図として、フランスの文明化の使命を世界へ拡大しようとするものである¹⁵⁵。フランスはヨーロッパ文明の中心国家として特別かつ固定的な文化的覇権を握っていると強い認識を持っていた。19 世紀にフランス植民地帝国は急速に成長し、アフリカにおいての植民地獲得ほか、1885 年に清仏戦争によって、コーチシナと安南の保護領が支配され、1887 年にラオス、カンボジア、ベトナムを合わせた仏領インドシナが成立した。共和政は主に植民地の人々を啓蒙するために自らの植民地事業の正当性を主張した。

特に 1889 年と 1900 年に開催されたパリ万国博覧会を通して、フランスは世界分割の空間を体系的に序列し、帝国主義の拡大によって生み出された諸国家や文明のヒエラルキーを視覚的に再現することでフランスの偉大さと文明化の使命を表象した。1885 年と 1867 年の万国博覧会での植民地からの展示物は、英国が 1851 年ロンドン万博にインドの展示¹⁵⁶のように、植民地戦争で獲得した資料がトロフィーとして提示された。1867 年の万博では、植民地原住民がカフェやレストランなどで仕事を与えられた。1889 年、1900 年の万国博覧会、または 1906 年と 1922 年のマルセイユ植民地展では、植民地の生活を再現し、展

¹⁵³ Patricia Mainardi, *Art and Politics of the Second Empire-The Universal Exposition of 1855 and 1867*, New Haven: Yale University Press, 1987 年参照。

¹⁵⁴ Kaiser, "Vive la France! Vive la Republique?", p. 231.

¹⁵⁵ Hobsbawm, *Age of Empire 1875-1914*, pp.56-58.

¹⁵⁶ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, pp. 52-64.

示した。これは大衆（とくにフランス国民）に植民地文化を体験する場を提供し、フランス帝国のナショナル・アイデンティティを形成しようとした¹⁵⁷。これは同時に、西欧中心のオリエンタリズムの認識を国民の中に強化することでフランスの帝国主義を正当化するという意味を持つものに他ならなかった。

第3節 20世紀西洋における帝国主義の拡大と万国博覧会の役割

19世紀後半から西欧列強における植民地への関心が急激に高まるようになる。このような歴史の展開に伴い、博覧会が新しい展開と特徴を見せるようになる。それまで博覧会は科学技術の進化や産業の発展という内容・性格であった存在から植民地の要素を意図的に取り入れるようになった。「もの」を中心とした万国博覧会の展示は、20世紀に入って、「ひと」を中心になるように変化してきた。

産業の発展度合いを示す製品を展示することは、それぞれの国の文化のみならず、その劣等にある状況の文化も展示されることであった。そこでは、西洋対非西洋、宗主国対植民地、文明対未開というように国家が相対化・序列化された結果、支配関係が明らかになっていく。この節では、西欧諸国において変容を遂げてきた20世紀に入る万国博覧会の性格とその意味を検討する。

1. 植民地展示

万国博覧会としての植民地博覧会は最初にオランダのアムステルダムで1889年に開催された。この1889年アムステルダム国際植民地博覧会の後、第3回以降のパリ万博で見られるように植民地の文物の紹介が万国博覧会に取り入れられるようになった。更に、20世紀の前半には植民地は独立した企画となり、20世紀における万国博覧会を特徴づけるようになった。

1889年アムステルダム国際植民地博覧会はオランダ領東インドあるいはインドネシアをめぐる議論に深く関係するため第3部で詳細に議論することとする。

¹⁵⁷ Michael D. Brooks, 'Civilizing the Metropole: The Role of Colonial Exhibitions in Universal and Colonial Expositions in Creating Greater France, 1889-1922', Thesis, University of Central Florida, 2012, p. 16.

る。ここではオランダ以外のイギリス、フランス、アメリカの万博における植民地展示を論ずることとする。

(1) 1886 年植民地・インド博覧会 (Colonial and Indian Exhibition) と植民地展示 (1886 年 5 月 4 日から 11 月 10 日)

植民地・インド博覧会 (Colonial and Indian Exhibition) はロンドンのサウス・ケンジントンで、豊富な展示物を用い、「商業を活発にし、女王陛下の帝国内の全ての地域の絆を強めること」を目的に開催された博覧会であった。この博覧会は、ヴィクトリア女王によって開会され、会期中にイギリス国内外から 550 万人が入場した。

この植民地博覧会は大英帝国の統合を促進することを目的として開催された。植民地博を運営した王立委員会は、『統合された帝国』を徹底しようとするため、博覧会には、イギリス領インド帝国、自治領カナダ、ニューサウスウェールズ植民地、ヴィクトリア植民地、南オーストラリア植民地、クイーンズランド植民地、西オーストラリア植民地、ニュージーランド自治領、フィジー、ケープ植民地、ナタール植民地、セントヘレナおよびアセンション諸島、セイロン、モーリシャス、海峡植民地、香港、ギアナ、西インド諸島、トリニダード、イギリス領ウィンドワード諸島、グレナダ、セントビンセント、トバゴ、セントルシア、バハマ、英領ホンジュラス、西アフリカ定住地、ゴールド・コースト、ラゴス植民地、マルタ、キプロス、フォークランド諸島が出展した¹⁵⁸。つまりあくまで大英帝国内の博覧会であり、「国際」的な性格はなかった。

インドの美術品は、藩王国ごとに、別々の場所に配置されていた。ラージプーターナーの入口は、当時のジャイプル藩王国のマハラージャが造らせた大きなジャイプルの門となっていた。グワーリヤル藩王国の門は、1883 年のカルカッタ国際博覧会に展示されたものをヴィクトリア&アルバート博物館が借り受けて設置されていた。アグラの監獄から連れてこられたという数十人のイン

¹⁵⁸ *Official Catalogue Colonial and Indian Exhibition 1886*, London: William Clowes and Sons, 1886.

ド人たちが、生きた展示物となり、イギリス帝国が長期的に取り組む「犯罪カーストの更生」の一部として職業訓練を与えられた職人として紹介された。自治領カナダは、農産物や工業製品を多数出展し、果物などの農産物のほか、農機具や楽器が注目され、このことは後にイギリスの輸出市場の拡大につながった¹⁵⁹。

それまでの博覧会と違って、この植民地博はイギリスが保持する帝国地域の重要性をイギリスの人々に示すことでその最大目的としたという点が大きな特徴がある¹⁶⁰。植民地博の開催によって、観客は世界中の至るところに存在する植民地から集められた様々な産物に触れることで、帝国の魅力的な資源とその可能性を体感できたのである¹⁶¹。

この博覧会の開催の意味は、19世紀末のイギリスにおける帝国地域への関心の高まりを反映したものであった。一方では大英帝国の領土拡大を示すことで帝国の威信を誇示することによって、新たに帝国に編入された地域に住む原住民を支配することの正当性と、彼らを教化することの必要性を国民に宣伝するための場でもあった。

もう一つは、この帝国拡張で重視されたのは、イギリス本国とイギリスからの移民が中心となり建設された植民地との統合である。植民地博が開催された1880年代のイギリスにおいて、植民地の価値は、外国市場で競争力を失いつつある製造業にとって理想的な市場と見なされただけでなく、本国への一次産品供給地としても再評価されたのである。

また、19世紀後半の植民地への責任をもった政府を設置した以降、植民地分離の高まりに対する脅威は、植民地博が開催された1886年始めのアイルランド自治法案をめぐる論争において頂点に達していた。植民地博覧会の開催は既存の自治植民地統合の一つの手段でもあった。

植民地博覧会を支えた植民地は、独自の会場を運営し、その展示を通して自

¹⁵⁹ 福士純「1886年「植民地・インド博覧会」とカナダ」『社会経済史学』第72巻第5号、社会経済史学会、2007年、620-630頁。

¹⁶⁰ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, p. 52.

¹⁶¹ 福士純、前掲書、46頁。

国の発展と大英帝国の統合を自ら主張したのである。イギリスからの移民によって建設されたこれらの植民地は、イギリス本国とそのアイデンティティを共有してはいても、大英帝国内にあるイギリス本国と植民地を同質ではない世界であると認識されていた。

従って、ブリティッシュ・アイデンティティによって統合された大英帝国は、その内部においてイギリスを頂点としたヒエラルキー的な序列構造を形成していたのである。それを現在から見れば醜悪なかたちで可視化したのは植民地原住民の展示であった。そのため各植民地は、序列の頂点をなすイギリス本国との差異を認識し、それぞれの展示の仕方でその差異を埋めようと試みたのである。この植民地博覧会は、各植民地にとって自国における新しいアイデンティティの建設の過程を本国の人々に示そうとする試みの一つであり、その進歩をめぐる競争であったと考えられる¹⁶²。

(2) 1931 年パリ植民地博覧会と植民地展示(1931 年 5 月 6 日から 11 月 15 日)

1931 年にパリ西南郊のヴァンセンヌで開催された植民地博覧会はとりわけ大規模で、フランスがイギリスに次ぐ世界第二の植民地帝国であることを誇示するものであった。インド支配に陰りが見え始めたイギリスは不参加を決めこんだため、ヨーロッパ大陸諸国のみの参加となった。フランスは博覧会会場内にカンボジアのアンコール・ワットを再現し、オランダはバリ島の寺院を模した建造物をわざわざ建設した。この博覧会の目的は民族文化の紹介に意を用い、植民地の事情を優先したように見えて、実はヨーロッパ人による植民地支配を永続化しようと図ったものだった。

パリ植民地博覧会には情報館や植民地館などフランス本国のパヴィリオン群が中心となり、その周辺に商業施設のパヴィリオン、「植民地の森」というパヴィリオン群が建ち並んでいた。フランス館の展示スペースは総計 4 万 2 千平方メートルあり、主にフランスの植民地への輸出目的のために製造された製品が

¹⁶² 福士純「1886年「植民地・インド博覧会」と植民地間の競争意識」『駿台史学』第131号、2007年8月、63頁。

展示された¹⁶³。フランス政府のパヴィリオンはアール・デコ様式であり、「商業と工業の大聖堂」として位置づけられた。展示室は巨大な単一空間の中にマダガスカル、モロッコ、インドシナなど、フランスの多くの植民地から出展された。博覧会会場は異国趣味を誘い、西洋文明を際立たせるための「見世物」として植民地の住民を会場内に配置し、西欧支配の秩序を合理化するために植民地世界をスペクタクルとして一望できる構成となっていた。これがパリ万国植民地博覧会の開催目的であった。もっとも、展示された植民地の姿は博覧会場では「異種混交（ハイブリッド）」が見られ、例えば、原型に似せて再現されたアンコール・ワットが異国趣味を呼び込む一方で、内部は現代的に設計された展示空間が広がっていた。こうした異種混交性にもかかわらず、観客を魅了させたのは会場内に連れてこられ歌舞を演じた植民地原住民の存在であって、植民地原住民を劣った「人種」として位置づけることで、西欧を頂点にした「人類進化」の歴史を語る筋書きができあがっていたのである。

2. 人間展示

産業のディスプレイとして誕生した万国博覧会は、次第に文化的、政治的側面を持つようになり、帝国主義のディスプレイの場としての博覧会へと変化していった。同時に、それらは西欧によって作り上げられた「表象」という視覚を利用した世界を序列化し、西欧の経済的・政治的支配下に置いた非西欧文化を西欧とは本質的に異なった「他者」として自分たち(西欧人)と区別し、分類していったのである¹⁶⁴。

ここでは、西欧がどのように世界を表象し、「野蛮」を生み出すことで「文明」としての西欧のイメージを創出していくのか、その過程について 1889 年のパリ万博以降、各国で開催されていった「人間展示」を中心とした万博展示の検討を行う。

「人間展示」とは、19 世紀末の社会進化論と人種差別を直截に表明した展示

¹⁶³ パトリシア・モルトン（著）、長谷川章（訳）『パリ植民地博覧会—オリエンタリズムの欲望と表象』、ブリュッケ、2002年、25-26頁。

¹⁶⁴ 吉見俊哉、前掲書、10頁参照。

ジャンルである¹⁶⁵。これは、博覧会における植民地展示物として、植民地産の輸出商品や工業原材料、あるいは伝統的文物、遺跡のレプリカに留まらず、植民地の「原住民」とその生活を、彼らの村を再現して実際に「原住民」を住まわせて展示するものであった。

(1) パリ万国博覧会と人間展示

1889年のパリ万博は、博覧会の性格を決定的に変化させた博覧会だった。それまで各国のパヴィリオンでは、近代産業が生み出した最新テクノロジーが展示され、産業文明がその中心に位置していた。その産業文明は国力を示すものでもあった。しかしこのパリ万博ではこれらの近代産業の展示のほかに、もう一つの催しがおこなわれていた。各植民地から原住民を連行し、会場内に設けられた模擬集落のなかで彼らに生活をさせて展示した「人間展示」である。

その背景には、帝国主義や植民地主義という政治的イデオロギーを正当化し、さらに推し進めていこうとする帝国主義国家の思惑と、世界を「発見」した西欧社会がその優位性を学術的理論に基づいて再認識する思想とが結びついていた。それは、当時のヨーロッパ社会において学術的にも、一般的にも大きな位置を占めていた社会進化論の理論の中に原住民を位置づけたものであり、植民地支配の正当性を証明する「文明」と「野蛮」の構図を形成するシステムであった。ダーウィンの進化論に基づき、人間社会も同様に「未開」、つまり「野蛮」な劣った社会から進化がおり、最終的に最も優れた西洋社会が出現するという社会進化論¹⁶⁶は、西洋人の人種的優位を証明し、同時にその他の人種（有色人種）に劣等性を付与することで、帝国主義国家の植民地政策による侵略を正当化するイデオロギーとして、政治的に利用されていった。「進歩」した西欧と「遅れた」植民地との間に大きな差を持たせることにより、「未開」が「文明」に従属することを正当化したのである。

当時の西欧社会は、産業革命によって発達した科学技術や軍事力を背景に、

¹⁶⁵ 同上書、184頁。

¹⁶⁶ 坂上考『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会、2003年、33頁参照。

地球のほぼ全域を自国の領土や植民地とし、博覧会では各植民地の展示物とともに、その範囲も地図などで示すことによって、一般の人々にも認知されていた。このような状況は、西洋、とりわけ「西欧人（白人）」の「優位性」を示すものとして社会進化論の思想と深く結びつき、政府だけでなく、一般大衆に至るまで多くの人々が社会進化論を支持していた。

「人間展示」は、そうした背景の下で、原住民たちの「未開」や「劣等性」を「教材」として展示し、視覚的に証明していこうとするものであった。1889年のパリ万博では、主にセネガル、ニューカレドニア、仏領西インド諸島、オランダ領東インドのジャワ島を中心とした地域から連れてこられた「原住民」が数ヶ月にわたる開催期間中ずっと会場内で「生活」させられ、昼夜を通して「展示」させられた。しかし、実際の展示ではそれぞれの家族が同一の民族で形成されているわけではなかった。例えばセネガル人集落の場合、8家族はブルブ族、ゴルフ族、バンバラ族などそれぞれ文化的伝統の異なる民族の出身者で構成され、同じ「集落」の者同士でも互いに言葉を通じさせることができなかったといわれる¹⁶⁷。しかし、訪れた人々は、民族学的根拠に基づいた「実物展示」としてかれらを見つめていた。ここで重要なのは、「実物展示」が人種や民族を正確に分類することではなく、社会進化論の理論を立証する「教材」として、進化の過程の中にかれらを位置付けていくことであった¹⁶⁸。

フランスで開催された博覧会では、植民地の「原始的」で「野蛮」なイメージを前面に押し出し、また一方ではエッフェル塔や電気技術などの最新テクノロジーは「文明」を象徴するものと位置付けた。この二つの展示部門は、「文明」としての西欧社会と「野蛮」な植民地との間に大きな距離感があることを観客に意識させる構図であった。

こうした「人間展示」は、それ以前にもロンドンやパリの見世物小屋でも行われていたが、1889年のパリ万博で行われた「植民地集落」は、それらのものとは質的に異なっていた。「人間展示」が、万国博が持つ政治技術論における一

¹⁶⁷ 吉見俊哉、前掲書、185-186頁参照。

¹⁶⁸ 同上書、186頁。吉田憲司、前掲書、36-37頁参照。

つの極限形態を示すものとして、それまでとは異なるものである理由として、次の3点が考えられる。

第一に、数十人、時には100人を超える人数の社会集団が、その居住環境とともに博覧会場に移植された点である。第二に、その組織化と演出の基盤にあったのが、興行的な成功を収めることではなく、非西欧世界を社会進化論的な階梯の中に位置づけようとする人類学的知の営みであった点である。第三に、それら「未開社会」のスペクタクル的な展示を国家が自ら担っていた点である¹⁶⁹。

万国博覧会で行われた「人間展示」は単なる興行的成功ではなく、国家が主体となって西欧とその他の地域との間に明確な差を生み出し、優劣をつけていこうとする政治的イデオロギーを全面に押し出したものであった。この「人間展示」という展示ジャンルは、このパリ万博において本格的に登場し、その後、ヨーロッパ各地、アメリカで開催された万国博覧会さらには日本における博覧会へと広く普及していった。

(2) シカゴ万国博覧会と人間展示

1893年、コロンブスの新大陸発見400年を記念して開催されたシカゴ万博（World Columbian Exposition）では、その中心となったのは、人工池に囲まれた白亜のパヴィリオンが立ち並ぶ「ホワイト・シティ」であった。ホワイト・シティのパヴィリオンは、古代ローマ風やルネッサンス風の建築様式で建てられ、これは力強い労働者ではなく、穏和な金融資本家であろうとする当時のアメリカ人の意識に適合させたものであった¹⁷⁰。アメリカは大陸の領土獲得を終えており、生活の安定を得たアメリカ人移民者たちにとって、次の目標は植民地を獲得し、西欧列強と肩を並べる帝国を築くことであった。

そうした中で開催されたこの万博では、新しいアメリカを象徴する「ホワイト・シティ」とは対比的に、会場の南端に武器や、材木類の展示、そして人類

¹⁶⁹ 吉見俊哉、同上書、186頁

¹⁷⁰ Stanley Appelbaum, *The Chicago World's Fair of 1893: A Photographic Record*, Dover Publications, New York, 1980, p. 13-14.

館などのパヴィリオンが林立する地区があった。「ミッドウェイ・プレザンス」と呼ばれたこの地区では、帝国主義と人種差別主義の思想の表明の場でもあった¹⁷¹。ミッドウェイ・プレザンスは、全長 1 マイル、幅 600 フィートの大通りで、その両側にレストランや興行館、そして民族村 (Ethnic Village) が並び、モスクやパゴダなどの建築物、観覧車、野生動物の見世物小屋、そして世界の諸民族によるエキゾチックで、娯楽的な空間で構成されていた¹⁷²。しかし、この空間は単なる娯楽施設ではなく、シカゴ万博においてもっともイデオロギーを顕著に表す空間であった。

1889 年のパリ万博を目にしたアメリカの調査団は、シカゴ万博でこれを凌ぐ展示を構想した。その結果、シカゴ万博では、ミッドウェイに大規模な「民族学的集落」が形成され、「文明」と「未開」の関係が、ホワイト・シティとミッドウェイ・プレザンスによって表象されていた。ミッドウェイからホワイト・シティに至るこの展示空間は、アメリカ人が辿った「進化」の過程を表していた¹⁷³。「進化」は、当時のアメリカ人の中に、新たに芽生え始めた概念であった。技術が進歩し、経済も発達し始めていたアメリカ人は、自分たちの文明が到達している位置を確認できる基準を求めている。そうして用いられたのが、人間を発達段階ごとに分類 (カテゴリー化) し、それを進化の流れとしてヒエラルキーの中に位置づけしていこうとするものであった。

進化の最高峰にアングロサクソンのアメリカ人を位置づけ、それはホワイト・シティが象徴していた。一方ミッドウェイでは、ホワイト・シティを頂点に、それ以外の人種が「進化」の過程によってヒエラルキー的に配置され、「進化」の過程を計る基準として作られた¹⁷⁴。ホワイト・シティに最も近い場所には、「ゲルマン系やケルト系の集落が置かれ、続いて中央部にはトルコやアルジェリアやアジアの諸民族、そして、西端にはアフリカの部族とアメリカ・インデ

¹⁷¹ Robert W. Rydell, *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*, University of Chicago Press, 1984, pp. 47-48.

¹⁷² 大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』東京：研究者出版、1993年、7-10頁。

¹⁷³ 奥出直人「1893年シカゴ博のミッドウェイファーストフード・レストランのデザインの文化的起源」『アメリカ研究』22号、アメリカ学会、1988年、98頁。

¹⁷⁴ Rydell, *All the World's a Fair*, pp. 80-88. 奥出直人、同上書、99頁参照。

インディアンの集落が配置」¹⁷⁵されていた。とくに「アメリカ・インディアンの展示に関しては、アメリカ・インディアンに関する膨大な収集品が「人類の進歩」の諸段階に従って展示」¹⁷⁶されていた。そして、アメリカ政府、つまり白人が原住民や国内の黒人に対して「いかに貢献したか」、「いかに彼らを文明化したか」を示すために、アフリカの黒人とアメリカの黒人やインディアンたちの生活、文化を再現し、その「文明化」の過程を比較するという展示が行われていた。会場は、ダホメ人の「未開状態」から出発し、ジャワやサモア、そして日本などの「半文明人」を通りながら「進化」の過程を辿り、ミッドウェイを抜けるとそこにはアングロサクソン文明を象徴するホワイト・シティが広がるように設計され、訪れた人々は、自らの文明が進化のヒエラルキーの頂点にあることを確認していった¹⁷⁷。

こうした人種差別主義と社会進化論のイデオロギーに基づいた民族学的展示方法は、大衆娯楽と巧妙に結びつきながら、訪れたアメリカ人を中心とする白人たちに優越感と自己認識の場を提供し、その後、アメリカで開催される万博のモデルとなっていった。米西戦争での勝利によりフィリピンとハワイを併合し、「帝国」として変貌を遂げようとしていたアメリカにとって、万博は「帝国」としての意識を大衆に広め、また意識を統合するイデオロギー装置として重要な役割を果たしていった。

(3) バッファロー博覧会と人間展示（1901年5月1日から11月1日）

1901年、ニューヨーク近郊のバッファローで開催されたこの万博は、新しい世紀の幕開けを祝う祝賀ムードとバッファロー地域の経済振興と地域住民の意識高揚を目的として開催された¹⁷⁸。会期中の入場者数812万人と規模としてはそれほど大きくなかったが、前回のシカゴ万博での展示方法を受け継ぎ、それをさらに発展させた、この時代の博覧会の性格を典型的に表した博覧会であっ

¹⁷⁵ 吉見俊哉、前掲書、193頁。

¹⁷⁶ 同上書、193頁。

¹⁷⁷ 同上書、193-194頁参照。奥出直人、前掲書、99頁参照。

¹⁷⁸ *Official Catalogue and Guide Book Pan-American Exposition 1901*, p. 5.

た。シカゴ博では、アメリカのアングロサクソン文明を「進化」の頂点とし、垂直方向へのヒエラルキーをその程度に従って段階的に示すことにより形成されていた。一方、このバッファロー博ではそうしたヒエラルキーが色彩によって階層化され、「色彩の政治学」が実践されていたのである¹⁷⁹。

バッファロー博の会場は、訪れた人々に与える印象を重視した設計となっていた。まずその入り口は一箇所に限定され、中に入ると目の前には湖が広がっていた。そして湖に架けられた「勝利の橋」は、ちょうどシカゴ万博でのホワイト・シティのように壮麗であった。そうして人々はその橋を渡り、その先にあるパヴィリオン群へと向かうように動線が作られていた¹⁸⁰。主要なパヴィリオン郡は会場を南北に貫く街路の両側に並んでいたが、いくつかのグループに分けられ、進化論的な方法で配置されていた。

第1グループ： 自然資源の利用と開発に関する展示と合衆国政府館。

第2グループ： 「音楽の寺院」といった芸術や「民族学館」などの文化や人種に関する展示。

第3グループ： 人間とテクノロジーの発展に関する展示。

第4グループ： 興業館と原住民集落¹⁸¹。

これらのグループは第1グループが最も手前に配置され、第2グループ、第3グループの順に奥に配置されていった。第4グループに関しては、これらのパヴィリオン群から少し離れた西側の地域にあり、シカゴ万博で形成されたミッドウェイであった。こうした配置は、シカゴ万博と同様に「自然」から「未開」、「未開」から「文明」へという進化論的方法で配置されていたが、先に述べたように、この博覧会を特徴づけたのは「色」であった。

シカゴ万博で用いられた進化論的配置に加え、この万博ではそれらをより効果的に表す手法として、パヴィリオンや建物の色調を進化論的配置に対応させ、「野蛮な黒い色」から「繊細な明るい色」へと変化させていった¹⁸²。具体的に

¹⁷⁹ Rydell, *All the World's a Fair*, pp. 131-137.

¹⁸⁰ Official Catalogue and Guide Book *Pan-American Exposition 1901*, p.15-16.

¹⁸¹ 吉見俊哉、前掲書、195-196頁参照。

¹⁸² 同上書、196頁参考。

は、「未開」の段階に相当する第 1 グループのパヴィリオンは赤褐色や黄土色の暗い色彩、そして第 3 グループが表す「文明」へ向かうにつれて、次第に薄い青や緑、そして金色といった明るい色彩を基調としたパヴィリオンという風に配置されていた。また、同様の手法はパヴィリオン内部の展示にも見られた。例えば、民族学館では展示品の背景の色が、その民族が進化の階梯の中で占める位置に応じて赤茶色から青空色へと進化していくという配置順であった¹⁸³。

(4) セントルイス万国博覧会と人間展示

次に、バッファロー博から 3 年後の 1904 年にセントルイス買収 100 周年を記念してセントルイス万国博覧会が開催された。セントルイス万博は 2000 万人近い入場者を集め、その会場の規模も 1893 年のシカゴ万博の約 2 倍あり、これまでの万博と同様、美術館を中心として、その左右に工業館、工芸館、電気館、学芸館、鉱山館、交通館などが配置され、その中心には無線電信や飛行機、そして自動車などの新しい産業テクノロジーを展示した「アイボリー・シティ」¹⁸⁴が人々の興味を集めていた。

しかし、この万博で最も人々の関心を集めたのは、それまでの万博の規模を凌いで企画された「人間展示」であった。1889 年のパリ万博からシカゴ万博、バッファロー博と続いて、開催されてきた「人間展示」は、常に人々の関心を集める展示分野であり、回を重ねるごとにその規模、内容ともに拡大され、組織化されていった。この万博における「人間展示」は、会場内に 3 箇所 of 展示区域が設けられ、原住民や様々な人種が大々的に「展示」された。まずは、会場を取り囲むように設計された細かい区画に設けられた娯楽街の「パイク-The Pike」である。パイクでは、動物ショーやカイロの町、インドの帝国、ボーア戦争のショーと共に、日本の縁日などが催され、アフリカ人やアジア人が多く展示されていた。このパイクによって開催者がアメリカにおける帝国主義的のビジョンを映し出そうとし、そのことによってアメリカ国民の世界観を作り出

¹⁸³ 同上書、196頁。

¹⁸⁴ 「アイボリー・シティ」はシカゴ万国博覧会の「ホワイト・シティ」と対比させるものであった。

そうとした¹⁸⁵。娯楽的なパイクに加え、これまで博覧会で最も人々の関心を集めていたが、公式な展示部門としては扱われなかった「人間展示」がはじめて公式の展示部門として登場した。この展示では大きく二つに分類された。一つは、様々な種族のアメリカ・インディアンから、アフリカのピグミー、アルゼンチンのパタゴニア原住民、そして日本からはアイヌが連れてこられ、模造集落のなかで「実物」の「生活」を展示させられていた。

そして、もう一つは「フィリピン村」であった。これは、フィリピン総督を務めていたウィリアム・ハワード・タフトの強い希望によって設けられたもので、広さ 47 エーカーの敷地に約 1200 人ものフィリピン諸島の諸民族が集められ、展示されていた。このような展示によって、彼はフィリピン諸島における原住民に対する道徳的な影響を与えとかれらの生活状況の向上をもたらすことになるという考えに基づくものであった¹⁸⁶。1889 年のパリ万国博覧会以降、各国で開催された万国博覧会では「植民地集落」が次々と造られ、展示されていたが、一つの植民地からこれほどの人数を集めた「植民地集落」は、これまでになかった¹⁸⁷。

この「フィリピン村」は、「これまでアメリカ人が経験してきた記憶を辿るように構成されていた。というのも、ここに訪れた人々がまず目にするのは、マニラの城壁であり、こうした配置は、米西戦争でスペインに勝利し、スペインに代わってフィリピンを統合するアメリカがマニラに入城したときと同じような感覚を人々に与えていった。そして、城壁を抜けるとマニラ市街を再現した中央広場やフィリピン諸部族の模造集落、そして練兵場が広がっていた」のである¹⁸⁸。中央広場は典型的なスペイン様式で構成された市街地が、スペイン支配を象徴的に表し、またそれらの周囲にはフィリピンの中心的部族として、ネグリティ族やイゴロット族などの模造集落が林立していた¹⁸⁹。さらに、これらの民族は単に並列されて生活していたわけではなく、進化の程度によって段階ごと

¹⁸⁵ Rydell, *All the World's a Fair*, p. 179.

¹⁸⁶ Ibid., p. 168.

¹⁸⁷ 吉見俊哉、前掲書、199頁参照。

¹⁸⁸ 同上書、199-200頁。

¹⁸⁹ Official Catalogue Philippine Exhibits, Universal Exposition St Louis 1904, pp. 261-271.

に分類され、その世話が展示されていたのである。さらにその外側を囲んでいた練兵場には、数百名のフィリピン警察兵が駐屯し、アメリカによって「文明化された」フィリピン人の姿を映し出した¹⁹⁰。

人々の関心をもっとも集めたこのフィリピン村は、帝国主義国家へと変貌を遂げようとしている「強い」アメリカの姿を訪れた人々に見せ、アメリカの統合がいかにフィリピン人を「文明化」し、彼らに利益をもたらしているかを訴えようとするものであった。一方で、模造集落では未だ「未開」の原住民を「展示」し、アメリカによる「文明化」の必要性があることを体系的に証明していた。

19世紀後半に国家主導で開催されるようになると共に、大規模化・国際化した博覧会は、また植民地という展示対象をより強調するようになった。そこでは、ヨーロッパ、とりわけ西欧を中心として非ヨーロッパを周縁する世界秩序が表象された。20世紀に入ると、博覧会における植民地展示「物」には原住民と呼ばれた進化におけるより低位にあるとされた人間が含まれるようになった。

小結

15世紀から18世紀までの間に、西欧社会はそれまでの社会構造や社会的価値概念が大きく変容を遂げ、同時に新たな価値概念を発見していった。それは近代市民社会が確立し、国民国家という新しいシステムが誕生する中で、それと密接な関係をもつ帝国主義イデオロギーの芽生えといえるものであった。この時代の帝国主義はヨーロッパ外の世界に対する政治的経済的な侵略だけでなく、西欧の価値観を普遍的価値として「世界を一元化」するという文化的侵略の始まりといえる。そのため、西欧という地域に限定された価値概念であったものが次々と普遍的価値概念として標準化されていった。その結果として、西欧の人々の中に「白人」と「黒人」、「西洋人」と「東洋人」、というカテゴリー

¹⁹⁰ Ibid., p. 293.

が形成されていく。こうして形成されたカテゴリーは、思考・行動様式を含めた「文化」と血のつながりや地域的共通性による「科学」や「歴史」を拠り所として西欧市民社会の「正当性」が主張されるようになっていく。西欧諸国による帝国主義や植民地主義の思想は、その正当性を見出した西欧の「知」による非西欧世界の「無知」に対する支配であった。博覧会はこの支配関係の正当性を国民に証明する場として後に利用されるようになった。

第 I 部では、第一章で博覧会が成立する政治経済的背景を整理すると共に、15 世紀に始まる世界の一体化、そしてルネッサンスから啓蒙思想に至る流れのなかで生まれた博物学の重要性を確認した。序論で提示した万国博覧会の 3 つの時代区分のうち、近代博覧会が誕生した 1780 年代～1851 年の第 1 期を第 2 章で、博覧会が国際化した 1851～1900 年の第 2 期、および帝国主義的性格を帯びた 1901～1940 年の第 3 期を第 3 章でそれぞれ議論した。

18 世紀半ばイギリスに起こった産業革命による工業化は新しい技術力と軍事力の発展をもたらし、豊かな西欧近代の誕生の原動力となった。また、それは西欧列強による新たな市場や植民地の獲得競争を激化させ、ヨーロッパ各国は国民の意識高揚と自国の地位を強化させることが重要な課題となった。その結果、当初ヨーロッパ各国の国内産業で新しく生産された工業品の展示即売会の性格を持った産業博覧会として始まった近代博覧会は国際的な性格を持つようになり、万国博覧会の流行をもたらすようになった。

最初の万国博覧会としてロンドンの第 1 回大博覧会開催の背後には、フランスの保護貿易主義に対するイギリスの自由貿易主義があった。つまり、産業振興・生産技術情報公開という産業主義と、ある種のナショナリズムがその動機の主要部分を占めていることは事実である。

また、1851 年ロンドン第 1 回万国博覧会は創始段階であり、具体的なテーマを持っていなかった。そのために展示品の陳列や分類法などが明確ではなかった。これに対してフランスのパリで開催された万国博覧会を比較してみると例えば 55 年に農業と商業を加えて表象の整理を行い、その後の万国博覧会においても分類と展示が系統的に、科学的に行われ、照合するシステムを構築する

ものとなった。

このように、博覧会は国際的な規模になるにつれ、ナショナリズムを掲げる場となっていった。建物は展示物として、各国の国際的地位とナショナル・アイデンティティを誇示する手段となり、それに、世界各地から収集されたモノは、体系的に分類し陣列するという博物学的な手法によって展示されるが、ここでの「世界」の分類は、当時の西欧の文明と進歩を象徴する世界観がその基礎となっていた。この西欧を中心とする「世界」は遠近法的に一望することが出来、人々に身体化していったのである。視覚的・身体的な感覚と記憶を通して西欧各国の国民のアイデンティティを逆に形成していったのである。

19 世紀から 20 世紀初頭の西欧社会は、産業革命によって発達した科学技術や軍事力を背景に、地球のほぼ全域が帝国主義諸国によって植民地化され、支配と被支配という構造が生み出された。こうして博覧会は政治的側面が強くなり、植民地政策の正当性を強調するディスプレイの場に変化していった。ここで形成されたのは「植民地展示」と「人間展示」であり、第 2 期と第 3 期の博覧会の成長期の特徴をつけた。

それまで産業と技術の性格が強かった博覧会は、1889 年のパリ万博以降、大きく変容する。この万博では、それまで近代産業、西欧文明が生み出した技術以外に、植民地から「原住民」が重要な要素として会場内に仮設された集落の中で展示され、現地の農村風景が再現された。ここで展示された人々は社会進化論の理論を立証する「教材」として、進化の過程の中で位置づけられた。「進化」した西欧と「遅れた」植民地との間に横たわる文明の大きな差を見せつけることにより、「未開」が「文明」に従属することを正当化したのである。

以上のように、この第 I 部では、西欧近代諸国家による国家の象徴として博覧会が役割を果たした。それと同時に博覧会は西欧によって創り上げられた「表象」という視覚を利用した世界を序列化し、支配するシステムでもあり、西洋の経済的・政治的支配下においた非西洋文化を「他者」として自分たちと区別し、分類していった。その後、この視覚的効果を利用した帝国主義のディスプレイは、植民地展示という政治的性格を中心とした内容に大きく変化を遂げて

いくのである。博覧会によって、外部には帝国主義国家として「強い国家」を演出し、国民には自らの「文明」や「進化」の偉大さを目覚めさせ、植民地に対する「優越感」を与えた。このようにして、非西洋諸国は、一方的に西欧帝国主義国家によって展示され、その展示は帝国主義国家に従属する劣等の人間として位置づけられた。

第II部 日本における博覧会の開催とその役割

18 世紀にイギリスで誕生した博覧会は、20 世紀初頭まで国際的で帝国主義的な性格を帯びる万国博覧会に発展し、欧米に広がっていった。そこでは列強が獲得した植民地は、低位ヨーロッパ中心のヒエラルキーの低位に位置付けられていた。こうした序列は人間をも対象とし、植民地の原住民は万国博覧会で「展示」されるに至った。

凡そ植民地化されるか、半植民地化されていた非欧米地域で例外的に列強による植民地化を逃れ、19 世紀後半から急速に近代化を推進した日本は、20 世紀に入るとむしろ列強の一角を占めるまでになった。この日本の近代化の過程においても博覧会は重要な役割を果たした。

第 II 部では、この博覧会が日本の近代化、あるいは日本における国民および国民国家の形成に果たした役割を議論する。本章では、まず明治期に欧米の博覧会を視察・観覧した日本人が何を体験し、何を理解したのかを検討する。

第 4 章 近代日本における国家の課題と博覧会の位置付け

第 1 節 明治期日本の国家政策と博覧会博物学政策

1853 年（嘉永 6）6 月 8 日の東インド艦隊司令官マシュー・カルブレイス・ペリー（Matthew Calbraith Perry）が率いる 4 隻のアメリカ軍艦が浦賀鴨居村沖に出現した。これを機に幕府は、日本と世界の情勢が想像以上に切迫していると認識するようになった。

西欧諸国の開国への圧力は、幕府を震撼させた。海防は脆弱で、西欧先進国に対する軍事力、とくに軍事技術は格段に劣っている。このような状況にあって開国・鎖国のどちらも苦渋の選択であり、一刻も早い危機的状況からの脱出が、幕府の喫急の課題であった。

ペリーの来航とそれに引き続く開国、明治維新は日本に様々な影響をもたらした。明治新政府にとって、欧米の植民地状態に陥らないように、近代国家を形成することが急務であった。当時「独立」という言葉で表現され、「宇内の大勢」を認識し、「万国と対峙する」「万国の並立する」「万国と抗衡する」ということが盛んに論議され、国民国家という西欧近代の成果の導入が最大の課題で

あったのである¹⁹¹。このような国家統合および国民統合を進めた国家装置の形成から考察する。

明治政府は国家目標として富国強兵を掲げた。国を富まし、強力な軍事力を建設するには、農業、工業を問わず生産を高め、商業化を促進しなければならない。しかしそれは従来の生産方法においては不可能であり、欧米が既に経験した産業革命を経なくてはならなかった。イギリスが200年かかった道を、早急に実現させるには、国家の役割が極めて重要であると考えられた。こうして国家が資金を投下して海外の機械設備、技術を導入することが構想された。政府の主導の産業革命を目指す殖産興業政策によって日本は国家体制の西洋化を企図したのである。

明治政府の殖産興業政策が目的としたのは、機械制大工業の移植を中心とする産業の西洋化であった。それは鉄道や電信など交通通信機関の整備、製糸や紡績など衣類工業の移植、軍事工業を中心とした工業の育成である。そのため、工部省が設置され、官営方式によって諸産業を発展させた。

1870年9月岩倉具視は、版籍奉還ののち中央集権体制を打ち立てるために「建国策」を作成、提出した。ここではまず第1に日本の「国体」の特殊性が強調され、天皇中心の政治体制が強調されると共に、第2に租税制度の大変革による国家財政の確立を急ぐことが求められた。そして第3番目として藩制改革による中央政府の権限強化、禄制改革、士族授産¹⁹²、藩知事（藩主）の東京居住という藩の実質的解体、その州郡化を主張し、また地方の民政、兵制、刑法、教育に対する中央政府の一元的支配の必要性が説かれている。

このような中央集権的な国家体制の下で富国強兵政策を推し進めることにより、西洋的な国民国家の形成を目指したのである。そのため明治政府は、西洋文明の摂取による近代化・西洋化の推進をはかり、西洋の技術や社会制度から学問・思想や生活様式に至るまでを取り入れようとした。これに伴い、明治初期の国民生活に、文明開化、脱亜入欧と呼ばれる新しい風潮が生じて、庶民の

¹⁹¹ 国際市場価格の影響、例えば綿製品は、大阪産の綿製品がマンチェスター産に生産量の面、価格の面、技術の面でも負けた。貿易収支の赤字、金の流出などが日本の経済危機を促進した。田村貞雄『殖産興業』教育社、1977年参照。

¹⁹² 明治維新の変革によって仕事や収入を失った士族を救済するため実施された様々な政策のことをいう。

間にまで浸透していくのである¹⁹³。

以上のような西欧近代帝国主義国家をモデルとした明治期日本の政治課題に対して、それらの国民国家の建設で重要な役割を果たした博覧会を、日本が富国強兵や殖産興業のなかにどのように位置付け、政策として取り入れたのかを、概観しよう。

幕府は、これまで、きわめて小規模に押さえてきた外国文化の研究や書籍、資料の翻訳を、一挙に拡大する方針に変更する。浅草天文台内に置かれていた翻訳局「蕃所和解方」を独立の機関として整備、拡張し「洋学所」と改めて、九段坂下竹本主水正屋敷跡に移したのは、1855年（安政2）2月のことだった。翌年2月には洋学所を「蕃書調所」に改名、機能を強化して人員を増加させ、単にオランダ語、西洋文化の講究、翻訳だけでなく、生徒を募集し教育をはじめめる。いわゆる官立の洋学校の設立である。「富国強兵」の目的意識をはっきり把握したうえでの開国政策が全封建支配者によって保持されはじめたこの頃に注目されたのが、「物産学」だった。古賀謹一郎・勝麟太郎は、1861年（文久元）に蕃書調所内に物産学を設けることを建議している¹⁹⁴。

貿易を行うにしても、国力を補強するにしても、国内のどの場所でどのような産物や特産品が存在しているのか、また諸外国はどのような物品に価値を見出しているのか、これを精査し把握しておくことが「富国」を実現するためには、どうしても必要となってきた旨が、建議では強調された。殖産興業をもって「国家経済」に寄与しようとする姿勢が、顕著であった。この建議を受けて、1861年（文久元）9月には蕃書調所内に物産学が設置され、授業が行われた。その後、蕃書調所は1862年（文久2）に洋書調所に、翌年には開成所と発展していくわけだが、一貫してその間、物産学は「国家御経済之根本」としての存在感を増していく。この傾向は明治維新以降も引き継がれ、事実、御雇外国人を多数受け入れた1877年（明治10）前後まで、物産学を含めた博物学が社会科学のなかでは他の教科を凌いで最も授業数が多かった。また物産学の取り組みは、明治政府になってのち、物産方のメンバー構成や、「国家経済之根本」と

¹⁹³ 田村貞雄、同上書、47-50頁参照。

¹⁹⁴ 東京国立博物館(編)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1973年、21-23頁参照。

いう趣旨をそのままに、博物館・博覧会へと引き継がれる¹⁹⁵。

日本政府の博覧会政策が本格的に始まるのは、オーストリアで開催されたウィーン万国博覧会を契機とした。政府はその万国博覧会への出展準備を兼ねて国内博覧会を開いたのである。

明治初期に始まった博覧会構想は、殖産興業と富国強兵を目的としたものであり、その延長線上に博覧会が位置づけられていた構想だった¹⁹⁶。この構想は、後述するように、使節団が西洋で体験し、学習した西洋近代を、日本の近代国家政策として実現しようというものであった。1872（明治5）年、国内で初の官設博覧会が開かれ、ウィーン万国博覧会に出品する展示品が人々に公開された。会場は、文部省博物局の聖堂大成殿で、20日間の日程で計画されたが、あまりの人気に50日間に延長された¹⁹⁷。

その後、湯島より内山下町に移された博覧会事務局は、今度は主に内国勸業博覧会のための事務局として機能することになる。後1873年には内務省が設置され、博覧会事務局もここに属した。ここで、事務局内に博物館に準ずるものが出来上がり、「山下門内博物館」と呼ばれた。この施設は、人工物（古器旧物や舶来品）および天産資料を展示する通常の博物館施設のほかに、農業や工芸器械を展示する館や、動物園の原型ともいえる蓄養所などの施設があり、ジャルダン・デ・プラントのような自然史博物館と、サウス・ケンジントン博物館のような産業館の混合型という構成になっていた。しかし、当時はまだ博物館という概念の理解は一般には得られず、結局「博覧会」という名での長期開催を実現していた¹⁹⁸。

その後、日本における博物館は時代や状況に応じて方向修正や揺らぎを繰り返しながら、増減を繰り返していく。1889（明治22）年の大日本帝国憲法発布をはじめ、学制や諸法令の公布によって、1890年代には日本における近代国家体制が確立していた。この頃には既にヨーロッパ型博物館の「輸入」政策は、国家の殖産興業としての積極的な意味を喪失していた。一方で、明治前期の中央官庁主導の博物館政策に代わって、後期から大正期にかけては、博物館の流

¹⁹⁵ 同上書、21頁。

¹⁹⁶ 金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001年、21頁。

¹⁹⁷ 同上書、21-22頁参照。

¹⁹⁸ 村田麻里子「ミュージアムの受容—近代日本における「博物館」の射程」『京都精華大学紀要』第35号、2009年、94頁参照。

れは徐々に枝分かれしはじめる。市町村制度の導入により、郷土色の強い小さな地方博物館がいくつか現れ、また産業系・勸業系の博物館（陳列館）が地方の博覧会と組み合わされる形で開館した。さらに、大正期に入ると第一次世界大戦の特需により台頭する富裕層が私立博物館を建設しはじめる一方、大正デモクラシーの機運やそれに伴う「社会教育」¹⁹⁹への手法により公立博物館も少しずつ数を増やした。この時期の博物館は、もはや進んだ西洋文化の「輸入」という段階は終わり、その形式を取り入れながらも日本の文脈の中で新たな展開を見せていくのである。

明治後期以降の博物館の多様な発展に対して、明治前期においては、殖産興業策として博物館は博覧会とともに輸入されながらも、結局は博覧会ほどにはその意義を理解されることはなかった。一方、博覧会を明治政府が重視した背景には、政府要人が欧米で博覧会を実際に経験したことが背景になっている。その彼らの博覧会経験を次節で取り上げよう²⁰⁰。

第2節 使節団の万国博覧会経験とその世界認識

1850年から1860年代にかけては、日本は西欧帝国主義同士が軍事的に対立した「世界」に直接に対峙した時期であった。1840年（天保10年）のアヘン戦争にはじまり、1853年（嘉永6年）のペリー艦隊の日本来航、1859年（安政6年）の開港など、その「世界」から一歩退いて長く平和を保ってきた日本は厳しい状況に直面することとなった。。

1850年代以降、日本は迫り来る帝国主義的「世界」に対応するため、数多くの難題と向き合い、解決していくことを余儀なくされる。明治維新を経て、日本政府は西洋国家をモデルとして富国強兵政策による近代国民国家・帝国主義国家の達成を国家目標とする決断をした。そして、政府はその厳しい世界の現状を理解する方法のひとつとして、そして近代帝国主義国家建設を達成するために、当時ヨーロッパで始まったばかりの博覧会に注目し、その役割の重要性を認識したのである。

¹⁹⁹ 金子淳、前掲書、28-29頁参照。

²⁰⁰ 村田麻里子、前掲書、97-99頁参照。

明治維新以前に、西欧博覧会に関する情報は、幕府の蕃書調所によって輸入された書物から得ることが多かった。だが、18世紀半ばに西洋文化を紹介した出版物は非常に少なく、博覧会・博物館について記した資料が限られていた。

条約批准書の交換のため、また西欧文化視察のために、幕府や各藩が、明治維新前の7年間に、海外に使節団を派遣した。第1回1860年(万延元年)1月、日米修好商条約批准交換のため遣米使節、新見豊前守一行が渡米した。第2回目、1862年(文久2年)に遣欧使節、竹内下野守一行が渡欧した。第3回は1863年(文久3年)12月に横浜鎖港談判のため遣仏使節、池田筑後守長発一行が渡仏した。第4回は1865年(慶応元年)に横須賀製鉄所設立準備のため特命理事官柴田剛中一行遣欧使節がフランスとイギリスへ派遣された。第5回はカラフト境界画定談判のため1866年(慶応2年)10月にロシアに小出大和守一行が派遣された。第6回はパリ万国博覧会参列観覧と締盟各国訪問のため、1867年(慶応3年)1月に遣仏使節、徳川昭武一行が派遣された²⁰¹。

これらの使節団の内、1860年(文久元)に派遣された初めての海外使節団は、首都ワシントンで鉱物資源や動物資源展示物に加え理化学実験が披露されたスミソニアン・インスティテュートや機械類や農器具類、世界各国の民族資料などが集められていた当時パテント・オフィスといった博物館・特許局の陳列場等を見学している²⁰²。したがって、使節団は西欧における博覧会・博物館を実際に経験することによって、はじめて日本従来との展示とは異なる展示空間を体験することになった。彼らの経験を契機に、その後急速に博物館や博覧会を含め、西欧の文化や技術あるいはその知識が、日本国内に持ち込まれるようになる。

1862年、幕府は、ヨーロッパに向けて使節団を派遣する。派遣の目的は、ヨーロッパ諸国にたいして開港の延期交渉とすでに開港を許可した港の閉鎖、貿易の禁止の交渉にあった。使節団は、竹内下野守、松平石見守、京極能登守、そのほか福澤諭吉をはじめ、寺島宗則、福地源一郎、箕作秋坪などを含む36人で組織され、フランス、イギリス、オランダ、ロシア、ポルトガル等を約1年

²⁰¹ 宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社学術文庫、2006年、348頁。

²⁰² 福井庸子「わが国における博物館成立過程の研究―展示空間の教育的特質―」博士論文、早稲田大学、2009年、108-116頁参照。

かけて巡回した²⁰³。彼らは単に条約交渉を目的としていただけではなく、西洋の文化や制度の見聞がその重要な目的のひとつであった。一行は、遣米施設団のときと同じように蒸気機関車を利用して移動し、大学、監獄、製鉄所、病院などを見学してまわっている。前回に引き続いて渡欧した福澤諭吉は、得意の語学力を用いてそれぞれの施設の資金運営などについても、調査を行った。

交渉の途上、使節団は1862年第2回ロンドン万国博覧会に訪れた。博覧会場には、イギリス国内だけでなく技術進歩にともない発達した交通手段を利用して世界各国から見学者が殺到した。約半年の開催期間に、6,211,103人が第2回ロンドン万国博覧会に訪れた。使節団メンバーの福沢諭吉は万国博覧会の会場について世界各国の物産を一堂に集めたもので、展示品は金銀銅鉄製品、農工業製品、織物、蒸気機関、船舶・浮ドック模型、美術工芸品、銃砲など百種類を越える全てのものが集められていると記録している²⁰⁴。使節団一行は、彼らが体験した万国博覧会場はヨーロッパ全土から民衆から貴族までが一同に集まって視察しにきた特別な近代的空間であると認識した。

1862年、(文久2年)の後、1863年(文久3年)、1865年(慶応元年)と幕府の命によりフランスやロシアへ派遣されたことがあったが、万国博覧会との関連でみた場合、より積極的な意味を持つのは、1867年(慶応3年)の遣仏使節団の派遣である。このとき日本人使節団が見聞した第2回パリ万国博覧会は、フランス皇帝ナポレオン3世から参加の招請を受け、はじめて日本が公式に参加した博覧会だった²⁰⁵。

この使節団の大きな任務は、1867年に開催された第2回パリ万国博覧会の参加にあった。一行は博覧会場を見学しただけでなく、ランジストリー宮殿での褒賞式にも参加した。

日本は、中国とインドの共用スペースに展示を出していた。このとき日本が出品したのは浮世絵、建築模型、象牙細工、陶器、生糸などで、なかには、明治以降の博物館創設の推進者である田中芳男が収集した昆虫標本も含まれてい

²⁰³ 宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社、2006年、16-17頁。

²⁰⁴ 同上書、106頁。

²⁰⁵ このとき幕府とは別に薩摩藩と佐賀藩が出品していた。とくに薩摩藩は「薩摩琉球諸島国」として参加。日本は徳川幕府の一國支配ではなく、薩摩藩は徳川と対等な関係にあることをフランスの新聞に掲載したため、物議をかもした。第2回パリ万国博覧会については、第3章第2節を参照のこと。

た。

第2回パリ万国博覧会を通して、使節団の団員たちの多くは、物を均質な空間のなかに展示し、比較、序列化することによって、さらなる進歩への意欲を掻き立てようとする積極的な意味を理解した。使節団は博覧会を国の進歩、発達に関して、各国の榮譽をかけた場所として認識したのである²⁰⁶。

明治政府の博覧会政策を方向づける役割を果たしたのは、福沢諭吉の博覧会論であった。福沢は博覧会機能を「進歩」という概念のもとに理解し、西欧近代の価値を選び取るためのもっとも重視すべき制度であると強く主張した。福沢が学び取った進歩の概念は、科学的知識と技術の進歩が社会的及び道徳的進歩を促進させ、結果的に社会システムの改良をもたらすものであるという楽観的な信念を含んだものであった。明治維新後の日本は、この福沢諭吉の博覧会論に代表される自由主義的・西欧主義的な博覧会理解に基づいて西欧化・文明化を進めていった²⁰⁷。

1871年（明治4）、明治政府が派遣した100人以上の岩倉具視使節団は、1年10ヵ月の長機関をかけてアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアなど帝国主義国家の主要な博物館施設を見て回った。その種類は美術館、歴史博物館、自然史博物館、動物園、植物園などである。しかし、この視察の中で使節団がもっとも注目したのは、当時の西欧で帝国主義諸国がその国家的威信をかけて開催していた万国博覧会であった。彼らは14日間のウィーン滞在のうちその4日間をウィーン万博の見学に当てていた。岩倉使節団がそこで目にしたのは、ベルギーなどの小国が、その展示内容において帝国主義大国に勝るとも劣らない姿であった。彼らはそのそれが「国民の精神」の優劣に深く関係があると理解したのである。万国博覧会場は、「世界」が一同に集められた空間であり、国別に間仕切りされた展示空間には可視化された国境が存在した²⁰⁸。こうした展示空間のなかで、軍事力ではなく工業力をもって生産した出品物による帝国主義国家間の戦争の場と化した博覧会の姿を看取した岩倉使節団は小国であっても「国民の精神」を高めることによって、大国と肩並べること

²⁰⁶ 同上書、4-5頁参照。

²⁰⁷ 松宮秀治「明治前期の博物館政策」『幕末・明治期国民国家形成と文化変容』新曜社、2002年、263頁。

²⁰⁸ 國雄行『博覧会の時代—日本政府の博覧会政策—』岩田書院、2005年、34頁。

ができる」と確信したのである²⁰⁹。これは、その後日本が近代国家としての権力を誇示する博覧会や博物館を設立する原動力になったのである。

使節団のメンバーに、草創期の博物館政策に重要な役割を果たす町田久成がいた。1865年、薩摩藩の英国親善使節団の副使として他の薩摩留学生とともに英国に派遣され、2年間滞在した。この間、町田はロンドンのサウス・ケンジントン博物館（現ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム）や大英博物館をはじめとする博物館施設に通っていた。特に大英博物館は、のちの町田が博物館のモデルとして常に念頭に置いていた存在であり、彼の理想の博物館像となる²¹⁰。

町田の見学した1866年のパリ万博は、薩摩藩、佐賀藩が単独参加したと同時に、幕府が正式参加した万博でもある。ここには、のちの博物館政策において重要な役割を果たすことになる田中芳男、佐野常民、手島清一、九鬼隆一といった者もそれぞれ来ていた²¹¹。彼らもまた、この滞在中に精力的な博物館施設見学を行っている。田中芳夫は、本草学者として物産会から博覧会の開設を町田とともに現場で行い、最後まで自然史系の博物館をつくりたい人物である。開成所の役人としてパリ万博に派遣され、10ヶ月間の滞在中に精力的に植物園や博物館を視察するなかで、彼がもっとも心を奪われたのがフランス国立自然史博物館（ジャルダン・デ・プラント）であった。

大英博物館を理想とする町田、シャルダン・デ・プラントを理想とする田中に加えて、そしてサウス・ケンジントン博物館を理想とした佐野常民がいた。当時、博物館と博覧会という西洋近代の装置を精力的に視察し、吸収しようとした代表的日本人である。この三つの博物館がその後日本の博物館モデルとされるようになるわけだが、佐野は博覧会政策の発展において重要な役割を果たすことになる。

佐野常民はパリ万博では佐賀藩の出展責任者として、またのちの明治政府の博覧会事務局においては副総裁として博覧会を取り仕切った人物なのである。彼は『澳国博覧会報告書』の中で、「夫博覧会ハ博物館トソノ主旨ヲ同クスルモノ

²⁰⁹ 久米邦武(編)、田中彰(校注)『特命全権大使米欧回覧実記5』岩波書店、1985年、22頁。

²¹⁰ Alice Y. Tseng, *The Imperial Museum of Meiji Japan-Architecture and the Art of Nation*, Seattle: University of Washington Press, 2008, pp. 27-28.

²¹¹ Ibid., p. 40.

ニシテ、実ニ国家富殖ノ源、人物開明ノ基トス。之ヲ要スルニ大博覧会ハ、博物館ヲ拡充拓張シ之ヲ一時ニ施行スルニ過キス。故ニ常ニ相須テ相離レサルモノタリ」と説明し、博覧会と博物館は「主旨ヲ同ク」する、国家の繁栄そして個人の知識を開く基礎であると指摘し、博覧会と博物館は「常ニ相須テ相離レサル」関係であるとした²¹²。佐野は博覧会と博物館を統一構造で考え、殖産興業の一貫として博物館建設も推進した。

博覧会開催の方法については「巨額ノ資金」が必要であり、企画や経営方法を数年前から吟味した上で開催するべきであり、それには明治十三年の開催が適当であると提言した。さらに、その開催のためには、「先ス其旨（将来の博覧会開設に向けた勸業奨励一筆者注）ヲ各地方ニ預告シ、各地方官ヲシテ務メテ其所管ノ職工ヲ督知勉励シ、或ハ士族授産ノ道ヲ興シ物産ヲ阜盛ナラシメ、又各地所産ニ随テ之ニ適スルノ小博覧会ヲ開キ、（中略）此ノ如クニシテ勸業ノ道洽ク流行シ、又從テ広大ナルベク大博覧会以テ開クヘキ也²¹³」というように、まず地方の勸業を奨励し、「士族授産ノ道」を設けた上で「小博覧会」を開催し、地方に勸業の方法を広め、将来「大博覧会」を開催すべきであると述べている。そこで佐野は、「小博覧会」に「博物ノ支場ト伝習ノ支場」を設けて、「東京本館ヨリシテ術業ニ精熟スル者ヲ派遣」する案を提示している²¹⁴。このように、地方博覧会を基礎付けながら、中央規模での博覧会開催を画策した。

佐野は、博覧会が貿易振興の手段だけでなく、近代特有の文化的制度であることを認識していた。彼は明治国家が博覧会という空間をどのような意図のもとに捉えるべきか、それを通して国民になにを要求しようとするべきかについて次のように認識した。博覧会は「国内外の物産が一堂に蒐集される場であるので、参加者は他国との物産を比較し、未知の物産、新技術を認識するとともに、その良否を判断、選別して自己の利益となすことができる」²¹⁵であった。そして外国が、日本に欠如している機械を出品することは確実であり、これを契機に国内に新しい機械技術を導入できると考えた²¹⁶。

²¹² 佐野常民『澳国博覧会報告書』（『東京国立博物館百年史資料編』28頁第一法規1973年所収）。

²¹³ 同上書、27-29頁。

²¹⁴ 同上書、27-29頁。

²¹⁵ 吉見俊哉、前掲書、126-127頁参照。

²¹⁶ 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究—殖産興業・不平等条約・「内国」の意味」『日本史研究』375号、日本史研究会、1993年3月、56頁。

そのため彼は、博覧会は日本が近代国家になるために何が重要であるかを実際に眼で見せることができるような空間でなければならないと考えた。会場では多数のものを部門・部類ごとに分類し、それを比較できるように並べられれば、そのような秩序つけられた空間を見た人々は無意識に展示品の製造方法と使用方法を学んでいけるとした。こうした佐野常民の万国博覧会での経験に基づく西欧帝国主義国家による競争という世界認識はその後、明治期を通じて開催される内国勸業博覧会の基本的な前提となっていく²¹⁷。

遣欧使節団は博覧会を通してヨーロッパ文化の姿を直接に目にした。彼らは実際に帝国主義と博物学が強力に結びついた博物館・博覧会の文化を実体験してきたのである。加えて彼らは、博覧会が国家にとって持つ意味を十分に理解していた。この認識こそが、その後、明治以降の日本が近代国家を形成する中で権力やその正統性を誇示する博覧会や博物館を設立していく原動力になった。そのリーダーとなったのがヨーロッパにおける帝国主義的博覧会の政治的重要性を理解した使節団のメンバーたちであった。

²¹⁷ 吉見俊哉、前掲書、129頁。

第5章 近代日本の万国博覧会への参加と国内博覧会の開催

明治政府が欧米に派遣した使節団や留学生は、現地で開催されていた万国博覧会の政治的意図を理解し、日本に持ち帰った。日本はその後、まず欧米の万国博覧会に参加・出品していく。本章では、まずこの時期の日本が万国博覧会に参加する過程と、その意味、そしてその意味の変容を検討し、次いで日本で開催されるようになった国内博覧会を取り上げる。

第1節 明治日本の万国博覧会への参加とその意味

1. 1867年パリ万国博覧会への参加とその意味

19世紀から20世紀初頭にかけての万国博覧会では、各国の展示スペースの面積と地位が国力を示し、世界におけるその国の地位を示すものであった。日本が最初に万国博覧会に正式参加したのは、1867年のパリ万博である。これには徳川幕府がフランス公使のロッシュ（Leon Roches）の勧めにより、陶器、漆器、浮世絵から和紙や木工細工に至るまで日本各地の特産品が出品された。しかし、この万博には幕府以外に薩摩藩、佐賀藩が独自の出品を行い、いかにも独立国家であるかのような展示を行った。そのため、徳川幕府は厳重な抗議を行ったが、受け入れられなかった。日本が統一国家として、万博に参加するのは明治以降になる。

幕府とその呼びかけに応じた民間、その他に薩摩藩と佐賀藩が独自に出品した1867年のパリ万国博覧会は、分裂状態であったが日本が初めて出品した万国博覧会であった。また、万国博覧会において日本が初めて「実演」を行った万国博覧会でもあった。

この時出品されたのは、陶磁器、漆器、刀剣、屏風、浮世絵などの美術工芸品のほかに、人形、提灯、扇子、布、和紙、さらには農機具や木材などの日用品や原材料も含まれており、かなりの数にのぼった。会場であるシャン・ド・マルスには、巨大な楕円形の産業館が建てられ、参加国はそれぞれ放射線状に並べられた。日本、中国（清）、タイ（シャム）には、ペルシアとエジプトの間に、3カ国でひとつの展示スペースが割り当てられたが、出品物が多かったた

め、与えられた区画の半分以上を日本が使用することになった²¹⁸。

幕府はシャン・ド・マルスの展示場のほかに、公園内に総檜造りの日本風の家屋を建設し、茶店を設けた。これは民間人として参加した江戸の商人瑞穂屋卯三郎による企画であったといわれており、柳橋松葉屋の芸者のかね、すみ、さとが煙草を喫んだり、手鞠をついたり、独楽を回したり、茶を煎じるなどの実演を行い、その動作や生活様式に注目を集めた²¹⁹。こうして、日本が自ら工夫し、展示した日本パヴィリオンと日常生活の再現はこの万博に訪れた人々に対してより具体的な「日本」イメージを提供した。日本はこの伝統と芸術性の合作という独自性が高く評価された。

1867年パリ万国博覧会で日本が展示した工芸品や建築物をはじめとする「物」によって、これまで漠然としたイメージしかもたれず、他のアジア諸国と明確には識別されていなかった日本は、自らの具体的な文化イメージをフランス社会に示す最初の機会を得ることとなった。これは続く1870年代のフランスに「ジャポニズム」²²⁰と呼称される文化現象の発展を促す重大な契機として位置づけることができる。

日本の出品物は、当時西欧で流行していた日本ブーム（ジャポニズム）の影響もあり、高い評価を受けた。とくに高い評価を受けたのは旅館風の日本館をはじめ、浮世絵、着物、漆工芸品など幅広い分野にわたっていた。ジャポニズムを利用したこうした展示は、日本文化をアピールするという目的を充分に果たし、日本の展示について、フランスでは「日本」が具体的なイメージで認識されるようになったのである²²¹。しかし、この博覧会ではアメリカや諸外国は、当時の最新技術である蒸気機械を展示した。そうした技術をまだ持たなかった日本は機械部門への出品が出来ず、工芸品を前面に押し出した展示しかできなかった。そうした状況を目の当たりにした日本は、早急に機械技術を導入して

²¹⁸ 寺本敬子『パリ万国は博覧会とジャポニズムの誕生』、前掲書、69頁。

²¹⁹ 同上書、80-81頁参照。

²²⁰ 「ジャポニズム」は19世紀後半に西洋の美術に与えた日本美術の影響を意味する用語である。その影響は絵画、彫刻、版画、工芸、建築、服飾など美術の全ての分野に及んだ。音楽、演劇、文学美術のすべての主に美術史の分野で用いられることが多い。フランスにおける「ジャポニズム」の形成とその広がりについては、寺本敬子『パリ万国は博覧会とジャポニズムの誕生』に参照、ウィーンを中心にジャポニズムの影響について西川智之「ウィーンのジャポニズム（前編）1873年ウィーン万博博覧会」『言語文化論集』27(2)、2006年に参照。

²²¹ 寺本敬子、同上書、89頁。

工業化を図ることが国家の重要な課題であることを強く認識したのである²²²。

2. 1873 年ウィーン万国博覧会への参加とその意味

大政奉還後、日本という統一国家として明治政府が初めて公式参加した万国博覧会は 1873 年（明治 6 年）のウィーン万国博覧会（Weltausstellung 1873 Wien）であった。1871（明治 4）3 月 20 日、外務卿・澤宣嘉がオーストリア公使・ヘンリー・ガリッジ氏と会談した際、ウィーン万国博への参加を呼びかけられた。明治政府はこれに同意し、同年 12 月、参議・大隈重信、外務大輔・寺島宗則、大蔵大輔・井上馨の 3 名を「万国博事務取扱」に命じて、ウィーン万国博覧会賛同計画を立てさせた。1872 年（明治 5 年）には、正院中に博物局が創設され、日比谷に開設された博覧会事務局では、大隈重倍が事務総裁に、佐野常民が副総裁となって、準備が進められることとなった²²³。

出品物の選定と収集に関しては、政府は早くから準備を進めていた。政府は各府県に人員を派遣し出品を促し、また優れた職人とは直接にやり取りをした。同時に、東京においては、「古道具商及製造人等」から新旧の漆器、その他小さな物品に至るまで、出品可能なものを蒐集し、点検を行った²²⁴。京都の織物・陶器、佐賀・愛知の磁器・七宝をはじめとして、全国各地の伝統産業から生み出される優れた工芸品・特産品が出品対象として重視された²²⁵。また予行演習として、1872 年の 3 月 10 日から湯島聖堂で博覧会を行っている。この博覧会には、ウィーンでの本番同様に、名古屋城の金の鯨などが展示され、当初の予定の 20 日間の会期を 4 月末まで延長するほどの人気を博し、入場者数は 15 万人にもものぼった²²⁶。

日本政府がウィーン万博へ参加した目的は、①日本製品を海外に紹介すること、②輸出増進を図ること、③技術伝習を通じて機械技術を取得すること、④将来に向けて、博物館の創設を目指すこと、⑤国内博覧会開催の可能性を探る

²²² 三島雅博「明治期の万国博覧会日本館に関する研究」博士学位論文、神戸大学、1993 年 3 月、14 頁。

²²³ 國雄行『博覧会の時代』、前掲書、31-32 頁。

²²⁴ 同上書、33 頁。

²²⁵ 戸田清子、前掲書、167 頁。

²²⁶ 湯島聖堂博覧会が行われた湯島聖堂大成殿は、日本で最初の博物館であり、現在の東京国立博物館の前身である。西川智之「ウィーンのジャポニズム（前編）」、前掲書、181 頁。

こと、などであった²²⁷。とくに、博物館の設立と国内博覧会の開催という目的について、博覧会への参加を、一時的な輸出増進だけをねらった一過性の事業としてではなく、西欧工業技術の移植、国内産業の振興及び西欧文明の総合的摂取という側面から長期的・継続的効果を視野に入れて計画が作成された²²⁸。

ウィーン万国博覧会においては、日本から資材を持ち込み、日本から派遣された松尾伊兵衛ら大工の設計により本格的な神社と日本庭園が造営された。これは、入口に鳥居を設け、数寄屋風の茶店を配し、奥に流れ遣りの神社を建てたものであった²²⁹。万国博覧会最終日にはここを会場にショーも行われた²³⁰。

一方、日本からの出品内容は、伝統工芸品と、軽工業製品がその大部分を占めている。精巧な機械製品を出品するには、工業技術力が未発達な段階にあり、輸出増進をめざして海外市場を開拓するには、織物、漆器、陶器、金属細工品、竹細工品、紙など、在来産業として発展してきた伝統工芸の分野で技術力を競うほかに方法がなかったのである。

日本の出品物のうち、最も受賞数が多かった部門は、衣服・織物の部であり、次いで、漆器、紙、金属細工、陶器・硝子器などである。そのうち、衣服・織物の部の受賞は 52 であり、受賞数全体の 26% を占めている。生糸では勸工寮や富岡製糸場からの出品物が、また織物では、京都の絹織物や小倉の綿織物が進歩賞を受賞した。その他、長野・福島・筑摩産の生糸や、東京・茨城・鳥取一和歌山産の織物類が、有功賞・雅致賞などを受賞している。とくに、日本の絹織物はヨーロッパにおいて高い評価を得た²³¹。

工業製品に関しては、日本はまだ近代工業の発展をみない工業化の初期段階であり、いわゆる近代工業技術を誇示するような出品物は見あたらない。「機械ノ技術ニ於テ未熟」な日本では、職工が製造できる品々も「手細工ノ小器品」に過ぎないが、古来、名品と称される特産品が数多くあり、それらは国際競争力を持ち得る輸出品として日本が自身をもっているものであった。衣服・織物

²²⁷ 戸田清子「近代日本における博覧会の産業振興的意義と役割ーウィーン万国博覧会を中心にー」『奈良県立大学研究季報』地域創造学研究、2010年3月、160-161頁。

²²⁸ 西川智之、前掲書、180-181頁。

²²⁹ 井上章一「日本館のエキジズム」『図説万国博覧会史1851-1945』思文閣出版、1985年、158頁。

²³⁰ 橋爪紳也「日本に博覧会がやってきた」『別冊太陽:日本のこころ133 日本の博覧会 寺下コレクション』平凡社、2005年2月、5頁。

²³¹ 戸田清子、前掲書、168頁。

の部においても、生糸などの一次産品や伝統的な在来技術による織物などが受賞対象となったのであるが、しかし手工業・軽工業製品の域を出ていない。伝統工芸品としての芸術性や美しさ、品質の良さという点においては、日本の物品も西欧諸国の品々に優るとも劣らず、大きな注目を集めた²³²。

日本の漆器については、ヨーロッパから強い関心が集中した。博覧会会場で初めて日本の漆器を見た欧米人が感嘆し、「古蔭繪ノ硯箱等ヲ争テ之ヲ求メント」殺到し、漆器に対する人気著しく高まった。そのため、漆器の輸出も契約が大幅に増加した。また、和紙は、その美しさや品質が評価され、安定生産のもとで、適切な価格で輸出できるのであれば、将来、強力な輸出品となることが期待された²³³。

このようにして、日本政府は伝統産業の振興・輸出増進という目的のもと工芸品や特産品を出品する一方で、西欧工業技術の移植策として技術伝習という方法をとった。明治政府の目標である殖産興業政策推進の柱として重視されたものは、西欧工業技術の日本への移植、国内の近代産業の育成・振興及び輸出増進であった。輸出増加を図るうえでまず重要なことは、西欧の技術の習得、いわゆる技術伝習であることは強く認識されていた²³⁴。

技術伝習は現地に滞在し、実際に職人や技術者のもとに製法を学んで技術を習得する方法である。ウィーン万博では随行した学生、職人 70 名は各専門分野における先進的な技術を現地で学び、日本の産業振興をのために役立てようとした。ここに例を挙げると、ウィーン万国に同行した職工である時計電機科出品主任旧・田中精助（工部省電信寮）は、1873 年（明治 6 年）10 月から 3 ヶ月間、ウィーンの諸工場で印字機や電信測量機器の製造を学び、帰国後は、電信機製造に従事した。田中は、1887 年（明治 20 年）までに、1,000 基あまりの電信機を製作し、全国の分局に供与し、電信技術の移植に力を注いだ。また、測量器・小器械列品主任であった藤島常興（工部省勸工寮）は、ウィーンの測量技師クラフトのもとに技術を学び、帰国後は工部省で測量機器の研究に従事し、大規模な測量器製造工場を経営していた。藤島は、工場経営のみならず、

²³² 田中芳男、平山成信編『澳国博覧会参同記要』森山春雍、1897年、14-16頁、また戸田、同上書168頁も参照のこと。

²³³ 田中芳男、平山成信、同上書、192頁、および戸田清子、同上書、168頁。

²³⁴ 戸田清子「万国博覧会と産業振興—明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察—」『研究季報』奈良県立大学、第18巻第3・4号併合、2008年、28頁。

工業学校の運営にも力を傾注し、東京京橋八官町に精器学校を創設した。測量機器の製作だけではなく、その技術を伝習させるため、技術人材の養成にも力を尽くした²³⁵。

ウィーン万国博への日本の参加は、日本の工業化において、さまざまな産業分野において技術の進歩をもたらした。さらに、この万国博への参加は、西欧国とくにドイツの教育制度や教育内容の先進性を学ぶ好機にもなり、それらはその後、開成学校において工業教育を形づくるための基礎ともなった。ウィーン万国博への参加は富国を目標とする日本において、工業化と教育を一層強く関連づける契機となったのである²³⁶。万国博終了後、お雇い外国人ワグネルは佐野常民とともに欧州各地の学校や工場を視察し、日本人技術伝習生を指導するなど、2年にわたって欧州に滞在し、視察と研究を続けた。帰国後、明治7（1874）年には中等工業教育の必要性を提唱して東京開成学校制作学教場の設立に尽力し、設立後は教師として化学や工作学の講義を行った。

オーストリアの文明と世界の諸国民の経済の現状を示し、その発展を支援する目的で開催されたウィーン万博は、当時世界最大の博覧会であった。同じ頃、近代化を目指していた明治政府にとって、この万博への参加は国際社会に対して日本という国家の存在を知らしめる好機であった。そのため、日本の天然資源や伝統工芸品を海外に広く紹介し、貿易の振興を図ることが掲げられていた。工業技術の面で大きく西欧諸国に遅れて近代化を図ろうとする日本が、その存在価値を世界に広くアピールするためには、長い歴史の中で高度な技術によって培われてきた日本の美術工芸品を数多く出品することが重要であると考えた。そこで明治政府は、以前からジャポニズムとして西欧諸国で評判が高かった着物、漆器、陶磁器に加え、銅器などの金属工芸品、象牙類・生糸・絹織物などの工芸品を多数出品し、望ましい日本イメージの演出につとめた。日本から出展された工芸品はその美しさや質の高さ、技巧の素晴らしさで注目を浴び、ウィーン万国博閉会后、イギリスやフランスの美術界ではジャポニズムへの関心が

²³⁵ 戸田清子「明治前期における中等工業教育の展開―開成学校制作学中等工業教育」『研究季報』奈良県立大学、第18巻第1・2号併合、2007年、59-60頁。

²³⁶ 万国博終了後、ワグネルは佐野常民とともに欧州各地の学校や工場を視察し、日本人技術伝習生を指導するなど、2年にわたって欧州に滞在し、視察と研究を続けた。帰国後、明治7（1874）年には中等工業教育の必要性を提唱して東京開成学校制作学教場の設立に尽力し、設立後は教師として化学や工作学の講義を行った。

いっそう高まり、日本の浮世絵や陶磁器に、以前にも増して関心が集まるようになった。

3. 1876 年フィラデルフィア万国博覧会への参加とその意味

ウィーン万博において博覧会が国家間の競争の場であり、また国威発場の場でもあることを理解した明治政府は、続いて 1876 年のフィラデルフィア万博 (Centennial International Exhibition) にも公式参加している。このとき、日本政府の参加目的は、前回のウィーン万国博覧会と同様に、日本の勸業政策に利用できるアメリカの新しい工業技術を習得することと同時に、日本の国際的地位を高めることであった²³⁷。

日本の出品は、生糸や茶、漆器、陶磁器や様々な細工類などの日本の意匠を凝らした製品を中心に構成されていた。日本イメージの演出は欧米人たちのこのようなエキゾチシズムに訴える形であり、その後の万国博覧会においても貫いてきたのである。西欧社会から受け入れられるというイメージ演出という目的を持つ万国博覧会への日本の参加は、最初から欧米社会の視線を強く意識して行われた²³⁸。

この万博で、政府は 2 棟の日本建物を建設した。一棟は、2 階建のものであって、事務室を備えた本館であり、一階を小部屋に分け、二階は展示空間としていた。もう一棟は数寄屋風の建物で、日本の工芸品が販売されていた。建物内には茶室があった²³⁹。日本建築様式で建設されたこれらの建物は、単なる展示館だけでなく、伝統的な建築様式が用いられたため欧米人のエキゾチシズムをかき立てた。

今回の万博では、新しい試みとして、伝統的な日本の姿以外に、日本の教育に関するもので、その制度や状況を海外に紹介した。出品されたものは、教育の概要を示す書物、教育制度、教育についての報告書、学校規則、学校で使用する書物および器具、学校の模型及び写真、各種の図書館器具、学習用地図、図画、など多岐にわたった²⁴⁰。日本では、産業における近代化はまだ立ち後れ

²³⁷ このフィラデルフィア万国博覧会に参加するために、日本政府は「米国費ラ特費府博覧会事務局」を内務省内に設けた。三島雅博、前掲書、22頁。

²³⁸ 大橋庸子「博覧会と日本に自画像・世界像」『別冊太陽日本のこころ133—日本の博覧会寺下勅コレクション』平凡社、2005年2月20日、217頁。

²³⁹ 三島雅博、前掲書、23-24頁。

²⁴⁰ 同上書、22-23頁。

ているものの、その基礎となる教育においては近代化を達成しつつあり、富国強兵や殖産興業政策を遂行しており、ひいては近代的な国家が完成しつつあることをアピールすることを目的としていたと考えられる。

4. 1878 年パリ万国博覧会における日本の参加

この時期は、博覧会のほかに博物館、図書館の設置など、明治政府が国内における啓蒙的社会教育施策を積極的に行った、社会教育の萌芽期にあった。万国博覧会への参加もこうした流れの中で取り組まれた国家的事業であった。さらに、この萌芽期においても特に 1878 年は、日本で最初の博物館として誕生し、一時は博覧会事務局に吸収されていた文部省博物館が、博覧会事業から切り離され、直接の目的を殖産興業から国民教育とした教育博物館（1877 年）へと転身した²⁴¹、一方で、殖産興業のための知識、工芸の普及のために上野で第一回内国勸業博覧会（1877 年）が開催されるなど、徐々に変化が現れ始めた時期でもあった。

1878 年（明治 11 年）、明治政府はパリにおいて開かれたパリ万国博覧会に「Japon」（日本）として参加した。前回の 1867 年のパリ万国博覧会は、ジャポニズムを大衆的なものとする契機となったが、1878 年のパリ万国博覧会はその影響をさらに大きく広げるものであった²⁴²。

政府は、参加事務所として、1877 年に臨時博覧会事務局を組織して、大久保利通を総裁、松方正義を副総裁、前田正名他 1 名を事務官、平山成信他 7 名を御用掛に任命した。

1878 年パリ万国博覧会では、前回と違い、シャン・ド・マルスに単独の日本展示場を得て、国際的な認知度が高まったことを見せつけた。またこのほかにトロカデロ会場に日本の伝統的な農家と庭を建設した。1878 年パリ万国博覧会に際して、日本はシャン・ド・マルスの日本展示場のほかにトロカデロ会場に日本の伝統的な農家と庭を建設した。農家に設けられた茶室は、建造物としての展示のほかに、日本の産品である団扇や陶磁器などの日本の工芸品の展示と「実演」のための舞台装置として利用された²⁴³。また、この茶室の周囲に作ら

²⁴¹ 村田麻里子、前掲書、94頁。

²⁴² 大島清次『ジャポニズム—印象派と浮世絵の周辺』美術公論者、1980年参照。

²⁴³ 樋口いずみ「日本の万国博覧会参加における「実演」とその役割に関する一考察—1878年パリ万国博覧会を事例として—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』16号

れた庭についても同様であった。この庭にはところどころに花壇を作り、日本から持ち込んだ草木、穀物、野菜などを植え、木製の棚には盆栽が並べられ、水田もつくられた。また、日本からの出品でもある鶏や家鴨も放たれた。このような演出は、日本の農村風景を移したものであって、この区域は「日本の村」と題された²⁴⁴。そして、さらに欧米側の報道図版などの出版物がその様子を多数記録しているということからも明らかなように、こうした「実演」の舞台が欧米側の人々に公開され強い関心を引き起こした²⁴⁵。また、この日本村の展示は、1883年のアムステルダム国際植民地博覧会で始まる植民地の村を宗主国が再現することに対して、日本が自ら「伝統的」な社会を博覧会で展示したという点で対照的である。

日本の出品の中でも特に2つの分野に力が入れられていたことがわかる。第1は工芸品である。「古器物」として趣味の領域で導入され、これらが欧米において日常の「実用品」として導入され始めたため、将来の日本の輸出品としての市場が開拓されることを目指したものであった。

第2は日本の植物を紹介することである。日本はトロカデロに日本庭園を造ったが、「第9大区園芸」部門の日本の出品として、そこに日本から持ち込んだ植物を移植した。このことは、優れた日本の農業、特に日本の珍しい樹木等の植物は欧米の日常生活にも受け入れられる可能性があり、将来の日本の新たな輸出品となり得る「産品」であると考え、その紹介が重視された。

この万国博覧会における日本の展示で、その主眼となっていたのは、工芸品などの日本の品々が日常的にどのように使われるものであるのかといったその正しい使用法を示すことであった。そして、その根底には1878年パリ万国博覧会において事務官長として出品を取り仕切った前田正名が記したように、日本を「野蛮」なアジアの国であり、「支那の属国」であると捉える欧米社会に対する反発と在来工業を重視し地方産業の振興を行うという思いが強くあったことがうかがえる²⁴⁶。こうした万国博覧会における「実演」の試みは、日本の産品

-1、2008年9月、201頁。

²⁴⁴ 三島雅博、前掲書、26-27頁

²⁴⁵ “L’Exposition de Paris”の記述によれば、日本家屋については、一般の人々の入場が禁止されていたようだが、この日本家屋の様子については多数の報道図版や報告記事が残されており公開が行われていたことは確認できる。

²⁴⁶ 樋口いずみ、前掲書、204頁。

の用法を正しく理解させ、日本に対する「誤解」を正して、日本の「正しい姿」を知らしめ、日本の地位を高めるといふ、西欧社会に対するある種の教育的効果を狙っていたのであった²⁴⁷。

5. 1893 年シカゴ万国博覧会と日本の参加

1893 年に、コロンブスの新大陸発見 400 年を記念して、アメリカのシカゴで大規模な「世界コロンビア博覧会」が開催された。

参加国のほとんど全てにとって、万国博覧会での目的は自国独自の文化や豊かさの誇示、国威発揚、輸出国相手の開拓すなわち通商貿易を拡張することにあった。殖産興業政策を進める日本も例外ではなく、これらの目的を達成する方法として、公募による美術品、美術工芸品などの一般出品のほかに、政府出品として、日本館の建設、美術品および美術工芸品の展示が考えられた²⁴⁸。

日本政府は、過去に日本が参加した万国博覧会(1873 年ウィーン万国博覧会など)でも自国を宣伝するための展示館を建設しており、既にその重要性を理解していた。今回の万国博覧会においても更に国威発揚のために自国館が必要であると認識されていた。シカゴ万国博覧会は日本が従来参加してきた万国博覧会の中でもとくに参加国が多く、規模も大きい会場であったことで大日本帝国を大々的にアピールする機会としては最適であった。そのため、今まで以上に力を入れてより優れた伝統的で美しい建物の建設が目指された。

日本はシカゴ万国博覧会において、日本館として鳳凰殿と呼ばれる建築物を建てた。名称は、設計を担当した久留正道が平等院鳳凰堂の姿をモデルとしたことから付けられた。「藤原（平安時代中期）」、「足利（室町時代）」、「徳川（江戸時代）」の各時代のモチーフを反映させた 3 棟から構成された建築物で、左翼（左棟）が藤原（平安中期）、右翼（右棟）が足利（室町時代）、中央が徳川（江戸時代）を表現した²⁴⁹。建物 3 棟は時代ごとに異なったデザインでモデルとなる建物が存在していた。左翼の棟は寝殿造りの技法を取り入れ、右翼の棟は書院造りの技法を取り入れ、内部は当時の茶室を模し、中央の棟は左翼、右翼の棟の

²⁴⁷ 同上書、204頁。

²⁴⁸ 臨時博覧会事務局『臨時博覧会事務局報告』、1895年、92-93頁。平井茜「1893年シカゴ万国博覧会に於ける日本館について」『博物館学紀要』第39輯、國學院大學、2014年、97頁。

²⁴⁹ 平井茜、同上書、95頁。

2 倍の面積となり、大名屋敷の技法を取り入れられた画期的な建物であった。このように日本の過去のそれぞれの歴史を代表する建築を一举に誇示しようとした背景には、この時の日本出品とその展示に関する責任者である岡倉覚三(岡倉天心)がいた²⁵⁰。

日本は、他の国には見られない特異な文化とその文化を育んだ長い歴史を武器にしようと試みた。探検家コロンブスがアメリカ大陸に到達した時代には、日本は室町時代であり、既に日本としての独自の発達した文化的基盤は成立していた。それ故、日本は平安時代、室町時代、江戸時代というその時代を代表する建築様式を西洋に対して、なにかんずく歴史が浅く、いまだ新興工業国であったアメリカに対してアピールしようとしたのである。

6. 1904 年セントルイス万国博覧会と日本の参加

セントルイス万博は、1904 年(明治 37 年)4 月 30 日から 12 月 1 日まで、アメリカ合衆国がルイジアナ地方をフランスから購入した 100 周年を記念して、セントルイスで開催された。広大な会場面積は「人間の気力と体力の限界を超えた」と評され、参加国は 44 力国、入場者数約 2000 万人であった。自動車、航空技術、無線電信の三つの近代科学の成果が展示され、米国の高度機械化時代を象徴する博覧会となった。その一方で体系的な民族学的展示が行われた。

日本は、日清戦争(1894~95 年)に勝利し、朝鮮半島の実質的支配権、そして清から台湾などを獲得し、欧米列強に一目置かれる存在になっていた。1904 年のセントルイス万博当時は、日露戦争(1904~05 年)を戦っている最中であった。

セントルイス万博の展示は、教育、美術、心芸、工業、機械、電気、運輸、農業、園芸、林業、採鉱及冶金、漁業及狩猟館、人類学、経済、体育、家畜の 16 の区部門に分類された。これは、さらに 144 グループに分けられると共に、807 類に細分され、14 の陳列館に展示された。

上記の分類に沿って日本は美術館で日本画、洋画、彫刻、刺繍、金銀器、陶磁器などを展示し、教育館及び経済館で日本の教育システムを紹介した。大日本帝国地理模型や刺繍世界航路図などが通運館で展示され、絹織物、製糸順序

²⁵⁰ Okakura Kakuzo, *THE HO-O-DEN (Phoenix Hall) An Illustrated Description of the Building Erected by the Japanese Government at the World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago, 1893.*

模型、生糸、織物、扇子、人形、竹細工や化学用諸器械が工業館で展示された。銅器、家具、陶磁器、七實、象牙細工、屏風、刺繍、漆器が工芸館のなかで展示された。電気館では電信電話機、発電機、調帯、農業館では茶、醤油、砂糖、ビール、缶詰などが展示された。そのほかに、採掘及び冶金館、林業漁業及び狩猟館にも日本は出品した。また、与えられた日本政府館の敷地は15万平方フィート²⁵¹の広さで、本館、事務所、売店、喫茶店、眺望亭、台湾館など8つの建築物と日本庭園が作られた²⁵²。台湾館では獲得した新領土を紹介するために、参考品として清国福建省福州の生産品が展示された。また、通運館の日本の展示区域に日本は大日本帝国名勝色彩写真額や朝鮮半島の写真を展示した。このような展示で日本政府は、博覧会を利用し、日本の国家領域を国外に認識させようとした。

この博覧会において日本側は工業・産業を通して西洋諸国家とまだまだ遅れていることを改めて認識した。しかし、米国は日本が建てた電気館や工業館を日本の近代産業の芽生えとして高い評価を与えた²⁵³。

このような米国から高評価は日本にとっては大きな自信につながり、その上に、日露戦争における日本の善戦がこの万国博覧会の話題の一つになり、独立した強国のひとつとして認識されるようになる最適な場となった²⁵⁴。

万国博覧会で日本は西洋が喜ぶような品々を多数取り揃え、自ら「西欧が期待するオリエントのイメージ」の役割を自ら演じることで、賞賛を受けたのである。園田英弘が、「日本にとって、万国博で自己主張するのに、文化の独自性を演出すること以外、どのような方法があっただろうか」²⁵⁵と述べているように、日本人は自分たちが異種の文化を持つことが西洋人に受け入れられることを理解していた。初代駐日公使オールコックの蒐集した美術品が展示された1862年のロンドン万博、ふんだんに日本のエキゾチック・イメージを演出した1867年のパリ万博の頃から、その方向は定まっていた。その後も万国博覧会では、日本人自らの手でエキゾチックなイメージがその都度再生産されていく。日

²⁵¹ セントルイス万博の参加国のなかで日本の陳列面積は、ドイツ、フランス、イギリスに次ぐ第4位であった。

²⁵² 楠元町子「セントルイス万国博覧会における日本の展示品と評価」『現代社会研究科研究報告』(2)、2007年、140頁

²⁵³ 同上書、146頁

²⁵⁴ Rydell, *All the World's a Fair*, pp. 180-181.

²⁵⁵ 園田英弘「日本イメージの演出」、前掲書、143-144頁。

本がオリエンタリズムの強い西洋で開催される博覧会に参加するには、古器旧物を軸とする歴史美術系展示物が中心となっていくのは、むしろ自然のなりゆきといえる。しかし日本はそれを逆手にとって、工芸品や美術品の展示によって、その文明が高度なものであり、その歴史が西洋諸国よりの遥かに古いことを強調した。また西洋に追い付きつつあった近代産業を、電気館と工業館、産業の基礎となる教育の展示によって、示そうとしたのである。

以上見てきたように、政府は西洋視察として派遣した使節団、更に万国博覧会の参加を通して、博覧会が産業奨励策として有効であることを理解する一方で、万国博覧会における列強との比較において自らの産業の後進性を痛感することとなった。「ジャポニズム」というオリエンタリズムによって与えられた役回りを演じ、好評を得つつも、西欧諸国を対抗するための殖産興業策として博覧会の重要性とその意義が強く認識されたのである。そして、万国博覧会をモデルとして国内博覧会を開催することとなる。大日本帝国憲法発布をはじめ、教育勅語や諸法令の公布など様々政策の実施と同様に博覧会政策は、国家の最重要な政策として積極的な位置づけが与えられた。そのため、府県制度や市町村制度の導入により、産業系・勸業系の博覧会が一揆に全国に拡大していくのである。

第2節 日本国内における博覧会の開催とその性格

1. 地方博覧会と文明化

日本は、明治期に入って、富国強兵を基礎として、近代国民国家の確立に向けて次々と新たな政策を打出したのであるが、しかし輸入超過や正貨流出等によって財政は危機に見舞われた。この財政危機を解決する手段として殖産興業政策が展開された²⁵⁶。この政策の一環として採用されたのが博覧会事業であった。

明治政府が初めて開催した博覧会、ウィーン万国博覧会の準備過程で開催したのは明治5年3月の湯島聖堂での博覧会であり、また明治期の日本における国内博覧会は、1877年（明治10年）に始まる内国勸業博覧会に代表される。し

²⁵⁶ 田村貞雄、前掲書、21-22頁。

かし、日本における初期の博覧会は、政府ではなく、民間主導で開催された。

最初の産業博覧会は明治 4 年（1871）10 月 10 日から 11 月 11 日にかけて、京都本願寺大書院で開催された京都博覧会であった。また、名古屋では同年 11 月 11 日から 15 日までの 5 日間、御前町総見寺において博覧会が開催された。こうした博覧会が人気を集めたため、日本の各地で頻繁に開催されていく。

明治維新以降、文明開化のシンボリックな存在として、京都、和歌山、岡崎、土浦、高知、茨城、福岡、松本、島根、名古屋、新潟、金沢、など全国各地で国内博覧会が毎年開催され、明治 10 年まで少なくとも 27 回の博覧会が開催された（表 2）。

表 2 明治初期における地方博覧会の開催

開催時期			名称	開催場所	主催者
1871 年	明治 3 年	10 月 10 日 ～11 月 11 日	京都博覧会	京都府 西本願寺	三井八郎右衛門、小野善助、熊谷直孝
1872 年	明治 4 年	3 月 10 日 ～5 月 30 日	第 1 回京都博覧会	京都府 西本願寺、知恩寺、建仁寺	京都博覧会社
		5 月 16 日 ～6 月 2 日	額田博覧会	愛媛県 岡崎専福寺	（不明）
		5 月 20 日 ～6 月	和歌山博覧会	和歌山県 鷲森本願寺	（不明）
		6 月 10 日 ～7 月 1 日	広島博覧会	広島県 厳島千畳閣	広島県
		9 月 16 日 ～10 月 1 日	金沢博覧会	石川県 兼六園	加賀 金沢市
1873 年	明治 5 年	3 月～4 月	金毘羅博覧会	香川県 金毘羅神社	金毘羅宮
		3 月 13 日 ～6 月 1 日	第 2 回京都博覧会	京都御所、仙洞御所	京都博覧会社
		3 月 15 日 ～5 月 15 日	伊勢山田博覧会	度会郡山田	度会県丁神社庁
		3 月 15 日 ～3 月 3 日	茨城博覧会	茨城県	西高辻信巖、三木隆助
		11 月 10 日 ～12 月 24 日	松本博覧会	松本城	松本博覧会社
1874 年	明治 6 年	4 月 1 日 ～6 月 8 日	第 3 回京都博覧会	御所、仙洞院	御所、仙洞院
		5 月 1 日	名古屋勸業博覧会	東本願寺名古屋	愛知県下博覧会

		～6月1日		別院	社
			奈良博覧会	奈良博覧会	(不明)
		6月1日 ～7月	新潟博覧会	白山神社	新潟県
1875 年	明治 7年	2月15日	新吉原博覧会	江戸金瓶楼	俵屋和助、泉屋 忠兵衛
		3月1日 ～6月8日	第4回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
		4月1日 ～6月19日	第1回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
		6月17日 ～7月1日	新潟博覧会	新潟	(不明)
1876 年	明治 8年	3月15日 ～6月22日	第5回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
		3月15日 ～6月2日	第2回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
		4月1日 ～6月10日	堺県博覧会	堺、南宗寺	堺博物館
		4月15日 ～6月25日	宮城県博覧会	仙台、桜が丘公 園	宮城県
1877 年	明治 9年	2月1日 ～5月	第3回奈良博覧会	東大寺大仏殿	奈良博覧会社
		3月10日 ～6月22日	第6回京都博覧会	御所、仙洞院	京都博覧会社
		4月10日 ～6月8日	堺博覧会	南宗寺	堺博物館
		5月15日 ～6月15日	第1回秋田博覧会	秋田、佐竹義純 別邸	(不明)

出典：橋爪紳也（監修）『別冊太陽日本のこころ 133－日本の博覧会寺下勅コレ
クション』平凡社、2005年より筆者作成

表2にある博覧会のうち、代表的なものを取り上げ、明治初期において開催された地方博覧会の内容とその特徴を分析する。

(1) 京都博覧会

① 京都博覧会成立の経緯

1871年(明治4)年に開催された京都産業博覧会は、日本初の博覧会であり、その後の博覧会人気の魁となった。その背景には明治維新で行われた還都によって首都でなくなった京都の危機感と、京都府の勸業政策があった。

京都府は 1870 年(明治 3)年に発表した産業復興の基本方針の「京都府庶政大綱」に「商工業に関する海外の動向を知らしめ、人々の産業知識を向上させる」という目的を掲げていた。これに沿って京都府は、農工商業者に対することも、一般庶民にも西洋諸国が製造したすぐれた工業製品を知らしめるために博覧会の開催を考えたのであった。

京都における最初の博覧会は、当時京都府知事であった長谷信篤が、三井家の京都府御用達である三井八郎右衛門、金融業の小野組の小野善助、薫香商・鳩居堂の熊谷久右衛門（大年寄）の 3 人に話をもちかけ実現したものである。新しい事業として位置づけられた京都博覧会の会期は 1871(明治 4)年 10 月 10 日から 11 月 11 日までのほぼ 1 カ月で行われ、会場は西本願寺の書院であった。このとき宣伝のための高札を、京都はもとより大阪、神戸、横浜などの 14 カ所に建てた。そこで博覧会の目的は西洋諸国で開催されていた博覧会に倣ったものとして勸業振興と観覧者に見せることで知識を開かせることにあった²⁵⁷。一方で、その内容と性格は江戸時代における開帳や物産会や薬品会などと似たような特色が色濃く残ってもいた²⁵⁸。

出品されたのは日本の武具・古銭・古陶器など 166 点、中国(清)の古銭・書画など 131 点、ヨーロッパからは汽車の模型・拳銃など 39 点で、「新しく発明された機械」は見当たらず、ほとんど骨董品展示会であったと伝えられている。それでも物珍しさからか 1 万人以上が押しかけ、入場料収入から経費を差し引いても利益が残った²⁵⁹。そのため博覧会は、京都だけでなく日本各地で次々と開催されブームとなった。

1871 年の京都博覧会の成功を受けて、その後、博覧会を事業として行う半官半民の「京都博覧会社」が設立された²⁶⁰。設立してまもなく、この会社の主催で第 1 回京都博覧会が開催された。その第 1 回京都博覧会は 1872(明治 5)年 3 月 10 日から 5 月 30 日まで、西本願寺・建仁寺・知恩院で開催される。出品点

²⁵⁷ 工藤泰子「明治初期京都の博覧会と観光」『京都光華女子大学研究紀』京都光華女子大学編、2009年12月、79頁。

²⁵⁸ 吉見俊哉「博覧会の政治―明治国家形成と内国勸業博覧会―」『都市問題』東京市政調査会、1988年11月、第79巻11号、43頁参照。

²⁵⁹ 丸山宏「明治初期の京都博覧会」『万国博覧会の研究』吉田光邦編、思文閣、1986年参照。

²⁶⁰ 1872年に京都博覧会社によって開かれたものを第一回とし、前年に開かれた京都博覧会はここに数えない。

数は前回の約4倍の2,400余りに増加、内容も大いに改善され、入場者は4万7700人にのぼった。この時期、外国人が自由に京都へ出入することは認められていなかったが、博覧会に限って参加・見学できるようにした。そのため770人も外国人が入場した²⁶¹。

第1回京都博覧会には、出品物として農産物、薬品類、茶・菓子・タバコなどの飲食物と嗜好品類、水晶や石灰などの鉱物類、工芸細工物、呉服、武具、そして様々な機械が展示された。

また、この都博覧会では、ヨーロッパの真似をして客寄せの娯楽が企画された。「附博覧会」と呼んで、知恩院の山門上で煎茶席、建仁寺などで抹茶席、祇園・宮川町などで芸妓による演舞、安井神社で能楽、鴨川べりで花火大会などを行った。このうちの、祇園新橋の松の屋で行われた三世井上八千代振り付けによる舞踊公演は、お座敷舞の常識を打ち破り、集団による舞と、幕を降ろさずに背景を変えるだけで場面を転換する方法を編みだし、話題を呼んだ²⁶²。

第1回の成功を受け、京都博覧会社は翌1873(明治6)年に御所と仙洞御所で第2回京都博覧会を開催し、物品展示のほか陶器製造と西陣織の実演販売、禽獣会も行った。3回目から大宮御所も借用し、さらに規模を拡大する。そして1881年(明治14年)には、御所の東南に約16,000坪の常設会場を設置するまでになる。この間、第2回(1873年)から輸入物の機械類を展示し、蒸気機関の運転を実演している。この時の入場者数は約40万人であり、当時の京都の人口が23,4万人だと言われていることを考えると、その数の多さが分かる。

京都における博覧会は、企画性、展示品、付博覧会を充実させながら、また常設会場も岡崎に移し、1928年(昭和3年)年まではほぼ毎年続けられた²⁶³。

②京都博覧会設立の意味

明治維新後、政治的、文化的価値の中心であった天皇という存在を東京に移された京都が、近代化の中でどのように復興するのか重要な課題となった。それは、産業振興や、町組改正のような都市計画による既存の枠組みの変革であり、もうひとつは皇居や寺社保存に見られる文化的価値の保存であり、さらに

²⁶¹ 工藤泰子、前掲書、90頁。

²⁶² 丸山宏、前掲書、233頁。

²⁶³ 1897年(明治30年)から新設の博覧会館で行われ、1914年(大正3年)以降は京都市勧業館で開催されるようになった。

博覧会などによる新たな価値の発信であった。この博覧会こそが、京都の近代化と経済的復興の実現の切り札であった。それは、日本国内に留まらず、国外からの観客も意識したものであり、幅広く京都をアピールする場として開設された。

明治期に見られた京都の持つ文化的価値と資源を保存²⁶⁴し、あるいは再興²⁶⁵し、創造するという動きは、東京遷都以降の近代化の中で新しい京都像を作り上げる試みであった。明治期における京都のイメージを復活させるために開催された記念祭と博覧会の目的は次のようなものであった。

社寺及勝地修繕補助の概則京都市参事会にては市会の決議に基き社寺及勝地の修繕補助に関する概則を制定せしが近日市会に附議するよし其要領左の如し

一本費目を以て補助すべきものは次条に掲ぐる処の標準に該当するものに限り

一桓武帝に御由緒歴然たる最古の建造物にして大破せるもの

一古来由緒あり其建築著名なるものにして大破せるもの

一市街接近名勝地の最も著名なるものにして目下破損せるもの

一前条の標準に該当するものと雖も檀信徒又は有志者の勸財を以て之が修繕に堪えるものの如きは補助する限りにあらず²⁶⁶

「記念祭博覧会記事」という題のもとに記されているように、地鎮祭に影響されて「桓武帝に御由緒歴然たる最古の建造物にして大破せるもの」が修繕補助の対象となっていることが特徴であり、地鎮祭を契機としてこれらの社寺及勝地が修繕、つまりは保存の対象となり建議に掛けられたと考えられる。また、逆に言うと、これらの有名な社寺や名勝地さえも、荒廃し破損して放置されていたと考えられる。

この新聞記事からは 1893 年（明治 26 年）当時の社寺や名勝地の状況が分かると共に、文化的資源保存の風潮の高まりが地鎮祭をきっかけとして、具体的

²⁶⁴ 1883（明治16年）の岩倉具視の「京都皇宮保存に関する意見書」、1897年（明治30年）6月の古社寺保存法公布などに代表される言説や法令に現れた。

²⁶⁵ 1872年（明治5年）には祇園祭が、「清々講社」という新たな組織の下で再興され、1884年（明治17年）には、明治維新によって途絶えていた葵祭りが復活した。

²⁶⁶ 京都日出新聞、1893（明治26）年9月5日付。

な政策として現れたことが分かる。記念祭・博覧会の年である 1895 年（明治 28）1 月の新聞の連載は、当時の京都の文化的価値に対する認識が強く反映されているのである²⁶⁷。

この記事は、外国人に京都に関する情報と娯楽を与えて、日本を「楽園」「美術の郷」という観光立国にすることが、大きな利益をもたらすという立場に立っている。日清戦争の勝利により、外国人が「東洋の強大武国」という新観念を以って博覧会に来るであろう、という認識を示しつつ、その一方で博覧会場となる京都と近畿を「楽園」「美術の郷」の中心となし、各地の勝地国宝を「益々国光を発揮せしむる」ものとして評価している。ここでの京都の位置付けは「富国強兵・殖産興業」の地ではなく、「山水明媚・美術郷」の地であるのだ²⁶⁸。京都の近代化を象徴する琵琶湖疎水は、そうした山水明媚な景観に添えられたもので、例えば「文明の新知識、新技術を以て更らに偉観を添へ」というように、近代化による殖産興業を積極的に強調し、アピールすることはしていない。こうした姿勢は博覧会の開催時にも同様で、前述したように「美術工芸の府」という京都像が再びアピールされている。

明治初期における博覧会開催の目的は、本来は、富国強兵を目指して、殖産興業の推進することであった。「京都側委員が京都博覧会以来目指してきたのは、三都の一角としての商工業都市京都の復興であり、近代都市京都の建設であった」のであるが、「福沢や外国人入洛者が京都に期待したのは、もっとも『日本的な』古社寺や風俗、町並みなどであり、それを補完する美術品や工芸品」であった²⁶⁹。1895（明治 28）年の新聞記事にも見られるように、来訪者の求めたものは古社寺や名勝旧跡に代表される、旧来の価値の保存であり、「美術工芸の府」となる都としての博覧会の表象だったのだ。

記念祭・博覧会が浮き彫りにしたのは、こうした京都の都市としての在り方をめぐる内外の意見の相違であった。京都の側も、外からの要望を受け入れ、それに応えていく。記念祭・博覧会の中心人物となった内貴甚三郎らは、1895 年から 1896 年にかけて古社寺保存法の制定運動を進めた結果、1897 年に同法

²⁶⁷ 京都日出新聞、1895 年 1 月 9 日付。

²⁶⁸ 京都経済同友会「第 4 回知識と情報を商売の糧」『京都近代化の奇跡』（<http://www.kyodoyukai.or.jp/rediscovery/rediscovery004>、閲覧日：2018 年 5 月 2 日）

²⁶⁹ 小林丈広『明治維新と京都 公家社会の解体』臨川選書、1998 年参照。

は公布されることになった²⁷⁰。

京都博覧会で、京都が「日本的」であることを引き受けたことは、欧米の万国博覧会で日本の伝統工芸・美術を展示して「正しい日本」の姿を示したことと、平行関係にある。国外に「日本」の姿を見せると同時に、国内に向けても「我々の住む日本」のあるべき姿を提示したのである。そしてそれは、「古来」の姿を見せているようでいて、その実、建設されつつある日本という国民国家の内実として整理・再編されたものであった。

(2) 新潟における博覧会

新潟でも湯島聖堂博覧会の3ヶ月後の明治5年6月に、民間の手によって初めて博覧会が行われた。明治7年には白山神社境内の白山公園内にある物品陳列所を会場として、官庁主催の博覧会も開催されている。この博覧会は新潟町に住む鈴木長蔵らの願い出により明治7年5月20日から20日間開催された。出品物は、東京の博覧会事務局から借り受けた品物²⁷³と県内の諸物産、社寺の什物、県民の家蔵品であった²⁷⁴。

さらに新潟では明治8年にも、白山公園内の物品陳列所において2回目の博覧会が開かれ、本博覧会の出品物も県内の社寺の什物や家蔵の物品であった。

(3) 和歌山博覧会

和歌山でも明治5年5月から鷲森本願寺で博覧会が開催された²⁷⁵。この博覧会の出品物は、神社蔵品之部、寺院蔵品之部、諸家蔵品之部、産物井製造品之部に分類されている。神社之部では熊野本宮神庫出品の豊太閤寄附能具や木本八幡社神宝の小野道風朝臣書額、和歌天神社神庫の古鏡や天神像などが出品されていた。寺院之部には高野山御影堂宝庫より宝剣や太刀、空海書心経、仏図などが並んでいる。諸家蔵品は呉景文水葵白鷺図等の書画や硯箱、ウニコウルの杖などさまざまな物品が出品されていた。物産之部では煙草や茶、和歌海苔や牡蠣といった食品をも展示されていた。

社寺の神宝類を中心とした博覧会は他にも確認されており、明治5年8月に

²⁷⁰ 同上書、183頁。

²⁷³ ウィーン万国博覧会のために博覧会事務局が蒐集・保管していた物品であるが、ウィーン万博に実際に展示されたものかは不明である。

²⁷⁴ 横山秀樹「新潟県における明治時代の博覧会・博物館史」『國學院大學博物館学紀要』第5輯、1980年、14-15頁。

²⁷⁵ 以下の和歌山博覧会については、青木豊、内川隆志「和歌山県博物館史」『國學院大學博物館学紀要』第14輯、1990年、66頁を参照のこと。

徳島城で開催された徳島旧城展覧会にも同様の傾向が見られ、小像佛や涅槃像巻物基本など寺院の宝物が多く出品されていることがわかる。明治6年に開催された三重県伊勢山田博覧会の博覧会の稟告には神社の神宝を展示品とする旨を明らかにしている。

(4) 岩手県の博覧会

岩手県においても第1回勸業物産会が1878年（明治11年）5月1日から31日の1ヶ月にわたり、盛岡で開かれた。1か月の開会期間で、来場者は合計65,973人を数え、2,689品取引されたといわれる²⁷⁶。

第1回の勸業物産会に対し、1880年（明治13年）の第3回勸業物産会（盛岡）では、主旨が理解され、「日用繁用ノ物品」が出品されたと評価されることが多かった。第3回物産会出品者は1,052人、出品数165,063品、内機械類25品、観客は49,023人であった。売り上げは7,857品で4,184円16銭、商品授与者273人（1等14人、2等79人、3等180人）と伝えられた。

1878年（明治11年）5月3日（金）付の『日進新聞』では、開催日の1日は好天気恵まれ、午前9時から会場式が盛大に行われた様子が報じられている。5月6日の記事によれば、最初の5日間だけで来場者数は12,795名を数えた、売り上げは591品で334円87銭7厘であった。現在の市域である12箇村を含めおおむね4万人と考えると、かなり盛況であったといえる。第1回勸業物産会の概況を見てみると、明治期の早い段階から岩手県においても見るべき物産が多く開催された。博覧会では売買された品数はそれほど多くないが、珍品は一部であり、石炭や琥珀などの鉱物や陶器、漁労具や工具、日用の家具も出品されている。

物産会の目的、以下の4点にまとめられる。①商品売るための産業指導を行い、生産者の技術を高めること。②商品の市場開拓を行うとともに、出品商品に対する需要を計ること。③商品を不特定多数の需要を目標に、実物を展示しながら宣伝・広告を行うこと。④需要者の選択眼を養い、生活技術を高めること。この4つの目的を考えれば、産業振興を目指すというのは既に取り入れていたのである。このほか、岩手県内でも郡連合の物産会が毎年のように行わ

²⁷⁶ 岩手県の第1勸業物産会については、笠原雅史「明治期の博覧会と物産会」『岩手県博物館だより』140号、2014年3月、3頁を参照のこと。

れるようになり、これを通じて各地の産業を評価することが定着していった。次第に「物産館を常備すべき」との声が上がるようになり、岩手県では明治 25 年（1892）に物産陳列所を常設している。

（5）岡山県の博覧会

1873 年（明治 6 年）5 月に、小田県展覧会という名称で、現在の岡山県笠岡市で展覧会が開催された²⁷⁷。民間が行なったのではなく、廃藩置県直後に県が実施したものである。

明治 4 年の廃藩置県で、現在の岡山県西半部を占める備中国の全域と、広島県東部で福山藩であった備後国東部 6 とが 1 つの県となった。明治 5 年 6 月には名称が小田県となった。小田県は、廃藩置県で備前国岡山藩の領域が県となっていた岡山県へ明治 8 年末に合併、その直後の明治 9 年 4 月には備後国 6 郡は広島県へ編入されている。小田県は、廃藩置県後のわずか 4 年ばかり存続したにすぎない。その期間のうちの前半に、小田県展覧会が開催されたことになる。

小田県が大蔵省へ届出た展覧会であるというのは、県の施策だったわけである。明治の初め、県の制度が始まった早々のころ、展覧会のような文化的事業を県が実施した例は、地方で紹介されたものもあるようだが、けっして数多いものではなかったと思われる。小田県の場合は、廃藩置県後早々に文化的・啓発的な性格の催しが立案されたのであった。それには、小田県権令であった矢野光儀がはたした役割が大きかったようである。

矢野光儀（1822 年—1880 年）は、廃藩置県で、深津県・小田県の権令となり、岡山県合併の少し前まで続いた。短い在任期間中に、活版印刷の小田県新聞の発行、教科書の出版、製糸場の近代化とか、明治 5 年の芸娼妓解放令をかなり徹底して厳格に実施したなど、多くの開明的施策があった点で注目される県権令である。小田県展覧会も、彼の目標とした文明開化の域に達するための一事業として計画されたものと考えられる²⁷⁸。

会場として、地福寺と玄忠寺の二つの寺で開催しており、県の布告によれば出品物は 465 件ほどである。出品者は、個人 180、寺社 23、病院、学校、役所

²⁷⁷ 小田県で開催された展覧会は、間壁忠彦「明治初期に中国地方小田県で開催された展覧会」『博物館学雑誌』第 24 巻第 2 号（通巻 30 号）、1999 年 3 月、91-92 頁を参照のこと。

²⁷⁸ 同上書、92 頁。

4 となる。出品者は、広く小田県一円にわたり、かなりな規模の博覧会であった²⁷⁹。

出展品目は、書・画の類が約 100 件、それに書籍の類が 10 件ばかり、新古の器物（万剣・武具類を含む）約 150 件、それに彫刻 1 や銭貨の類が少しあり、貝・化石・奇石の類、動・植物の標本的なものなど天産品の類が約 140 件となっている。これに加えて、病院の西洋式医学機材と標本類で約 25 件、西洋知識を得るための学校教材 15 件ばかりがあり、西洋の機械・器具と、内外の物産が少しみえる。美術・工芸品と天産品を主とする出陳の品目をみると、国立博物館の前身として、明治 5 年の湯島聖堂や明治 6 年の山下門内博物館で行なわれた博覧会の出品目録の種類と類似するものだったように思える。目録の記載方法も似ているようである²⁸⁰。

明治新政府の開明政策を、地方の行政組織が早々に担った学習活動の一つとしての博覧会であったのである。

1877 年（明治 10 年）に、次章で取り上げる第 1 回内国勸業博覧会が開催されて以降、都道府県レベルでも共進会等様々な形の博覧会が次々と開催され、明治 14 年 2 月には静岡・三重・愛知・山梨 4 県連合による綿糖生糸繭茶共進会が開催された。同年 3 月には第 2 回内国勸業博覧会が開かれ、それに併せて全国 3 府 37 県の老農たちを召集して農談会が開催され、同 4 月にはそれを基盤として大日本農会が設立された。こうした地方自治体主導の博覧会がブームになっていく一方で、民間が主催する地方博覧会も、開催されつづけた。

（6）神社・民間が主催する地方博覧会

1873 年（明治 6 年）には、伊勢山田博覧会を度会県と神宮司庁が合同で主催した。同年、大宰府においても同社の神官たちが中心となって博覧会が開かれた。香川県の金刀比羅博覧会や大宰府博覧会では、会場である金刀比羅宮、大宰府天満宮所蔵の神宝を中心として博覧会が開催された。大宰府博覧会や金刀比羅宮博覧会などの社寺が会場となる博覧会では、会場が神社だっただけでなく会場となった神社の神宝類が展示の中心として揃えられていたのである。

²⁷⁹ 同上書、93 頁。

²⁸⁰ 同上書、92-94 頁。

その他、明治5年の金沢博覧会や明治8年の長野博覧会などの主催者も個人や民間の博覧会社であった。

こうした民間主導で開催された初期の地方博覧会に出品されたものとして、社寺の宝物以外に、古器物と物産が挙げられる。明治7年の飯田博覧会では生糸や陶器などの飯田生産品が出品されていたし、明治8年の大分博覧会でも食品や水産品、笠や下駄などの物産が出品されている。書画や刀剣、古銭や古鏡などの古器物は松本博覧会や伊賀上野博覧会、高嶋博覧会、熊本博覧会、長野博覧会などほとんどの博覧会に出品されていた。これら古器物の展示は、明治4年に布達された古器旧物保存の考えと無関係ではなかった。出品物の多くを占める、刀剣や古鏡、古書などは古器旧物保存の大政官布告でも保存品目の早い段階に記載されていることからその重要性が理解できる。また、明治8年になると勸業試験場の出品物や、富山博覧会のように博物館の備品や医療器具が展示されることもあり、地域によっては神社の神宝などが中心であった展示から、勸業や医療へと展示の関心が移されつつあった²⁸¹。

2. 地方における博覧会の開催目的

地方博覧会が開催ついて少なくとも二つの目的があった。1873年(明治6年)に三重県の博覧会の稟告には県内から集められた神宝をはじめ、珍品や天産人造の器財を一つの場所に展示する。そしてそれらを考証し知識を開いて文明を進歩させることが目的に掲げられている。また、明治7年開催の金沢博覧会は、自分の地域の物産工芸を刺激するとともに、他県の沿革に触れることにより郷土民の啓発を図り、村の活気を取り戻すことを目指していた²⁸²。

さらに石川県では、第2回博覧会主催者の博覧会社を組織していた石川郡栗崎の豪商木谷藤十郎等が、石川県令に建議書を提出して地方博覧会の開催を要求している。木谷は博物館が人の心を感化して、物産工芸の開発を進めることのできる施設であることを把握していた。そこで博覧会が中央の開催に偏っていることを説き、中央以外の人々が博物館を知らず人智を開くに至れないことは不幸なことであるとして、地方においても博覧会を開催する必要性が唱えら

²⁸¹ 同上書、7頁。

²⁸² 大貫涼子「地方博覧会の変容(序論)―明治前期を中心として」『國學院大學博物館學紀要』37、2012年、7頁。

れた²⁸³。このように、三重の博覧会や金沢で開催された博覧会は、実物の出品物の見学により、各地域の民衆の知識を開くことを主な目的としていたことが分かる。さらに博覧会の教育効果により地域の物産工業を再認識することで、村の活力を取り戻す効果をも期待され、多くの地方博覧会が開催されていたのである。

また、博覧会は教育の一環として位置づけられていることが明らかである例もある。明治6年に長野で開催された第1回博覧会ではその規則に知識の啓発を目的とする規程がある。さらに第2回博覧会に向けて、明治7年5月29日に木曽福島取締所が権令永山盛輝に博覧会の開催を申し出た文書には、今日村々に学校が設立されたが教育が十分に行きとどかないことから、博覧会を設けて教育の補助とする旨が記載されていた²⁸⁴。博覧会が学校教育理解の一環と考えられていたのである。

出品物については、明治7年の第2回松本博覧会の出品物は、書画、古陶器、古具足類、考古学的な遺物のみで、明治9年高嶋博覧会においては諏訪神社の神宝が中心であった。京都と大阪の博覧会規則には出品物について効用、製法、年代、地方、所有者又は発明、発見者を記述するよう指定している。

以上のように、明治4年から明治9年の比較的早い時期の博覧会の展示物を整理すると、必ずしも殖産興業・経済開発と結びついた展示内容が定められていたわけではないことが分かる。特に、明治5年の和歌山博覧会や明治6年三重県の伊勢山田博覧会博覧会、大宰府博覧会、香川県の金刀比羅博覧会では神社蔵品と神宝類が中心となっており、社寺の什物・神宝類は明治初期の博覧会において中心的な展示品であった。さらに、神宮司庁や神官が主催者となったこと、金刀比羅宮などでは開催場所となった神社の宝物が出品される頻度が高いこと、個人や博覧会社など民間の主催者も多いことも特徴的である。

このような地方博覧会の内容を、内国勸業博覧会以後の勸業博覧会と比較をした場合、前時代の物産会的内容であることは否定できない。しかし、このような地方博覧会は地方の住民が文明開化の受容の仕方とその解釈によって開催され、その後内国博覧会を中心になる博覧会時代の準備段階として位置づけ、

²⁸³ 日本博物館協会『わが国の近代博物館施設発達資料の集成とその研究—明治期編2・補遺』、1965年、65-66頁。

²⁸⁴ 大貫涼子、前掲書、9頁。

新しい概念である博覧会が早いスピードで国民に受容されていった姿が見られるのである。

3. 地方博覧会の変化と共進会への展開

初期の地方博覧会は、開催した主体が民間であれ地方自治体であれ、出品物の多くが既存の工芸品や美術品、あるいは社寺の神宝や家蔵品だった。長野県の事例のように博覧会を学校教育の橋渡しとするなど、経済開発や殖産興業と直接結び付くような内容の博覧会は多くなかった。しかし、1877年（明治10年）に第1回内国勸業博覧会が開催されることにより、地方博覧会もその内容を変化させていくこととなる。

明治9年に歴史・古美術資料等を中心とした博覧会を開催していた宮城県では、明治13年に第1回内国勸業博覧会の成功を受け博覧会が開催された。博覧会開催の目的は、農工業の奨励のために開催されたことである²⁹⁵。出品物は第1区から第6区に分類され、第1区は鉱業冶金術で鉱石鉱物建築材料と冶金術上製品に分けられていた。第2区は製造品で、化学製品及調剤品、ガラス製品、金属製品、木製器具・動植物鉱物の雑工品、衣服及製飾・諸車・医術上用器・土木建築雛形及図面。焼窯製品・七宝器・漆器が展示された。百工用具及利器諸金物・糸及織物・紙類・教育及學術具・陸海ノ軍器・諸産業ノ体裁ヲ示ス書籍と分類されていた。第3区を美術とし、彫鐫刊刻・古器品類・書画及百工図案が出品された。第4区は機械で、製糸紡織裁縫洗浴等ノ機会・汽力水力風力等ノ発動機・製糖機械、印刷製本機、堤水救火機類、第5区が農業で、農園産物及菓園産物・貯蔵の食物及食用外の動殖産物・農業上の方案及肥料・水陸動物・農具類・樹林産物、最後の第6区は園藝、草木花卉有用諸苗木いとなっていた²⁹⁶。出品物は明確に分類され、製造品や機械、農業が展示の中心となり、従来出品物のほとんどを占めていた、書画や彫刻、古器物は3区に見られるのみとなったのである。

政府の博覧会事業と殖産興業政策が整えられ、さらに内国勸業博覧会を5年に1回開催することが定められたことにより、各地で開催されていた地方博覧

²⁹⁵ 佐々本和博「宮城県博物館史」『國學院大學博物館學紀要』第14輯、1990年、28-29頁参照。

²⁹⁶ 宮城県勸業課『明治十三年宮城県博覧会出品目録』、1880年参照。

会が減少に転じた。1880年（明治13年）3月には第9回京都、奈良、琴平博覧会が、4月から長崎、愛知、茨城、大分、秋田、宮城博覧会などの博覧会が開催されていたが、第2回国内国勧業博覧会が開催された明治14年には第10回京都博覧会と奈良博覧会のみで、その後、明治23年の第3回内国勧業博覧会が開催される頃には、東京、京都、大阪以外の地域では目立った博覧会が開かれなくなった。この頃から、内国勧業博覧会への出品に力を入れる傾向が強くなったことを表している。

さらに、明治15年から16年にかけて共進会という産業別の展示会の開催が急激に増加していったこととも関係していると考えられる。政府による全国規模の共進会は明治12年の製茶共進会と生糸共進会がはじめて、双方とも横浜で開催された²⁹⁷。共進会は府県郡市もしくは数府県が連合して年々時期を定め、開催した。共進会では茶、糸、繭、稲、委、綿、陶器、漆器、海産物等の内国又は輸出向けの重要品を収集して審査批評を行い、優等者には褒賞を授けて産業を奨励することが共進会の役割であった²⁹⁸。

勧業博覧会に比べて、出品種類の制限により情報交換を行いやすく産業奨励に結びつくことや、出品物にあわせて時期や場所を選ぶことができること、開催経費が比較的少ないという利便性がある。そのために、共進会の意義は着実に全国各地に浸透しつつあったことが分かる。明治14年ごろまでさまざまな地域で開催されてきた地方博覧会は、共進会の形態を取るようになった。

以上のように、日本は明治維新以前から欧米の博覧会を見学し、またそれらに参加していた。明治になると、民間主導で種々の地方博覧会が開催され、後には県などの地方自治体も主催するようになり、両者が併存していた。

欧米の万国博覧会に実際に参加したことは、博覧会が殖産興業政策において極めて有効な手段であることを日本人に認識させると共に、産業分野における列強に対する遅れをも実感させる結果にもなった。まさしくそのために、日本は遅れた産業を発展させようと、積極的に博覧会を開催することになる。

一方、民間主導で始まった地方博覧会は、京都における博覧会に見られるよ

²⁹⁷ 清川雪彦「殖産興業政策としての博覧会・共進会の意義—その普及促進機能の評価—」『経済研究』39(4)、1988年、341頁。

²⁹⁸ 同上書、343-346頁参照。

うに、当初は産業育成を目的としていたものの、伝統的な工芸品や美術品の展示が重視され、他の博覧会でも既存の地方産業の展示が主にならざるを得なかった。イギリスにおける産業博覧会のように教育装置として博覧会を開く認識は、長野のように明確である例は少なく、まだ十分ではなかったと考えられる。明治期日本における国民国家形成に結びつけて考えれば、日本各地において文明化という当時の流行を早い段階で地方住民が意識し、その象徴になった博覧会を積極的に開催したという意義があった。もう一つの意義は、中央集権国家形成の初期に各地で博覧会が開催されたことは、中央政府による国家装置としての博覧会政策の土台となり、その後政府主導で博覧会を開催する重要性を、国民が容易に理解できる背景となったと考えられる。同時に、京都博覧会の例に顕著なように、当初企図された近代産業の展示ではなく、伝統的な工芸品や美術品の展示が中心になっていったことは、欧米の博覧会で提示した「正しい日本」の姿を模索する試み、あるいはより限定的に「我が故郷」の姿を視覚化する試みの端緒であったと位置付けられる。この試みは、1877年（明治10年）以降開催される内国博覧会で発展することになる。

第6章 日本帝国における博覧会の展開とその政治的役割

19世紀後半に富国強兵政策を進めた日本は、同世紀末になると植民地を獲得し、列強の一角を占めるようになる。

第1節 第2次世界大戦前期における日本帝国の展開とその課題

1894年（明治27年）7月に始まった日清戦争で日本軍が圧勝し、下関講和会議が開かれた。その結果、清国が朝鮮の独立、遼島半島、台湾の割譲、賠償金の支払い、開港などの条件を認め、戦争は日本の全面勝利で終結した。戦争によって日本はアジアの強国にのし上がり、欧米列強と並んで帝国主義国家への道に踏み出した。

しかし、このことは西洋列強の強い警戒心をもたらし、下関条約が調印された6日後、ロシア、ドイツ、フランスによる「三国干渉」がおこり、結果的に日本は西洋とくにロシアへの敵対意識を強め、日本の軍国主義化の道を進むことになった²⁹⁹。日清戦勝の結果とそれに伴う一連のできごとは、日本人の意識を刺激し、その後帝国主義国家として展開していく。

大日本帝国の帝国主義的な出発点は、1895年の下関条約による台湾（および澎湖島）領有にはじまる。その後1920年代には台湾、朝鮮、南洋諸島など、1932年には「満洲国」が加わる。そして1937年以降日中戦争（支那事変）が開始し、さらに1941年以降「南方圏」への軍事進出と「大東亜共栄圏」建設を目指すことになる³⁰⁰。

日本の植民地帝国としての特質の一つが、東アジアの片隅における遅れてきた帝国主義として出発し、拡大したことにある。「遅れてきた帝国主義」というのは、まず西欧諸列強が植民地分割の終盤に向かう19世紀末にその闘争に新たに参入したこと、そして諸列強がすでに植民地拡大を終えようとした第一次大戦以後に、その潮流に逆らってさらなる植民地＝帝国拡大を目指したことである³⁰¹。

²⁹⁹ 黒沢文貴「日露戦争への道―三国干渉から伊藤の外遊まで―」『外交資料官報』第28号、2014年、34-35頁。

³⁰⁰ 山本有造「近代日本帝国における植民地支配の特質」『経済志林』73(4)、法政大学、2006年、98頁。

³⁰¹ 同上書、98頁。

大正時代に入ると明治期における殖産興業政策の成果として経済が発達し、社会の近代化が進展するようになる。新たな大衆社会の到来による大正デモクラシーの拡大と大衆文化の発達は人々のライフスタイルを大きく変化させた。博覧会に関しても、その変化に伴って多様化し、新しく登場してきた大衆に国民の要望に応えるという性格を強めていく。この時代における博覧会では進んだ西洋文化の「輸入」という認識は薄れ、形式だけは西欧の形を受け継ぎながら、日本という文脈の中で博覧会が演出されるようになる。それは日本における国民国家形成の基盤が確立したことを意味したと言える。このことは日本が西洋帝国主義国家と並ぶ帝国主義国家として世界から認められる基本的な条件で整いつつあることを意味した。この時代、国民国家の成立と帝国主義はまさに表裏一体の関係にあった。その結果、日本の博覧会は、台湾、朝鮮、満州館の建設など帝国主義的色彩が強く反映していくようになる。

第2次世界大戦前の博覧会は、昭和期に入って、日本各地で開かれた天皇即位の奉祝を中心の博覧会で賑わいを見せた。しかし、軍部の発言力が増す過程では、戦意を高揚するように博覧会の内容が変化していく。1930年代半ばから世界的に戦争の気配が本格化すると、博覧会における軍国主義的プロパガンダの性格はより一層強まっていく。

戦時体制下、教育議会によって検討された教育全般の見直しは、社会教育にも及び、博覧会は博物館と共に次のように位置づけられた。①博物館の普及充実に計画的に進め、東亜に関する総合博物館を設置すること、②博物館は教育的使命を負い、積極的な移動展覧その他の活動を行うこと、③展覧会・博覧会は教育的配慮を加えた展示内容にすること³⁰²

このような流れを受けて、東亜の理念を広めるための特別博覧会が数多く開催されるようになった。日本における博覧会では、軍事的な目的で、海軍館、陸軍館などが威を振るって建ち、館内では戦闘シーンのパノラマや爆撃機の模型、銃火器などが展示された。野外では工兵隊による架橋の実演が行われ、アトラクションの「人間大砲」に軍国少年が日の丸の旗を振って歓声を上げた。軍事博覧会の特色は、入場門の見事さに凝縮される³⁰³。

³⁰² 村田麻里子、同上書、106頁。

³⁰³ 橋爪紳也（監修）、前掲書、101頁。

第2節 日本における内国博覧会開催とその性格

1. 第1回から第4回内国勸業博覧会の開催とその内容

国内にける地方博覧会ブーム、そして政府による欧米の博覧会への出展を経て、日本政府は本格的に博覧会事業に乗り出すことになり、日本国内の技術を向上させるために内国博覧会の開催を決定した。以下は第1回内国勸業博覧会から第4回内国勸業博覧会について考察する。

(1) 第1回内国勸業博覧会の開催とその内容（1877年）

第1回内国勸業博覧会は、明治日本における政府主催の最初の博覧会であった。殖産興業を担当する内務省勸業寮の設立(1874年)から3年というスピード開催で、展示品は政府によるものが最も多かった。政府は短期間で多数の国内出展品を募るため、出品人助成法を作って運搬費助成等を行い、出品を促した。展示品は府県別に展示され、競争心を煽った。

東京上野公園を会場として、8月21日から11月30日にかけて開催された。約10万平方メートルの敷地内に、美術本館、農業館、機械館、園芸館、動物館が建てられ、寛永寺旧本坊の表門の上には大時計が掲げられた。また、公園入り口に造られた約10メートルのアメリカ式の風車(地下水汲み上げ用)や上野東照宮前から公園にかけての数千個の提灯が彩を添えた。会期中におよそ45万人以上の観客が入場し、開会式には明治天皇が皇后とともに臨幸した³⁰⁴。

全国から集められた出品物は、前年に日本が参加したフィラデルフィア万博の会場構成を模倣して6つの部(鉱業及び冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸)に分類され、素材・製法・品質・調整・効用・価値・価格などの基準で審査が行われた。優秀作には賞牌・褒状等が授与されることも行われた。このことは物品調査と産業奨励が同時に行われていたことを意味した³⁰⁶。

展示品として、外国製品は政府購入品のみが出展され(第4回内国博までこの状態は継続)、内務省勸農局出品の風車や金属製の農機具などが展示された。外国の模倣として、外国製品を分解して模造したというミシンや印刷機などの機械が出展・展示された。工部省工作局の旋盤、京都西陣の荒木小平の木製ジ

³⁰⁴ 同上書、14頁。

³⁰⁶ 國雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』岩田書院、2005年、61-72頁参照。

ャガード織機のように西欧の技術を日本の産業に合う形で取り入れた製品、また、前章で述べたウィーン万博の技術伝習生によるものが多く出展され、測量技術を学んだ藤島常興が工作局時代に製作した尺度劃線機(ものさしに目盛を刻む機械)もまた、その一例である。一方、臥雲辰致の紡績機(ガラ紡)のように在来産業から生まれた製品もあり、これは従来の綿糸生産体系を変えることなく使用できたため、急速に普及した。量的には、紡績や農業関係の出展品が多かった。農業機械では、神村平介の煙草切り機や播種機が人力を省いたという点で高評価を得た³⁰⁷。

第1回内国勸業博覧会はこのように、国内製品は外国製品の模倣と改良といった段階に留まっていたが、日本の産業促進に大きな影響を与えた。政府はこの博覧会を通して地方府県における勸業状況を把握し、地方政府にも殖産興業の重要性を認識させることを重要な目的とした。そのため、新聞報道や報告書の刊行によって全国の国民に認識を深める努力が行われた。その結果、第1回内国勸業博覧会を模範とした博覧会はその後日本の各地方で次々開催されるようになった。これらの地方博覧会が各地の産業奨励に大きな役割を果たし、殖産興業に貢献したことであった。

(2) 第2回内国勸業博覧会の開催とその内容 (1881年(明治14)3月1日－6月30日)

第2回内国勸業博覧会は明治14年の西南戦争を契機としたインフレーションにより、勸業政策の縮小を余儀なくされる状況で開催されたにもかかわらず、規模は第1回内国博を超えたものだった。各府県群区に設置された世話掛による出展勧誘が成功したことがその一因であった。出展品は種別に分類し、展示され、各製品を比較することに重点が置かれた。また、各製品は改良発展が目的されたため、前回の第1回内国勸業博覧会に出品されたものが再出品を禁じられた。第2回内国勸業博覧会でも政府の出展品が最も多く、勸農局(博覧会終了時は農商務省農務局)と工部省の展示品が中心となった。

会場約14万3,000平方メートルに、本館ほか6館の陳列館が建設された。上野の山の花見客を期待して3月に開会したことが功を奏したのか、会期中の入

³⁰⁷ 同上書、68-73頁参照。

場者は 82 万人で、一日平均 6,740 人と、第 1 回内国博より倍近くの人を集め大盛況であり、明治天皇も皇后と行幸し、観覧した³⁰⁹。

第 1 回内国博に続き第 2 回の内国勸業博覧会においても指導者的役割を果たしたお雇い外国人ワグネル (G. Wagner) は、日本政府への報告書の中で日本産業の現状分析と将来への提言を行い、例えば日本農業を外国の資本や外国技術等を導入して発展させるべきであると述べた。他に、人力を省く農具を採用し、牧畜事業を興すことが急務であると主張した³¹⁰。

出展数は、紡績関係が約 3 分の 1 を占めたが、臥雲辰致製作の改良版ガラ紡以外は、ほとんどガラ紡の模造品だった。特許制度がない時期だったため、改良版ガラ紡と模造品の両方が受賞している。ほかに、第 1 回の水車式織物機械で受賞した渡辺恭・柴田徳蔵兄弟が、その際入手したアメリカ製品の図式を元に改良を重ねて、足踏機で再度受賞している。次いで多かったのは、農業機械である。勸農局 (三田農具製作所) は靱摺機やポンプなどが受賞しているが、すべて外国製品の模造品だった。しかし、海外の大農場向けの機械は日本でそのまま使うには不適當で、農業機械はその後外国技術を輸入するのではなく、日本独自の方向に発展していく。

原動機類では、民間からの出品も徐々に増え、蒸気動力利用の萌芽が窺える。この 2 年後には、蒸気機関を使った大規模な紡績業として有名な大阪紡績会社も操業をしている。

勸業政策の面では、博覧会により国内各地から出展品が集積されるため、各地の産業状態を把握することができた。

(3) 第 3 回内国勸業博覧会の開催とその内容 (1890 年 (明治 23 年) 4 月 1 日 - 7 月 31 日)

内国勸業博覧会も第 3 回になり、明治の社会に定着した存在となる。政府出展品が審査対象外とされ、ここから民業振興の性格が明確となった。

会場の建坪は 9,725 坪 (3 万 2,000 平方メートル) で、本館のほかに、美術館、農林館、動物館、水産館、機械館、外国製品を並べる参考館からなり、建物全

³⁰⁹ 橋爪紳也 (監修) 『別冊太陽』、前掲書、18 頁

³¹⁰ 國雄行、前掲書、93 頁。

体の面積は、第2回の約1.3倍、出展品数は441,458点と増加して前回を超え、その種類も多様化し、機械製品の分類が細分化された。3月26日に、明治天皇が臨幸し、開会式が挙行された³¹¹。

民間出品物に限った褒賞の授与はその等級が商品価値を左右するため、審査に対する不満も出るようになり、不満をもった出展者から訴訟が起こることもあった。一方、この博覧会は特許制度の整備を促進する役割も持った。その準備過程において、1884年の商標条例、1888年の意匠登録制度が定められた。政府は意匠条例を社会に認知させる意図のもと、出展物に限り出願手数料と登録料を徴収しないこととしたため、出願数が急増した³¹²。

民間出品は前回の約4倍も増加したものの、大型機械については参考として展示された政府の製品のみであった。会場内に東京電灯会社の藤岡市助が輸入した電車を走らせてはいた。造船業は早くから産業化・民営化されており、川崎造船所が大砲輸送船模型を出展している。参考出品では海軍省の軍艦模型があった。

農業機械では、渡辺万吉の軽便打籾器(馬力脱穀機を人用に改造)が受賞している。人力の省力化を図ろうとしていた農商務省の意図とは逆行するが、人間の賃金の方が馬の使用より安価だった当時の現状をふまえていた。原動機部門の出品は17点に留まったが、東京電燈株式会社がエディソン・ダイナモ(発電機)の模造等を出品し、電力の時代の到来を示した。中央発電による電力事業のはじまりは、この東京電燈株式会社(1886年設立)で、白熱灯を供給した。その後次々に、大阪、京都などで電灯会社が作られていた。出展品では、ほかに、石川島造船所が「船用高圧蒸気機械」で賞を得ていた。

(4)第4回内国勸業博覧会の開催とその内容(1895年(明治28年)4月1日－7月31日)

商品の展示や褒章授与が出展者に利益をもたらし、博覧会開催によって民業が振興することに加え、来場者の急増により博覧会が開催地に直接利益をもたらすことが広く知られると、博覧会の誘致活動が活発に行われるようになった。

³¹¹ 橋爪紳也(監修)『別冊太陽』、前掲書、28頁

³¹² 國雄行、前掲書、116-117頁。

第4回の開催地は、東京遷都以降の低迷を活性化すべく民間主導の博覧会を定期的に開催していた京都が積極的に誘致した。当初、第4回内国勸業博覧会は1894年に開催される予定であり、東京遷都以降、新たな拠り所を求めている京都は、平安遷都千百年記念事業という口実を掲げ、開催を勝ち取った³¹⁵。1894年には日清戦争が勃発したにもかかわらず、むしろ、政府は殖産興業政策が戦時中であるからこそ重要であるとし、京都復興という側面だけでなく、多分に天皇崇拜、愛国心の涵養という側面に注目して、1年延期はしたものの1895年の開催を決めた³¹⁶。

会場は平安神宮の南に当たり、会場面積は17万8,000平方メートル、建物敷地総数は4万7,000平方メートルであった。会場の正面には大理石製の噴水が建ち、その左右両側に売店が並んだ。建物は、美術館、工業館、農林館、機械館、水産館、動物館の6館が主要なものであり、機械館の動力源はそれまでの石炭から電力に変わった³¹⁷。

水産館の前には水産室、今日でいう水族館があり、鰻や鯉、鮒などを見せた。ここでは魚を上から見るというそれまでの方法とは異なり、側面から見るができるということで珍しがられた。ただし海水魚はここでは見られず、兵庫県の和田岬にある遊園地和楽園内に設けた生け簀で見ることができた。

ここで注目したいのは、「美術工芸の府」という認識であり、博覧会場である京都の特性を美術工芸に見出している。こうした京都の持つ文化的価値と資源に対する評価と認識は、当時新聞紙上にもしばしば取り上げられ、どのような京都像を作り上げていくかという問題は、当時、京都が東京遷都からの復興を目指す過程で、極めて重要な問い掛けであったことが確認できる。博覧会開場をきっかけに、こうした「美術工芸の府」としての京都像が再び提示されているのだ。

ほかに大きな話題として、会場の外に正式な交通機関として日本ではじめて市街電車が登場したことがある。運行は、京都七条から会場の平安神宮付近と琵琶湖疏水のほとりまで、南の伏見方面にも走り、電力は疎水の水力発電でま

³¹⁵ 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年、138-140頁。

³¹⁶ 保本野夢「「古都」京都と天皇制の可視化」『空間・社会・地理思想』第9号、2004年、23頁。

³¹⁷ 橋爪紳也（監修）『別冊太陽』、前掲書、30頁。

かなった。電力時代の幕開けを象徴するものと言えよう。

何かと話題の多い博覧会であったが、7万3,781人の出品人から16万9,098点の出品を得て、入場者数も113万6,695人に達し、大変な賑わいの中で終了した。また、道路・旅宿の整備が進み、京都の観光都市としての基礎が作られた。

2. 内国勸業博覧会の開催とその役割

(1) 内国博覧会の開催と国民意識の形成

博覧会の開催で明治政府が求めたのは日本の産業の振興を通して、富国強兵の実現であった。その結果、農工の民業を奨励し、啓蒙させることによって貿易が発展するという殖産興業政策の基本線の上に博覧会が構想された³²¹。

明治期において、5回続けて開催された内国博覧会や1907年に東京勸業博覧会や様々な産業博覧会などが勸業博覧会というテーマで数多く開催されたが、最も影響力が大きかったのは政府主導の内国勸業博覧会であった。第1回から第4回内国勸業博覧会にかけて、外国産品の出品販売に対して、民間からの外国輸入品の出品は禁止された³²²。これは、日本が自力で産業を振興しようと図ると同時に、外国品の出品を禁止することによって、国内の工業産業を保護し、発展させるという意味をもっていた。そして、国内からの出品物に対して、それぞれ品質・調整・効用・価値・価格などについて明確に規定された方法と基準で審査が行われ、優秀作には褒賞が授与された³²³。

産業振興のために、あらゆる天然資源や物産、工業品などの所在が研究され、収集され、選別された。展示品は鉱業・冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の部門に分類され、展示された。さらに、文明開化を視覚的に具体的な形で見せるため、薬品、陶磁器、織物、生糸、文具、統計、理学機器、製糸機器、印刷機械、蒸気機関、軍艦の模型、電信装置、旋風機などが積極的に展示されていた³²⁴。

最初、それらの出品物は館別に、各館の内部の陳列は府県別に展示されたが、

³²¹ 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究...」、前掲書、57頁参照。

³²² 同上書、57頁参照。

³²³ 同上書、43頁参照。

³²⁴ 吉見俊哉「博覧会の政治—明治国家形成...」、前掲書、45-46頁参照。

次の第2回内国勸業博覧会からは各館の陳列において、横軸は府県別になり、縦軸は部類別に配列に展示方法の工夫が成された。このような展示のしかたは明治期における日本の博覧会の原型となった。

この展示方法は、博覧会に動員された観客や出品者に対して、集めた物質の「良否」と製造の「巧拙」を「比較」出来る合理性や秩序などを教育すると同時に、総体として日本国という秩序的な空間となるように工夫されたのである。そのような秩序づけられた空間を巡回する人々は無意識に展示品の製造方法と使用方法を人々が学習できるように考えられた³²⁵。明治政府は博覧会を通して観客に、このミニチュア化された日本である展示空間を経験することで、「国民化」する自己を認識させようと図った。こうした経験に基づく認識はその後、明治期を通じて開催される内国勸業博覧会の基本的な前提となっていく³²⁶。

(2) 内国博覧会と中央主権国家の形成—天皇制

内国博覧会において、もう一つ注目すべきことは、産業振興と天皇制の象徴的意味合いの現れである。博覧会の開場を記した記事では、

京都は美術工芸の府、時期亦美術工芸勃興の気運に際す、其陳列に時期の反影を認め、其会場に土地の特性を帯ぶべきは言ふを待たざるなり〔中略〕

本日の開場陛下は尚ほ依然大本營に在せられ、大元帥の御務を執せらるるの故を以て、晃親王殿下御名代、親しく盛典を挙げさせらる、誠に本会の光栄とす、殊に他を顧れば、我軍連戦連勝、彼れ敵国は遂に和を請ひ、使節来りて馬関に在り、…嘗て西南暴動の日に於けると、之れを比ぶるも、国家の機関が如何に強大に発達し、如何に文明に組織せられたるかに思い到らば、誰が嘆賞せざらんや、而して皆是れ我皇陛下の威徳の致す所豈に復た盛ならずや偉ならずや、臣民たる者皆謹で今日の大典を祝し、益々君国のために利用厚生、開物成務の事に怠る可からざるなり³³⁵。

³²⁵ 吉見俊哉『博覧会の政治学…』、前掲書、129頁。

³²⁶ 西川長夫「日本型国民国家の形成—比較史的観点から—」西川長夫、松宮秀治（編）『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、2002年、30-32頁参照。

³³⁵ 京都日出新聞、1895年4月1日付。

博覧会場である京都の特性を美術工芸に見出し、近代化が急激に進むなかで、京都は「美術工芸の府」であるという認識が現出したことは既に述べた。ここでは、殖産興業の手段たる第4回内国博覧会の記事においても、開会時には日清戦争中ゆえに天皇は出席できなかったとしても、晃親王が名代として出席し、天皇の威徳を示すのである。

明治維新により権力の中心が将軍から天皇へと代わることになった。明治新政府は、その存在基盤としての天皇を民衆生活の中心に浸透させ、支配権力として機能させることで、国内的にも、また対外的にも、日本国家の正当性を維持し、近代的統一国家を形成しようとした。明治政府は「唯一の支配者、唯一の正当性を与える聖的秩序、唯一の支配的記憶」としての天皇像を求めた³³⁶。そうした天皇像の形成は、単なる言葉・言説によるイデオロギーのような抽象的で、観念的なものではなく、行幸を通じて天皇の生身の身体を視覚的、具体的に意識させることにより、訪れた地域の広範の人々に「臣民」であることを実感させ、国民統合を図った³³⁷という点に天皇の重要性がある。

明治政府の指導者たちが京都のもつ皇室の過去の重要性を認識していた。岩倉具視が意見書を出した1883（明治16）年当時、明治政府は「一千年の歴史をもつ都市の御陵や神社、仏閣、御所といった、皇室の支配と伝統を視覚的に裏付ける過去の遺物が、いかに強力な正当性の根拠となりうるかという点に理解を示し」ていたのである。皇室儀礼を創造することが最大の意義であり、それは新政府の政治的正当性の強力な根拠となるものとして、極めて重要となったのである³³⁸。

天皇の位置づけとして、天皇の巡幸や後述する天皇に関連する記念博覧会とその展示を通して民衆の視線を集め、地域の統合や民衆の統合を図った。博覧会が天皇の名の下、晃親王を向え式場に座らせることは、まさに天皇制を視覚化することであり、それが殖産興業と富国強兵とに結びつけ演出されることは、「産業、富強の奨励者」としての天皇像であったりしたのであろう。近代日本の公的儀礼に用いられる様々な表象・記号を伝播させ、天皇制を可視化することによって、天皇が社会の中心に居ることを示したのである。

³³⁶ T.フジタニ、『天皇のページェント』NHKブックス、1994年、17頁。

³³⁷ 原武史『可視化された帝国』みすず書房、2001年、11頁。

³³⁸ T.フジタニ、前掲書、58-61頁。

(3) 内国博覧会と日本社会の近代化

明治期日本における内国勸業博覧会は明治 10 年上野で開催された第 1 回の開催以降明治 28 年の京都での第 4 回内国博覧会まで殖産興業を中心テーマとして、博覧会の観覧者、出品者相互間に、技術・知識・情報を共有し、日本の工業化を普及促進させるという政府の強い決意の下で実施された。それは人々に「日本とは何か」あるいは「日本人とは何ものか」という国民形成の基盤となる自己認識像を探る場でもあった。そしてそれは、前章で述べた同時期の欧米における万国博覧会で示したような日本に対する「誤解」を正して、日本の「正しい姿」を知らしめ、日本の地位を高めるという意識が、国内に向けて発露したと言える。これらの博覧会によって日本人のアイデンティティと日本国に対するナショナリズム意識が急速に拡大していった。

博覧会がこのような役割を果たしたからこそ、自力による産業振興と国内産業の保護が達成でき、その結果として日本における国民国家の形成を早い段階で可能としたといえる。「内国＝日本」という限定をつけた形の博覧会の開催であるからこそ、欧米列強との間に存在する不平等条約（とくに治外法権）に対抗する手段としての外国人の内地旅行の拒否という政策に結びついた³⁴²。それらはさらに明治 28 年の日清戦争での勝利とそれに伴う外国の治外法権撤廃といった日本の国際的な地位の上昇を背景として、明治 36 年の第 5 回内国博覧会は西洋化・近代化の向かう日本の国家的威信を内外に知らしめる場として認識された³⁴³。

明治政府は博物館や博覧会が国民を幅広く教育する空間としての認識を強くもっていた。内国勸業博覧会の注意書では、展示物に対して、素材・製法・効用・時用・価格などを具体的に示して相互を比較し、その価値を特定することによって有益の品と無益の品を分かり易く選別できるように考えられた³⁴⁴。明治国家が内国博覧会によって来場した民衆に「比較」と「選別」という方法でモノを観察し、それによって人々に優秀なモノを生み出すという意識を持たせようとしたのである。これは新しい形の近代的な国民教育であり、そして博覧

³⁴² 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究...」、前掲書、66-67頁参照。

³⁴³ 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年、94頁参照。

³⁴⁴ 吉見俊哉「博覧会の政治—明治国家形成と内国勸業博覧会—」、前掲書、45頁。

会はその重要な教材であった。

しかし、このような合理的なモノの見方を国民に獲得させたのは、注意書という手引き以上に、博覧会の展示方法そのものであった。内国博覧会では比較、選別、認識が容易な展示構成が必要だった。展示品を鉱業・冶金、製造物、美術、機械、農業、園芸の部門に分類別に配列するほか、府県別に陳列され、府県ごとに物産を一覧できるような工夫が行われた。このように観客としての民衆は「府県」という新しい領域を「内国＝日本」という枠組のなかに一目で観察できるようになった。それは当時の民衆にとって新しい自己認識の経験であったといえる。それによって、それまである特定の地方に限定されていた技術や知恵や情報などという「モノ」がこの博覧会という場によって全国に知られるようになった。これは博覧会が実際にもっていた大きな役割であった³⁴⁵。

これらの「モノ」は国家という日本全国（ときには世界）を回ることを可能とする博覧会という組織によって、ひとつの場を集められ、国家がそれを管理し、「賞」という形でその「モノ」に権威付けが行われた。また、新聞・雑誌・ハガキなどの印刷物によってモノの流通が図られ、またそれは各地方の「モノ」ともなって、全国に広がっていった。それはまた「産業化」の推進という形によって、日本の文化的社会的統合性を推し進めることとなる³⁴⁶。

(4) 内国勸業博覧会と日本近代工芸・美術の確立

内国勸業博覧会は、産業振興を目的に国内で開催された博覧会である。第1回内国勸業博覧会では、工芸品の出品は第2区製造物と第3区美術として区分され、同様に1881年の第2回内国博覧会にも行われた。ここでは第2区の名称が、製造物から製造品に改められた。しかし、工芸品の出品基準は必ずしも整備されているとはいえず、第1回内国博では、第3区美術の第1類彫刻のなかに、きせるや茶托など実用性の高い彫刻品が含まれており、第2回内国博においても、第3区美術の第3類書画に陶・磁・七宝を施した画が含まれたことというのは書と画の区別もなされていないという状況であった。

すでに明治19年の段階で、パリ万国博開催にあたって事務官長となる林忠正

³⁴⁵ 國雄行『博覧会の時代...』、前掲書、65-147頁参照。

³⁴⁶ 園田英弘「博覧会の背景」、吉田光邦（編）『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986年、10-12頁参照。

は、「凡ソ工藝品ヲ分ッテニ種トス。一ヲ美術品トシ一ヲ普通品トス」と述べ、工芸品を、技巧に優れ、人を感動させるような芸術性の高いものと、装飾性があっても日常に使用できるものの二つに区別すべきであると主張している³⁵²。

明治18年頃には、純粹美術（絵画・彫刻・建築など）と、応用美術（金工・陶磁器・織物など実用的要素のあるもの）との分類が次第に明確になった。1890年（明治23）の第3回内国博において、工芸はその内容によって、第1部「工業」と第2部「美術」に分類されることとなった。工芸に入っているものは良質・精巧・安価・実用的であることが条件であり、美術に入るのは「美術の巧妙を顕すもの」に限定された³⁵³。したがって、第1部の工業出品物群には、焼窯製品・漆器・七宝・金工など実用性があり、産業的色合いが濃い作品が、第2部の美術出品物群には、第1類・絵画、第2類・彫刻などのほかに、「美術の巧妙を顕すもの」として「美術工業」が第4類として加わることとなった。さらに、1895年（明治28）の第4回内国博では、「第2部美術」が「第2部美術及び美術工藝」に改められ、「美術工業」も「美術工藝」と変更された。この変更は、美術工芸が美術に包含されるのではなく、美術と美術工芸は同等の価値をもって並列し得る関係にあり、美術としての工芸の存在価値を認識すべきであることを示している³⁵⁴。それは、機械制工業が進展するとともに、規格化された工業製品として大量生産されていく工芸品（＝第1部「工業」に属するもの）と、一流の作家によって丁寧に制作される美術工芸品（＝第2部「美術及び美術工藝」に属するもの）とが明確に区別されることを意味するものである。美術工業や美術工芸という言葉は、日本の工芸品が、殖産興業政策下において輸出振興を目的に制作されていた「産業としての工芸」の時代から脱却しようとする。そして美術の領域を構成する独立した「美術としての工芸」を主張し始めたことを象徴するものと考えられる³⁵⁵。

教育にも純粹美術と応用美術を区別するという考え方は普及し、その後、工業教育機関においても、美術工芸学校と工業学校を生み出し、伝統産業としての日本の工芸の近代化に発展した。日本工芸を教育として体系化・組織化する

³⁵² 日野栄一「万国博覧会と日本の『美術工芸』」、吉田光邦（編）『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986年、22頁。

³⁵³ 同上書、25頁。

³⁵⁴ 三好信浩『日本工業教育発達史の研究』風間書房、2005年、113頁

³⁵⁵ 日野栄一「万国博覧会...」、前掲書、25-26頁。

ようになった。

第3節 帝国主義日本における博覧会の変容とその役割

明治30年代から大正期に入って、日本が海外に領土を拡大して帝国主義国家への道を進み始めると、博覧会のありかたも大きく変化し始めた。西欧を目標とした文明の発信装置としての内国博覧会は次第にそれまでになかった娯楽的要素が取り入れるようになり、それはその後ひとつの重要な要素となった。言い換えれば、博覧会の娯楽化・遊園地化であった³⁶⁰。

また、帝国主義国家として海外に新領土を求めて、博覧会も植民地と深い関係に置かれ、さらに、植民地においても博覧会が開催されるようになった。西欧において行われた万国博覧会と同様に、日本においても植民地そのものを対象にした博覧会が開催され、一般的な博覧会にも植民地からの出店が数多く見られた。海外の植民地でも、日本本土で開催されたと同じ形式で博覧会が計画され、開催されるようになった³⁶¹。

大正時代に開催された博覧会には、明治時代から殖産興業を目的とした勸業・産業博覧会のほかに、社会の大衆文化の発展と生活様式の近代化の進展に伴って国民の関心のある分野に絞って目的別に博覧会が開催されたのがそのひとつの特徴であった。大正時代の15年間には116回の博覧会が開催された（付録参照）。それらを分類してみると家庭様式、衛生、旅行、産業・鉱業、美術・工芸のテーマ別で多様な博覧会が開催されるようになる。このテーマ別の博覧会にうち代表的なものを概観しよう。

1. テーマ別の博覧会

①家庭・婦人・婚礼・子供の博覧会 ―皇孫御誕生記念としたこども博覧会

明治期以前には政治権力とは直接的な関係を持たず、家族の存在は村落共同体の中に組み込まれていた。この家族の存在は、明治期に入ると戸籍法や性別役割分業の成立によって変化し、新しく「家庭」という概念が誕生する。これを基礎として、封建的な身分制を破壊し、「国民」概念に置き換え、家族と国家

³⁶⁰ 吉見俊哉「博覧会の政治―明治国家形成と内国勸業博覧会―」、前掲書、52頁参照。

³⁶¹ 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年、3-4頁。

の関係性を構築していくのである³⁶³。また、学制発布により、近代学校制度が整備されることを通して〈子ども〉の存在を認知することが重要となる。また、学校教育が普及する過程で、学校教育を代替するものとして「家庭教育」が文部省に認められ、家庭単位で教育の必要性が着目されるようになる³⁶⁴。

大正期に入って、大衆社会の到来により家庭や婦人・子どもをテーマにした博覧会が盛んに開かれるようになり、その内容として生活様式や家庭や住宅の実物模型などが展示された³⁶⁵。これは、生活が国民の関心だけでなく国家行政の関心となり、主婦とこどもの地位向上など政府にとって西欧市民社会と同等の「新しい家庭および家庭生活」作りが重要な課題とみなされ、博覧会を通して新しく登場してきた大衆に訴えかけた。

皇孫照宮成子内親王殿下の誕生を記念して、こども博覧会が大正 15 年（1926 年）1 月 13 日から 2 月 14 日まで東京上野公園で開かれた。皇孫ご誕生の記念館は会場の中心となったが、そのほかに、明治時代の風俗と教化資料、児童の芸術作品と童謡の変遷、運動器具の参考品、代表的な文具・玩具の現状、こどもを主体とした東西・古今の名画の展示、また古代から現代における各種人形の陣列などがあった。

また、展示場に東京市内の各玩具商が出展するおもちゃ館、御所を背景に三越、白木屋、松屋、松坂屋、高島屋の五大百貨店が競争するきもの館、運動館、迷宮春の園、栄養館、母の家、こどもの部屋などが並び、主催の東京日日新聞社も特別出品をしていた。催しものには、宝つり竜宮城、天体観測場、豆自動車競走のほか、おもちゃデー、音楽デー、お菓子デー、福豆デー、牛乳デーがあり、男女で子供から大人までで大賑わいで、開催期間中の来場者は少なくとも 500,000 人にのぼった³⁶⁶。

東京での成功を受けて、京都でこども博覧会が開催されることになった。会場は応天門通りを中心として、三つの会場が設けられた。第 1 会場には公会堂や本館があり、そのなかにはこどもと母の家、きもの館、おもちゃ館、電気館、栄養館、教育館、北極館、娯楽館などが設けられた。第 2 会場にはこどものた

³⁶³ 小山静子「家族の近代—明治期における家族の変容」、前掲書、169-176頁参照。

³⁶⁴ 山崎信子「近代日本における〈家庭教育〉—明治期にみられる「主婦」の位置づけの変遷—」『創価大学大学院紀要』 28, 2006年、184頁。

³⁶⁵ 橋爪伸也（監修）、前掲書、60-93参照。

³⁶⁶ 同上書、86頁。

めの遊戯施設があり、こども汽車やこども馬所なども作られ、常時こどもたちの歓喜声があがっていたという³⁶⁷。

このような博覧会による家族単位の理想像の形成過程のなか、国家は「家」よりも優先すべき存在であるという考えになり、個別の家の利害よりも国家社会の発展が優先されるべきであるという国家主義の考え方が有力となる。この考えは特に明治30年代以降の新聞や雑誌などに目立つ。さらに、家の興隆がすなわち国家、社会の繁栄につながるものであると考え、あるいは逆に国家に尽くすことが即ち祖先に仕えることであるという考えを立てて、家・祖先と国家を一致させた³⁶⁸。家を合理化することによって、国家の近代化の中で家族道徳が変動してゆくのを容認、促進しようとする姿勢をとっていたと考えられる。

②電気博覧会

電気博覧会は次のものが代表的事例である。1918年（大正7年）3月20日～5月20日に「電気博覧会」が東京の上野に開催され、1926年（大正15年）3月20日～5月31日に「電気大博覧会」が大阪に開催された。

近代的な象徴とした電気が博覧会において重要な要素となった。電気事業は目覚ましい発展を遂げていたという日本の文明化の成果として、より一層の普及を目指して博覧会が企画され、開催された。内外の電気工業製品が勢揃いしたこれらの博覧会は多く観衆を集めた。

③工業博覧会・産業博覧会

工業・産業博覧会には以下のようなものがある。1921年（大正10年）7月5日から9月5日にかけて、「戦後発展全国工業博覧会」が京都に開催された。その後、1926年（大正15年）4月1日～5月10日に「全国産業博覧会」が姫路に、同年8月1日～8月30日に「国産振興博覧会」が札幌に開催された。次の1927年（昭和2年）9月11日から10月20日にかけて「全国産業博覧会」が山形に開催された。

³⁶⁷ 同上書、87頁。

³⁶⁸ 山崎信子、前掲書、184頁。

④化学工業博覧会

この博覧会は、大正時代に少なくとも 1917 年と 1926 年に、2 回にわたって開催された。この博覧会は、化学業界が国の産業や国防上にも重大であることを伝え、発明思想の増進を促すことを目的として開かれた。陸軍館や海軍館も建てられ、化学に広範囲の各企業から出品があった³⁶⁹。

これらの特別テーマの展覧会をその趣旨についてみると、各特別展覧会のテーマを大きく分類できる。それは、生活改善を旨としたものと科学技術に関するものという二つに類型化できる。いずれの場合も、展示内容を検討するに、生活との接点を意識したものとなっている。

なぜ特別展覧会は「生活」をテーマとしたものが多いのか。

一つ目は一般の人々の「生活」への興味が増大していたという点である。第一次世界大戦後、社会の近代化と産業の飛躍的な発展にともない、会社員や教員、官吏、職業軍人といった資本家と賃労働者の中間に位置する新中間層が大量に生み出された。これら新中間層を中心とした新たな家族の出現は、従来の家族のありかたを大きく変えていくことになる。つまり従来の数世代が協力して家族労働を行う形態から職住分離の核家族化が推し進められたのである。1920 年（大正 9）の第 1 回国勢調査によると、二世帯以下の家族構成の世帯は六大都市の公務員、自由業の家族の 84.8%を占めている³⁷⁰。こうした現象は伝統的な経験知に代替する新たな「生活」への関心を持つ層を生み出した。事実、当時の女性雑誌には良い家庭を築き、より良い生活を送るための工夫等を掲載したに記事が多く見られ、生活改良会をはじめたとした民間による生活改善への動きが見られるようになる。

二つ目は政府の方針として実施されたのである。つまり、日本の政策として意図的に計画された。

なぜこのような展開になったか、二つの理由が考えられる。

第 1 に国民の階層が分化してきたこと。日露戦争（1904 年～1905 年・明治 37～38）を契機に重化学工業が進展した日本社会は、本格的な資本主義を確立することに成功する。だが、それは同時に都市では労働者階層や新中間層を析出

³⁶⁹ 同上書、88頁。

³⁷⁰ 戸田貞三『家族構成』新泉社、1982年、347頁。

し、農村においては著しい階層分化をおこすなど社会関係の変動をもたらした³⁷¹。

第2に、それに関連して労働問題が非常に大きくなってきたことによる。その傾向が顕著だったのは都市部で、貧困問題や住宅問題など、格差の拡大にともなって生じた問題が無視できない大きな課題として浮かび上がってきていた。いわば、この時期はこれまで「国民」とひとくくりにされていた人々のなかでも、とくに新中間層もしくは労働者階層と呼ばれる人々への注目が集まった頃だったといえよう。この2つは、これまでの教育のありかた―すなわち学校教育体制や内務省を中心に進めてきた産業振興政策など―では掌握しきれない問題を露呈させた。結果的に、政府はあらたな教育方法を模索することを余儀なくされる。この過程で注目されたのが国民の生活のレベルにまでおりて、教育を実施するという方策だった。以上、2点から明治末期の社会的な問題状況を背景に、国民とくに中間層から労働階層の思想教化が、緊急の課題であることが明らかになった³⁷²。

特別テーマの博覧会では、こうした時代状況も配慮して人間らしい豊かな「生活」という誰もが希求する内容が選択された。以上のように一般の人々の「生活」に対する興味と政府の要請、この両者が複雑に関係を保っていたところに特別テーマの博覧会の特徴はある。

2. 新しい祭典として記念博覧会の開催

明治時代にすでにアジアで最初の近代国民国家の枠組を確立した日本は、西欧諸国家に対して、その成長と成果を見せる最も適切な場となったのもまた博覧会であった。そのため、大正期には、歴史的な出来事を利用して、記念として博覧会がひんばんに開かれたのはその特徴である³⁷³。

① 明治記念拓殖博覧会

日清戦争に続き、日露戦争に勝利して、関東州を租借地とした日本は、続いて朝鮮を併合し、国土を大きく膨張させた。さらに北海道や樺太も開拓を要す

³⁷¹ 福井庸子、前掲書、191頁。

³⁷² 同上書、192-193頁。

³⁷³ これはアメリカをモデルにして、フィラデルフィア万博、シカゴ・コロンビア万博、セントルイス万博はその例である。海野弘、前掲書、13-14頁参照。

る土地であり、開拓に関する政策は重要な問題となった。これらの新領土に関する情報を国民に広めるため、北海道出品協会が「新しき日本」を掲げて、各地の出産品を集めて、殖民思想を喚起させようと博覧会を計画し、主催した。

北海道からの出品が中心となって、会場に北海道館を建て、工業、林業、鉱産、水産、農産など生産品を陣列し、北海道の模型や北海道の風景の写真で拓殖の進展を示した。そのほか、王子製紙、北海道セメント、大日本ビール、北海道鉄道などの企業も出展した。

本博覧会は、大正元年（1912年）10月1日から11月29日に東京上野公園で開催され、およそ616,315人が来場した。

②東京大正博覧会（1914年）

この博覧会は大正天皇の即位の奉祝と大正時代の冒頭に日本の産業界の氣勢を示すために東京府が開催した博覧会である。自由、平和が強調され産業博覧色が薄れ、文化性や娯楽性が盛り込まれるようになった³⁷⁴。

会場として、上野公園を第1会場に、不忍池畔を第2会場とした。分会場として、青山練兵場で陸軍の飛行機、芝浦では海軍の飛行機がそれぞれ2機ずつ展示された。

会場内には工業館、美術館、水産館、農業館、林業館、鉱産館、染織館が建てられた。第2会場には、朝鮮、台湾、満州、樺太など新領土や植民地の特設館があり、日本の帝国主義の進展を象徴した。第一会場と第二会場をつなぐエスカレーターは日本初登場であり、不忍池に架設したケーブルカーなどが科学技術のシンボルとされた。これらには見世物的な意味もあったが、先端技術や文化的な生活が手に伸ばせば手に入るものであることを大衆に示すためのものでもあった³⁷⁵。

大正3年（1914年）3月20日から7月31日までの会期中に7,463,400人が来場し、大成功であった。

³⁷⁴ 山田俊、安田政彦「幸絵葉書に見る大正時代の博覧会」『帝塚山学院大学研究論集』42、2007年、39頁。

³⁷⁵ 同上書、40頁。

③大正記念京都博覧会（1915 年）

大正 4 年（1915 年）11 月 10 日の大正天皇の即位式に先立って、式典挙行の地である京都では、同年 10 月 10 日から岡崎公園で大規模な奉祝の博覧会が開催された。

応天門を中心に東と西の二つの会場に分けた。正門を入るとシンボルとして万歳塔、第一会場には工業館が建てられ、中には染織工業、化学工業など展示された。そのほか商工館、機械館、参考館、食料館などが設けられた。

第 2 会場には満州館や各地の売店が並んでいたが、メインは大礼館で、即位嘗祭後の大饗の儀で奏した舞楽「万歳楽」と「太平楽」の装束をつけた人形を展示した。また、階上には玉座の模型や参考品が陣列された。

④東京奠都 50 年記念博覧会（1917 年）

明治元年（1868 年）9 月 20 日に、明治天皇の鳳輦は京都を出発、10 月 13 日に江戸城に入った。その後、日本近代化の一連として、江戸を改め東京とし、藩制の廃止、憲法の発布を行うこととなる。この京奠都以来 50 年を記念するため、東京上野公園で大正 6 年（1917 年）3 月 20 日から 5 月 31 日にかけて博覧会が開かれた。会場では京都御所の建礼門を第一景に、第二十六景の東京ご到着まで、東海道五十三次の道中をジオラマにまとめて展示した。また東館陳列館には国内 3 府 6 県の出品をはじめ、台湾、朝鮮や満蒙の出品も陳列された。

⑤平和記念東京博覧会

大正デモクラシーと平和を祝福するために東京府が開催した博覧会であった。これまでの勸業的博覧会と違い、一等国としての文化国家日本を示す試みであった³⁷⁶。

会場として上野公園と不忍池畔で、第 1 会場には二階建ての平和館、製作工業館、染織館、化学工業館、衛生館、美術館、食料水産館、農業館、電気館などセセッション様式で展示館が建ち並んだ³⁷⁷。会場内に「文化村」として展示

³⁷⁶ 同上書、48頁。

³⁷⁷ セセッション様式は、1890年代末期のオーストリア・ウィーンにはじまり、1910年代にかけて行われた新芸術運動で、当時のヨーロッパを席卷したアール・ヌーヴォーの一環である。

された実験住宅の数々によりそれまでの日本になかった居間中心型の住居形式が提案され、日本における住宅建築に影響を与えた。第2会場には平和塔、電気工業館、航空交通館、外国本館、動力機械館、林業鉱業が建ち並んだ。このほか、朝鮮、台湾、樺太、南洋統治などの展示もあった。

第1次世界大戦の終戦を記念して開催されたこの博覧会は殖産興業という目的を掲げた明治期の博覧会と違い、一等国として文化国家日本のイメージを示す試みと位置づけられた博覧会として特徴をもった³⁷⁸。

この他にも、明治記念博覧会、山陰鉄道開通記念・全国特産博覧会、戦勝記念博覧会、大正記念博覧会、宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加50年記念博覧会、皇孫御誕生記念、など様々な記念博覧会が開催された（付録参照）。このような大正期に開催された博覧会は、日本の植民地政策と強く結びついていた。それは日本が、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦に勝利して植民地や当たらし領土を得たことで、帝国主義国家として列強に数えられるようになった自信の表われでもあったと考えられる。それは、一方では、新しい祭典、新しい歴史作りとして日本文明の発展の実績を国民に見せて示し、他方では、戦争における勝利によって、領土を獲得した日本が帝国主義的な国家運営を維持するための国民教育の一貫でもあった。

このように、僅か15年間という短い期間の大正期に多くの博覧会が開催されたのは国民に単に娯楽施設で新しい生活を楽しませるだけでなく、それは同時に国民に帝国主義のイデオロギーを身に付けさせる教育的役割を目的としていた。

3. 第5回内国勸業博覧会と帝国主義イデオロギー

1903年(明治36年)に大阪で第5回内国勸業博覧会が開催された。日清戦争(1894-95年)の勝利、1899年の治外法権撤廃といった出来事に伴って日本の国際的な地位が上昇したという自負心を背景として、第5回内国勸業博覧会は、国家の威信を内外に知らしめる「国光国華を発揮する」博覧会として認識されたのである³⁷⁹。

³⁷⁸ 久保田稔男「絵葉書『平和記念東京博覧會原色写真版』」『国立科学博物館研究報告』E類38号、2015年12月、57頁。

³⁷⁹ 松田京子『帝国の視線―博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2007年、17頁。

会場には、農業館、林業館、水産館、工業館、機械館、教育館、美術館、通運館、動物館のほか、台湾館、参考館が建設された。建物はこれまでの仮設ではなく漆喰塗りで、美術館は大阪市民博物館としてその後使われている。第二会場として、堺に水族館も建てられた。

第5回でははじめて外国の出品を認め、日本の産業発展状況との比較対象となり得る大規模な諸外国製品の展示を陳列しており、イギリス、ドイツ、アメリカ、フランス、ロシアなど16か国が出品した³⁸⁰。その中で新しい時代を強く印象付けたのはアメリカ製の8台の自動車であった。名称および形の上では内国博覧会だが、実質的に万国博覧会に近づいていると言える。



図3 第5回内国勸業博覧会の参考館 図4 参考館の内部

出典：国立国家図書館コレクション

この博覧会で初めての夜間会場が設置され、会場にはイルミネーションが取り付けられた。大噴水も5色の照明でライトアップされ、エレベーター付きの大林高塔も人気を呼んだ。これらは、日本にも本格的な電力時代が到来したことを示している。また、茶臼山の池のほとりに設けられた飛艇戯(ウォーターシュート)、メリーゴーラウンド、パノラマ世界一周館、不思議館(電灯や火薬を用いた幻想的な舞踏、無線電信、X線、活動写真などを見せた)、大曲馬など、娯楽施設が人気を呼んだ。堺の水族館は二階建ての本建築で、閉会後は堺水族館として市民に親しまれた。夜になると各館は閉館していたにもかかわらず、

³⁸⁰ 橋爪紳也(監修)、前掲書、35頁。

多くの入場者はこれらのイルミネーションや余興目当てで来場し、入場者は4,350,693人にのぼり、内国勸業博覧会始まって以来の数を記録した³⁸¹。

先述のようにこの博覧会でははじめての外国による出品が行われ、多くの入場者を集めたが、イギリスやオランダを中心として植民地からの出品も行われていた。そしてこの植民地に関して、第5回内国勸業博覧会はそれ以前の博覧会とは異なる性格をもっていた。1877（明治10）年の第1回から計5回にわたって開催された内国勸業博覧会について、明治政府が当初「万国」ではなく「内国」の限定を付したのは、「外国品遮断による国内産業保護」と、治外法権にともなう外国人の内地旅行（内地通商）制限への考慮があった³⁸²。こうした保護主義的傾向から脱するのが不平等条約改正後の第5回内国勸業博覧会であり、これによって初めて外国産品の出陳・販売が正式に認められることになった。それ以前は外国産品の出陳は政府の購入品のみに限られており、外国政府はおろか民間日本人による出品さえ認められていなかった。こうした欧米製品の展示とならんで、もうひとつ、第5回勸業博の特色として注目されてきたものがある。それは欧米の万国博を模した植民地の産物や住民の展示であり、そこに、西欧の帝国主義的「まなざし」を受容し、それを台湾や北海道（アイヌ）や琉球へと反転させていく帝国日本の姿が読みとれる。それは「まなざされる客体」から「まなざす主体」の位置への大きな転換を示していたという³⁸³。

日本も日清戦争によって獲得した植民地・台湾を国民に宣伝する目的で、台湾館を設けている。この内国博覧会は、帝国主義の最盛期中に開催され、各国が植民地の産物を売り込む博覧会であり、博覧会を植民地経営に活用していこうとした。

特設館の設置は、表向きには台湾人等に日本殖産興業の進歩の現状を認識させ、日本に対する服従心を誘起させることを目指した。それはまた、単なる紹介ではなく、日本人の台湾等に対する無関心・無理解あるいは誤解を解消し、理解を深める教育的側面があった。こうした台湾等の産品及びその文化の展示は、現地において工業を向上させ、経済も発展し、殖産興業を奨励することに加え、内地の日本人に外地に意識を向けた殖民的思想を喚起するという目的が

³⁸¹ 國雄行、前掲書、1993年、184-186頁。

³⁸² 同上書。

³⁸³ 吉見俊哉『博覧会の政治学...』、前掲書、212-217頁参照

あった³⁸⁴。この展示方法の意味は文明国の一員へと迎える日本にとって、新たに獲得した台湾は日本による遅れており、日本による統治が必要であることを国民全体に知らしめる装置であった。



図 5 第五回内国勸業博覧会台湾館

出所：大阪市立図書館デジタルアーカイブ
(管理番号：c0951001)

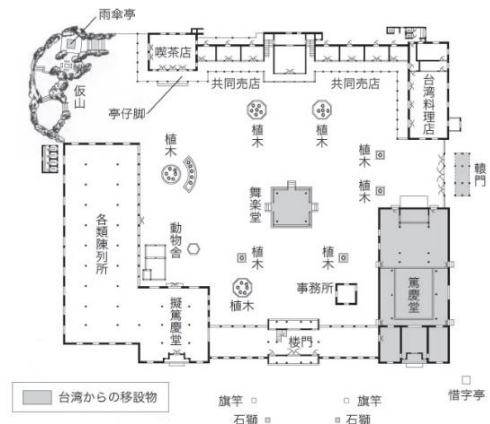


図 6 台湾館の平面図

出所：農商務省『第 5 回内国勸業博覧会
事務報告上巻』、1904 年、第 48 図より

台湾館は独立パヴィリオンとして建設された。その中に、台湾という生産地・製造地が中心になり、出品物の主体から分類すると二つに分けられた。一つは台湾の住民が自発的に出品したものと、もう一つは台湾総督府による出品物であった³⁸⁵。

第 5 回内国勸業博覧会の出品分類は 10 部門に分けられ、さらに 59 類に細分された。その中に、台湾住民による出品は一部農業及び園芸、第 2 部の林業、第 3 部の水産の 3 部門が大きな割合を占めていた。主要な出品物としては米、烏龍茶、砂糖であった。これらが植民地経済のなかで重要な作物であることを示している。

一方、第 5 部科学工業、第 6 部染織工業、第 7 部製作工業などの工業関連の出品と第 8 部機会に関する出品はほとんどなかった。しかし、第 5 回内国勸業博覧会における工業館と機械館の展示方法は府県別の区分ではなく、全体として日本「内地」の工業製品の「発展」状況を表した工業館と機械館は、その総

³⁸⁴ 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究...」、前掲書、57頁参照。

³⁸⁵ 松田京子、前掲書、61頁。

体が台湾に対する比較対象であった。そのために台湾館の台湾住民による出品は相対的に「貧弱」であり、「欠落」であるという印象が強かった。結果的に、これは台湾を「遅れた」土地として表象して印象づけることになった³⁸⁶。

では、もう一つ、台湾総督府からの出品はどのようにあったのかについて以下に述べていく。

表 3 台湾総督府による台湾館の出品状況

	分類	品数		分類	品数		分類	品数
1	形勢一般	9 点	7	農業・園芸	103 点	13	林業	71 点
2	製腦	19 点	8	水産	31 点	14	鉱物・土石	46 点
3	工業	99 点	9	交通	16 点	15	衛星	12 点
4	教育	58 点	10	気象	5 点	16	度量衡	42 点
5	地理・歴史	35 点	11	土俗	163 点	17	蕃俗	約 300 点
6	動物	19 点	12	参考	若干			

出典：第 5 回内国勸業博覧会『第 5 回内国勸業博覧会出品目録 台湾館』金港堂、1903 年、97-98 頁。

台湾総督府による出品物は大きく 2 つに分類できる。それは 2～12 出品で農商務省告示として 10 部門 59 類の分類規定に含まれたものであった。そしてこの分類規定に含まれていない台湾館で特別に出品・展示されたもの（上記 1、13～17）である。これは分類規定に収められない台湾の特徴を表象するものを強調し、製造物ではなく、製造方法を示すようなものを中心とした展示である。

そのなかに、台湾全土の地図を始め、行政機関一覧、民族分布図などの台湾統治の概要を示す地図や統計図が展示された。そして、台北市街や台湾神社や土地の様子の写真が展示され、台湾統治の状況を視覚的に提示することであった。「土俗」について、台湾住民の風俗・習慣を示す住宅のレプリカ、衣服、装飾具、結婚式の写真などが展示された。「蕃俗」³⁸⁸について、「蕃俗」の展示ス

³⁸⁶ 同上書、63-68頁。

³⁸⁸ 日本では、現在でも台湾土着民族のことを高砂族（高山族）と称しているが、この呼称は1923年に提唱されて以来徐々に普及していったものである。それまでは、漢民族の呼

ペースが設けられ、その先住民が 8 つの種族に分けられた。それぞれの種族に衣服・装飾具、飲食器具、武器、楽器、住居写真が展示され、さらに、それぞれの体質写真も展示された³⁸⁹。

総督府はこれらの台湾「文化」の展示によって台湾の文化が日本「内地」の文化と異なることを示し、日常生活、風俗、習慣、信仰、そして民族的異質な文化を総体として表象したのである。これは台湾統治のためにその対象とした台湾または台湾人が可視化され、知識の枠組のなかで体系され、把握しようとした。

日本は日清戦争の勝利や治外法権撤廃といった国際的な地位上昇を背景に、西欧列強と肩を並べた「文明国」日本の姿、さらには植民地を所有する「帝国」日本の姿が展示＝呈示された空間として第 5 回内国勸業博覧会を開催した。しかし、この「まなざす主体」への転換は、諸外国や植民地の品々をいかに展示するかという演出の問題にとどまらず、さらにその展示を誰に見せるのかという観客の問題をも含んでいた。その点と関連して、欧米各国及び清国、朝鮮といった周辺アジア諸国からの観光客の誘致が本格的に企画され、まさに「帝国」の博覧会だったのである³⁹⁰。

日本で当時大規模な外客誘致が試みられた背景として、大きく以下の 3 つの要因があった。

第 1 は、日本産品への諸外国の注目を集めることで対外貿易を活性化させるという目的である。第 5 回内国勸業博覧会の前回とは異なる「特色」として「外人の来観」が大量になされたことが挙げられる。これによって「将来に於ける内外の商業取引を振作し貿易を發達せしめ輸出を増進する」という目標が大いに実現されることになる。

第 2 に、第 5 回内国勸業博覧会という大規模なイベントを通して、その後の日本の観光業を發展させることになる。第 5 回内国勸業博覧会の開催を契機として、大阪では西欧の都市を念頭に置いた上で、道路や港などの交通インフラ、

称に従ってその漢化の程度によって「生蕃」「熟蕃」「化蕃」などと呼ばれ、「生蕃」の居住する地域を「蕃地」とか「蕃界」などと称していた。漢族の住民が台湾にやってくる前から台湾に住んでおり、日本による支配が始まった当時、台湾の全人口の数%を占めていた。土居平「台湾高砂族の研究—高砂族の研究史と分類（一）」『九州大学医療技術短期大学部紀要』13、1986年、59頁。

³⁸⁹ 松田京子、前掲書、72頁。

³⁹⁰ 同上書、17頁。

公園や公会堂、外国人向けのホテルなど諸施設が次々と整備された。これによって、都市の「魅力」が多様化し、都市を文化的資本とした観光産業に結びついた。第5回内国勸業博覧会では、名前に内国と謳ってこそいたが、日本で初めて外国に開かれた博覧会だった。そのため、外国の出品が認められ、大規模な外国製品が展示されたばかりでなく、欧米各地および清国、朝鮮といった周辺アジア諸国からの観光客の誘致が本格的に企図された。

第3に、博覧会開催を通じて日本に対する国際的評価を高めるという日本イメージ作りの目的があった。特に清国・韓国を狙った観覧客誘致については、将来の貿易相手国との交流促進を図ることにくわえ、「博覧会の如何なるものなるかを知らさる」非文明国に文明国の威信を示すという思惑も入り混じっていたようである³⁹¹。

第5回内国勸業博覧会を機に、台湾協会を通して、「土人〔台湾の土着民族〕の出品を督促し、観覧を勧誘する」ことが台湾館の設けた目標であった。特に注目されるのは、台湾領有後初のこの博覧会は、「独り台湾の主要物産を内地人に紹介し、内地台湾間の貿易を進捗せしめる好機会たるのみならず、台湾土民をして、内地に於ける殖産工芸進歩の実状を知らしめねば、直接には其知識を開発し、間接には内地に対する土民の心服心を誘う利益あるべし」と主張されている点である³⁹²。

日本には、博覧会に動員される二重の「まなざし」を利用して台湾の産業発展を促進しようとする姿勢があった。すなわち、台湾産品を日本人に見せることで台湾経済への商業的関心を刺激する一方で、日本製品を台湾漢族に見せることで将来の台湾経済を担う人材を開発しようとする狙いがここに確認できる。これと同様の発想は、第5回内国勸業博覧会を内地住民に「台湾の真相」を伝えると同時に、台湾島民に「母国の文華に接触」させる絶好の機会とみなす台湾協会の見解や、「成るべく台湾の出品を奨励し、内地人をして居ながら、台湾の真札を合点せしむると同時に、成るべく多数の台湾人を勧誘して、博覧会を見せしめ、大に彼等の智識啓発に資せん」（児玉源太郎）とも符合している。つ

³⁹¹ 同上書、17頁。

³⁹² 阿部純一郎『帝国期日本のネーション形成と人種・民族研究の学知形成に関する移動論的研究—日本と台湾の博覧会事業および観光政策に注目して—』博士論文、名古屋大学環境学研究科、2010年、96頁。

まり第5回内国勸業博覧会は、台湾経済の将来性に対して、日本本国の住民だけではなく、台湾漢族自身の眼を開くための重要な舞台装置として捉えられていたのである。更には、「土民の心服心」への効果が語られているように、博覧会観覧は、台湾島民に商業的関心を喚起するだけでなく、日本および日本人への畏敬を植え付けるための装置とも捉えられていた³⁹³。

第5回内国勸業博覧会を日本の威信を知らしめる機会と捉えるこの認識は、日本政府の姿勢とも重なっており、ある意味それを植民地側から補完するものであったといえる。

以上の2点から、総督府と台湾協会が内地観光事業を押し進めた背景には、近代的な日本製品を見せることで台湾漢族を資本主義的経済システムへと投げ込み、かつ「日本＝文明」を頂点とする価値序列の内部に囲い込もうとする政策意図を読み取ることができる。

第5回内国勸業博覧会を、当時総督府が進めていたさまざまな人の移動に関わる政策が集約的に動員された空間と捉えることができる。それは第1に、「台湾の真相」を伝えることで優秀な日本人移住者を台湾に誘致するというブル政策の装置であった。それは第2に、「文明＝日本」の姿を見せることで台湾島民に精神的畏敬と商業的関心を喚起するための装置でもあった。つまり総督府は、将来台湾の植民地経営を担う人材を誘致・育成するための装置として第五回勸業博を利用したのである。そしてこれを支えたのが、日台間の移動者を対象とした総督府の無料渡航措置であり、台湾協会や台湾協賛会等による渡航割引・観光案内・宿泊斡旋等の受入体制の構築だった。この意味で、第5回勸業博は、当時の台湾における移住・観光・交通といった人の移動をめぐる政策実践の交点に位置している。つまりそれは、さまざまな人の移動を通じて帝国建設を成し遂げるという大規模な政治的プロジェクトの一環だったのである³⁹⁴。

第5回内国勸業博覧会のために日本を訪れた台湾人は、そのほとんどが上流層（あるいは学生）に限られていたが、それはかえって当時の内地観光事業を支えていた関心の所在を明らかにする。つまりそれは、将来台湾の植民地経営を担う人材をターゲットとし、彼らを日本の商工業および文化に触れさせるこ

³⁹³ 同上書、96頁。

³⁹⁴ 同上書、98頁。

とでその意識変革をおこなうという、台湾総督後藤新平が台湾島内の近代的なインフラ開発を通じて成し遂げようとしていた課題を、内地に移し変えて実現しようとするものであった。

こうした台湾の姿は、工業を向上させ、経済も発展し、文明国の一員へと向かっていた日本にとって、新たに獲得した領土である台湾が、未だ発展途上であり、日本による統治が必要であることを台湾の人々に示していた。これは、これまで西欧の帝国主義国家が博覧会で行っていった植民地展示において、展開していた植民地主義を正統化する手法であった。台湾館のような植民地パヴィリオンは、その後の内国博覧会においても継続的に設けられた。こうして、博覧会における展示は、日本が帝国主義国家として植民地化の戦略を正当化するプロパガンダとして利用され、国民の結集と理解の確立することを図っていた。

第5回内国勸業博覧会に続き、1910年の日英博覧会、日本拓殖博覧会など日本国内の博覧会では、帝国主義的なまなざしのもとで、植民地住民の異質な日常を演出する「原住民」「原住民の村」の展示が発達しつつあった。

それを支えたのは当時の人類学的「知」の枠組みであり、より具体的には、「原住民展示」への学知の関わり方として以下の3点が明らかにされた。すなわち、①展示民族をさまざまな原産品・民族品をもちいて、現地風に演出し、その姿を民族全体の「真正な日常・純粋な標本」として提示したこと、②各民族をさまざまな境界線（区画化された地図・写真・人間の並列的展示）によって截然と分類し、かつそれらの比較を促す空間配置を整えることで、各人がそなえている境界横断的な混淆性を舞台上から締めだしたこと、③「原住民展示」を学問的に正当化しながら、同時に娯楽空間（動物園、世界一周パノラマ）の一部にはめこむことで一関係者の真意はどうあれ結果的には一その見世物化を温存・助長したことである³⁹⁵。

4. 日本における植民地博覧会の開催とその内容

植民地の拡大に伴い、日本帝国は植民地に関するものに強く関心をもち、意識するようになったのである。植民地の存在を国民に知らせるために、1912年

³⁹⁵ 同上書、117-122頁。

（大正元年）に東京の上野公園を会場にし、植民地の出品を中心に植民地を直接の対象にした「拓殖博覧会」が開催された。

その当時、日本の国民は日本帝国の植民地に対して北海道、台湾、樺太、朝鮮、そして新たに獲得した満州の一部のことを認識してはいたが、これらの地域とそこで住んでいる人々についての知識は乏しい状態であった。このような状態を認識した日本政府は、植民地に対する日本国民の意識と知識を高めるために、拓殖局総裁のもとで拓殖博覧会を開催した⁴⁰²。この博覧会のもう一つの目的は、第5回内国勸業博覧会における台湾館と同様に、植民地における殖産興業による産業奨励をし、それによって植民地の繁栄にもたらすことと同時に植民的進歩思想を植民地住民に喚起することであった⁴⁰³。

この拓殖博覧会の内容は北海道、樺太、満州、朝鮮、台湾から多くの産物、また植民地統治の成果を誇る数多くの製品を中心に組織され、各会場で展示された。それと同時に、日本帝国版図に新たに組み込まれた地域の人々も招かれ、それぞれの展示所に各地域の伝統家屋を建てられ、そこに生活していた。招かれた人々は「台湾台北土人、台湾屈蕃ウライ社蕃人、樺太オタサムアイヌ、ギリヤーク、オロッコ、北海道日高アイヌの諸種族男女長幼総数 18 人」であった⁴⁰⁴。

⁴⁰² 山路勝彦、前掲書、51頁。

⁴⁰³ 拓殖博覧会事務取扱所『拓殖博覧会事務報告』1904年、4頁。

⁴⁰⁴ 同上書、63-65頁。



図 7 拓殖博覧会におけるギリヤーク人及びオロッコ人

出所：東京大学医学図書館デジタル資料室（絵葉書 A-3/77）



図 8 拓殖博覧会における台湾人家屋

出所：東京大学医学図書館デジタル資料室（絵葉書 A-2/77）

この拓殖博覧会は、一見、当時西欧で流行し始めた植民地博覧会と相似形を

なしているが、実際には特異な点ももっている。それは、展示された民族は日本国民として認められた「種族」であるということである。「北海道アイヌ」、「琉球人」、「千島アイヌ」「樺太アイヌ」「台湾土人」、「ギリヤック」、「オロッコ」、「朝鮮人」は既に日本国民を構成する、日本版図内の諸人種とされ、これらの人々についてより詳しい情報を知るために展示が行われ、この人々も「内地・日本本土」について啓蒙させようとした。

このことについてとくに日本見学旅行(蕃人内地観光)の役割が大きかった。

1897年(明治30年)に、台湾が日本の植民地の下になった直後に、台湾総督府は内地観光団を組織し、計画した。このとき、タイヤル族、ブナン族、パイワン族などの種族から13人が選ばれ、長崎、大阪、東京、横須賀など遊覧旅行させた。その目的は、日本を実際に観覧させ、日本の現状を体験することによってその体験を台湾のほかの住民たちに広めることであった。このような現地協力者を育成することで、将来の統治が円滑に進むことを目指した⁴⁰⁸。

第4回の観光団はタイヤル族約50名から成り、1912年(大正元年)10月に内地を観光し、訪問したのはほとんど軍事施設であったが、丁度開催されていた拓殖博覧会にも足を運んでいる。日本の軍事力と技術力を「蕃人」に見せ、日本を畏怖させることが目的であった。実際、台湾総督府警務局が編纂した『理蕃誌稿 第3編』には、次のようなタイヤル族の発言が記されている。

私カ考ヘマス所ハ日本ハ成ルヘク私共ノ様ニ多クノ蕃人ヲ内地ニ観光サセ其ノ者カ歸社シタ後、見テ來タ事ヲ汎ク説明サセテ日本ノ日本ノ強ク且大キナコトヲ知ラセ其レヲモ尚頑固ノコトヲ言張ツテ政府ノ命令ニ服從セヌ者カ多イ場合ハ其ノ時初テ彼ノ怖ロシイ飛行機ヤ機關銃ヲ持テ來テ懲罰サルコトト察シテ居リマス⁴⁰⁹

多分に日本側の意向を反映したものではあろうが、日本側の意図はおおよそ達成されていたと考えられよう。

東京での拓殖博覧会開催の成功を受けて、大阪で1914年3月20日より7月31日まで天王寺において「明治記念拓殖博覧会」が開催された。そのために、大阪商工会という組織が博覧会の主催者として設立された。この博覧会の開催

⁴⁰⁸ 山路勝彦、前掲書、60頁。

⁴⁰⁹ 台湾総督府警務局編『理蕃誌稿』第3編、1918年、335頁。

の動機は植民地の生産品を一堂に集め、実物教育を実施し、植民地思想の喚起に努力することにあつた⁴¹⁰。

会場は三ヶ所から構成されていた。第1会場は博覧会の中心となる勸業館であり、「満州参考部」、「台湾部」、「樺太部」、「北海道部」、「朝鮮部」から成り立っていた。第2会場では民芸や美術品が展示されていた「美術館」で、第3会場には「風交館」、「機械館」、そしてアイヌの熊祭を実演する場所が配置された⁴¹¹。

拓殖博覧会や東京大正博覧会のほかに、大正期から昭和期にかけて各種の植民地を中心となった博覧会が開催された。1915年（大正4年）に「大典記念京都博覧会」、1916年（大正6年）には「東京奠都五十年記念博覧会」、1922年（大正11年）には「平和記念東京博覧会」、1925年（大正14年）には「大大阪記念博覧会」など数多くの博覧会が開催された。これらの博覧会には台湾など大日本帝国の新領土になった地域から参加が見られ、朝鮮からも続いて参加した。

このように、大正時代に入ると明治期における殖産興業の成果によって経済が発達し、社会の近代化が進展するようになる。新たな大衆社会の到来による大正デモクラシーの拡大と大衆文化の発達は人々のライフスタイルを大きく変化させ、それに伴って博覧会は多様化し、新しく登場してきた大衆＝国民の要望に応えるという性格を強めていく。この時代における博覧会では進んだ西洋文化の「輸入」という認識は薄れ、形式だけは西欧の形を受け継ぎながら、日本という文脈の中で博覧会が演出されるようになる。それは日本における国民国家形成の基盤が確立したことを意味したと言える。このことは日本が西欧の帝国主義国家と並ぶ帝国主義国家として世界から認められる基本的な条件でもあった。この時代国民国家の成立と帝国主義はまさに表裏一体の関係にあった。その結果、日本の博覧会は、台湾、朝鮮、満州館の建設など帝国主義的色彩が強く反映していくようになる。

⁴¹⁰ 有信社（編）『明治記念拓殖博覧会案内記』有信社、1913年、7-9頁。

⁴¹¹ 山路勝彦「拓殖博覧会と『帝国版図内の諸人種』」『社会学部紀要』第97号、2004年10月、27頁。

小結

国民国家形成において博覧会が果たした役割について、明治から昭和初期にかけて日本人が経験した博覧会を検討することによって、少なくとも3つ断面から明確にすることが出来た。

1. 近代国民国家の形成の急務

日本は万国博覧会を帝国主義諸国の「文化の比較観察の場」と理解した。そのため、日本が万国博覧会への参加に対しては、出品物はいたずらに西洋風を追い求めず、諸外国に対して日本文化が独自かつ優秀なものであることを示し、国際社会に日本の「正しい」姿とその存在をアピールする方針を採用した。その一方で西欧帝国主義国家を目標として新たな国家方針を模索していた日本にとって、国内産業の振興と国威発場という近代の課題を、万国博覧会を見学した使節団は認識し、帰国後に政府政策に反映させた。

2. 国家と国民の関係の可視化

博覧会では、「府県」という新しい領域を「内国＝日本」という枠組のなかに一目で観察できるようになった。それは国民にとって新しい自己認識の経験であったといえる。博覧会という組織によって、ひとつの場を集められ、国家がそれを選別し、管理し、「賞」という形でその「モノ」に権威付けが行われた。それまでである特定の地方に限定されていた技術や知恵や情報などという「モノ」がこの博覧会という場によって全国に知られるようになった。

また、天皇の巡幸や天皇に関連する記念博覧会とその展示を通して博覧会は民衆の視線を集め、国家統合や国民の統一に役割を果たした。博覧会による天皇制を視覚化することはそれが殖産興業と富国強兵とに結びつけ、「産業、富強の奨励者」としての天皇像を強化したのである。

3. 国家運営を維持するために国民強化と文化統合

明治政府は殖産興業政策の一環として、万国博覧会への参加を通じて、西欧諸国から最新の製造技術や制度を摂取する一方、日本の伝統工芸品を広く海外に紹介し、輸出増進による産業振興を図ろうとしたのである。そして、その万国博覧会を契機に、先進技術を有する現地の工場や職人を訪問し、技術を学ぶことも積極的に行われた。明治期日本がめざした近代化とは工業化、西欧化で

あり、視察であれ、技術伝習であれ、近代西欧社会に直接ふれ、体験することが、近代化を推進する最良の方法であると考えられたのである。

そもそも博覧会は西欧から輸入されたものでありながら、西欧の視線を意識して開催されたが、徐々に日本の伝統と栄華を内外に伝播するものとしての役割を付与されていった。日本が博覧会という「場」を通じて行ってきたのは、「日本（文化）とは何か」という自己像の形成と、自己像形成のための他者像の形成であった。明治政府は西欧と並ぶ帝国主義国家への発展の道を目指していくなかで、「日本」の存在を西欧列強に強く示そうとした。万国博覧会に出品された日本からの様々の伝統工芸品は「日本文化の代表」として「われわれ」の文化であるという意識を広く普及させた。また西洋で高い評価を得ることが文化的アイデンティティの形成に大きく影響していった。

近代国家体制が確立し、日清日露戦争の勝利した結果、植民地を獲得し帝国の領域を拡大した日本は国威を発揚し、国力を誇示するために博覧会の内容とその性格が変化するようになった。殖産興業を目的とされた勸業・産業博覧会のほかに、社会の大衆文化の発展と生活様式の近代化の進展に伴って国民の関心のある分野に締って目的別に博覧会が開催されたのはそのひとつの特徴であった。これは明治期の博覧会が技術と産業の近代化を中心としていたのに対して、大正期の博覧会は文化的近代的生活の普及にその焦点が当てられていた。

そのなかに、博覧会は新しい祭典、新しい歴史として、一方では日本文明の発展とその実績を国民に見せつけ、他方では、戦争の勝利などを機運に、領土を獲得した日本が帝国主義的な国家運営を維持するための国民教育の一貫でもり、帝国主義国家としての自信の表われでもあった。

4. 日本帝国における国民アイデンティティの形成と国民統合

西欧で発見された植民地博覧会と相似形をなしているが、実際には特異な点ももっている。それは、展示された民族は日本国民を構成することになる「種族」として認められていたという点である。これは西洋と日本で開催された博覧会における「原住民」展示とその意味の、著しい相違である。

日本は、博覧会に日本帝国版図に新たに組み込まれた地域の住民（台湾人、朝鮮人など）を参加させることによって、彼らに「外地」の国民として新しい帰属意識を持たせようとし、いわゆる「同化」政策を図ろうとした。同時に、

大日本帝国の国家運営を維持するために、博覧会は「内地」の日本人に、新しい領土の重要性を知らしめるという博覧会の役割を果たした。

第III部 オランダ領東インドにおける植民地政策と博覧会

第II部で見たように、後発の列強である日本は、西欧の博覧会を見聞し、また参加することで、その意義を理解した。その上で、それらをなぞるように、しかし独自の解釈を加えて、様々な博覧会を開催していった。植民地の住民を展示することも行なったが、その意味するところは、欧米における原住民の展示とは異なっていた。

では、その原住民の側は、博覧会でどのような経験をし、またその経験にはどのような意味が与えられたのだろうか。第III部では、オランダに植民地化された現在のインドネシアとその住民が経験した展覧会を議論する。まず、第7章では、その議論の前提となるインドネシアの植民地化の過程を概観する。

第7章 オランダ領東インドにおけるオランダ植民地政策と植民地国家の成立

第1節 東インド諸島とオランダの進出

17世紀当時のオランダが東インド諸島を植民地化した背景には、当時のヨーロッパで一般的であった封建制度や人口増加による土地不足、食糧難という問題を抱えていたことが大きく関係していた。オランダは国土が狭く、資源にも恵まれていなかったため、海業や海運によって活路を見い出そうと東南アジアに進出するようになる。そのため、オランダは商船事業に国力を注入するようになる⁴¹⁴。また航海技術の向上、天文学、地図製作などの専門分野の発達が国外への大規模な進出を可能としたのである。大航海時代の到来はヨーロッパ社会に情報と物の地球規模の流通を可能とし、新しい世界の「発見」をもたらすようになる⁴¹⁵。

1596年にはオランダ商船が西ジャワのバンテンに現れた。その後ヨーロッパ諸国の船団が商品の現地での仕入のため次々とインド・東インド諸島・中国・日本などに進出するようになる。そのため商船の間での貿易競争は激しくなり、

⁴¹⁴ M.C. Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*, Gadjah Mada University Press, 2005, p. 37.

⁴¹⁵ 吉見俊哉『博覧会の政治学...』、前掲書、6頁。

価格は上昇していく。これに対してヨーロッパ市場では輸入量が増大したため売価が逆に下落し、その利益は急落した。その結果、1602年、オランダの連邦議会は、利益確保を目指して、オランダの貿易会社を統合し、「オランダ東インド会社」(Vereenigde Oost-Indische Compagnie、以下VOCと略す)を設立した⁴¹⁶。VOCは株式会社であるが、その権限は条約締結、自衛戦争の遂行、要塞の構築、貨幣の鋳造などを含み、オランダ国家に代わる国家的性格をもつ存在であった⁴¹⁷。VOCが求めた主要な商品は、丁字、ニクズク、胡椒などの香料、森林産物、熱帯特産物であった⁴¹⁸。

VOCは、「オランダ領東インド」(Nederlands-Indië)での交易の独占を通して東インド諸島(現インドネシア)を間接的に統治した。その統治はもっぱら経済的なものであり、文化・社会・政治の領域には直接には介入しなかった。つまり、当初のオランダの関心は領土の獲得よりも、交易ネットワークの独占とその維持という経済を中心としたものであった⁴¹⁹。

しかし、17世紀後半に入ると、初期の頃には領土に関心のなかったオランダは次第に領土の支配を中心とした植民地主義政策を強めていく。当時、マタラム王国はスルタン・アグン(在位1613年～1645年)の治政下にあった。王は1628年～1629年、二度にわたってオランダの東インド支配の中心都市であったバタヴィア⁴²⁰を攻撃した。しかし、この試みは失敗に終わり、マタラム王国はジャワ島北部海岸地域から次第に内陸部へと後退せざるを得ない状況となった⁴²¹。オランダ東インド会社の直轄地が拡大するに従い、オランダ東インド会社の支配領域はバタヴィアという点からジャワ島内陸部という面に拡大し、経済活動は商館交易から領域支配に変質した⁴²²。

1789年のフランス革命後にオランダ本国がナポレオン率いるフランスに占

⁴¹⁶ VOCはオランダ本国では特許会社に過ぎないが、「喜望峰の東、マゼラン海峡の西」という広大な地域では国家的な権力を行使できる。オランダ領東インド会社—VOCについて、永積昭『オランダ東インド会社』、45-71頁参照。

⁴¹⁷ Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*, pp. 39-40.

⁴¹⁸ 土屋健治『インドネシア—思想の系譜』経書書房、1994年、16頁。

⁴¹⁹ 同上書、17-18頁。

⁴²⁰ この拠点からVOCはスリランカ、アフリカ、日本に至るまで広範な領域の通商を管理していた。

⁴²¹ ジョンD. レッグ、中村光男(訳)『インドネシア歴史と現在—学際的地域研究入門—』サイマル出版会、1984、133-134頁参照。

⁴²² 土屋健治「ジョクジャカルター中部ジャワにおける「みやこ」の成立と展開」『東南アジア研究』21(1)、1983年、21-22頁参照。

領され、親フランス政権が成立していた 1799 年にオランダ東インド会社 (VOC) は解散され、オランダは本国による直接的な植民地支配へとその方針を転換した。東インドでの戦費が嵩んだうえ乱脈経営により破産状態となった VOC は強制的に解散させられたのである。フランスと対立していたイギリスがオランダに代わりジャワを支配 (1811 年～1816 年) するようになる。その後、VOC の支配領域は、1817 年イギリスからオランダに返還され、「オランダ領東インド」として、オランダ本国直轄の植民地となった。これ以降、約 150 年間、オランダの支配はそれまでの間接支配から直接支配へと転換されていくことになる。オランダ政府による直接統治が深化するに従って、その支配は各地域の伝統的な社会制度や政治構造にまで及ぶようになった。植民地からの収奪を第一とするオランダの植民地統治機構は住民に対する封建的権力の強化が図られ、伝統社会の組織はオランダ植民地支配の目的に合致するように変えられた⁴²³。

ヨーロッパ大陸におけるナポレオン戦争は西欧列強の植民地にも波及した。オランダ領東インドでは、イギリスによる侵攻が予想され、これに備える必要があった。1808 年、総督のヘルマン・ウィレム・ダーンデルス (Herman Willem Daendels, 1808—11 年) は、ジャワ島防衛に必要な連絡道路、「郵便道路」(de Groote Postweg) の建設に着手した。後にこの道は総督の名前を付けて、「ダーンデルス道路」(Jalan Daendels) として有名になる。ダーンデルス道路はジャワ島西端のアンイェル (Anyer) から東端のパナルカン (Panarukan) まで約 1000 キロに広がり、1809 年に完成した。

ダーンデルス道路の完成はジャワ島に交通革命を起こした。この道路によってジャワ各地が結ばれることにより、それまで孤立していた伝統的な社会に大きな変化をもたらされた。ジャワ島東西間の旅が短縮され、馬車によってジャワ各都市が結びつけられ、特にジャワ島北部海岸沿いの町は大きく変化するようになる。この道路が作られるまでは、荷物の輸送用として主に川と海が使用されており、川に沿って集落が形成されていた。ダーンデルス道路が完成したあとは、ジャワにおける河川交通の重要性は低下し、市街もこの道路に沿って建設されるようになった⁴²⁴。

⁴²³ Sartono Kartodirdjo, “Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia pada Abad 19 dan Abad 20”, *Lembaran Sedjarah* No.8 Juni 1972, pp.1-3.

⁴²⁴ Peter J.M Nas, and Pratiwo, “Jawa dan de Groote Postweg, La Grand Route, The Great Mail

ダンドルス道路の完成によって、道路を中心に新しい住宅街や市場や商業地が誕生するようになり、また、新しい都市も建設された。これまでのジャワの町は王宮を中心とするジャワの伝統的宇宙論に基づいて成立していたが、この道路ができてからは、都市は経済を中心に発達をするようになった⁴²⁵。

19世紀にはいるとオランダ領東インドの経済的拡大により、オランダの関心はジャワからスマトラ、そして外島全般⁴²⁶へ向かって、広がり、同時によりいっそうの政治的権力の拡大がともなった⁴²⁷。

スマトラ島南部のブンクルは1824年に、そして東南部のパレンバンは1825年にオランダにより直接支配下に入れられた。また、スマトラ東北沿岸の地域であるシアク、デリ、スルダン、ランカット、アサハンは、1856年の現地の王国との条約によってオランダの支配下に入った。スマトラ最北部に位置するアチェは長期にわたる武力抵抗の末、1908年に、オランダの支配の下に入られた。その結果、20世紀初頭にはスマトラ島全域がオランダの支配下に置かれた。19世紀初頭にはボルネオ、セレベス（現スラウェシ島）の北部及び南部の一部、モルッカ（マルク）諸島、フロレス、スンバ、スンバワなど小スンダ列島の大半はすでにオランダの権力下にあった。セレベスの南部および中央部は1906年にオランダの支配の下に入った。また、ニューギニアにおいても、1898年からオランダの進出の動きが見られた⁴²⁸。こうしたオランダによる領土的拡張が東インド諸島全域に拡大し、1910年には、オランダ領東インドの植民地体制が事実上完成した。それに伴って、従来の王国や伝統的な共同体を越えてモノと人が移動するようになり、新しい植民地空間が誕生する。

以上のように、20世紀に入ってオランダの植民地支配が東インド群島の全域に拡大し、今日のインドネシア共和国の版図のほぼ全域、すなわちスマトラの西北端から西パプアの東端つまり「サバンからメラウケに至る」5200キロメートルの広大な海域に広がる東インド群島全体が、オランダ領東インドという一

Road, Jalan Raya Pos”, in *Kota-Kota Indonesia: Bunga Rampai*, (ed) Peter J.M Nas, Gajah Mada University Press, 2007, pp. 268-269.

⁴²⁵ Ibid., pp. 272-274.

⁴²⁶ 東インド諸島では古代からこの領域の歴史的、文化的、経済的中心地であった人口の多いジャワ島に対して、面積で圧倒的なジャワ島以外の島々は外島と呼ばれてきた。

⁴²⁷ ジョンD. レッグ、中村光男(訳)、前掲書、149頁。

⁴²⁸ 同上書、149-150頁参照。

大植民地に編成されたのである⁴²⁹。それ以来、この広大な植民地国家を実効的に支配するために様々な統治制度が整えられるようになる。

オランダが東インド諸島に進出し始めた 17 世紀初頭以来、バタヴィア、スマラン、チレボン、アンボン、メナドなどはオランダの貿易拠点都市として、要塞、商館、オランダ人街区などの港湾都市が整備されていたが、これらは 19 世紀以降の植民地支配の深化に伴い植民地都市へと発展した。オランダの到来以前から伝統的な港町であったバンテン、ジュパラ、トゥバンなども次第に西歐的な都市空間を持つ植民地都市に変容を遂げていった。また、スラカルタやジョグジャカルタなどジャワの典型的な王都も、新たな支配のための都市機能を与えられるようになった⁴³⁰。

こうした植民地都市が政治・経済・軍事などのネットワークの結節点として機能するとともに領域支配の拠点となって、新しい植民地体制が生み出されていった。それは、①従来の航路に加えて、道路・鉄道による交通網および郵便制度を中心とする通信網が都市間を結びつけるようになったこと、②商館、学校、病院、官庁などの政府施設の増加に加えて、近代的なオランダ人の生活空間が形成されるようになったこと、③この近代的な空間で形成されたのはオランダ人の住宅、クラブハウス、劇場、文化サークル、スポーツ用の場、ダンスやパーティホール、公園、など空間によって作り出したライフスタイルであったこと、また、④植民地各地から集まってきた住民・民族集団とその生活場であったことなどによって地域間ネットワークを緊密化し、植民地の役割を強化した⁴³¹。

⁴²⁹ 土屋健治『インドネシア—思想の系譜』、前掲書、23頁。

⁴³⁰ 植民地時代におけるインドネシアの都市の形成過程とその原型について3つに分類することが出来る。それは①ヌガラ都市である。ジャワ古代王国の基本的性格で構成され、市街の中心には王侯の宮廷「クラトン—*kraton*」や貴族の居住地「ダルム—*dalem*」があり、それに隣接して広場「アルンアルン—*alun-alun*」がある。その他重要な建物が周囲に配置される。②パサール都市である。13世紀から沿岸部の港町を中心にイスラーム化が渡来し、町が形成された。市場が中心となって、近くにモスクがあり、その周辺に商人の居住区域が形成される。③植民地都市である。オランダの進出によって誕生した新型都市で、要塞と商館（次第に植民地政庁館）が中心となって、その周辺に民族ごとに定められた居住地区が形成された。布野修司「カンボンの歴史的形成プロセスとその特質—インドネシア都市の生活空間に関する研究（1）」『日本建築学会計画系論文報告集』第433号、1992年3月、88-89頁参照。

⁴³¹ Rudolf Mrazek, *Engineers of Happy Land-Perkembangan Teknologi dan Nasionalisme di Sebuah Koloni*, Yayasan Obor Indonesia, Jakarta, 2006, pp. 68-108.

第2節 19世紀オランダ領東インドにおける植民地政策と社会構造

19世紀初頭に入るとオランダ東インド会社（VOC）時代から扱ってきた各種香辛料は供給過剰状況が生じるようになると共に、ヨーロッパでの需要も減少するようになる。その結果、オランダ本国において、アジア貿易の重要性は低下していくこととなる。そこで新たな交易品として砂糖やコーヒー、藍などの商品作物が重視されるようになる。この香辛料に代わる熱帯作物を確保するために実施されたのが、1830年にオランダ領東インドの総督として派遣されたヨハンネス・ファン・デン・ボス⁴³²（Johannes van den Bosch）によって導入された「強制裁培制度」（Cultuurstelsel）である。この制度の導入によって1825年から1830年にかけてジャワ戦争の後、ファン・デン・ボスはこれまで不徹底とはいえ続けられてきた自由主義的傾向を一転させ、在地首長層にそれまでになかった大きな権限を与えた。首長層はこの権限を行使して農地の20%に植民地政庁が指定した輸出向けの作物を強制的に栽培させた⁴³³。半国営企業の性格を持っていたオランダ通商会社がヨーロッパ向けの商品作物輸出を独占することで、強制裁培制度は1870年代までに総額7億8000万ギルダーという巨大な利益をオランダにもたらした。この額は、制度導入時に植民地政庁が抱えていた負債を差し引いても、純益6億ギルダーを本国に送金できる程であった⁴³⁴。植民地政府が指定し強制した栽培作物には、コーヒー、砂糖きび、藍、茶、煙草、綿花、胡椒などがある。これらの熱帯商品作物は大量にヨーロッパ及びアジアに輸出され、オランダに莫大な利益をもたらした⁴³⁵。

東インドからの栽培作物による利益は1830年代から1840年代にかけてはオランダ国家歳入の年平均19%を占め、栽培政策最盛期の1850年代には年平均で32%にも達している。強制農業栽培政策はオランダの負債を解消して経済危機を打破し、工業化の財源をもたらした⁴³⁶。

⁴³² Johannes Van den Bosch（1780－1844年）はオランダ領東インド総督であった。若いときに軍人となり、一時西インドにも派遣されたが、1830年東インド総督に任じられ、ジャワ戦争（1825－30年）による政府の窮乏を補うため、強制裁培制度を判定した。1834年に帰国し、39年まで植民相を勤めた。

⁴³³ Robert van Niel, *Sistem Tanam Paksa di Jawa*, Jakarta: LP3ES, 2003, pp. 140-141.

⁴³⁴ 宮本謙介『概説インドネシア経済史』有斐閣、2003年、100頁。

⁴³⁵ Ibid., pp. 183-186.

⁴³⁶ 芦崎瑞樹「19世紀オランダの植民地政策－植民地科学者としてのシーボルト」『パブリック・ヒストリー』西洋史学研究室大阪大学、14巻、2017年、68頁

しかし、ジャワでは強制裁培のため長い間続けてこられた水稻栽培は後回しになり、1843-48年には中部ジャワで米不足のため多数の死者を出すに至った。このような植民地の悲惨な状況に対して、オランダ本国内からも強い批判が生じた。ムルタトゥーリ (Multatuli)⁴³⁷は自らの植民地官吏の経験を基に小説『マックス・ハーフェラール (Max Havelaar)』を執筆し、植民地の収奪の実体を暴露した。これはオランダ本国のみならずヨーロッパの有識者に衝撃を与えた。さらに、1870年のスエズ運河が開通して以来、ヨーロッパから大量の人と物が押し寄せるようになり、このことがジャワ島北部海岸の港町を大きく変化させていくことになる。最初に海によって交易の中心拠点となった港町は植民地経営のための重要な中核的植民地都市に変化した⁴³⁸。これらの植民地都市は西洋的な都市として、経済中心あるいは行政中心に都市計画され、居住する人々の住宅地は民族あるいは人種によって区別された。植民地都市は王宮とカンブン (kampung) と呼ばれた原住民の伝統的な集落、新たに誕生した商店街と華人(中国人移民者)の街、植民地経営のために強化された要塞やコロニアルスタイルの新しい役所の建物を中心としたオランダ(西洋)人街の三つの区分から形成されていた⁴³⁹。このような都市構成が植民地都市の特質であった⁴⁴⁰。

本国で大きな批判に晒された強制裁培政策に代わる、オランダ領東インドにおける新たな植民地政策として、1870年ごろから「自由主義政策」が実施された。これは企業の自由競争の原理の下に、自由貿易によって植民地住民の生活環境の向上を図ることにより、植民地からの利益を上げようとしたものであった。この政策によって東インド植民地の経済は大きく前進したが、その利益の恩恵を受けていたのはオランダ人と中国人だけであり、オランダ領東インドの原住民は依然として困窮したままであった⁴⁴¹。

この植民地都市が発展するようになると、都市には東インド植民地の各地か

⁴³⁷ ムルタテューリ (Multatuli) はペンネームであり、本名はドウウェス・デッカー (Eduard Douwes Dekker, 1820-87年) である。『マックス・ハーフェラール』は、1857年から彼が副理事官として赴任した西ジャワのバンテン (Banten) にあるレバク (Lebak) で見聞した強制裁培制度の実態を描いている。この暴露小説のため、彼はオランダ政庁によってオランダ本国に帰国させられた。

⁴³⁸ Nas and Pratiwo, "Jawa dan de Groote Postweg...", p.305.

⁴³⁹ ある都市では要塞のかわりに副理事官 (Asisten Residen) の住居であり、王宮のかわりにブパティ (県知事) の住居があった。

⁴⁴⁰ Nas and Pratiwo, "Jawa dan de Groote Postweg...", p.306.

⁴⁴¹ Kartodirdjo, "Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia...", p. 17

ら様々な民族が集まる空間となった。また、そこではオランダ人、アラブ人、インド人、そして華人がこの地域の重要な構成員となった⁴⁴²。

華人は古くから、交易のためにインドネシアに到来し、現地に永住する者もいた。現在、ジャワに居住する華人の多くは福建、広東両省出身を中心とした人々から構成される。これらの中国からの移民は、各々の出自による中国各地方（主として南部地方）の異なる言語と異なった文化をジャワに持ち込んだ。

ジャワの華人は少なくとも福建人、広東人、潮州人、客家人によって構成されているが、それはまた、プラナカン（peranakan）とトトック（totok）という二つの集団に分類される。プラナカンとは植民地で生まれ育ったため先祖の出自とは文化的に切り離されてジャワ文化の影響を受けた人々である。そのため、彼らの日常語はムラユ語かジャワ語である。一方、トトックとは自分たちの出身地である中国語と文化にアイデンティティをもつ新しい移民者のことである。これは単なる生まれに基づくだけではなく、華僑のインドネシア文化に対する適応と文化変容を基準とした分類である⁴⁴³。

19 世紀の半ば、華人の大部分はジャワに住んでいた。これは、当時インドネシアでジャワ島北部海岸にあった商業都市が栄えていたからである。華人のほとんどは都市に居住していた。昔から現在にいたるまで、オランダ領東インドの華人の大部分は商業を中心に生計を営んでおり、とくにジャワにおいてその傾向が強い。ジャワの都市の華人街では普通、1 階が商店である家々が向かい合う形で商店街を形成している。このような街はプチナン（Pecinan－中華街）とよばれてきた。プチナンには必ず廟がある。ここには各種の伝統的な中国式の彫りものが施されている。廟には出身地域別で華人が様々な目的で集まり、各自各々の利益を頼み、子供が生まれることを望んで、感謝の気持ちで守護神に香をたく⁴⁴⁴。

このような街を背景として 19 世紀末頃になると、風景画、クロンチョン（Kroncong）音楽、民衆演劇、マレー語大衆小説などといった大衆文化が誕生してくるのである。新しい大衆文化としての歌と演劇はマレー語（インドネシ

⁴⁴² Peter Carey, *Orang Cina, Bandar Tol, Candu dan Perang Jawa: Perubahan Persepsi tentang Cina 1755-1825*, Jakarta: Komunitas Bambu, 2008, p.14.

⁴⁴³ クンチャラニングラト(編)、加藤剛(翻訳)『インドネシアの諸民族と文化』めこん、1980年、425-427頁参照。

⁴⁴⁴ 同上書、432-433頁。

ア語）で表現されたため、マレー語はとくにジャワ島北部海岸地方全体に広がっていった。さらに、洋服、読書や交信、映画、など西洋からの外来文化としての生活様式や慣習もこの世界に浸透してきた⁴⁴⁵。古代から海のシルクロードに面して貿易の要衝であった北部海岸の港町は新しい近代化（西洋化）にいち早く対応したのである。

19世紀のオランダ領東インドのジャワでは、オランダ本国から派遣された総督を最高権力者として統治が行われた。19世紀にオランダ領東インドに派遣された総督の数は26人である⁴⁴⁶。ジャワおよびマドゥラは3省の直轄地と20ほどの理事州に分かれ、オランダ人の官僚と原住民の下級役人から成る官僚機構によって統治された。総督から直接指導を受けたのは、オランダ人官僚である理事官であった。ただし、旧マタラム王国の中心地であるスラカルタとジョグジャカルタの王侯領は「特別地区」として、一定の自治が認められていた。理事州はさらに79の県に別れ、原住民の伝統的な権力者である旧地方領主が植民地制度におけるブパティ（県知事、bupati）に任命され、下の地位のプリヤイ（伝統的貴族・官僚、priyayi）を束ねていた。ブパティは、オランダ人副理事官による指導監督を受けていた。ブパティは、本来、副理事官より格が上とみなされており、プリヤイの中では最高位であったが、19世紀になると世襲の権力者としての地位を失い、オランダ政庁から給料をもらって生活するようになった。ブパティが給与生活者になると、ブパティに対するオランダ人副理事官の権限はさらに強くなっていったのである⁴⁴⁷。

植民地体制下のオランダ領東インドでは、オランダ人が支配階級として君臨し、一般の東インドの住民は「原住民」⁴⁴⁸として西欧人や外来東洋人を区別さ

⁴⁴⁵ 土屋健治『インドネシア...』、前掲書、30頁。

⁴⁴⁶ 村上直次郎、原徹郎『蘭領印度史』東亜研究所、1942年、220-224頁参照。

⁴⁴⁷ スロト、シティスマンダリ(著)、舟知恵・松田まゆみ（訳）『民族意識の母カルティニ伝』井村文化事業社、1982年、5頁参照。永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1980年、14-15頁参照。

⁴⁴⁸ オランダはオランダ領東インド植民地を統治するために、領土に対する主権の所在を確認するだけでなく、オランダ領東インドの住民を区分し管理する。そのため、1854年に統治法として「オランダ領東インド統治政策に関する規定確定のための法律」が定められ、オランダ領東インドの住民を「ヨーロッパ人」と「原住民」とに区分された。この統治法は植民地にとって憲法と見なされた。この区分の目的は間接統治に根拠を与えるほか、「原住民」を村落に拘束したことによって強制栽培を通じてオランダに利益を供給し続けることにあった。

1925年には全面的に「東インド国家組織法」として改正された。この改正では中華系住民を中心とする「外来東洋人」の区分が独立した。さらに、ヨーロッパ人と同等視されるものに、オランダ本国と同様の家族法を採用する国の出身者という新たな基準が加えられ

れ、オランダ人によって差別的に支配されていた。

オランダ領東インドにいるオランダ人の中には、オランダ本国からやってきた、あるいは東インド生まれの純血のオランダ人、オランダ人と原住民との結婚から生まれた混血のオランダ人（ユーラシアン、Eurasian）⁴⁴⁹が存在した。ジャワ在住のユーラシアンは1815年当時で1,750人、1854年当時で14,000人、1860年当時で44,000人、1905年には95,000人に達したという⁴⁵⁰。

ユーラシアンのみならず、オランダ領東インドで生まれたオランダ人（クレオール）⁴⁵¹も、オランダ本国で生まれた生粋のオランダ人よりも社会的に低く見られていた。オランダ領東インドで生まれたオランダ人（クレオール）は、原住民の乳母に育てられるため、現地化され、オランダ語ではなくマレー語やジャワ語という土地の言葉で育てられているという理由からである⁴⁵²。

ジャワの伝統的な社会において、その身分は、大別すると貴族階級であるプリヤイ（Priyayi）と庶民階級であるカウラ（Kawula）の二つに分かれていた⁴⁵³。プリヤイは、支配階級であるオランダ人と一般庶民であるカウラの間でいた。彼らは、オランダ人の指示に従って一般庶民のカウラを支配し監督した。カウラはジャワ島における人口の大多数を占めたが、最下層に位置づけられた⁴⁵⁴。

このようないわゆるジャワ典型的な社会のほかに、もう一つの社会構成が形成された。それは植民地都市において形成された社会構成であった。

た。この基準に伴い、日本人、トルコ及びシヤム国籍保持者もヨーロッパ人と同等視されることになった。

吉田信「オランダ植民地統治と法の支配—統治法109条による「ヨーロッパ人」と「原住民」の創出」『東南アジア研究』40巻2号、2002年参照。

⁴⁴⁹ 東インド及びインドネシアではユーラシアンのことを「インドー（indo）」と呼んでいる。

⁴⁵⁰ 土屋健治「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』22巻1号、1984年、60頁。

⁴⁵¹ 同上書、71-72頁参照。土屋健治はオランダ領東インドに生まれたオランダ人は「クレオール」という。「クレオール」という言葉はスペイン語の「クリオーリョ」に由来する。南アメリカ各地を支配したスペイン人の内、スペイン本国で生まれ育ったスペイン人を区別して、血統上は両親ともにスペイン人であっても、植民地で生まれ育ち、植民地の文化によりなじんでいる人々を指す言葉であった。

⁴⁵² 同上書、71頁。

⁴⁵³ ジャワの伝統社会は貴族階級とされるプリヤイ（Priyayi）とカウラ（Kawula）という一般庶民に大別できる。Priyayiは語源によるとPara-Yayi（パラヤイ）というジャワ語で、王様の兄弟という意味である。さらに、クントウィジョヨ（Kuntowijoyo）によると①グスティ（Gusti—王様）②プリヤイ③カウラという3層に区分されている。グスティは最上層の王とされ、プリヤイという層の中に含まれていない。プリヤイは王宮内に居住し、その中に王様の家来たちも含まれているが、カウラは王宮外に居住し、まったく王宮の政治と関わっていない一般庶民としている。

⁴⁵⁴ Heather Sutherland, "The Priyayi", *Indonesia*, No. 19, Cornell University, Southeast Asia Program Publications, April 1975, p. 69.

第3節 20世紀植民地政策の転換と東インド植民地国家の成立と「インドネシア」の民族意識

1860年代、ヨーロッパ中で巻き起こっていた自由主義気運の高まり、強制栽培制度に対する反対論を助長した。当時オランダの首相であったヨハン・ルドルフ・トルベッケ（Johan Rudolph Thorbecke）を筆頭とする自由主義者達は強制栽培制度を、不当な搾取で、ジャワ人小作農の半奴隷制度であり、また財政的にも有益なものではない、とこれを非難した。また経済界からも、貿易の自由を妨げているという理由で強制栽培制度に対して反対論が叫ばれるようになっていた⁴⁵⁵。

1863年トルベッケ首相はヴァン・デン・ブッテ（van de Putte）を植民地大臣に任命し、彼の指揮の下1870年、自由主義政策が強制栽培制度に取って代わる形で実行された。1879年自由主義政策が実際に実行に移されたとき、次の二つの法律が可決された。一つは土地利用に関する法律であり、海外資本に過度に依存した農業開発を避けるため、外国人の土地購入を禁止した。もう一つは砂糖法と呼ばれるもので、政府が強制的に砂糖耕作を廃止できる権限を規定したものであった。⁴⁵⁶

1870年代は、東インド植民地史上、大きな転換点となった。この時代に輸作物の生産は急激に増加した。1860年～75年の間に農業生産物の価格は3倍に、85年までには10倍に増加、生産量も80%増えた。一方地下資源については石油の開発が1887年に始まった。貿易によって得られた利益がオランダに送られる代わりに、植民地開発を目的としたプロジェクトにエネルギーが注がれた結果、東インドからの輸出品は確実に増えていった。19世紀末までは、東インド植民地からの輸出品は農作物を主としていたが、その頃オランダの蒸気船がジャワに導入され、船舶施設がスマトラとボルネオの政府経営の石油、石炭、鋼鉄工業の発展を導いた。

1870年ごろから「自由主義政策」が実施されたのであるが、これは自由企業の競争の原理の下に、自由貿易によって農民の生活環境の向上及び東インド経

⁴⁵⁵ Daniel Hall, Edward George, *A History of South-East Asia*. 4th Edition, Macmillan Education, 1981, pp. 613-614.

⁴⁵⁶ Gilbert Khoo, *A History of South-East Asia since 1500*. 2nd Edition, Oxford University Press, 1983, p. 35.

済の利益の向上を図ろうとしたものであった。この政策によって東インド植民地経済は大きく前進したがその利益の恩恵を受けていたのはオランダ人と中国人に限られていた。オランダ領東インドの原住民は困窮したままの状況に置かれ続けた。これに加えて、不効率的な税システム（Batig Slot）によって行政コストが圧迫されたため、次第にこの政策に対して、原住民の側からの不満と反発が強まっていった⁴⁵⁷。

1880年代自由主義制度により莫大な利益を得ていたオランダ人農園主に対して、それを不当利得だとする原住民からの抗議が巻き起こされた。これに関して、後に首相になるアブラハム・カイパー（Abraham Kuyper）は「私たちのプログラム」（Ons Program）の著書の中で、オランダ政府はオランダ領東インドの原住民の福祉のため道徳的な政策を採用するべきであると主張した⁴⁵⁸。

またこれと並行して、聖職改革者の一団からも人道主義的サービスや、一般市民の保護を訴える運動あるいは1880年代にヴァン・コル（Van Kol）の指導のもとで出現した社会主義者達からも、東インド諸島におけるすべての人の平等を訴える運動が起こるようになる。このように1880年代、さまざまな政治・思想・宗教団体からオランダ領東インド原住民の利益を追求する訴えが頻繁に起こったのである⁴⁵⁹。

この時代の自由主義による経済競争の中で、オランダ領東インド原住民は外来の勢力との競争に敗れて過酷な状態に追い込まれていった。とくに彼らは特定の農産物に対する過剰な依存によって不況の影響をもろに受けることになった。とくに主な収入源であった砂糖の価格の下落によって窮地に立たされたのである。さらに1885年の世界恐慌が追い打をかけるように彼らを襲ったのである。この政策・制度の最も好ましくない特徴は、植民地支配者が多額の利益を得ている一方で、原住民の利益は極端に低く抑えられたことである。税金の対象が貿易ではなく土地（プランテーション）であったのに加えて、富める者より貧しいものからより多くを徴収するような構造であったため農民は貧困にあえぎ、その結果東インド植民地政庁の収入も結果的に非常に困難な状況となっ

⁴⁵⁷ Kartodirdjo, “Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia”, p. 17.

⁴⁵⁸ Hall, “A History of South-East Asia”, p. 789.

⁴⁵⁹ Robert van Niel, *The Emergence of The Modern Indonesian Elite*, The Hague: Van Hoeve Publisher, 1970, p. 8.

た。1877 年からは政庁の収入は次第に赤字が増えていき、1897 年までに借金は 1800 万ギルダーに上った。また人口の増加は倫理政策から提供される医療・教育・商業・社会的サービスを急速に悪化させていった。そのため、行政費用は税収入を上まわって増加していった。伝統的な村落組織の崩壊により、小作農たちは、首長に対する尊敬の念を払わなくなり、農民たちは、輸出作物の耕作より稲作への復帰を強く主張するようになった。このような農民層の困難な生活状況はジャワ在住のオランダ人の同情を集めるようになり、1890 年代自由主義政策の継続に対してジャワのオランダ人から強い批判が出るようになる。この自由主義政策によって農民が困難な生活状況に追い込まれていったことに対して、農民たちはこれをオランダ人との厳しい競争であると認識した。「原住民」に渡る利益の一部は、その他の人々にわたるものと比べてあまりに少ないものであったため、結果として社会的崩壊と行政的混乱をまねいた。強制裁培制度が失敗したように、自由主義改革も結局失敗する運命にあった。なぜなら植民地下にあった「原住民」と植民地支配者であるオランダ人の利益を両立できる制度が成立する筈がなかったからである。自由主義政策は結果として社会的崩壊と行政的混乱を生み出すという結果に終わった⁴⁶⁰。

そんななか、最も決定的な影響をもたらしたのは 1899 年、人道主義派議員である C. Th. ファン・デフエンテル (C. Th. van Deventer) によって「名誉の負債」の考え方が表明された。彼は、オランダは強制裁培の時代から東インド諸島の富を奪い取ったから、名誉にかけてそれを返済するために、オランダの国庫より植民地に援助を与え、植民地住民の福祉問題を見直そうという「倫理政策」と呼ばれる改革政策を強く主張した⁴⁶¹。

倫理政策がオランダの植民地政策として正式に表明されたのは 1901 年のオランダ議会開院式におけるウィルヘルミナ女王の演説においてであった。女王は倫理政策を提案した意味を「東インド諸島の住民に対する道徳上の義務」にあると述べた⁴⁶²。1901 年に当時オランダの政権の地位にあった自由党は、キリスト教党と社会民主党との連合によって倒され、新たにアブラハム・カイパーがオランダの首相に就任し、倫理政策を実行することが可能となった。新しい

⁴⁶⁰ Khoo, *A History of South-East Asia since 1500*, p. 36.

⁴⁶¹ ジョン D. レッグ、中村光男(訳)、前掲書、158頁。

⁴⁶² 永積昭『インドネシア民族...』、前掲書、65頁。

オランダの財政的援助は具体的に農業部門を開発し、原住民のために保健と教育サービスを提供するという内容であった⁴⁶³。

女王の倫理政策は次の3つの目的を中心としたものであった。第1の目的は、西欧の企業による社会資本への資金注入によって国の発展を図るという経済的な目的である。第2の目的は、村制度の改革を通してオランダ領東インド住民の利益を追求するというものであった。自由主義政策による経済的自由は村の結束を弱めたということを踏まえて、倫理的改革によって村の結束を強め、それによって物質的生産物を増やすだけではなく、社会的幸福を高めるという社会的な目的である。第3の目的は、第1と第2の目的を実現することにより、地方自治いわゆる権力分散を促進しようという政治的な目的であった⁴⁶⁴。

村落レベルでは、具体的な農業指導のプログラムによって経済的刺激を促進しようと試みた。それまで存在しなかった行政的および技術的技能をもった者が指導者として任命された⁴⁶⁵。孤立した村や孤立地をなくすため、新しい道路が建設され、灌漑施設も拡大され、村学校(*desascholen*あるいは*volksscholen*)や診療所などが建設された。社会福祉を達成することで、村レベルの社会基盤が強化されるとオランダ政府は考えたのである⁴⁶⁶。

このことにより植民地支配の拠点としての都市の機能はますます大きくなっていった。植民地の政治・経済・社会的のネットワークをうまく結節するため、バタヴィアを始め、ジャワにおける植民地都市が発展し、従来の航路に加えて、道路や鉄道などの交通インフラが整備された。さらに、郵便制度を中心とする通信網が都市と都市を結びつけるようになった⁴⁶⁷。1880年代に入ってもジャワ島を中心としたオランダ領東インドにおける鉄道網はわずか1000kmに達せず、1900年になっても約1600kmしか延びなかった。しかし1920年代に入るとようやく4000kmに拡大し、ほとんどのジャワ島における都市間は鉄道で繋がるようになった⁴⁶⁸。

開発分野において、新しい開発のあらゆる分野での建設はオランダ大規模私

⁴⁶³ ジョンD. レッグ、中村光男(訳)、前掲書、159頁。

⁴⁶⁴ 同上書、160-162頁参照。

⁴⁶⁵ 同上書、159頁。

⁴⁶⁶ Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*, p. 235.

⁴⁶⁷ 土屋健治「インドネシアの社会統合」『アジアにおける国民統合』東京大学出版会、1988年、159頁。

⁴⁶⁸ 同上書、161頁。

企業が主要な役割を果たした。東インド経済の現地セクターでは、農村指導事業によって、灌漑制度の改善や新農地の開拓や新作物の導入などが可能となった。新しい交通・通信網によって、より広範な商業上の接触の機会が拡大した。しかし、この時代に東インド諸島における植民地領域がジャワ島以外にも拡大していったため、民間企業の投資と輸出はスマトラやカリマンタンなどの外島を中心的に行われる傾向があった⁴⁶⁹。その結果、倫理政策を実行するための財源の調達は依然として困難な状況にあった⁴⁷⁰。

政治的改革は倫理政策の支持派にとって中心的な目標であり、そのなかで最も重要であったものは、権力の分散ということであった。これまで植民地経営の重要な問題は全てがオランダのハーグで決定され、その結果がバタヴィアの総督に伝達されていた。しかし、この時代に入ると総督の行政権限は次第に拡大、強化されていく。また従来総督が決定したことはその重要度に応じて各地域の行政機関に移譲された。そのため、それまでのヨーロッパ人官僚の管轄であった業務の一部を原住民官僚に移管するすることも、この政策の一環として行われることとなった⁴⁷¹。具体的には、1904～1905年に主要都市に都市議会が設立された。1930年代末まで、少なくとも32の都市議会が設立され、そのなかに19議会がジャワ島における都市に設立された。また、ジャワは76県に行政区分され、各県に県議会が設立された。植民地政府の下において国民参事会(Volksraad)が設立された。国民参事会は総督の諮問機関であるが議決機関ではない。発足当時の議員の割当てはヨーロッパ人20名、原住民15名、外来東洋人(華人)3名であった。国民参事会は実質的に総督の諮問会議であり、実質的な権限は無いに等しいものであった⁴⁷²。しかも、議会を構成する議員の大多数はヨーロッパ人と中国人であり、原住民は常に少数派であった。このように改革政策で実施された内容は実際には倫理政策の目的とは大きくかけ離れていた。いわば倫理政策を実行に移したように見せかけたものにしかすぎなかった。このことは植民地制度の本質にある「原住民」に対する人種差別の要素を強く反映したものであった。

⁴⁶⁹ Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*, pp. 228-231.

⁴⁷⁰ Ibid., p. 232.

⁴⁷¹ 永積昭『インドネシア民族意識の形成』、前掲書、65頁。

⁴⁷² Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern*, p. 243.

以上概観したように倫理政策は 1930 年代までに実施されたが、結局福祉のための社会基盤の整備できず、以前から低下しつつあった福祉低下の流れを止めることができなかった。教育分野においては、識字率は依然として大変低かった。大学教育にまで辿りつけた者は例外に過ぎなかった。必要な数の現地人技術者と行政官吏を養成することに失敗したという事実は、植民地政策の主要な失敗の一つであった。さらに 1930 年初期になって世界大恐慌が東インド経済の輸出部門にまで及んで、大農場における大規模な解雇をもたらし、農村社会の混乱にさらに拍車をかける状況であった⁴⁷³。

オランダ領東インドは、数々の征服戦争を経て、20 世紀初頭に完成した。交通インフラの整備や官僚機構の整備により、旧来の伝統的共同体を越えたモノと人の移動が促され、植民地都市が発展、そこにハイブリッドな植民地空間が生まれた。

しかしながら、植民地国家成立の過程において、「原住民」は強制裁培制度のような過酷な直接的搾取の対象とされ、「原住民」の福祉を掲げた 20 世紀初頭の倫理政策においても、その苦難はほとんど解消することはなかった。表向きの政策は変化したようでも、本国オランダの経済利益が優先され、実質的には「原住民」に対する差別に基づく経済的搾取が続いた。その差別意識は、ユーラシアンが「原住民」の血統を、クレオールがその文化を引き継ぐが故に社会的に低位に置かれたことから理解されるように、根深いものだった。倫理政策でさえも、より進歩しているオランダ人が、遅れた「原住民」に教育を与え、福祉を与え、文化的に進歩させるという意識を基礎にしていたのである。オランダ語で教育を受け、オランダ語で仕事をし、オランダに留学する「原住民」が出現しようとも、この「原住民」に対する差別意識は、植民地社会に通底していたのである。

⁴⁷³ ジョン D. レッグ、中村光男(訳)、前掲書、167-168頁参照。

第8章 オランダ領東インドにおける博覧会の開催とその内容

19世紀以降、オランダは東インドの領土獲得を本格化させ、20世紀初頭には植民地国家を成立させる。オランダは、ヨーロッパで開催された万国博覧会において、原住民と呼ばれた人間の展示を含めた植民地に関する展示を行なった（第3章第3節）。また植民地国家の完成と共に、オランダ領東インドでもまた、博覧会が定期的に行なわれていた。この植民地に関するオランダの博覧会展示の背景とその意義を、本章では論ずる。

第1節 オランダによる植民地政策の展開と博物学的政策

1795年、ナポレオン戦争における敗北によってオランダ（ネーデルラント）はフランス軍に占領され、一時期その支配下に置かれることとなった。この混乱の中、オランダ本国と植民地との交流は途絶え、1799年にはこれまでオランダ本国と植民地との貿易を一手に担っていたオランダ東インド会社（Vereenigde Oostindische Compagnie, 通称 VOC）が倒産した。イギリスはオランダ領植民地が敵国フランスに渡ることを恐れ、1811年にオランダ領東インドを接收した。

ナポレオン戦争が終わり、1815年に新王ウィレム1世のもとオランダの主権が回復すると東インド植民地はオランダに返還され、東インド会社を経由しない直接の植民地統治が開始された⁴⁹²。

19世紀植民地支配を本格化的に強化するため、西欧諸国は「合理主義的かつ先進的」西欧世界とは全く異なった、野蛮で遅れた「非合理的で神秘主義的」植民地世界の気候・土着宗教・伝統・慣習などに基づいた原住民の価値観をより詳細に検討し分析する必要性に迫られた。すでに宣教師によって、伝道と聖書翻訳のために、現地事情調査と言語研究や各言語の辞典編成が行われていた。また旅行記や地誌などが個別に現れていたが、政治的征服と植民地確立に引き続き、オランダによる東インド（場合によってアジア）研究が次第に制度化されていた。その結果、ヨーロッパ本土から多くの科学者が動員され、植民地政

⁴⁹² 1824年のロンドン条約によってオランダはインド、マラッカなどのイギリス勢力圏から撤退を強いられ、その代償としてジャワ、スマトラなどいわゆる東インドの既得権益をкаろうじて確保することができた。宮本謙介、前掲書、96頁参照。

庁・総督府のもとで民族調査を行うことになった。ウィレム 1 世は統治にあたって植民地の原住民の状況を始め動植物・鉱産物といった東インドの正確な状況を総合的に把握することを目指して、多数の画家・調査員・科学者などからなる調査団をジャワ島に派遣した。1820 年代初頭、ライデンで国立自然史博物館と国立植物園が設立された。また、現地調査のため、1822 年に植民地大臣および東インド総督の管轄下に自然誌委員会 (Natuurkundige Commissie voor Nederlandsch-Indië) が設けられた⁴⁹³。委員の中心となったのは後のライデン大学附属植物園長であるプロイセン出身の植物学者 C. G. C. ラインワルト (Caspar Georg Carl Reinwardt) や、同じくプロイセン出身で、のちにライデンの国立標本館長に就任した植物学者カール・ルートヴィヒ・R・フォン・ブルーム (Carl Ludwig Ritter von Blume)、ハインリヒ・クール (Heinrich Kuhl)、ヨハン・コンラート・ファン・ハッセルト (Johan Coenraad van Hasselt) といった高名な科学者たちであった。彼らは総督府の管轄のもとで、植民地の探検と博物学的調査、自然物収集などに従事した⁴⁹⁴。

そのほかに、1778 年に設立されたバタヴィア学術協会が 1810 年代に再び活性化され、1848 年にライデン大学にジャワ語・ジャワ文化論が開設された。1817 年にバイテンゾルフ国立植物園⁴⁹⁵がジャワに建設された。バイテンゾルフ国立植物園はバタヴィアの南約 60km の都市バイテンゾルフ (現在のボゴール) に位置している。現在でも熱帯・亜熱帯の世界各地の有用植物が栽培されている世界最大級の植物園である。植民地時代は外部への展示活動よりも調査・研究を中心として経済的に有用な熱帯植物やその種子の収集に力が入れられた。初代園長ラインワルトは東インド全域から 900 種余りの植物をこの植物園に収集した。彼がオランダ本国に帰国すると、C. L. ブルメが 2 代目園長となった。植物園で気候馴化された植物は、園内で研究の対象になるものもあったが、多くの植物生体はライデン大学附属植物園へ、植物標本は国立標本館へ移送された

⁴⁹³ Peter Boomgard, ed., *Empire and Science in the Making-Dutch Colonial Scholarship in Comparative Global Perspective 1760-1830*, Palgrave Macmillan, 2013, pp. 153-154.

⁴⁹⁴ 芦崎瑞樹、前掲書、53頁。

⁴⁹⁵ バイテンゾルフは、標高260m、年平均降水量3000～4000mm、湿度80～90%の湿潤なゆるい雨季と乾季をもつ熱帯モンスーン気候であり、植物の馴化・養殖にふさわしい土地であった。植物園の設計はイギリス占領期の総督であったラッフルズの発案を原型として考案され、自然誌委員長ラインワルトが初代園長となった。

1830 年にオランダ人植物学者の J. E. テイスマン (Johannes Elias Teijsmann) がバイテンゾルフ植物園の学芸員 (実質は植物園の責任者) として任命されると、さらに多くの植物生体が、バイテンゾルフへ輸送・移植された。1848 年にはアブラヤシが西アフリカから移殖され、デンプン質で生産効率の高い南米原産のキャッサバが東インド全土に広められた。1852 年から 54 年には南米からキニーネが導入された。また、3 代目園長 (1869-80) のシェファーはオーストラリアのユーカリ、タバコ、リベリアのコーヒーなどの台木を育成して種や接ぎ木を全土に配布した。このように、19 世紀中盤になると、バイテンゾルフ植物園はオランダ領東インドを越えてはるか南米、西アフリカ、オセアニアなどから採集された外来植物の移殖と繁殖が試みられたのである⁴⁹⁷。

このような時代背景から、ヨーロッパ本土では博物学熱が巻き起こり、外来の珍奇な動植物・鉱物に対する注目が高まっていた。また同時に、自然誌委員会やバタヴィア学芸協会のもとで、オランダ領東インドの博物学研究が本格化していくこととなる。本国の科学者たちは植民地に赴いた科学者団と連携し、彼らの伝える新情報と珍奇な収集品に熱狂した。また、自然物のコレクション熱の結果、ヨーロッパ各地で王立・公立の博物館・植物園・動物園が設立された。これに触発され、オランダでもウィレム 1 世によって「王立珍品陳列室」が設置された。この施設は、「自然と文化に関する収集」を目的として 1816 年に創立されたものである。また、これらの珍奇な外来物品を収集することは国家の威信にもつながった。王立珍品陳列室はナポレオン戦争後の荒廃を経て新しく誕生したオランダ王国の国家的権威の象徴としても機能したのである⁴⁹⁸。

1825 年に、ジャワ島では、中央集権を目指すオランダ領東インド政庁とマタラム王国との間でジャワ戦争が勃発し、その闘いは激しさを増した。この戦争を遂行するための防衛費は膨れ上がり、ナポレオン戦争以降の負債を抱える巨大な額となって、オランダに重くのしかかった。この財政危機を乗り切るべく、オランダ本国は東インド植民地に対して、より大きな経済的利益を生み出すよう要求し始めたのである。これを機に、1820 年代からウィレム 1 世が模索して

⁴⁹⁶ 芦崎瑞樹、前掲書、57頁。

⁴⁹⁷ 同上書、58頁。

⁴⁹⁸ 栗原福也編『シーボルトの日本報告』平凡社、2009年参照。

いた新しい植民地政策は、実行に移された⁴⁹⁹。

1825年の議会への年頭演説でウィレム1世は東インド植民地のために発行された公債が1815年から10年でおおよそ2倍になっていることについて触れ、植民地への「早急かつ直接的な介入」が必要であると宣言した⁵⁰⁰。これ以降植民地財政を改善すること及び、植民地からより大きな利益をもたらすことを目指してオランダ本国による植民地政策が本格化した。

1820年以降、東インド諸島における植民地領域の拡大とその政策の展開はオランダ人の東インド諸島に関する「知」的関心と熱意を深めた。その結果、さらなる探検・研究・研究成果の応用に対する社会的動きが生み出された。この知の漸進的な蓄積は、植民地支配組織に関わる足場の固定化を可能にした。多くのオランダ人は、19世紀半ば以降に権威あるリベラルな定期刊行物「De Gids」で記載された植民地に関する記事から、あるいは王立研究所によって1851年に創設した王立オランダ領インド言語地理民族学研究所（KITLV-Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie）は、東インド諸島に対して強い関心を持つようになる。これはオランダ領東インド植民地を効率よく支配するために、植民地に赴くオランダ官吏を養成することにあつたのが設立の目的であつた。そのため、現地語土着の慣習法、宗教に関する知識の体系が不可欠と考えられたのである⁵⁰¹。

王立オランダ領インド言語地理民族学研究所について、オランダのデルフトでは海外植民地と対応して、先に植民省長官を勤めたことのあるバウト（J. Ch. Baud, 1789-1859）首相の下にデルフト官吏養成所長シモンズ（G. A. Simons）や、同研究所でジャワ言語を教授していたタコ・ロールダ（Taco Roorda）らが相寄ってオランダ海外領土、植民地研究のための学会の設立が検討された。1851年8月をもってデルフトに王国オランダ領インド言語、地理、民族学研究所（Koninklijk Instituut voor Taal, Land-en Volkenkunde van Nederlandsch Indie）の設立が実現した。当研究所は東南アジア諸地方の文献（刊行書、未刊文書）を蒐集し、研究論集を発行し、隣接諸学会と関係すると共に、海外の研

⁴⁹⁹ Peter Boomgard, ed., *Empire and Science*, p. 154.

⁵⁰⁰ Andreas Weber, *Hybrid Ambitions: Science, Governance, and Empire in the Career of Caspar G.C. Reinwardt (1773-1854)*, Leiden University Press, 2012, p. 191.

⁵⁰¹ P.E.デ・ヨセリン他著『オランダ構造人類学』（宮崎恒二、遠藤史、郷太郎訳）せりか書房、1987年、482頁。

究者と交流を図ることを目的としていた⁵⁰²。

研究所は以下のような形で、植民地に関する知を蓄積、共有した。

1. 学術誌 *Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* (BKI)の発行

研究所は 1853 年以来、この学術研究誌 (B. K. I) を発行している。初めはオランダ領インドを研究対象としていたので誌名にもそれを冠していた。収載論文の多いのは言語学、仏教学、次が歴史学等である⁵⁰³。

2. 叢書 *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde* (V.K.I)の出版

研究所はまた紀要 *Verhandelingen* をモノグラフとして 1938 年から刊行し始めた。その内容は東インド群島地域を中心とした研究内容であった。具体的項目としては歴史、文学伝説、言語、法律慣習、民族誌、先史、地理、などである⁵⁰⁴。

3. 慣習法集発行

オランダは東インド諸島を統治するに当たり、民族ごとに異なる多様な各地域の社会にある伝統的な価値体系、思考方法に関する理解が全く欠如していたことにより、多くの困難に直面してきた。またイスラーム法はヨーロッパ法理解とは全く異なる法概念であった。

そのため、民族や地域ごとにことなる慣習法とイスラーム法を研究し、その成果を原住民行政に適用する必要に迫られた。このような背景から C. van Vollenhoven によって、東インド領域における慣習法の研究成果が誕生した。慣習法といえば先ず想起されるのはその大成者であろう。彼の成果を基盤として数多くの彼の弟子たちのより、その後 30 年にわたる調査、資料蒐集、体系化が行われライデン学派の成立となったのであるオランダは東インド社会の慣習法の研究を重視したが、それは当然の結果として「秩序」に関する概念の発見と結びついた⁵⁰⁵。

⁵⁰² 中村孝志「オランダの東南アジア研究」『東南アジア研究』2巻1号、京都大学、1964年、95頁。

⁵⁰³ 同上書、95頁。

⁵⁰⁴ 同上書、96頁。

⁵⁰⁵ P.E.デ・ヨセリン他著、前掲書、468-488頁。

4. 図書館・博物館の設立

研究所は購入、寄贈、交換等によって多数の関係図書を蒐蔵しており、1868年以來は東インド協会（Indisch Genootschap、1854年に政治、経済方面に主力をそそぐ姉妹団体としてハーグに設立）の図書をも併せて、東アジアを中心とする豊富な図書を蒐蔵した⁵⁰⁶。

博物館に関しては、いくつかの小規模な公共民族学的コレクションに加えて、オランダには2つの主要な植民地博物館と民族学博物館があり、1880年代初頭に民衆に向けて植民地をはじめとした非ヨーロッパ世界のイメージを造り始めた。1837年に学者への援助として最初に出発したライデン国立民族学博物館はフィリップ・ヴォン・シボルトのコレクションを基盤に設立された。Lindon Serrurier（1846-1901）が監督として就任した1881年に、彼は博物館の人類学のおよび民族学的コレクションを広げようとした。1864年に産業振興協会によって設立されたハーレルレム植民地博物館は、主に起業家向けの博物館であった。協会は、オランダの産業の利益をもたらし、英国の競争に対抗するために、自然原料を展示し、人々の啓蒙を奨励することによって、植民地の発展を促進するべくと述べた。

1873年に設立された地理学協会（Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundig Genootschap）は、植民地拡大と知の追求との間の相互作用の最も雄弁な例であるかもしれない。この協会は、植民地についての情報を広げるだけでなく、オランダ全体でこの情報の実用普及をさせることに専念していた。また、その活動は、東インド諸島におけるオランダの進出の拡大を奨励し、促進することであった。1888年に「王立」の叙述を取得した王立地理学協会の創設者とそのメンバーは、民間人、文化人、財政界の人、商社の社員、軍人、行政のエリート混合であった。議長を務めた東洋学者であるP. J. Vethの下に、1877～1889年にかけてスマトラへの研究探検隊を形成し、遠征を行った。これは1860年代に発見された西スマトラにあるウンビリン炭田の輸送ルートを発見するためのほか、軍事的・政治的な遠征でもあった⁵⁰⁷。

このような研究・教育機関と研究者の制度化によって、東インド諸島だけで

⁵⁰⁶ 中村孝志、前掲書、106頁。

⁵⁰⁷ Rob Van Der Vaart, Ben De Pater, Katie Oost, “Geography in The Netherlands”, *Belgeo* 1, 2004. URL: <http://belgeo.revues.org/10076>, pp. 4-5.

なく東南アジアまでに拡大した研究範囲に関する学問的成果が蓄積され、継承され、ジャワ学、東インド学など西欧が世界に誇る学問的研究が築かれていったのである。東インドの古代史、古代文化、古代学など、古典研究を中心となり、それはこの地域の未知の領域であり、また、遺跡の発見と発掘、数多くの碑文の解読を通して、植民地の過去の栄光が発見されたことを意味した⁵⁰⁸。

第2節 万国博覧会におけるオランダ領東インドの演出



図 9 原住民村を中心とした 1883 年アムステルダム植民地博覧会における正面の風景。写真左側にはバタヴィアを築いた第 4 代オランダ領東インド会社総督であるヤン・ピーテルスゾン・クーンの像、右側にはアチェ征服戦争の勝利を記念して建てられた「勝利のモニュメント」がある。

出典：Marieke Bloembergen, *Colonial Spectacles-The Netherlands and the Dutch East Indies at the World Exhibitions, 1880-1931*. Singapore University Press, 2006, p. 71.

1. アムステルダム植民地博覧会設立の経緯とその展示内容

19 世紀前半、オランダは経済成長が全く停滞する状態に陥った。しかし、1860 年代になると、アムステルダムに船舶を運んだノールト運河の開通によって、

⁵⁰⁸ 土屋健治『インドネシア—思想の系譜』、前掲書、69-70頁。

この状況が好転し始めた。同時に、全国の鉄道システムは急速に改良され、1879年にアムステルダム駅が新設され、ここが鉄道網の中心になった⁵⁰⁹。経済成長や観光産業の発展によってアムステルダムはパリやロンドンのような都市のコスモポリタンな雰囲気が生み出され、国際博覧会を開催する気運が高まった⁵¹⁰。

フランスの起業家エデュアル・アゴスティーニ (Edouard Agostini) は、オランダにおける博覧会開催の重要性を見出し、有力なアムステルダムのビジネスリーダーに呼びかけた。このアイデアには懐疑的な面があったにも関わらず、計画としては実行に向かって進められた。これまでオランダでは国際規模の博覧会は開催されることはなかった。オランダにとって国際的に知名度の高かった東インド植民地の豊富な資源を宣伝するとともに、経済成長と観光産業の振興を目的として博覧会の開催を行うことは重要な意味を持っていた⁵¹¹。そのため委員会は他の博覧会で行われた産業の展示を回避して、植民地に焦点を当てた植民地博覧会として、アムステルダム国際植民地および輸産品博覧会 (Internationale Koloniale en Uitvoerhandel Tentoonstelling te Amsterdam、以降はアムステルダム植民地博覧会と表記) という名称で開催された⁵¹²。アムステルダム植民地博覧会は植民地に関する物情報が強く求められ、あらゆる植民地の施設、制度、可能性などがそれを体系的に提供する場となった。

このオランダ植民地博覧会の開催はこれ以前に開催されてきた帝国主義的博覧会の在り方に根本から変革を迫る内容であった。それまでの西欧における博覧会は産業革命による科学技術の進歩とそれに伴う産業の発展を基盤とした西欧帝国主義国家の偉大さを強調することに焦点が当てられた。そこでは西欧によって支配された非西欧である植民地は未開で野蛮で非人間的な地域として西欧帝国主義国家から救いの手が来るのを待つ進歩の光が当たらない影の存在と位置づけられ、博覧会の中では付属的な存在であった。

しかし、アムステルダム植民地博覧会では科学技術の進歩と産業の発展をテ

⁵⁰⁹ John E. Findling, ed., *Historical Dictionary of World's Fairs and Expositions: 1851-1988*. New York: Greenwood Press, 1990, p. 78

⁵¹⁰ Erik Mattie, *World's Fairs*. New York: Princeton Architectural Press, 1998, p. 60.

⁵¹¹ 平野繁巨、前掲書、318頁。

⁵¹² Mattie, *World's Fairs*, p. 60.

一マとした従来の博覧会とは異なり、それまで付属的な存在であった西欧帝国主義国家の植民地（もちろん中でもオランダ東インド植民地が主要な存在であったが）を中心テーマとして本格的に取り上げられた。それは新しい形の万国博覧会の在り方を示すと同時に西欧帝国主義国家の本質を浮び上がらせる博覧会となったのである。

アムステルダムの方側の荒れ地は、博覧会のための十分なスペースを確保できた。長方形の主たる建物は、運河の上に建てられた。本館は、オランダの植民地館が建てられ、そこには東インド植民地からの農産物、文化財、原住民の武器などが展示された⁵¹³。コロニアルパヴィリオンの隣には、植民地を代表する様々な集落が展示物として建設された。

この博覧会は植民地展示を中心として、世界各地の植民地の「原住民」が連れて来られて、植民地での村落風景の中で生活をさせるという演出で、大きな注目を集めた。この博覧会は西欧列強の植民地産品の展示が行われた。それぞれの植民地で実施されている植民地運営とその制度、熱帯農業、鉱物資源の開発など植民地に関する情報を比較する場として開催された⁵¹⁴。

博覧会において植民地制度、熱帯農業産物、鉱物などの植民地の自然資源の展示が比較可能とするという計画が立てられた。これはアジアとアフリカにおけるオスマン帝国の支配領域を除いた西欧列強の植民地領域がすべて含まれていた。しかし実際には、博覧会の中心はオランダの植民地のセクションであった。オランダ植民地の展示はオランダ植民地パヴィリオンという広大な建物に収容され、展示されたがその他の参加国の植民地展示及びその産物は第2区展示空間で共有して展示された。

博覧会の中心に位置づけられたオランダ領東インド植民地の展示内容は、オランダの植民地運営における国家の栄光と近代性を示すことが目的であるため植民地の製品や原材料を宣伝するだけでは不十分であるとされた。そのため、展示は、観客に「植民地の原住民の慣習とその特徴」を西欧と比較できる機会を提供するように設計された。また、植民地支配の正当性が理解できるように「繁栄と文明の基盤」とみなされた「公共事業と交通手段」がオランダによっ

⁵¹³ Ibid., p. 62.

⁵¹⁴ Bloembergen, *Colonial Spectacles*, pp. 50-77.

て建設されていることを示す展示も行われる。東インドの植民地の獲得を可能にした軍隊によってオランダ国家の独立が維持されているということが展示内容で展示された。植民地の動植物やこれらを利用して作られた製品の見本は、熱帯地域の豊かな自然が世界に対する貢献として展示されたのである。

このような博覧会の目的は 3 つの主要なグループに分類して展示された。さらにそれは 38 のクラスの分類に反映され、それぞれはさらに多数のより小さなサブクラスに分類された。

3 つの主要なグループは以下の通りである。

第 1 グループは、その対象を「オランダの統治下で植民地化された領域」に限定され、その植民地の地理的特徴と自然環境の豊かさを示す原材料、動植物のサンプルの展示が中心であった。第 1 グループの区画化、いわゆる自然の世界は、自然の歴史的・生物学的分類体系、及び自然の豊かさという思想に基づいていた。

第 2 グループは、住宅や生活様式、食べ物と生計手段、芸術と科学、遊びと娯楽、習慣と伝統、統治制度（伝統支配の制度）、法的制度、宗教および宗教的慣習など「支配領域におけるの原住民」の社会的全体を対象に焦点が当てられた。

第 3 グループはオランダ以外の西欧各国によって支配されている各々異なった植民地の制度、公共事業、そして文明、公衆衛生、安全保障、および「自由」などを促進するために設立される装置などを中心に「これらの地域におけるヨーロッパ人および各植民地原住民との関係」に焦点が当てられた。

この主要な 3 つの分割は、部分的には古い分類の仕方に基づいていた。しかし、この分類方法による展示はオランダの植民地運営に対する近代的正当性を与えたと考えられたのである。支配領域における自然の豊かさと余剰の第 1 グループ、と原住民のエキゾチックかつ原始性を対象とした第 2 グループの展示はオランダ政府と民間企業に対して近代化と文明化への意欲を呼び起こした第 3 グループでオランダの植民地支配の正当性へと結びつくのである。

植民地博覧会において最大かつ最も重要な要素となる民族展示（グループ 2）は、東インド諸島の原住民の多様性、性質、および特定の特徴を可能な限り体系的かつ包括的に提供することを意図していた。それは 6 つのクラスに細分化

され、そのうちの第1クラスは人口統計を提供することを目的とした。それぞれのクラスとサブクラスは、むしろ生活のなかに必要性の程度によって地理的区分、または行政地区の区分や居住地に基、に従って配置された。これは、主要な必需品（食べ物と飲み物、服装、住居）から出発し、道具やその使用方法、防衛、狩猟、農業と貿易、そして最後に知識と芸術の領域で人と人種（民族＝原住民）を比較することによって博物学研究が行われた。

民族展示とそのカタログは、徹底的で包括的であることを示し、ある種の恣意性と偏見を必然的に伴うものであった。材料から食品サンプルまで、調理器具から家畜まで、あらゆる展示物が適切なクラスに入れられ、番号が付けられ、このクラスに細分化された。分類方法として、西欧的アプローチが使用された。そのアプローチとは展示物を進化的な視点から一般的に分類し、陳列、展示する方法であった。これらはすべて、オランダ領東インドにおけるそれぞれ原住民の民族や社会層において文明の進化過程のレベルを示すことを意味していた。たとえば、東インド諸島の畜産業は、「土地の肥沃度と原住民の無知なやり方の組み合わせから生じる非常に原始的な状態にある」と断定された。農業や園芸の形態は「非効率的である」と判断され、行政当局からの指導が必要になると記述された⁵¹⁵。

この単純な西欧を基準とした進化論によって判断された「原住民社会の原始性」という結論は、アムステルダムで展示されていた植民地の世界は、近代的で強力なオランダ国民国家の正当性を証明する場となったのである。なにより、このことこそが植民地展覧会開催の最大の目的であった。展示資料の選択とカタログの構成とその説明は、近代オランダの文明化の事業現場としてオランダ領東インドという植民地における経済的および行政的管理を把握し、それを単一の包括的な実体として理解して、制御できるようにするという目的を反映している。これは、この世界のすべての側面とあらゆる特徴が対処されなければならないことを意味したが、それに含まれた様々な文化と本来の関連性があるかどうかは無関係である。オランダにおける文明の進歩過程のなかに、原始的な段階や「他者」というイメージを作り出すのは最も重要な課題であった。し

⁵¹⁵ *Catalogus der afdeeling Nederlandsche kolonien van de Internationale koloniale-en uitvoerhandel tentoonstelling (van 1 mei tot october 1883) te Amsterdam*, Leiden, Brill, 1883, pp. 131-141.

たがって、この博覧会はまた、オランダ国民に対して自己の世界観と自国の自画像を引き起こすことが成功したのである。

原住民の村としてこの博覧会に展示されたのは：

- (1) ブギス族の家（セレベス島南部）
- (2) スンダ族の村落（ジャワ島西部地方）
- (3) アチェ地方の村落（スマトラ島北部地方）
- (4) アラフル地方の民族の家（モルッカ諸島）
- (5) パダン高地からの民族の家（スマトラ島中西部地方）
- (6) テガルからの家（ジャワ島北西部地方）
- (7) バタヴィア村落（ジャワ島北西部）⁵¹⁶

このように、ジャワ島の村落を中心とした植民地展示は、第一に、これはオランダ領東インドという植民地領域を地域的実体として伝えるための図式的な方法であった。第二に、先住民の生き生きした日常生活を実際に見せる演出であった。第三に、各村落の原住民は植民地領域全体の主体、というよりはオランダ領東インドという広大な植民地に含まれる各地方や各民族の多様性の代表に過ぎない、という意味を持っていた。このことは、原住民がひとつにまとまって統一を成し遂げ国家をもつ可能性を否定することを示すものであった。

植民地博覧会は、1883年5月1日から10月1日の会期中の観客数は1,439,000人に上った。

植民地博覧会で包括的な展示の演出をできたのはオランダとベルギーだけであった。しかし参加国は、ヨーロッパ各国を始め、中国、日本、インド、トルコ、中東、アフリカ、米国、カナダなど28カ国に及んだ⁵¹⁷。そのほかに、アミューズメントパークの中心にはドイツ、オランダ、イギリスのレストランに囲まれたミュージックパヴィリオンが設置された。敷地内には、アムステルダムのパヴィリオン、日本のバザール、小さなお店やレストランなどの建物がいくつか建てられた。

財政的挫折にもかかわらず、アムステルダム国際植民地博覧会は、植民地のテーマを持つ最初の国際博覧会として、世界の博覧会の歴史に残っている。植民地

⁵¹⁶ H.J. Eerlich van Gogh, *De Kampong op de Tentoonstelling*, J.H. De Bussy: Amsterdam, 1883, pp. 2-15.

⁵¹⁷ Findling, ed., *Historical Dictionary*, p. 78.

原住民の伝統家屋が建てられ、原住民と呼ばれた様々な民族がそこに住み、植民地を支配する側にある西欧人との出会いの機会が作られたのである⁵¹⁸。

2. 1889年パリ万国博覧会におけるオランダによる「ジャワ村」の演出とその目的

その後、オランダ領東インドが万国博覧会に登場したのは1889年のパリ万国博覧会であった。1889年のパリ万博は、主催国フランスが革命100年記念を強く打ち出したために、列強諸国をはじめ多くの国々が公式参加を見送った。しかし、フランス側の熱心な呼びかけに答えて、最終的に西欧列強から私的に参加する民間団体が続出した。オランダも今回は民間団体の立場として参加することにし、そのために民間企業や商業者などを中心に『1889年パリ万国博覧会におけるオランダの利益を守る会』が結成されたのであった。

この時のオランダの主要な展示はジャワ人がジャワ島から連れて来られ、アンヴァリッド広場の植民地パヴィリオンにおいて「オランダ領東インドでの生活」というテーマの下に造られた「ジャワ村落」（図10；図11；図12）でのその生活ぶりを見せるというものであった⁵¹⁹。

展示された「ジャワ村」では、プンドポ（pendopo）とよばれる伝統的な舞踊場ともなる広間の建物が建てられて、そこで連日、ジャワ人による舞踊と音楽が披露された。ジャワ村の人気はこの公演によるところが大きかった。フランスで出版された多くのパリ万博に関する報告は、好意的にこの公演を取り上げた。なかでも、4人の踊り子が繰り広げる伝統舞踊とジャワのガムラン音楽は高い評価を受けて賞賛の的であった。4人の踊り子によるものとは別の男女のカップルによる踊りの演目も人気を集めた。また、太鼓と大小さまざまなアングルンによる合奏も人々の注目を浴びている。それは、公演の開始を知らせるために、村を行進しながら演奏されたのであった⁵²⁰。

「ジャワ村」には、少なくともマレー人、ジャワ人、スンダ人という異なる3つの民族がいた⁵²¹。また、村作りのためにジャワからやってきた作業員たち

⁵¹⁸ Mattie, *World's Fairs*, p. 60.

⁵¹⁹ Greenhalgh, *Ephemeral Vistas*, pp. 88-90.

⁵²⁰ Denys Lombard, “Le Kampong Javanais a l’Exposition Universelle de Paris en 1889”, *Archipel*, vol. 43, 1991. p. 121

⁵²¹ Emile Monod, *L’Exposition Universelle de 1889*, Paris: Tome Illeme, 1890. p.133.

が、「東インドでの生活を見せる」という目的で彼らは家の建設とは別に、自分たちが建て、展示用に設置された東インド各地（プレアンゲル、ソロ、バンテン、パダンやテルナテの家）の家に自ら見せ物として会期中住んで生活をしたのである⁵²²。



図 10 1889 年パリ万国博覧会における「ジャワ村落」の玄関

出典： The Library of Congress, <https://www.loc.gov/item/94500843/>

⁵²² Lombard, “Le Kampong Javanais...”, p. 119.



図 11 ジャワ村の風景

出典: Denys Lombard, 'Le Kampong Javanais a l'Exposition Universelle de Paris en 1889', *Archipel*, vol. 43, 1992, p. 120



図 12 4人のジャワ踊り子の演出

出典: Denys Lombard, 'Le Kampong Javanais a l'Exposition Universelle de Paris en 1889', *Archipel*, vol. 43, 1992, p. 123

これらの博覧会におけるオランダ領東インドの演出は原住民や人類・博物学による展示手法が利用され、文明進化の垂直方向のヒエラルキーなかに植民地の原住民を位置付けて、提示しようとしたのである。

20世紀に入って、万国博覧会におけるオランダ領東インドの登場は依然としてジャワを中心に展示と演出が行われたが、その内容は次第に変化して行く。それまでのジャワの展示が「野蛮」な原住民の人間展示の性格を強調したものであったのに対して、20世紀に開催された博覧会では、植民地のエキゾチシズム、博物学的な建物、そして多様で広大な東インド植民地におけるオランダの植民地運営の成功という成果を見せつけようとし、植民地支配の正当性を実証する性格がさらに強くなっていく⁵²³。

植民地展示による万国博覧会へのオランダの参加は二重の目的を果たすための演出に力が注がれた。ひとつはオランダ領東インドにおける植民地支配の正当性を示すことであったが、それは自国の国民への意識を高め、植民地運営を維持し継続することが重視された⁵²⁴。他のひとつは、西洋におけるオランダの地位の強化を目的としていた。それはオランダ領東インドはオランダに属して

⁵²³ Bloembergen, *Colonial Spectacles*, pp. 197-314.

⁵²⁴ Ibid., p. 317.

いることを実証することにより、西洋における列強の一員として認められるための努力であった⁵²⁵。

3. 1900 年パリ万国博覧会とオランダ領東インドの展示

1900 年のパリ万国博覧会は、オランダがオランダ政府として 1878 年以来初めて正式参加した万国博覧会であった。1883 年のアムステルダム植民地博覧会や 1889 年パリ万国博覧会の影響で、世紀の変わり目の万国博覧会として開催国フランスは、植民地展示区域を独自に設けていた。

オランダ領東インドのパヴィリオンはインドネシアのジョグジャカルタ郊外にある壮大な仏教遺跡であるプランバナナ寺院のなかのチャンディ・サリ (Candi Sari) の遺跡を復元したものであった。これはジャワにある 9 世紀の仏教寺院で、頂部にストゥーパが並び、壁面に教の神話に由来した彫刻が再現された。外観は 3 階建の大建築物に見えるが内部は 1 階のみである。チャンディ・サリにはジャワ・と仏教寺院の座像、浮彫立像が施された⁵²⁶。チャンディ・サリの正面の左右に、木彫りの彫刻と壁装飾で飾られた 2 棟のスマトラの家が建てられた⁵²⁷。

オランダの植民地パヴィリオンの出現は明確な二分法を示した。チャンディ・サリの古代建設物は、2 つのスマトラの民族家屋とは対照的であった。チャンディ・サリの外観は美しい考古学的な存在であったが、その内部はオランダの植民地政庁による展示が陳列されていたに過ぎなかった。それに対して民族家屋の方は素朴な内部も生きた展示であった。

1900 年におけるオランダ植民地展示の公式カタログは、オランダ領東インドの全域を通じた案内書として書かれ、1889 年パリ万国博覧会のカタログに続くものとして発行された。案内書は、オランダ植民地の展示区域の内容とその意義が学習できることを目的に書かれた。

案内書によれば、オランダ植民地の展示は、オランダ東インド植民地原住民の生活風景が強調されたものであった⁵²⁸。観客に、ヨーロッパの起業家による

⁵²⁵ Ibid., p. 317.

⁵²⁶ 中村恵三『1900年パリ万国博覧会の建築』足利工業大学、1987年、66頁。

⁵²⁷ Bosboom Kan, *Guide a travers la section des Indes Neerlandaises. Groupe XVII (colonisation)*, Nijmegen, G.J. Thieme, 1900, ix.

⁵²⁸ Ibid., xi.

経済的、科学的進歩だけでなく、植民地における学校や商業銀行などの教育や社会経済的施設の開発が原住民の生活向上に結びつくと、オランダ植民地政庁による倫理政策の実施の必要性とその意味が具体性をもって主張された⁵²⁹。原住民の生計手段のイメージなどの民族学的資料の展示も行われた。原住民の文化的、宗教的実践の展示空間では、植民地支配が東インドの産業の発展をもたらしたが、それは原住民の文化と宗教的伝統を尊重することで実施されてきたことが強調された。

オランダ植民地展示の分類について、北部パヴィリオンの最初の部屋には植民地化の事例が展示された。オランダ王立郵船会社 (Koninklijke Paketvaart-Maatschappij) の装飾的な壁面図は、「その船舶のルート」の地図となる以上に、それがオランダの植民地化事業の範囲であることも明確に示された。スラバヤの海軍基地のレプリカと、要塞と兵舎の模型は、外部の脅威に対する防衛と、さらに内部に敵対的な勢力に対する法的執行を植民地政庁が行う必要があり、その象徴として展示された⁵³⁰。

4. 1931 年パリ植民地博覧会とオランダ領東インドの展示

フランスは、自らの帝国主義国家としての地位を正当化し、フランスが世界各地にもつ広大な植民地の重要性を再確認するために、1931 年にパリで国際植民地博覧会を開催した。

1931 年 11 月 6 日から 6 月 6 日にかけて、パリの東部にあるヴァンセンヌ森 (Bois de Vincennes) で、一大な植民地博覧会を開催した。会場にはデンマーク、ベルギー、オランダ、イタリア、ポルトガルの 6 つのヨーロッパ諸国 (フランスを含む) のみがそれぞれの国の独立パヴィリオンを建設した。米国も参加し、国際的に西洋文明の進歩と植民地事業の共通目標を描いた帝国主義的博覧会として注目を集めた。

32,000 m² の広大な面積を占めたオランダの展示区域には、近代的な西洋建築と東インド諸島の多様な建築様式の融合からなる幅 110 メートルのメインパヴィリオンが建設された。デザインは船を形取った屋根の形といった特徴的な

⁵²⁹ Francis Gouda, *Dutch Culture Overseas- Colonial Practice in the Netherlands Indies 1900-1942*, Serambi, 2007, p. 24.

⁵³⁰ Bloembergen, *Colonial Spectacles*, pp. 203-204.

もので、屋根はボルネオ（現カリマンタン）からの板葺き（sirap）でそれはミネンカバウの家をモデルとした建物であった。西洋と土着の建築様式の混在したなか、バリ島の寺院の門の形のメイン・ゲートが建てられた。そして正面にはバリ・寺院の像が建設されたためこの建物の周囲はバリ島の雰囲気が出た。バリ・寺院を複製した 50m の高さの霊山を象徴する塔は、かなりの遠くの距離から目だって人々の注目を引いた。

今回のパリ万国博覧会においてオランダのパヴィリオンでは、植民地とオランダ宗主国との関係は、過去にオランダ領東インドが演出した博覧会よりも植民地の商業主義精神と原住民の文化の展示の間にはっきりと対照的に表現されていた。

その関係をいかに深く結びついているかを示すために、来場者としての西欧国民がはじめて植民地に足を踏み入れた中央入り口に入ってすぐの大広間がヒンドゥー文化の紹介にあてられていた。一方、ジャワに残る遺跡が大きな絵によって展示され、現場の雰囲気が再現された。また今回の博覧会でも原住民の踊りによって踊りが上演された。また、オランダ領東インドの植民地における経済、教育、福祉の各分野の発展にオランダの協力やそれによる成果を模型と図解で分かり易く説明されていた。タバコや砂糖といった植民地の作物の栽培に従事する農民たちの栽培の現場が再現され、それは植民地で新しく登場した働く労働者の姿として展示された⁵³¹。

パヴィリオン建築を担当した建築家モーイエン（Pieter Adrian Moojen）⁵³² はそれまで西洋世界でまだ知られていないオランダ東インドで生み出された新しい植民地精神を発信する建物の建造を目指した。彼は、オランダ領東インド諸島の原住民文化の神秘的な性質を表現しようと試みた。さらに彼は、建築のデザインにおける合理的な応用と、土着の建築様式の融合によって植民地支配の成果としての近代性を創造しようとしたのである。また、近代的な要素を示す物として、オランダ東インドにおける西洋文明の成果、それは鉄道から灌漑工事、発電所から教育までのディスプレイによって示された。

⁵³¹ 永瀬康之「パリにきたバリ―1931年パリ国際植民地博覧会オランダ館」『季刊民族学』国立民族学博物館、18巻4号、1994年、47頁。

⁵³² モーイエンは植民地で活躍した建築家である。1879年にオランダで生まれ、建築を学び、1903年に建築ブームにわいていたバタヴィアに移り住む。彼は建築家であると共に画家であり文化愛好者でもあった。

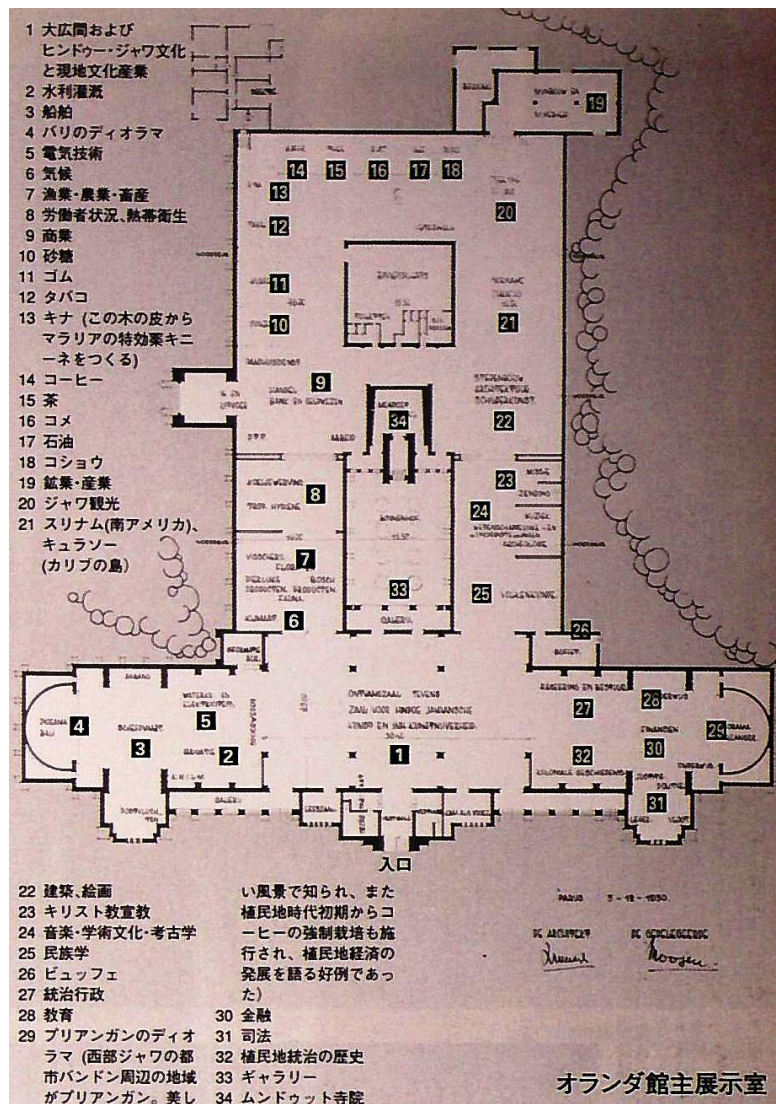


図 13 1931 年パリ国際植民地博覧会のオランダ館図

出典：永渕康之「パリにきたバリ―1931 年パリ国際植民地博覧会オランダ館」『季刊民族学』国立民族学博物館、18 巻 4 号、1994 年

このように、来場者には、東インド植民地の芸術文化の魅力とオランダの植民地支配による近代的業績という 2 つの理想が提示された。後者は、コロニアルスタイルと呼ばれる建物が最も印象的存在であったため、オランダが植民地で達成した代表例として挙げられた。

オランダはこのような高度な文化を展示することに、植民地政府側は現地の文化の価値を損なうことなく植民地運営を進めるよき統治者としてのイメージ

を印象付けようとしたのである。つまり、植民地の良き保護者としての印象を与えるように植民地政府は文化の展示を行ったのであった⁵³³。そこでは、原住民は高い文化を作り上げてきたが、その価値については何の判断も持たず、保存・自治の能力も無いことが強調された展示であった。そのため、西欧人が乗り出し、文化の価値をあらためて認め、保護に乗り出さなければ混乱が助長されるだけであるとして植民地制度やその支配の正当性が主張されたのである⁵³⁴。

オランダは、観客に示そうとした言説として、東インド諸島におけるオランダの経済的・文明的存在の重要性が原住民の芸術あるいは文化の本質的な価値や美しさと並置された。この博覧会は「植民地近代」という概念を表現するための場として大きな意味を持っていた。この政策は、オランダの植民地支配の現状のままを保つために、原住民の伝統と制度の保存あるいはそれを化石化する傾向を助長したのである。こうして、西欧帝国主義的立場に立脚することが植民地社会を改革し発展させることよりも何よりも重要であると考えられたのである。

第3節 オランダ領東インドにおける博覧会の開催とその内容

前節ではヨーロッパで行なわれた万国博覧会において、オランダが植民地東インドをどのように展示し、その展示にはどのような意味があるのかを見た。一方、20世紀になり、東インドという植民地国家が完成し、帝国主義による工業化や商業化が進出すると共に、博覧会が植民地の各都市で開催されるようになった。毎年、バタヴィアを初め、スマラン、バンドン、スラバヤ、チレボンなど各植民地都市で博覧会が開催された。

1. 1914年スマラン国際植民地博覧会の開催とその展示内容

オランダ領東インドでは様々な博覧会が開催されたが、そのなかでも規模が最も大きかったのは1914年にスマランで開催された植民地博覧会（Koloniale Tentoonstelling）であった。このオランダ領東インドでは初の国際規模の博覧会はオランダがフランスから独立100周年を記念して、最初は1913年に企画

⁵³³ 永渕康之、前掲書、47頁。

⁵³⁴ ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、前掲書、295頁。

されたのであるが、様々な状況の変化によって延期されることとなったものの、博覧会が延期されたためオランダの独立 100 周年記念としての意義がなくなった。しかし、その代わりにオランダ領東インドにおけるイギリス統治の返還（1814 年ロンドン条約）⁵³⁵100 周年記念として開催された⁵³⁶。

オランダは、この歴史的な出来事を記念する国際的な博覧会によって、オランダ領東インドを伝統と歴史のない植民地と位置付け、オランダに保護されるべき存在として、新しい歴史を創ろうとした。

300 年間にわたる東インド諸島におけるオランダの存在は、西ニューギニアを除いて、この時期には全面的かつ実質的にその全域を支配するに至っていた。またこの時期になると新しく登場してきた資本主義型の民間企業がジャワとスマトラに基盤を置くようになり、利益を生み出すことが可能になった。さらに、スエズ運河の開通以来、そして特に 1880 年代の不況の終結以来、オランダ民間企業の勢力の拡大と植民地官僚機構の形成に伴い、オランダ人の移住が増加し、植民地社会はジャワ島北部海岸の植民地都市を中心に「西欧化」が進行しつつあった。

このような時代変化を背景として西欧で流行した博覧会の開催もオランダ領東インドという植民地国家の成立と完成を象徴するものとして現実のものとなっていく。それは東インド諸島におけるオランダによる支配の頂点を象徴したものであった⁵³⁸。また、この博覧会を通して、オランダ植民地政庁はオランダ領東インドの発展状況とその全体像を見せるためにも博覧会の開催が目指した⁵³⁹。それまで、オランダ領東インドにおける植民地統治は各地方の反乱を抑え、領土の獲得、経済の基盤作りなど様々な点で武力を中心とした征服の時代であった。

アジアでのヨーロッパの植民地達成という目的を掲げ、国際的な博覧会として予定されていたが、博覧会の開会日の 2 週間前、ヨーロッパで第 1 世界大戦

⁵³⁵ 1814 年、オランダとイギリスの間で締結された条約であった。この条約ではオランダがスマトラ島を、イギリスがマレー半島を、それぞれ支配領域におくことを相互に承認した。今日のインドネシア・マレーシア間のマラッカ海峡に大きな国境線が引かれることになったのは、この条約に端を発し、1824 年の英蘭協約で確定したものである。

⁵³⁶ Booklet, *The Colonial and International Exhibition at Semarang 13 August-13 November 1914*, p.3.

⁵³⁸ M.G van Heel (ed), *Gedenkboek van de Koloniale Tentoonstelling*, Semarang, 20 August-22 November, 1914, Batavia: Mercurius 1916, p.1, p. 110.

⁵³⁹ Booklet, *The Colonial and International Exhibition at Semarang*, p. 5.

が勃発した。そのため公式の参加国は、日本、中国、オーストラリアのニューサウスウェールズ州と西オーストラリア州の2州にしかなかった。その他、民間的な参加として英領インドからの参加もあった。

オランダ東インドにおいて最初の博覧会ではないが、約26ヘクタールの面積に105個の新設された建物は、スマラン植民地博覧会が、間違いなく「オランダ領東インドにおける最初の最大規模な博覧会」⁵⁴⁰であったことを示すものであった。それにた。近代性と進歩は、そのデザイン、建設、運営に組み込まれた。建物のほとんどは、その当時、顕著な建築家マクレーン・ポン（Maclaine Pont）によって設計された。仮設の建物は、当時西欧においても流行していた近代的な技術と材料を利用していた。博覧会場内で自動車と路面電車も巡回し、電気発電とガスによる人工照明が特徴づけ、毎日深夜まで会場を照明した。熱帯科学の最新の成果は農業および植物のディスプレイにも組み込まれ、最新のモダンな娯楽として、当時西欧で人気のルナ・パーク（遊園地）が設けられた⁵⁴¹。

展示物としてオランダ領東インドにおける農林産物、工業産物、商業や交通インフラの発展した姿などあらゆるオランダ植民地政庁の業績が展示された。開催者は一方ではオランダ領東インドの未開で遅れた状況とこれからの進歩の可能性を見せること、他方では、オランダ植民地による近代化の成果を演出することを目指した。展示は7つの分類によって展示が行われた。第1分野は植民地政庁の運営、第2分野は農園業、第3では原住民の工芸、第4分野は国外産業、第5では商業、第6では交通、と第7は女性という分類で展示が行われた⁵⁴²。

この博覧会では、直接的に原住民を展示品として表象したのは「原住民の展示区域」であった。ここには東インド諸島の各地の建築様式で設けられた家・建物の展示のほか、地方の伝統工芸品などが展示された。固有の工芸品の実用的なデモンストレーションが見せるために、Kampung Tukang―職人の村が特別に設けられた。

博覧会の組織委員会は、オランダ東インド植民地社会の伝統的支配者であつ

⁵⁴⁰ van Heel (ed), *Gedenkboek van de Koloniale Tentoonstelling*, p.16.

⁵⁴¹ Ibid., p.72.

⁵⁴² Booklet, *The Colonial and International Exhibition at Semarang*, p. 7.

た貴族階級の代表を参加させ、植民地支配の正当性を強調しようとした。ここで最も中心となったのは、ジャワ世界の中心であるスラカルタ王宮であった。以前からジャワ世界は西欧のオリエンタリストにとって関心の焦点となった。西欧近代とジャワのシンボリックな展示を対比することによって、植民地による西欧の進歩・近代が可視化され、博覧会のカタログやパンフレットなどにも反映された。このように植民地博覧会はすべての分野において植民地の優位性を証明することを目指した⁵⁴³。

オランダ植民地政庁の監督のもとに、すべての原住民の文化や産業の展示が管理された。例外的に、スマランの中国人の関与が顕著であった。最も有名なのはウィ・チョン・ハム（Oei Tiong Ham、黄仲涵）であり、植民地で最も有名で裕福な中国人の一人であった⁵⁴⁴。彼は博覧会の会場の土地を提供し、財政的に膨大な資金を提供した。中国のパヴィリオンは、中国人の商人によって中国から持ち込まれ、中国人の設計によって中国の建築様式で建設された。このように、中国人にとっては少なくとも、この博覧会は経済力と地域社会の地位を示す場を提供したことが明らかであった。

博覧会は帝国主義のディスプレイの場として、西欧によってオランダ植民地政庁による倫理政策と一環として行われた⁵⁴⁵。

2. パサル・ガンビル（Pasar Gambir）⁵⁴⁶国内博覧会

20世紀の初頭になると、オランダ植民地政庁は、東インドにおける植民地の運営において商業の発展を重視するようになる。そのために、小大規模の博覧会は貿易を促進する目的で数多く開催されるようになる。そのような博覧会は、新しい産業や企業の成長を促すことをひとつの目的として開催されるようになる。1917年、オランダ領東インドにおける博覧会を開催するための計画を立

⁵⁴³ Joost Cote, “‘To See is to Know’: the Pedagogy of the Colonial Exhibition, Semarang, 1914”, *Paedagogica Historica: International Journal of the History of Education*, 36: 1, 2000, p. 357.

⁵⁴⁴ Oei Tiong HamについてYoshihara Kunio, “Oei Tiong Ham Concern: The First Business Empire of Southeast Asia” in *Southeast Asia Studies*, Vol. 27 No. 2, September 1989参照。

⁵⁴⁵ Cote, “‘To See is to Know’...”, p. 355.

⁵⁴⁶ パサル（Pasar）はインドネシア語で市場を意味する。またガンビル（Gambir）はこの地域の名前であるため、ガンビル市場という。ここはジャカルタ有数の庶民の市場であり、近くにジャワ各地から人が集まるジャカルタ有数の鉄道のガンビル駅があることで有名である。

てる統括管理局として農産商省の商業部が設立された⁵⁴⁷。

特にジャワ島では、パサル・ガンビル博覧会（Pasar Gambir）は8月末から9月上旬にかけて、スラバヤ博覧会（Jaarmarkt Surabaya）は9月末から10月初旬で、スマラン博覧会（Semarang Annual Market）は7月下旬から8月上旬、バンドン博覧会（Jaarbeurs Bandung）は6月から7月、などさまざまな博覧会が、毎年オランダが植民地運営の拠点として建設した植民地都市で開催された。そのなかでとくに有名なのはバタヴィアで開催されていたパサル・ガンビル博覧会（ガンビルフェア—Pasar Gambir）であった。

オランダ領東インドの原住民のために必要情報を普及させることも目的のひとつであった。そのため、衛生展、住宅展示、水道供給など、原住民の生活を高めるために植民地政府が取り組んでいることが強調された。

最初のパサル・ガンビル博覧会は1898年8月31日にウィルヘルミナ女王の戴冠式を機に開催されたが、1904年から、その戴冠式を記念の祝祭として前面に打ち出されるようになり、毎年開催されるようになった。規模も大きくなるに従って、観客数も年々増え続けた。1906年に75,000人の観客数が、1923年に少なくとも10万人の観客数が登録された。その数は1929年におよそ50万人に増加したといわれる⁵⁴⁸。1921年以来パサル・ガンビルの開催期間が2週間に延長され、1939年まで開催され続けてきた。



図 14 1922 年パサル・ガンビルにおける学生の見学

出典：ライデン大学デジタルコレクション

< URL : <http://hdl.handle.net/1887.1/item:896118> >

⁵⁴⁷ *Encyclopaedie van Nederlandsche Indie 15*, S'Gravenhage, 1932, p. 295.

⁵⁴⁸ *Pandji Poestaka*, September 5, 1930.

コニングスプレイン広場の会場内に、屋内と屋外のパヴィリオンが並んで、主にオランダ領東インドの各地からの工芸品、農林産業や工業品などオランダ植民地政庁の成果、さらに民間企業の産物が展示された⁵⁴⁹。会場が対称的に作られ、中心にはヨーロッパ人しか参加できないダンス会場が設営された。会場における建物がトラジャ、ミナンカバウ、バタック、ジャワなどオランダ東インドの主な民族伝統建築様式で建てられ、大小パヴィリオンやメイン・ゲート建設はその様式が毎年変化した。オランダは西洋的な様式を中心的として位置づけず、その代わりに支配の下にあった東インドにおける原住民の伝統様式をカタログの目録のように建物が建て並べられた。それらの建物は、元々はある民族の家屋、もしくは伝統的宗教的意味をもった建物であったが、パサル・ガンビル博覧会ではそのようなコンテクストから切り離され、近代的な建築物様式として人々を魅了した。



図 15 1928 年のパサル・ガンビル
におけるミナンカバウの建築



図 16 1929 年のパサル・ガンビルに
におけるバリ島の建築

出典： Nationaal Museum van Wereldculturend 所蔵

この博覧会の展示物は、次の 3 つの要素が特徴的であった。その第 1 は、オランダ領東インドにおけるオランダ政庁による植民地運営の業績と成果の展示

⁵⁴⁹ *Bataviaasch Nieuwsblad*, August 27, 1937.

である。それには①通信・交通のネットワークとその手段の発展、②農林産業の産業発展とその成果としての産物であった。また③チョコレートやビールなど近代的な飲食から車、ホテル、観光ツアーなど近代ライフスタイルも展示された。第2は、娯楽あるいは楽しい要素が強調されたことである。2週間の会期中に、軍隊パレードや舞踏会、花火や会場の周縁部での見世物などの催しが繰り広げられた。この催物のうわさが広がりバタヴィアの原住民だけでなく、その周辺に住む各民族たちも多数来場した。第3は、原住民の伝統工芸品の展示が多数行われたことである。オランダ領東インド各地から彫刻、織物、バティック、竹細工など様々な伝統工芸品が収集され、展示品として並べられた⁵⁵⁰。

博覧会の主催団体であったオランダ植民地政庁の意図した展示内容は伝統的な民族世界に対して魅力的な近代的世界を対比的に原住民に見せようとした。このような展示に対するオランダ領東インド政庁の意図とは別に、毎年開催されるこのパサル・ガンビルで原住民は近代的世界と接触することにより、近代世界の多様な動きや変化に対する認識が生まれるようになった。

3. 年次博覧会の目的と展示内容ーバンドン博覧会を中心として

定期的に行われた小中規模の博覧会のうち、もうひとつバンドンで開催された博覧会（Bandung Jaarbeurs）を中心にその内容を吟味しよう。バンドンでの博覧会（Bandung Jaarbeurs）開催目的及びその展示内容の中心は産業展という点であった。この博覧会では、この博覧会の目的のために恒常的な常設展示館が建てられた。

この博覧会は1920年5月17日に第1回が開催された。この時には、機械展示、ゴム加工機械展、農業展示などのいくつかのカテゴリーに分かれていた。しかし、最初の回であったためこの時に参加して出展をおこなった企業は少なかった。

第2回バンドン博覧会は1921年に開催された。オランダ政府は開催準備に当たって、「オランダ領インドにおける第2回年次博覧会計画」⁵⁵¹を立てて、国内の製造物、海外からの生産・製造の見本物の展示、自然物の展示の3つの主

⁵⁵⁰ *Bataviaasch Nieuwsblad*, Pasar Gambir-Nummer, 27 Agustus 1937.

⁵⁵¹ *Indie-Geïllustreed Weekblad Voor Nederland en Kolonien*, May 11, 1921, pp. 104-105.

要部門に分類し、1921 年に開催されると決定した。各部門には、船舶、鉄道、路面電車会社、農業機械、建設資材、農業鉱業生産、書籍（印刷）、美術、宝飾品などを中心に分類され、展示が行われた。

この 2 回目の博覧会では、原住民の産品も展示されたが、当時、原住民の側には近代的な産業は存在しなかったため、陳列されたものは例えばバンドンを中心としたプリアンガン地方の陶器、磁器、真鍮などにしか過ぎなかった。また、バティックと革製品など西ジャワ以外の地域からの製品も展示された。そして、スラカルタからは陶器と布など手工芸品を中心に展示が行われた。これらの原住民の産業産物は、本館ではなく、付属の仮設建物にまとめて展示された。

1923 年 7 月 28 日～8 月 12 日に開催された第 4 回バンドン博覧会では、航空博覧会（Luchtvaarttentoonstelling）いわゆる航空をテーマとして、オランダ領東インドで初めての航空博覧会として開催された⁵⁵²。今回の展示では、フォッカー航空機製造（N. V. Nederlandsch Vliegtuigen Fabriek Fokker）⁵⁵³が所有する 8 機種 of 航空機が展示された。観客数は減少したが、今回の展示会は多くの注目を集めた。オーストラリア貿易協会の代表が訪問し、各地からの学生も動員された。

第 6 回バンドン博覧会は、「電気」というテーマで博覧会が開催され、この博覧会は、以前に比べて最も興味深いものと考えられ、32 カ国から様々な企業が参加した⁵⁵⁴。また、電気関連の展示に加えて、「家庭用電気」「ジャワにおける水力発電による電気供給」「砂糖産業における電力利用」などの電気に関するプレゼンテーションも行われた⁵⁵⁵。

⁵⁵² *Bataviaasch Nieuwsblad*, 18 Juli 1923.

⁵⁵³ インドネシア生まれのオランダ人アントニー・フォッカーによって1910年にドイツのベルリンに設立された。第一次世界大戦で戦闘機を製作した。ドイツの敗戦後、航空機製造が困難になると、1919年にオランダに新しいフォッカー社を設立した。

⁵⁵⁴ *De Indische Courant*, 20 Juni 1925.

⁵⁵⁵ *Indie-Geïllustreed Weekblad voor Nederland en Kolonien*, 9de Jaargang No. 12, 2 September 1925, p. 185.

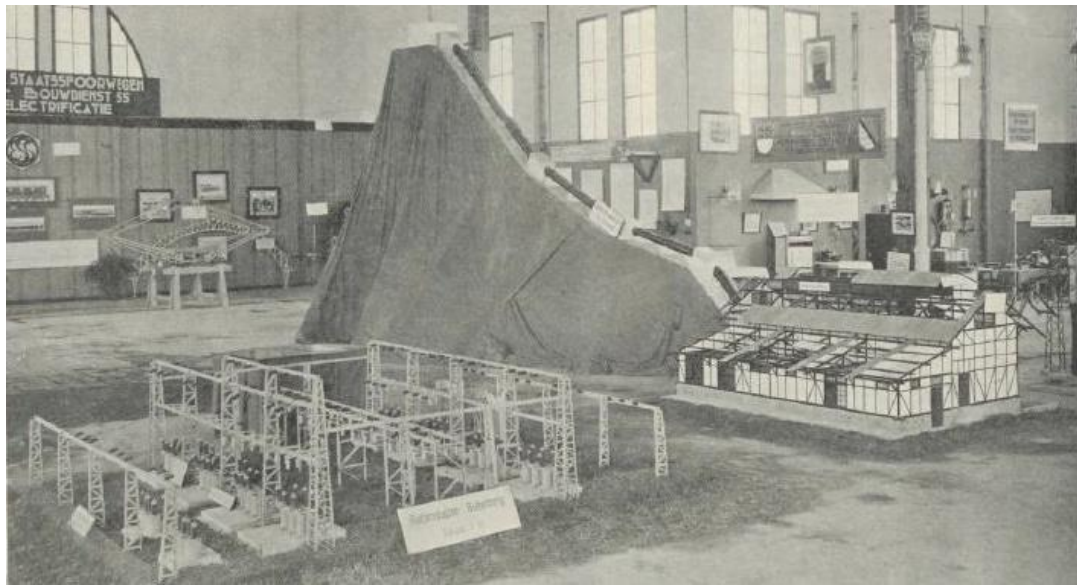


図 17 バンドン博覧会における電気及び発電所模型展示

出典： Nationaal Museum van Wereldculturend 所蔵

この博覧会では東インド原住民の産業からの展示品も数多く陳列された。原住民による製品は少なくとも 43 の製品を記録した。ジョグジャカルタからは、バティック、革細工、銅工芸品が展示されており、ソロからは同様の製品が、西ジャワのタシクマラヤ地方からは、繊維製品が展示されていた⁵⁵⁶。

1926 年の第 7 回バンドン博覧会は 6 月 26 日～7 月 11 日に開催された。この博覧会のテーマは農業であった。博覧会には、オランダ東インドの外から 38 社が参加した。

第 8 回博覧会は 1927 年 6 月 25 日から 7 月 14 日まで開催された。この博覧会では、オランダ政府はオランダ領東インドにおける原住民の生活の衛生の改善を目的として、「第 1 回オランダ東インド衛生展」(Eerste Hygiene Tentoonstelling in Nederlandsch Indie) というテーマが掲げられた。この博覧会は、オランダ政府が直接に東インドにおける博覧会に乗り出した最初のものであり、またテーマも原住民の生活の改善を目的としたはじめての出来事であったため多くの人々の注目を集めていたようで、スラカルタの王様パクブウォノ 10 世と皇后は、1927 年 7 月 10 日と 11 日に来観し、タイからはプラチュ

⁵⁵⁶ Ibid., p. 192.

トラ王子も訪れた⁵⁵⁷。

この博覧会には、医薬品および衛生分野に携わるさまざまな企業が参加した。ミュラーとフィリップス社は、様々な種類の特許薬物を展示して、また、いくつかの光学装置、顕微鏡および他の測定装置が陳列さ、手術器具、看護器具、医療機器などの様々なタイプの医療機器も展示されていた⁵⁵⁸。

1928年6月から7月8日まで第9回のバンドン博覧会が開かれた。今回の博覧会は「ラジオ・スポーツ・ホテル及び旅行における博覧会」を掲げたテーマで開催された。この博覧会で政府運営会社と民間企業からの展示が行われた。例えば、オランダ領東インド国有鉄道・路面電車会社（*Staatsspoor en Tramwegen in Nederlandsch-Indië*）、ラジオ局会社、*N.V. Amsterdamsch Kantoor voor Indische Zaken (A.K.I.Z.)*⁵⁵⁹、ジャワ島におけるオートバイクの愛好会、旅行会社などの参加が見受けられた。ホーマン・ホテルやプレアンガー・ホテルなどジャワにおける有数なホテルの展示も行われ、ジャワ島とその有名な観光地や宿泊所を模型として展示された。

このバンドン博覧会で重要な展示品は、建物のなかに展示するだけでなく、農業や鉱業プロセスの各段階を現物で見ることができ、それぞれの分野の実証されるデモンストレーションも行われた。このうち、植民地の経済にとって最も重要な原材料や強制栽培による農産物が注目された。生産過程のモデルで展示が構成されていた。

このような展示は、パサル・ガンビルと異なり、大衆になじみの無いものであり、原住民の関心を引き起こさなかった⁵⁶⁰。しかし、これは当然だと考えられる。オランダ植民地政庁がバンドン博覧会の開催は西欧資本主義者向けであった。これらの博覧会は投資家や西欧（もしくは中国、日本）の企業に対してオランダ領東インドにおける経済的な魅力あるいは可能性を提供する場として設けられた。

⁵⁵⁷ *Indie-Geïllustreed Tijdschrift voor Nederland en Kolonien*, 11de Jaargang No. 12, 14 September 1927, p. 179.

⁵⁵⁸ *Ibid.*, p. 179.

⁵⁵⁹ ヨーロッパ製品をオランダ領東インドに輸入関連する国有会社である。

⁵⁶⁰ “The Passar Gambir”という記事に、1925年のパサル・ガンビルについて取り上げ、バンドン博覧会についての感想がのべられた。*The Singapore Free Press and Mercantile Advertiser*, 10 September 1925.



図 18 バンドン博覧会で R.S Stokvis en Zonen ラジオ会社の展示

出典： Nationaal Museum van Wereldculturend 所蔵



図 19 バンドン博覧会でジョグジャからの工芸品の展示

出典： Nationaal Museum van Wereldculturend 所蔵



図 20 バンドン博覧会におけるダンスパーティ（西洋人専用の会場）

出典：Indie-Geïllustreerd Weekblad voor Nederland en Kolonien,
7de Jaargang No. 30, 24 October 1923, p. 460



図 21 バンドン博覧会におけるダンスパーティ（西洋人専用の会場）

出典：Nationaal Museum van Wereldculturend 所蔵



図 22 バンドン博覧会の本館とその正面玄関

(写真のなかでは西欧人が車で会場を訪れている姿が見受けることが出来る)

出典：Nationaal Museum van Wereldculturen 所蔵

オランダは植民地東インドにおいて、極めて博物学的意思によって、植物や動物と同じように、支配下の諸民族の文化、社会、慣習などを収集・分類していった。そして、それらを支配者たるオランダの対応物の下位に位置付けていった。仮に植民地に素晴らしい文物があれば、それを支配するオランダの権威は更に高まるのであった。

そうした分類は、第3章で議論したように、西欧の万国博覧会で、建築物や音楽、舞踊、そして人間の展示と共に提示された。植民地にまつわるモノの従属性が表象されたと言える。

植民地で開催された博覧会では、東インドにおける産業振興という産業博覧会以来の目的もあったが、西欧すなわちオランダの文明の優位性を見せ付けることとなった。同時に、それまではほとんど交わることのなかった東インドの諸民族に、それぞれの文化が分類され、並べられ、カタログ化される様を具体的に見て取れる機会を与えることともなった。これは、先走った議論をすれば、

後にインドネシアとなるオランダ領東インドの住民たちが植民地国家という一つの枠組みに共存していることを鮮明に提示したのであり、来たるべく国民の原型がそこにあったと言えよう。そこから、支配-非支配の関係をひっくり返す、あるいはその垂直的な関係を水平に転換する運動、すなわちナショナリズムが生まれてくるのである。

第9章 インドネシア・ナショナリズムと博覧会

前章では、オランダによる植民地支配における博物学的意思が、政策や学術に反映し、それが更に博覧会において表象される過程を追った。この章では、そうした博覧会が、展示されるモノとなっていた原住民にとってどのような意義を持ったのか、独立後への影響も含めて議論する。

第1節 国際博覧会の開催とその役割

国際博覧会におけるオランダ植民地展示空間は二重の目的を持って登場した。第1に、経済的、行政的、軍事的統治が拡大する時期においてオランダの東インド諸島における帝国主義的植民地支配を正当化し、それを表象することを目的とした。第2はオランダの国際的地位を強化するという目的であった。20世紀に入り国際資本主義競争の要素が強くなっていく状況のなか、オランダによる植民地展示は西欧人の大衆とオランダ国民を対象としてその正当化の目的を実現しようとした。東インド諸島がオランダの支配領域であることを強く内外に示すことによって、オランダは西欧列強に加わることを目指したのである。

オランダ政府と民間企業による植民地の見せ物は、強制裁培制度の廃止を廃止した後正式に受け入れられてきた自由主義的な植民地制度を実践する時代に計画された。しかし、オランダ領東インドの植民地支配は量と質の両面で複雑な状況に置かれることになる。軍事および経済的な拡大は、オランダがより広い領土を獲得したが、それはより多くのオランダ人が植民地に出向かわなければ、その広大な領域を支配できないことを意味した。また、このような変化は、強制裁培制度の時代に比べて、植民地の行政や土着の事柄についてはるかに多くの知識を必要とした。新しい「自由主義的」制度では、植民地政庁が植民地における原住民と地域の発展に対する行政執行を再定義する必要に迫られたのである。もう一つ新たに起こった複雑な要因は、植民地における問題に対する責任の分担という政府と民間企業家の関係についてであった。この植民地支配の問題の結びつきは、西欧世界に対してオランダが演出した様々な植民地の見せ物の組織構造と計画に大きな影響を与えた。

博覧会におけるオランダ植民地展示の言説と陳列を見た限りでは、植民地政

治の変化を背景から考えることとほとんど同じである。後々に計画されたオランダ植民地展示は 1883 年アムステルダム植民地博覧会のコンセプトに基づいて計画されたことと基本的には同じであった。原料の自然界、原住民の民族の世界、植民地化という 3 つの基本から形成されることは、オランダによる植民地の進歩を実証する理想的な構造であった。

オランダは帝国主義とその植民地主義政策の正当性を博覧会において強調しようとするれば、第 1 に経済的動機を、第 2 に文明と進歩を広げるすなわち文明化への使命という政治的文化的動機を、第 3 には領土を獲得するため反乱を鎮圧し、勝利を収めるという軍事的動機について説明する必要があった。

第 3 の軍事的動機は、1883 年のアムステルダム博覧会においては、わずかにアチェの記念碑と戦利品として収集した武器を植民地館で展示し、オランダの軍事的成果を誇示したが、その後のオランダ植民地の展示空間から消えていったの。

ここまでに既に検証してきたように、オランダの植民地の展示空間は、オランダ東インドの原住民族の文化を表象する上で、1880 年代の民族学の分類では、個々の民族の「原始的かつエキゾチック」な実体とされたものから、1900 年以降には、地理的及び文化的多様性がある広範囲の「ヒンドゥー・ジャワ文明」の芸術的産物にその重点が移り変わった。

20 世紀初期に入ると西欧帝国主義国家の発展及び資本主義経済の国際化及び大衆社会の登場という時代背景の中で欧米各国や日本では万国博覧会を中心とした博覧会の開催が近代という新しい時代のシンボルとして大流行し、人々の注目を集めた。そこでは、世界の植民地の展示なかでもオランダ領東インドという植民地国家の存在が突然世界から脚光を集めるようになった。しかし、それは植民地に住む「原住民」と呼ばれた人々の悲惨な生活に焦点が当てられるより、西欧帝国主義の植民地支配に対する正当性を世界に主張する場であった。博覧会は重要な政治的メッセージを発信する場、あるいはその手段として利用されたのである。博覧会効果と呼べるその影響力の大きさに注目したオランダ東インド政庁は植民地で建設した支配の拠点である植民地都市で博覧会を開催するようになる。

もちろん、その博覧会はオランダが東インド植民地を支配する正当性を強く

主張するものであった。しかし、この博覧会原住民側からの出品作品はその殆どが、原住民が昔からジャワ各地で作り続けて来られた伝統工芸品に過ぎなかった。このことはオランダ東インド政庁の植民地政策が原住民の伝統産業に大きな貢献がないことを意味した。それが 300 年にわたる植民地支配の結果であった。あえてオランダの貢献を挙げるとすれば、オランダ東インド政庁の薦めで広がったバティック布が自然染料から化学染料に変わった程度といえる⁵⁶¹。しかし、19 世紀末から 20 世紀にかけて、この時代オランダ東インド政庁の薦めがなくても、化学染料はヨーロッパや日本から輸入されていたのだから、その使用が広まるのは自然の成行きであった。たとえばバティック布は新しい時代変化を受けて、手描きから銅板のスタンプによる工場製の採用により大量生産が行われ、値段も下って大衆化が進んだのであるが、これは原住民の側からの努力の成果であったといえる。言い換えれば植民地博覧会で展示された伝統工芸品の数々は、300 年に及ぶオランダ東インドを植民地支配の実態をみごとに説明するものであった⁵⁶²。

こうした博物学的視線に支えられた博覧会的空間は、博覧会に限定されたものではなかった。19 世紀末からの世界的な交通の発展により、「原住民」の住む植民地そのものが、一種の博物館ないし博覧会会場として、欧米の博物学的視線に晒されるようになる。

20 世紀に入ってオランダはバリ島を直接支配するため、伝統的な力しか持たなかったバリ島の王宮の兵隊（軍隊と呼ばない）を全員殺戮した。このことが、世界から強く批判を受けたため、その批判をかわすために野蛮なバリ島を「最後の楽園」として開放したと主張した。そしてその結果、1930 年代に入るとバリ島の「最後の楽園イメージ」は島全体を最後に残された素晴らしい汚れのな

⁵⁶¹ 戸津正勝「インドネシアにおける民族文化と国民統一—BATIKの変容過程を中心として—」『国士舘大学教養論集』第28号、1989年、65頁。

⁵⁶² しかし、ジャカルタ、バンドン、スマラン、スラバヤといった植民地都市で開催された博覧会の資料の収集を何年もかけて努めたのであるが、それは非常に困難な仕事であった。その最大の理由は当時の資料の殆どはオランダ東インドに集められ、多くは1945年以後に始まったオランダとのインドネシア独立戦争で行方不明になっていることである。オランダに行く機会があれば、その資料を発見できる可能性は少しはあるものと期待しているが、それは今後の課題である。またインドネシア側の資料としては、当時発行されていた新聞及び雑誌に注目して、かなりの努力を行ったが、それも現在ではその入手が非常に困難であった。さらに、この分野に関するインドネシア研究者の論文には、写真等関連するものを含めて、殆ど見つけることは出来なかった。以上のようにこの分野における研究は今後に譲りたい。

い伝統文化の「博覧会」あるいは「生きた博物館」として世界に向けて発信され、欧米から画家、音楽家を始めとしたアジア文化に興味をもった数多くの観光客を呼び寄せることに成功した。しかし、バリで形成されてきた土着の舞踊やガムラン音楽、絵画、木彫、銀細工あるいは伝統料理に至るまで、欧米観光客の好みに合う観光商品として大胆に内容の変化が行われたのである。

一方、ジャワ島においても同じような目的でジャワ島中南部の古代遺跡のポロブドゥール仏教寺院やプランバナン遺跡も観光商品として欧米からの観光客を引き寄せた。また、古代ジャワ・ヒンドゥー王国からの中心的な伝統文化のセンターであり、ジャワ神秘主義の文化の発信地で王国の権威のシンボルであったマタラム王国の王宮はオランダによって博物学資料収集とその研究対象と見なされ、オランダ人学者や研究者からその神秘性を定義し、書面化し、博物館と化した⁵⁶³。このようにして、原住民の精神的模範的中心であった王宮や王族（宮廷）の権威がオランダ植民地主義の下にひれ伏すことが求められ、政治的にはマタラム王宮は二度に渡ってオランダの軍事力の前に平伏し、4つの王宮に分割させられ、その権力を奪われ、文化的にも、その権威の源泉たる神秘性は「科学的」に分類・分析されて力を失しなっていくのである⁵⁶⁴。更に、バリと同様に、王宮とその文化は西欧人観光客のための珍しいエキゾチックな対象とされ、博物館化されていったのである。

第2節 国内博覧会の開催とその役割

前章で見たようにオランダ領東インド植民地における博覧会は、通信・交通・行政サービスなどの主要な植民地政庁による植民地国家装置の発展と植民地の主要産業の発展・進歩に関する成果を誇示する展示であった。博覧会を通して、オランダは東インド諸島の世界における西欧社会の進歩的な貢献を明確にしよ

⁵⁶³ 土屋健治『インドネシアの思想の系譜』勁草書房、1994年、70頁。

⁵⁶⁴ 従ってオランダ博物学研究の目的のひとつは伝統的な王宮ないしはその文化の力をそぐことにあった。1755年にオランダの強力な武力の下にギヤンティの和議が結ばれ、強大な勢力であったマタラム王国はジョグジャカルタのスルタン家とスラカルタのスプナン家に分離させられ、さらに1757年にはスプナン家からマンクネガラが分離し、また1813年にはジョグジャカルタからパクアラムが分離した。このようにして、19世紀初頭には、マタラム王国の系譜に連なる4王家が分離することになる。このマタラム王国の分裂によって、ジャワの王宮の政治的な力はさらに弱体化することになった。土屋健治「ジョグジャカルター中部ジャワにおける都の成立と展開」『東南アジア研究』21巻1号、1983年6月、20-21参照。Ricklefs, *Sejarah Indonesia Modern* 参照。

うとしたのである。開催者の自己利益が最大の目的でありながら、テーマや展示地域や産業種などの選択は博覧会が植民地進歩を前提とされた合理的な宣伝の場であった。伝統的な建築様式を採用したにも関わらず進歩主義の価値観を伝えるために設計された個々の展示パヴィリオンや陳列館の中で、展示品は、表示やカタログなどその他の文書に維持され、説教的な説明文と共に陳列が行われた。

次に博覧会で重要な展示品は、ヨーロッパの農業と栽培であった。パヴィリオンのなかに展示するだけでなく、農業プロセスの各段階を現物で見ることができ、栽培が実証されるデモンストレーション分野であった。このうち、植民地の経済にとって最も重要な砂糖産業が注目された。「進歩」を実証するため砂糖加工工場のモデルで展示が構成されていた。機械がほとんどなく、簡単な粉碎設備を備え、水で動かされた非常に原始的な作法の「19世紀初頭から中半にかけての古い砂糖工場」のモデルに対して、「大量生産ができる最新の機械を完備している近代の砂糖工場」⁵⁶⁵が対比された。これらのモデルの展示は、19世紀後半の砂糖産業における革新的な発展のイメージを提供した。さらに、砂糖産業研究所の模型モデル、サトウキビのサンプル及びその改良と拡大の技術図、および昆虫や害虫動物の標本などの展示も行われた。すべては伝統的な農業の近代化・科学化したことを示すために行われた。

このような展示は、大衆に直接的に関係はしていなかったが、すべての主要農業輸出産業と同様に、砂糖産業は、ヨーロッパ人と中国人の起業家によって管理・運営された⁵⁶⁶。この植民地資本主義の視覚化は、その展示方法自体が印象的であったと共に、合理的な組織で技術と応用された科学の採用にもかかわらず、依然として原住民の労働に依拠していた産業については興味深いであった。そこに西欧人を中心とする支配者、手段として科学技術、そして被支配者としての原住民の力関係が目に見えるようになる。

博覧会を訪れた原住民の大部分は裕福層あるいは教育を受けた上流階級層であったと考えられる。この社会層はオランダの教育を通して、すでに植民地に対する認識をもち、場合によってオランダ植民地官僚制のなかに盛り込まれた

⁵⁶⁵ G. Roger Knight, *Commodities and Colonialism: The Story of Big Sugar in Indonesia, 1880-1942*, Koninklijke Brill NV, Leiden, 2013, p. 5.

⁵⁶⁶ Ibid., pp. 6-8.

者であった。彼らと西欧植民地社会の下層階級にとって、博覧会のゲートの明るい電灯の下を通り過ぎた瞬間から、博覧会は約束された明るい未来と近代性を経験できる場を視覚的に示した。植民地当局と当時芽生え始めてきた民族運動主義者との間に緊張関係が生じるなか、オランダ領東インドで開催された博覧会は、原住民の観客に進歩の本質を観察させ、それが望ましいものであることを納得するようとし導くよう意図された、現物を用いたレッスンを表象していた⁵⁶⁷。

20世紀初頭に入って、オランダ領東インドに対する領域的征服が最終段階に入り、その領域ほとんどはオランダ植民地政庁の下になった。オランダは、この東インドという政治領域のなかに新しい秩序を作り、そして原住民をその中に位置づけようとした。パサル・ガンビルや Jaarbeurs や Jaarmarkt などの博覧会は秩序作りの教育の場であり、また植民地運営で重要な役割を荷った植民地都市の機能を強化した。

土屋健治が指摘するように、19世紀末から20世紀初頭にかけて成立した各地の植民地都市の機能は当時の東インドにおける文化的・社会統合の役割を果たしたとしているとする⁵⁶⁸。当時植民地都市で開催された博覧会も又各地から集まってきた多様な人々を統合するという機能を果たすこととなったと思われる。東インド各地から博覧会に集まってくる様々な民族の原住民にとって、西欧から持ち込まれた博覧会は新しい世界の「場」であるとともに、この「新しい世界」の意味と形を問いその答えを得る空間、すなわちフロンティアであった。言い換えれば、博覧会はひとつの「新しい巡礼圏」⁵⁶⁹として、フロンティアとする植民地都市とともに機能していた。

それは、植民地都市が植民地の政治・経済・軍事などのネットワークの結節点として機能し、領域支配の拠点としての態勢が顕著に進むにつれ、新しい段階として①道路や鉄道による交通網及び郵便制度を中心とする通信網が都市と都市を結びつけるようになったこと、②近代的なヨーロッパ人住宅区が増えるようになったこと、③この「近代的な」のは居住空間だけでなく、クラブハウス、劇場、スポーツ施設など娯楽施設、パーティ、洋服、自転車、などのライ

⁵⁶⁷ Cote, “‘To See is to Know’...”, pp. 358-359.

⁵⁶⁸ 土屋健治「インドネシアの社会統合…」、前掲書、150-152頁参照。

⁵⁶⁹ ベネディクト・アンダーソン、前掲書、100-101頁。

フスタイルの普及する場になったこと、そして④植民地各地の住民集団が都市に集まり、そこを生活場とするようになったことである⁵⁷⁰。

このようなフロンティアから生まれるインドネシアの統合要因として重要なのは「インドネシアにおいて進行する社会統合の過程」であり、培養器として文化現象が出現し、次第に広い世界をゆるやかに統合する作用を果たした。

少なくとも、博覧会によってジャワでは新しい文化現象が現れたのは、風景画の様式の成立であり、クロンチョン（Kroncong）音楽の拡大であり、マレー語の普及、そして大衆演劇とその展開である。

博覧会は帝国主義のディスプレイの場であり、非西洋文化の表象を作り上げて、世界を序列化し、植民地による支配の正当性を視覚可能にした⁵⁷¹。博覧会は支配の象徴であること鋭く批判したのはスワルディ（Soewardi Soerjaningrat）であった⁵⁷²。フランスからオランダの独立百周年祝賀の際に、スワルディは「私はオランダ人なりせば（Als ik eens Nederlander was）」という論稿を発表した。これはジャワの植民地支配に対してオランダ語を使用し、オランダの植民地を批判する衝撃的な記事であった。スワルディは、このような祭典を祝うことが出来るのはオランダ人愛国者として幸運であると思っていた。彼は「私も、愛国者である。祖国に愛する純粋なオランダ人愛国者のように私も自分の祖国に言うまでも無く愛している」。彼は東インドでオランダの独立のお祝いを開催することが愚かだと批判した。彼は次のように述べる。「もし、私はオランダ人なりせば、私は独立が否定された人々の土地で独立の祝祭を行わない... 私は最初にその自由を与え、そしてそれからだけ私たち自身の自由を思い出すだろう」⁵⁷³。

このように、西欧帝国主義による植民地祭典である博覧会を通して、植民地原住民の自己認識である支配される側としてのアイデンティティをもたらされ

⁵⁷⁰ 土屋健治「インドネシアの社会統合...」、前掲書、160-161頁。

⁵⁷¹ 吉見俊哉、前掲書、10頁参照。

⁵⁷² スワルディ・スルヤニングラット、インドネシアの民族主義者、民族教育運動の指導者。1928年に40歳の誕生日を機にキ・ハジャール・デワントロ Ki Hajar Dewantoroと改名した。ジョグジャカルタにあるパクアラム王家に1889年5月2日に生まれ、ジャカルタ医学校中退後ジャーナリストとなった。この論稿が筆禍事件を起こし、1919年までオランダで追放生活を送った。ジャワへ帰還後は教育・文化活動に関心を強め、1922年にジョグジャカルタでタマン・シスワ学校を設立した。スワルディとタマン・シスワについて土屋健治『インドネシア民族主義研究—タマン・シスワの成立と展開—』創文社、1982年参照。

⁵⁷³ R.E. Elson, “Constructing the Nation: Ethnicity, Race, Modernity, and Citizenship in Early Indonesian Thought”, *Asian Ethnicity*, 6: 3, Routledge, 2005, pp. 147-148.

た。この自己認識は新聞や書籍や学校などによってその思想は急速に拡大することになり、ナショナリズムの芽生えの大きな要因となっていく⁵⁷⁴。

そして、植民地都市を中心に形成された文化とその緊密なネットワークによって、インドネシアという地理的の共通意識が形成されたのは民族独立運動を可能にしたのである。

以上見てきたように、19世紀から20世紀にかけて広大な東インド群島を基盤としたオランダ東インド植民地国家が成立する。しかし、オランダ東インド植民地政庁の支配下にあった東インドの被支配者であった「原住民」は人種差別政策によって過酷な状況に置かれたままであった。「原住民」のひどい生活状況を改善するという声はあったものの、そのための「倫理政策」はことごとく失敗したのである。その結果、一部のエリート青年の中から20世紀に入るとカルティニというオランダ語を理解したひとりの懸命な少女の植民地政策批判を始め、ブディウトモやタマン・シスワの民族運動が盛り上がりを見せ、1928年には「青年の誓い」に見られるように植民地からの独立を熱望する運動として盛り上がりを見せるようになる。

第3節 植民地からの開放と博物館・博覧会

1. スカルノと国民統合の課題

インドネシアは第2次世界大戦中の日本軍占領を経て、1945年8月17日にインドネシア共和国の独立を宣言し、対オランダ独立戦争を経て、1949年末にはオランダから正式に主権を譲渡された。民族独立運動の結果として、オランダ領東インドという植民地国家を解体することで独立を達成したのである。政治的独立を果たしたインドネシアは、国民国家という西欧近代的価値に基づいて、その内実たる国民統合という課題に取り組むこととなる。

しかし、植民地領域として、帝国主義諸国相互の政治的・軍事的力関係によって、インドネシアの地域の文化的同一性や歴史的体験の共同性といったことは無関係に決定された。その上、長い間の過酷な植民地支配の下にあったインドネシアは、歴史形成のなかで、内発的・自立的な力を奪われてしまったため、社会的文化的統合への自然な発展を妨げられたのである。

⁵⁷⁴ ベネディクト・アンダーソン、前掲書、193-196頁参照。

これらの理由で、インドネシアにおいて一つの民族あるいは一つの国民を形成することが最大の政治課題となった。そのため、分裂状態にあった民族を一つに統合し、一つの国民を創出することによって、近代的な国民国家を形成するというネイション・ビルディング (nation-building) の問題は独立を達成したインドネシアが抱えていた最大の課題である。

初代大統領のスカルノを中心にインドネシア建国者たちは、早い段階から、インドネシアが抱える課題を理解していた。そのため、彼は強力な政治的指導力を発揮して、インドネシア各地域の多様な民族文化の要素をナショナリズムの枠組の中に再編しようとしたのである。

その課題を克服ために、スカルノは古来受け継がれた文化の偉大さを見出そうとし、国家建設プロジェクトとしてインドネシアの近代性を示すために、壮大な大道り、記念碑、公共の建物を建設することによって首都ジャカルタをインドネシアのシンボルとして建設した⁵⁷⁵。

この点はスカルノ体制が示していた特徴から理解できる。スカルノ体制は、国家の政策やプログラムの中身よりも、華麗さ、引き続く興奮の感情、示威的行事や国家的偉大さの象徴の強調がその特徴である⁵⁷⁶。

ジャカルタは、国の中心であり、行政の中心であり、以前はバタビアという植民地の首都であった。このような首都にスカルノは名声のある公共建物を建てた。国家プロジェクトの下で、記念碑や像も含めて、インドネシアの開発進歩の展示するためのポーラビルディング (Gedung Pola)、日本企業が設計・建設したサリナ百貨店 (Toserba Sarinah)、アメリカの建築家アベル・ソレンセン (Abel Sorensen) が設計したインドネシア・ホテル (Hotel Indonesia)、イスティクラル・モスク (Masjid Istiqlal)、インドネシア中央銀行の本部 (Gedung Bank Indonesia)、ナショナル・モニュメント (Monumen Nasional)、農民のモニュメント、国会議事堂 (Gedung MPR/DPR RI) など多くのモダンな建物が建設された。これらによってスカルノは新しく誕生した権力の象徴としてジャカルタを「演出するステージ」⁵⁷⁷として変貌させ、そこに中心的な空間として作り

⁵⁷⁵ ジョンD. レッグ、中村光男 (訳)、前掲書、260頁。

⁵⁷⁶ 同上書、259頁。

⁵⁷⁷ Yuke Ardhiati, *Bung Karno dalam 'Pangung Indonesia'*, PT. Wastu Adicitta, Jakarta, 2013. pp. 7-9.

出そうとしていた。

ジャカルタに建てられたいくつかのシンボリックなモニュメントや像や建物のほかに、考古学遺跡は注目され、独立後のインドネシアの地位を高める手段として有効に利用されるようになった。1950年代に入って、カンボジア王ノロドム・シハヌークはボロブドゥール周辺で飛行機ツアーを行い、フィリピンのエルピディオ・クイリノ大統領、ビルマのウー・ヌ首相、当時米副大統領リチャード・ニクソン、ジャワハラルル・ネール (Jawaharlal Nehru) など世界の数々の著名な政治指導者が中部ジャワにあるボロブドゥールやプランバナンのという仏教寺院の遺跡を訪問した⁵⁷⁸。

インドネシアの指導者たちにとっては、独立後インドネシアのアイデンティティを獲得するために、政治的、文化的、外交的に、考古学遺跡は明らかに最適な手段であると考えた。

1953年12月20日に、スカルノ大統領は、ジョグジャカルタ近郊のプランバナにあるロロ・ジョングラン寺院敷地において最大の寺院であるシファ寺院 (Candi Syiwa) を正式に竣工した祝賀式典において歓迎のスピーチをした。

スカルノの演説で示されるように、シファ寺院を国家の記念碑として強調し、独立以降の考古学遺跡を国家遺産の形成の転換期となった。ボロブドゥール遺跡やジョグジャカルタ周辺のその他の遺跡のように、プランバナ寺院がインドネシアの国民の先祖の偉大な巧みと業績として、小さいころから感嘆と誇りを感じさせたと述べた。これらのモニュメントが植民地から開放した今のインドネシア国民の激励になりながら、雄大なインドネシアの未来を築くためのインスピレーションになるべきと主張した。

独立後のインドネシアにおいて初めて博覧会が開催されたのは、1953年であった。これはパサル・ガンビル (Pasar Gambir) 博覧会の形を取り、会場はスティルマン通りに面していた。1953年の開催は、初回商工業国際博覧会 (The First Indonesian International Trade and Industrial Fair) というテーマの下で、中国のパヴィリオンが最も大きいパヴィリオンであり、中心的な存在であった。翌年、1954年にソ連のパヴィリオンが中心的なパヴィリオンになった。1955年の開催では、米国が大々的にアメリカの産業・企業を参加させ、フ

⁵⁷⁸ *Laporan Dinas Purbakala* (1951-52) 1958, *Laporan Dinas Purbakala* (1954) 1962, p. 24.

オード、ジェネラル・モーターズ、キャタピラー、グッドイヤー、RCA、パンアメリカ（PanAm）など著名な大手企業による展示が行われた⁵⁷⁹。

第3回商工業インドネシア国際博覧会では、博覧会の開催目的として以下のように掲載されていた。

- (1) 技術的・組織的の観点から、インドネシアの国際博覧会の開催水準を向上させること。
- (2) 国内および国際レベルの両方において、生産者と消費者の間の仲介役としてその役割を果たすように国際博覧会の有用性を高めるためであること。それによって、インドネシアの経済発展に貴重な貢献をすることができること。
- (3) 活気の無い性格をもつ伝統的な見本市から脱し、国の経済情勢に対してよりダイナミックな理解に替えるためである。
- (4) 大衆を教育させ、その教育水準を向上させること⁵⁸⁰。

これらの目的を見ると、新興国としてインドネシアは経済復興がひとつの課題として重要視されたが、そのなかに国民の教育が重要であることも認識され、そのため教育手段として目的を掲げた。

スカルノ政権の終盤の時期に、1964年4月22日から1965年10月17日にかけてアメリカ合衆国ニューヨーク市クイーンズ区のフラッシング・メドウズ・パーク規模を拡大して開催された。テーマとして「相互理解を通じた平和(Peace Through Understanding)」で、参加国は開催国のアメリカをはじめ、日本やスイス、メキシコやインドなど約60か国に及んだ。

当時のアメリカの好景気を反映して、2.6平方キロメートルという巨大な敷地にジェネラル・モーターズやフォード・モーター、アメリカンエクスプレスやIBMなどアメリカを代表する大企業のパヴィリオンが、世界各国の政府や市などによるパヴィリオンと同様、もしくはそれを上回る規模で建てられ高い人気を呼んだ⁵⁸¹。

この国際博覧会の準備と開催機関中に、様々な政治的・外交的問題が浮上し

⁵⁷⁹ *Guide Book for the 3rd Indonesian International Fair*, Jakarta, NV. Kesedjahteraan, 1955.

⁵⁸⁰ J.M. Laihad, 'Preface' in *Guide Book for the 3rd Indonesian International Fair*, Jakarta, NV. Kesedjahteraan, 1955. pp. 10-11.

⁵⁸¹ "Something For Everyone: The 1964-1965 New York's World's Fair", *Flushing Council on Culture and Arts*, 1995, pp. 28-41.

た。それに博覧会国際事務局（BIE—Bureau International des Expositions）⁵⁸²の規制のために、イギリス、フランス、など西洋主要諸国は参加しないが、第2次世界大戦後、植民地から独立したアフリカ、南アジア、中東の多数の新興諸国の積極的に参加した。独立国家としてこれらの諸国の参加は始めてであった。これらの国々のために、「相互理解を通じた平和」のテーマは、新興諸国にとって自国の存在をアピールする最適の場となった⁵⁸³。

インドネシアはこのニューヨーク 1964—1965 年国際博覧会に参加を表明したアジアの国として最初の国であった。招待状を受けてからわずか4日後には、承諾の返事が送られた。情報大臣の通知によれば、「インドネシアの参加は、インドネシア共和国と世界各国との良好な友好関係を結ぶことを目的として、国際社会におけるインドネシア革命の理念を実現する過程にある」と表明した⁵⁸⁴。スカルノ大統領は、冷戦時のインドネシアの中立性を表すために、インドネシアのパヴィリオンを米国とソ連の間に配置するよう要請した。その要請の実現は困難なため、インドネシアのパヴィリオンの位置を決定するためにおよそ6か月間を要した。最終的に、ベオグラードの非同盟会議の開催準備にあたって米国にやって来たスカルノ大統領はケネディ大統領と会って、その際、万国博覧会の予定会場に直接訪れてインドネシアのパヴィリオンの立地を自ら選んだ。スカルノは4万平方フィートの面積を選択し、インドネシアは博覧会開催者と契約を正式に締結する最初の国となった⁵⁸⁵。

インドネシアのパヴィリオンは、「東西イデオロギーの統合を目指す」という願いを反映して、政治的な問題に焦点を当てて、「インドネシアが考えた積極的かつ中立的外交政策を印象付け」ることを目指した。インドネシア・パヴィリオンにおいては、インドネシア人女性はフランス人やアメリカ人の女性のように「振る舞わない」ように指導し、「あらゆる行動の中でインドネシアの女性らしくなるように」とスカルノは忠告した。スカルノにとって、インドネシア・パヴィリオンでは、植民地から独立した国家、イデオロギー、精神の象徴とな

⁵⁸² 国際博覧会条約に基づき1928年に設立された国際博覧会（万国博覧会）の常設事務局である。

⁵⁸³ Sharyn Elise Jackson, *International Participation in the New York World's Fair 1964-1965*, Thesis, New York University College of Arts and Science, April 21, 2014, p. 59.

⁵⁸⁴ Sie Pek Ho, *Indonesia Plans for NY Fair Exhibit*, Christian Science Monitor, 10 January 1963.

⁵⁸⁵ Bernard Kalb, *Sukarno Chooses Site at 1964 Fair*, New York Times, 16 September 1961.

る存在でなければならなかった。

また、スカルノはパヴィリオン計画自体に自ら関与した。彼は画家、芸術愛好家、宝石コレクターであり、彼は博覧会へ私有物を展示品として出品しようとした。スカルノは建築設計士でもあり、博覧会のインドネシア・パヴィリオンの設計に実際に関与した。

国連からの脱退、マレーシアとの紛争、そして国内の混乱した政治情勢のため、インドネシアは 1965 年 3 月 11 日にニューヨーク 1964-1965 年国際博覧会から正式に辞退し、インドネシアのパヴィリオンは閉館された⁵⁸⁶。しかし、スカルノはインドネシアの積極的な参加を通して博覧会を、自国をアピール場として強く意識していたことが分かる。

こうしたスカルノによる、インドネシアの近代性の強調、古来の「伝統文化」の発見と陳列は、かつて日本が行なったことと相似形を成している。「上からのナショナリズム」において、博覧会、あるいはそれに代表される博物学的空間は、国民という枠組みを埋める内実を生み出す装置として機能したのである。

2. スハルトによる博物学的空間の利用

独立後、スカルノの「指導された国家・国民」の政策とその思想は、スハルト体制においても維持された。しかし 1970 年以降のスハルト政権の開発経済優先政策による権威主義的かつ独裁的な文化的イデオロギーの進展は、博物館・博覧会にもたらした⁵⁸⁷。

この時期に入って、国家の統一と国民統合を目指すさまざまな政策が優先的に実施された。数多くの文化施設が作られ、スハルト体制下ではスカルノ以上に「記念碑主義」が重視され⁵⁸⁸、モニュメントや彫像が全国に設営された。各地に博物館が次々と設立され、大小の数多くの博覧会が独立記念や国家的祝日に全国で開催された。

そのなかで最も代表的な存在は、「タマン・ミニ・インドネシア・インダー」(美しいインドネシアのミニチュア公園-Taman Mini Indonesia Indah)と呼

⁵⁸⁶ *Indonesia Halts Plans for Pavilion at Fair*, New York Times, 12 March 1965.

⁵⁸⁷ ジョンD. レッグ、中村光男(訳)、前掲書、266-290頁。

⁵⁸⁸ Benedict Anderson, "Notes on Contemporary Indonesian Political Communication". *Indonesia*, vol. 16, 1973, p. 61.

ばれるジャカルタ近郊開設された広大な博物館の複合施設である。インドネシアの第2代大統領スハルト（1968年～1998年）と妻ティン・スハルトの要請により、タマン・ミニはインドネシア共和国国民の多様性を表現し、パンチャシラ（国家5原則）哲学の表象舞台となるように設計された⁵⁸⁹。この国家的プロジェクトは内外の観光客に対してインドネシア国家への誇りと、国民意識を高めることを目的としていた。1972年1月6日にプルタミナ病院の開院式のスハルト大統領が述べたように、古代ジャワ王国であったマジャパヒト王国や古代仏教王国であったスリウィジャヤ王国といった東南アジアを代表する古代王国は、記録はあっても、それを視覚的に理解できる遺跡が少なかったため、インドネシア国民の意識と自国への誇りを高めるために新しい施設が必要とされた⁵⁹⁰。タマン・ミニの公式ガイドの序文に外国人観光客の増加という魅力が述べられてはいる⁵⁹¹が、タマン・ミニの設立で意図された来園者は、外国人ではなく、インドネシア国民であった⁵⁹²。スハルトは、世界最大の他民族で構成されたインドネシア国家の姿をタマン・ミニ（小さなインドネシア）と呼ばれる多民族文化博覧会施設の観光化を通して、まだ統合過程にあるインドネシア国民に対して「多様性の中の統一」（ビネカ・トゥンガル・イカ）というインドネシアの国家的課題を理解させようとしたのである⁵⁹³。

タマン・ミニという博覧会施設は、インドネシア人観光客に国家の過去の栄光と未来への可能性を見せることで、彼らがインドネシアの国民の誇りを持つようになることを目的としていた。タマン・ミニは、国家のさまざまな局面を提示する重要なインドネシアの文化的伝承の証拠⁵⁹⁴としての展示であった。ティン・スハルトは「これからの世代のための貴重な遺産」と「...彼らが理解していない世代がなくなる前に、それにすべてが消えていく前にますます必要になっている」と述べていた⁵⁹⁵。これらの博物館の外見は、ヨーロッパのものに

⁵⁸⁹ 戸津正勝「インドネシア共和国憲法とパンチャシラ（建国五原則）」『国士舘大学教養論集』第18、1984年参照。

⁵⁹⁰ Sekretariat Negara, “Pidato Presiden pada Pembukaan Rumah Sakit Pertamina Tanggal 6 Januari 1972”.

⁵⁹¹ *Apa dan Siapa Indonesia Indah*. Jakarta, 1975, p. 13.

⁵⁹² M. Picard and R. E. Wood (eds), *Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies*. Honolulu: University of Hawaii Press, p. 10.

⁵⁹³ *Ibid.*, p.20.

⁵⁹⁴ J. Pemberton, “Recollections from ‘Beautiful Indonesia’ (Somewhere Beyond the Postmodern)”. *Public Culture*, vol.6, 1994, p. 255.

⁵⁹⁵ *Apa dan Siapa Indonesia Indah*, p. 13.

非常に似ているが、その根底にある哲学は大きく異なっていた⁵⁹⁶。

タマン・ミニとは公園であるが、インドネシアの文化と伝統をミニチュアのかたちで呈示する博物館であり、芸術・慣習や伝統・生活規範などの豊饒さ、生きた環境、二つとない自然の美しさについての全般的な概要を提供する博覧会展示空間である。なかにはインドネシアの各州における代表的な建築様式で再現されたパヴィリオンがあり、またインドネシア文化のさまざまな形態が紹介、保存、育成されている。タマン・ミニは、地方文化ただ展示するだけの博物館ではなく、生きたモノやショウを直接提供し、訪問者がその生活とひとつになる

園の中央には大きな人工池が造られ、インドネシアの主要な島々をかたち取った土盛りが配置されている。あたかも海に浮かぶ群島を眺めるかのように、国土の形態や相対的な規模の大小、位置関係を知ることができる。

池の周囲は 1 ヘクタールずつに区画され、全 33 州の代表的な民家が穀倉や副棟などと合わせて建つ。これらの民家パヴィリオンの外装は過剰なまでに復元されて、壮麗さを競い合う。内部では生活用具や民俗衣装などの展示、民芸品の販売がある。前庭でも結婚式の再現や民俗芸能の上演が催される。したがって、個々の民家パヴィリオンそれ自体がまた地方文化の博覧会的な機能を備えている。

後に追加された施設として「インドネシア戦士博物館」と「科学センター」がある。この博物館は「インドネシア国軍の役割と歴史」を展示するもので、7～19 世紀に群島各地で起こった戦いから 14 のジオラマが「抜きんでた愛国精神」との理由で選ばれ、現在行政州のうちの 14 州における戦いという位置づけでジオラマ化されている。植民地支配をうける以前の 7 世紀から独立以前の 19 世紀までの時期を選んだという点で、この博物館は独立闘争（1945～1949 年）にちなんだ国内各地のローカルな博物館や歴史資料館とは決定的に異なり、既存のものを統合するという。建物そのものは五角形で、パンチャシラ「国家建国 5 原則」のシンボルになっている。

タマン・ミニはインドネシアのさまざまな文化伝統を展示するという点が強

⁵⁹⁶ Michael Hitchcock, “‘We Will Know Our Nation Better’: Taman Mini and Nation Building in Indonesia”, *Civilization*, Vol. LII, no. 2, 2005, p. 50.

調されるのでしばしば見過ごされがちであるが、それとは相反するようなテーマをもつ施設もある。たとえば「科学センター」は、設立の趣旨によれば、青少年が基礎的、応用的な科学技術に直接に触れ、関心を高め、現在と将来の社会的な役割を理解することをめざすという。これに「石油天然ガス博物館」「テレコミュニケーション博物館」「輸送博物館」を加えてみると、科学技術への関心を促そうとしているのか、それとも「新秩序体制」の最優先課題、「開発」の方向の正しさを象徴するかのようである。



図 23 タマン・ミニ・インドネシア・インダーの展示物や施設の配置

出典：TMII 公式ホームページ

〈https://www.tamanmini.com/pesona_indonesia/map/map.jpg〉

(閲覧日：2020 年 5 月 21 日)

さまざまな展示物や施設、舞踊や演劇などパフォーマンス、あるいはまた科学技術の進歩発達を見せる博覧会にしても、インドネシアの生活や自然、「開発」の目的やその成果についての象徴的な表示であった。さまざまな象徴を組み合わせ、ある地理的の姿をイメージさせるという手法は、まさに地図による表現と同質である。

人工池にインドネシアの列島を模した島々を浮かべ、そのまわりに列島各地

の民族ハウスをパヴィリオンとして配置するのは、それ自体できわめて地図的であるため誰にも地理的理解が容易となっている。多数の象徴の集積であるタマン・ミニは、「想像の共同体」としての国民国家インドネシアについて、公共的な空間に具象的、視覚的に描きだす巨大な装置であり、インドネシアの国家と国民についての見取り図なのである。タマン・ミニを遊覧してみれば、その造営の歴史的、政治的な背景や開設の過程も含めて、政府の意図が明確となる。

政府が国民に強調した点は、インドネシアが文化的多様性の国家であることであり、インドネシアの国家原則である「多様性のなかの統一」(Bhinneka Tunggal Ika)である。国民の多様な生活形態が、民族との関係ごとの特色ある文化というかたちで、各地域の民族家屋を巨大なパヴィリオンとして建設し、生活用具や衣装・工芸品の展示、舞踊や演劇など芸能の上演が毎日行われ、頻繁にパレードや映像をとおして、繰り返し呈示される⁵⁹⁷。

タマン・ミニにおいて、本来それぞれ個別に存在していた民族の文化は、近代化の過程における後進性の象徴としてではなく、国民国家という枠組みの中に位置付けられ、「伝統的」「民俗的」「地方文化」として表象され、国民文化の一部に再編成されていく⁵⁹⁸。しかも、その再編成は、インドネシアの各民族の文化が、その文化とは本来的には関係のない行政区画(州)という枠組みに沿って分類され、系列化され、提示されるのである。

多民族国家インドネシアでは、1970-1990年代に、ジャカルタやスラバヤといった大都市で、「工芸品フェア」という博覧会が政府主導で数多く開催されるようになる。そこでは全国各地方を代表する「民族工芸品」が出品され、その出来ばえを争い合っている。このようにして、民族的伝統を可視的に、シンボリックに伝えることにより国民アイデンティティの形成に重要な役割を果たすことが期待されていく。現在の政府は博覧会を通してインドネシアの中の諸民族の伝統文化を、国民国家を前提とし、それを支える国民文化の基盤としての地方文化へと転換を促そうとする⁵⁹⁹。インドネシアでは、博覧会によって、つ

⁵⁹⁷ Informasi Budaya dan Wisata “Kalender Acara TMII 2018”.

⁵⁹⁸ Hitchcock, “‘We Will Know Our Nation Better’...”, p. 50.

⁵⁹⁹ 戸津正勝「インドネシア、ジャワ島、ジョグジャカルタ特別州、コタゲデの伝統工芸」『宗教・文化研究所紀要』第11号、1993年3月、53頁。

めかけた人々の各自民族のさらに上に、「インドネシア人」としての誇りと新しいアイデンティティを確立させることによって分裂化傾向にある諸民族の政治的統合を目指す努力の過程にあるといえよう。

小結

オランダ領東インドをめぐる博覧会は、それがオランダで開かれたものであれ、植民地東インドで開かれたものであれ、支配者としてオランダと被支配者としての「原住民」という対比に基づいていた。強制裁培制度の時代における「搾取する」側と「搾取される」側の対比であり、また倫理政策においては西洋文明の福祉と安寧を「与える」側と「与えられる」側の対比であり、常に前者の先進性、強大さを強調し、後者への支配を正当化するものであった。

植民地における博覧会の展示は、植民地各地の伝統や文化、産品を、オランダ領東インドに属するものとして、分類し、系統立て、並列して展示した。オランダの意図は、その文化の後進性を強調する、あるいは優れた文化があるにしてもそれを正当に評価できるのはオランダ人であることを示すことだった。しかし、これらの展示は、後にインドネシア人となる「原住民」に、彼らが住まう東インドを視覚的かつ端的に理解させるものであり、その展覧会という場に自分達の文化が並列しているということに、オランダ人の意図しない新たな意味を与えたのである。「原住民」は、インドネシアという名前はまだ存在しないとしても、東インドという空間に、オランダに虐げられた一つの運命共同体を見出し、これを虐げているオランダと並列する存在に変換する運動を開始するのである。

その運動が、具体的な政治的独立という形で実った後も、新たな国民国家の内実はまだまだ多様であり、国民統合には程遠い状態だった。この国民国家に内実を与えようとしたスカルノは、インドネシア国民の偉大さを示すモニュメントを建設し、国民に提示した。また、インドネシアの古い歴史を掘り起こし、それぞれの遺跡が、その当時には存在しなかった「インドネシア国民」が昔から偉大であったことを示すモニュメントに転用していった。博覧会においても、近代産業というよりは、古く優れたインドネシアの文化を強調し、インドネシ

アおよびその国民の偉大さをアピールしたのである。

スハルトもまた博覧会的空間を国民統合に利用したが、その手法はスカルノとは異なっていた。タマン・ミニに見られるように、インドネシアを地理的にも文化的にも俯瞰して理解できるようし、それぞれの民族社会や文化を、行政区画に沿って分類し、配置していった。これによって、インドネシアの各州、そしてその州にいる民族が「インドネシア」という枠組みに属しており、かつ並列して存在していることを視覚化したのだ。

以上のように、博覧会および博物学的空間は、オランダ領東インドにおいてインドネシアのナショナリズムを生み出す一原動力となり、現在に至るまで様々な形で国民統合に利用されてきたのである。

第10章 結論

博覧会という博物学的施設あるいは空間は西欧文明の産物である。大航海時代に始まる非西欧との接触およびその文物の流入、そしてギリシア・ローマ文明の再発見に始まるルネッサンスによって、地上の万物を理性の働きによって分類し、系列化するという博物学的思考が生まれ、発展していった。換言すれば、アジア、アメリカなどの空間的な外ないし他者の「発見」により、それらを、時間的に隔ったヨーロッパの「起源の再発見」で生まれた思考によって、非ヨーロッパと位置付け、逆にヨーロッパを定位していった。このような博物学的思考・視線が如実に表われたのが博覧会であった。

近代市民社会が確立し、国民国家という新しいシステムが誕生する中で、ヨーロッパ外の世界に対する政治的経済的な侵略だけでなく、西欧の価値観を普遍的価値として「世界を一元化」するという文化的侵略が始まったともいえる。そのため、西欧という地域に限定された価値概念であったものが次々と普遍的価値概念として標準化されていった。その結果として、西欧の人々の中に「白人」と「黒人」、「西洋人」と「東洋人」、さらに「民族」というカテゴリーが形成されていく。こうして形成されたカテゴリーは、思考・行動様式を含めた「文化」と血のつながりや地域的共通性による「科学」や「歴史」を拠り所として西欧市民社会の「正当性」が主張されるようになっていく。西欧諸国による帝国主義や植民地主義の思想は、その正当性を見出した西欧の「知」による非西欧世界の「無知」に対する支配であった。博覧会はこの支配関係の正当性を国民に証明する場として後に利用されるようになった。

博覧会の起源は、しかしながら、産業振興という極めて実利的なものだった。18世紀半ばに起こった産業革命による工業化は新しい技術力と軍事の発展をもたらし、豊かな西欧近代の誕生の背景となった。その産業技術と工業機械や製品の展示即売会として、産業博覧会というものがイギリスで開催されはじめた。この原初的な博覧会は、地方色が強く、雑多で、民間の主催するものだった。これを大きく変化したのがフランスだった。産業革命の拡散は西欧列強による新たな市場や植民地の獲得競争を激化させ、ヨーロッパ各国は国民の意識高揚と自国の地位を強化させることが重要な課題となった。その結果、当初

ヨーロッパ各国の国内産業で新しく生産された工業品の展示即売会の性格を持った産業博覧会として始まった近代博覧会は、フランスにおいて政府主導の下、明確に国威の発揚と国内産業の誇示という明確な目的を与えられ、そして博物学的手法により、美術品を含めたあらゆる展示物が分類され、系列化されていた。当時圧倒的な先進国であったイギリスはこれに対抗して、複数の国家が参加する国際的な博覧会が開催した。そこでは国同士の比較により、産業および植民地主義におけるイギリスの卓越が理解された。この 1851 年ロンドン万国博覧会の成功は、以降の万国博覧会の流行をもたらした。

最初の万国博覧会としてロンドンの第 1 回万国博覧会開催の背後には、フランスの保護貿易主義に対するイギリスの自由貿易主義があった。つまり、産業振興・生産技術情報公開という産業主義と、ある種のナショナリズムがその動機の主要部分を占めていることは事実である。それでもまだ、1851 年ロンドン第 1 回万国博覧会は具体的なテーマを持っておらず、そのために展示品の陳列や分類法などが明確ではなかった。

これに対してフランスのパリで開催された万国博覧会では、それまでの産業博覧会で始まった、展示品の分類と系列化が更に洗練され、その後の万国博覧会において分類と展示が系統的に、科学的に行われ、照合するシステムを構築するものとなった。

このように、博覧会は国際的な規模になるにつれ、西欧国家間の比較を通じた、ナショナリズムを涵養する場となっていくた。一方で、西欧の外を含めた世界各地から収集されたモノは、体系的に分類し陣列するという博物学的手法によって展示されるが、そこでの「世界」の分類は、当時の西欧の文明と進歩を象徴する世界観をその基礎としていた。この西欧を中心とする「世界」は遠近法的に一望することが出来、人々はそれを身体化していったのである。視覚的・身体的な感覚と記憶を通して西欧各国の国民のアイデンティティを形成していったのである。

19 世紀から 20 世紀初頭、産業革命によって発達した科学技術や軍事力を背景に、地球のほぼ全域が帝国主義諸国によって植民地化され、支配と被支配という構造が生み出された。外ないし他者として西欧諸国のアイデンティティ構築に寄与しただけではなく、その西欧諸国が支配すべき「未開の土地」として

非西欧が提示されていく。こうして博覧会は政治的側面が強くなり、帝国主義国家の正当性を強調するディスプレイの場に変化していった。

それまで産業と技術の性格が強かった博覧会は、1889年のパリ万博以降、大きく変容する。この万博では、それまでの主要な展示物であった近代産業、西欧文明が生み出した技術以外に、植民地から「原住民」が重要な展示物として、会場内に仮設された集落の中で展示され、現地の農村風景が再現された。ここで展示された人々は社会進化論の理論を立証する「教材」として、進化の過程における「遅れた」存在として位置づけられた。「進化」した西欧と「遅れた」植民地との間に横たわる文明の大きな差を見せつけることにより、「未開」が「文明」に従属することを正当化したのである。

西洋近代諸国家による国民意識の形成と、国威発揚の場としての役割を、博覧会が果たした。それと同時に博覧会は、西欧によって創り上げられた序列化された世界を視覚的に表象した。西洋の経済的・政治的支配下においた非西洋文化を「劣等」な「他者」として自分たちと区別し、分類していった。その後、この視覚的効果を利用した帝国主義のディスプレイは、植民地展示という政治的性格を中心とした内容に大きく変化を遂げていくのである。博覧会によって、外部には帝国主義国家として「強い国家」を演出し、国民には自らの「文明」や「進化」の偉大さを目覚めさせ、植民地に対する「優越感」を与えた。このようにして、非西洋は、一方的に西欧帝国主義国家によって展示され、その展示は帝国主義国家に従属すべき、あるいは保護されるべき弱者のイメージを付与されていった。

欧米列強が世界を植民地分割した 19 世紀に、植民地化を回避し、それどころか 20 世紀に入ると列強の一角を占めるようになる日本は、博覧会との関係においても稀有な存在であった。明治維新以前から西洋の万国博覧会に参加していた日本は、万国博覧会を帝国主義諸国の「文化の比較観察の場」と理解した。日本が万国博覧会への参加に対しては、近代産業においてはまだ欧米に敵わない以上、出品物はいたずらに西洋風を追い求めず、諸外国に対して日本文化が優秀なものであることを示し、国際社会に日本の存在をアピールする方針を採用した。同様の手法でその後の 1878 年のパリ万博、1893 年にシカゴ万博、1900

年のパリ万博、そして 1904 年のセントルイス万博でも行われ、日本文化を世界にアピールすることに努めた⁶⁰⁰。その一方で西欧帝国主義国家を目標として新たな国家方針を模索していた日本にとって、国内産業の振興と国威発揚という近代の課題が明白になっていったという点において、万国博覧会が日本に与えた影響は非常に大きいものであった。

日本は近代国民国家の形成のために、西欧諸国の文明を積極的に取り入れ、さまざまな方法で近代化・工業化を推し進めた。その近代化の契機となったのは開国にともなって日本は西欧諸国家との格差を埋めるために、「富国強兵」という国家目標を掲げ、「文明開化」、「殖産興業」政策を推進したのである。

明治政府は殖産興業政策の一環として、万国博覧会への参加を通じて、西欧諸国から最新の製造技術や制度を摂取する一方、日本の伝統工芸品を広く海外に紹介し、輸出増進による産業振興を図ろうとしたの。そして、その万国博覧会を契機に、先進技術を有する現地の工場や職人を訪問し、技術を学ぶことも積極的に行われた。明治期日本がめざした近代化とは工業化、西欧化であり、視察であれ、技術伝習であれ、近代西欧社会に直接ふれ、体験することが、近代化を推進する最良の方法であると考えられたのである。

そもそも博覧会は西欧から輸入されたものでありながら、西欧の視線を意識して開催されたが、徐々に日本の伝統と栄華を内外に伝播するものとしての役割を付与されていった。日本が博覧会という「場」を通じて行ってきたことの一つは、「日本（文化）とは何か」という自己像の形成と、自己像形成のための他者との比較であった。明治政府は西欧と並ぶ帝国主義国家への発展の道を目指していくなかで、「日本」の存在を西欧列強に強く示そうとした。万国博覧会に出品された日本からの様々の伝統工芸品は「日本文化の代表」として「われわれ」の文化であるという意識を広く普及させた。また西洋で高い評価を得ることが文化的アイデンティティの形成に大きく影響していった。

国内に対しては、内国博覧会では日本各地の（後には植民地や新領土の）展示品が、分類され系列化されて展示された。各地にある「日本の」伝統文化とその技術能力が再評価され、「日本」という枠組みに位置付けられて、来場者は日本をそのようなものとして理解する。博覧会は、世界に誇るべき伝統・文化

⁶⁰⁰ 吉田光邦、前掲書、208頁。

を持ち、近代産業においても欧米に追い付かんとする日本を強調し、そのナショナリズムを高揚させて、日本人アイデンティティの確立と国民形成に大きな役割を果たした。

後発の帝国主義列強としての日本は、また、欧米と同じように、植民地や新領土を博覧会の展示物とした。強国であり近代化した日本を、植民地や新領土の住民に見せつけ、日本に恭順させるという意図はもちろんあった。しかしながら、彼らは単なる被支配者としてではなく、近代化した日本人の枠組みにいずれ入れるという前提があった点では、欧米の植民地展示とは決定的に異なるものであった。

西欧列強オランダにより植民地化され、後にはその植民地国家がそのままインドネシアという国民国家として独立することになるオランダ領東インドでは、博覧会は植民地支配の成果と実績、そして植民地国家の成立の成功を誇示するものであり、オランダによる植民地の正統性を証明する場として役割を果たした。欧米で開催された万国博覧会同様、植民地東インドでの博覧会も、欧米の先進性と強さを展示するものだった。他方、植民地の産品や文化を分類・系列化した展示は、東インドという、植民地化以前にはなかった、伝統的な王国や共同体を越えた空間をミニチュア化したものであり、それを端的に実体験できる場を「原住民」にも提供した。この博覧会という博物学的空間を通して、オランダ領東インドの「想像の共同体」が視覚可したのである。一方、オランダ領東インド政庁は文化的に「原住民」たちをオランダ本国に従属し、保護されるオランダ領東インドという植民地国家のなかに取り込もうとしたのだが、「原住民」はその植民地空間をインドネシアという新しい民族運命共同体に変換し、オランダに従属するのではなく、それに並列されるべき国民国家として鍛えていくことを選択することになるのだ。

その運動が、具体的な政治的独立という形で実った後も、新たな国民国家の内実はまだまだ多様であり、国民統合には程遠い状態だった。この国民国家に内実を与えるために、スカルノとスハルトはそれぞれ異なるアプローチを取ったが、いずれも博覧会および博物学的空間を活用した点では一致していた。

スカルノは、近代的なものであれ、古代の遺跡であれ、それをインドネシア

国民の偉大さを示すモニュメントとして活用した。同様の手法を、外国で開催される博覧会に参加する際も、用いた。この、国民国家とは本来関係のない、古い文化に、新たな意味、すなわちインドネシア民族の偉大さを付与する手法は、かつて日本が「正しい日本」の姿を内外に提示した手法を、より大胆にしたものであった。一方、スハルト時代に建設されたタマン・ミニでは、インドネシアの各民族やその文化が、行政区画（州）ごとに分類され、展示される。このような博物学的手法は、タマン・ミニが娯楽施設であると同時に、博覧会的空間であることを示している。多様な民族がインドネシアという一つの国民国家に属していること、国是「多様性のなかの統一」を、視覚的に国民に提示しているのである。

西欧で、極めて実利的な目的で生まれた産業博覧会は、西欧列強におけるナショナリズムの高揚や相互の競争のなかで、国威を発揚するものへ、そして各国が産業を競う国際的な場と発展していった。その発展の過程では、非西欧世界との接触、西欧の古典文化の再発見および復興（ルネッサンス）によって生まれた世界を理性によって分類し、系列化し、理解するという博物学的思考により、展示物が陳列された。19世紀から20世紀初頭にかけて、世界が欧米列強によって植民地分割されるのと並行して、博覧会において非欧米世界の文物、文化、そして人間が展示されるようになった。これらは欧米よりも「遅れて」「劣った」ものとして位置付けられ、列強の植民地支配を正当化する手段ともなった。

そうした列強の一つ、オランダの植民地東インドは、まさしく「遅れた」世界であり、その地の「原住民」は、万国博覧会において展示物となった。博覧会は、「原住民」に対して、彼らの劣等生と欧米の先進性を見せ付ける場となった。しかし、一方で、植民地域内の民族文化を分類し、系列化し、並列して展示した博覧会の空間は、そのまま東インドという空間のミニチュアであり、そこに陳列されていることそのものが、それを見た「原住民」に植民地空間を理解させ、「劣等」とされた彼らの中に、新たな意識を植え付けたのである。その意識こそナショナリズムの萌芽であった。

その意識の萌芽が、やがてインドネシアという国民国家の独立に繋がること

となる。そして、独立後もインドネシアの国民統合には、博覧会的空間、博物学的思考が活用され、実際の博覧会でも「強く偉大なインドネシア」が打ち出されてく。

西欧による植民地化を経験しなかった日本の場合、その博覧会経験も特異なものだった。欧米における博覧会の発展過程に途中から参加した日本は、博覧会の背景にある政治的意図と博物学的思考を読み取り、吸収し、意識的に自らの博覧会に応用していった。博覧会を産業振興に利用しつつ、他方では外に向けては、その古い伝統文化によって「正しい日本」の姿をアピールし、内に向けても「正しい日本」の姿を国民に提示していった。その意味において、インドネシアのような旧植民地が、一旦「劣等」な地位に置かれ、宗主国によって分類された姿を受け入れ、更にそれを引っくり返して、自らのものとしていく過程を経たのに対し、日本は特異な博覧会経験をしたと言える。また欧米の列強とは違い、その植民地展示においても、日本は特異であった。あくまで支配する対象の「原住民」とその文化を「遅れた」「劣等な」ものとした欧米の植民地展示に対し、日本はその「遅れた原住民」を近代化させ、日本国民にする意思を見せたのである。

世界の国々の博覧会経験あるいは博覧会的空間の経験は、おそらく、日本という例外を除くと、欧米列強のように「外」の世界を「他者」として自らを定位していく場合と、インドネシアのように欧米列強によって分類・整理された「原住民」がその姿を自意識として内在化させ、国民へと鍛え上げていく場合のいずれかに属するであろう。ただし、その詳細な過程やそれぞれの差異については、より精密な比較研究が必要となろう。

参考文献

一次資料

Booklet. *The Colonial and International Exhibition at Semarang 13 August-13 November 1914*.

De Indische Courant. June 20, 1925.

Duscuing, Francois (ed), *L'Exposition Universelle de 1867 Ilustree*, Publication Internationale Autorisee Par La Commission Imperiale

Guide Book For The 3rd Indonesian International Fair. Jakarta: NV. Kesedjahteraan, 1955.

Heel, van M.G (ed). *Gedenkboek van de Koloniale Tentoonstelling, Semarang, 20 August-22 November 1914*. Batavia: Mercurius, 1916.

Indie-Geillustreed Tijdschrift voor Nederland en Kolonien. September 14, 1927.

Indie-Geillustreed Weekblad Voor Nederland en Kolonien. May 11, 1921.

Indie-Geillustreed Weekblad voor Nederland en Kolonien. September 2, 1925.

Official Catalogue. *Colonial And Indian Exhibition 1886*. London: William Clowes and Sons, 1886.

Official Catalogue and Guide Book Pan-American Exposition 1901.

The Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851 Volume 1. London, 1851.

Official Catalogue Philippine Exhibits, Universal Exposition St Louis 1904

Pandji Poestaka. September 5, 1930.

The Committee of General Literature and Education. *Industry of Nations as Exemplified in the Great Exhibition 1851*. London: The Society, 1852.

拓殖博覧会事務取扱所、『拓殖博覧会事務報告』、1904年

田中芳男『平山成信編 澳国博覧会参同記要』森山春雍、1897年、国立国会図書館デジタルコレクション、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801730>（閲覧日：2018年8月27日）

第5回内国勸業博覧会『第5回内国勸業博覧会出品目録 台湾館』金港堂、1903年

東京国立博物館(編)、『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1973年

日本博物館協会『わが国の近代博物館施設発達資料の集成とその研究明治編第2・補遺』1965年

有信社(編)『明治記念拓殖博覧会案内記』有信社、1913年

二次資料

Allwood, John., *The Great Exhibitions*. London: Studio Vista, 1977.

Anderson, Benedict., “Notes on Contemporary Indonesian Political Communication.”*Indonesia* vol. 16, 1973.

Apa dan Siapa Indonesia Indah. Jakarta, 1975.

Appelbaum, Stanley., *The Chicago World’s Fair of 1893: A Photographic Record*. New York: Dover Publications, 1980.

Ardhiati, Yuke., *Bung Karno dalam Panggung Indonesia*. Jakarta: PT. Wastu Adicitta, 2013.

Auerbach, Jeffrey., *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*. Yale University Press, 1999.

Auerbach, Jeffrey and Peter Hoffenberg., *Britain, the Empire, and The World at the Great Exhibition 1851*. Ashgate, 2008.

Bataviaasch Nieuwsblad. July 18, 1923.

Benjamin, Walter., ‘Paris-Capital of the Nineteenth Century’, Eiland, Howard., Jennings, Michael W. (editors), *Walter Benjamin Selected Writings Volume 3 1935-1938*, Harvard University Press, 2002.

Bloembergen, Marieke., *Colonial Spectacles-The Netherlands and the Dutch East Indies at the World Exhibitions, 1880-1931*. Singapore University Press, 2006.

Boomgard, Peter (ed). *Empire and Science in the Making: Dutch Colonial Scholarship in Comparative Global Perspective 1760-1830*, Palgrave Macmillan, 2013

Brooks, D.Michael., *Civilizing The Metropole: The Role of Colonial Exhibitions in Universal and Colonial Expositions in Creating Greater France, 1889-1922*.

- Thesis, University of Central Florida, 2012.
- Carey, Peter., *Orang Cina, Bandar Tol, Candu dan Perang Jawa: Perubahan Persepsi tentang Cina 1755-1825*. Jakarta: Komunitas Bambu, 2008.
- Cote, Joost., "To See is to Know: the Pedagogy of the Colonial Exhibition, Semarang, 1914." *Paedagogica Historica: International Journal of the History of Education*, 2000: 36-1.
- Daniels, Morna. 'Paris National and International Exhibitions from 1798 to 1900: A Finding List of British Library Holdings' *eBLJ* Article 6, 2013: 1-49.
- Eerlich van Gogh, H.J., *De Kampong op de Tentoonstelling*, Amsterdam: J.H. De Bussy, 1883.
- Elson, R.E. "Constructing the Nation: Ethnicity, Race, Modernity, and Citizenship in Early Indonesian Thought." *Asian Ethnicity* [Routledge] 6-3, 2005.
- Encyclopaedie van Nederlandsche Indie 15*. S'Gravenhage, 1932.
- Findling, E. John (ed). *Historical Dictionary of World's Fairs and Expositions: 1851-1988*. New York: Greenwood Press, 1990.
- Gouda, Francis., *Dutch Culture Overseas- Colonial Practice in the Netherlands Indies 1900-1942*. Serambi, 2007..
- Greenhalgh, Paul., *Ephemeral Vistas, The Expositions Universelles, Great Exhibitions and World ' s Fair, 1851-1939*. Manchester University Press, 1988.
- Hall, Daniel., George, Edward., *A History of South-East Asia 4th Edition*. Macmillan Education, 1981.
- Hitchcock, Michael. "We Will Know Our Nation Better: Taman Mini and Nation Building in Indonesia." *Civilization* Vol. LII, no. 2, 2005.
- Ho, Sie Pek. "Indonesia Plans for NY Fair Exhibit" *Christian Science Monitor*, January 10, 1963.
- Hobsbawm, Eric., "Mass-Producing Traditions: Europe, 1870-1914." In *The Invention of Tradition*, by Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds). Cambridge: Cambridge University Press, 1983.
- Hobsbawm, Eric., *Age of Empire 1875-1914*. New York: Vintage Books, 1989.
- . *The Age of Revolution 1789-1848*. 1st Vintage Books, 1996.

- Hudson, Derek., Luckhurst, Kenneth W. *The Royal Society of Arts 1754-1954*. London: John Murray, 1954.
- Informasi Budaya dan Wisata. "Kalender Acara TMII 2018."
- Jackson, Anna. *Expo International Expositions 1851-2010*, V&A Publishing: South Kensington, 2010,
- Jackson, Elise Sharyn., *International Participation in the New York World's Fair 1964-1965*. Thesis, College of Arts and Science, New York University , 2014.
- Kaiser, Wolfram. "Vive la France! Vive la Republique? The Cultural Construction of French Identity at The World Exhibition in Paris 1855-1900." *National Identities* Volume 1-3 [2012]: 227-244.
- Kakuzo, Okakura. *THE HO - O-DEN (Phoenix Hall) An Illustrated Description of the Building Erected by the Japanese Government at the World's Columbian Exposition*, Jackson Park, Chicago." 1893.
- Kalb, Bernard. "Sukarno Chooses Site at 1964 Fair." *New York Times*, September 16, 1961.
- Kan, Bosboom. *Guide a travers la section des Indes Neerlandaises*. Groupe XVII (colonisation). Nijmegen: G.J. Thieme, 1900.
- Kartodirdjo, Sartono. "Kolonialisme dan Nasionalisme di Indonesia pada Abad 19 dan Abad 20 ." *Lembaran Sedjarah* No.8, Juni 1972.
- Khoo, Gilbert. *A History of South-East Asia since 1500*. Oxford University Press, 1983.
- Kostova, Julia. *Spectacles of Modernity: Anxiety and Contradiction at the Interwar Paris Fairs of 1925, 1931 and 1937*. Dissertation, Graduate School-New Brunswick Rutgers, The State University of New Jersey, 2011.
- Kunio, Yoshihara. "Oei Tiong Ham Concern: The First Business Empire of Southeast Asia." *Southeast Asia Studies* Vol. 27, No.2 [September 1989].
- Lombard, Denys. "Le Kampong Javanais a l' Exposition Universelle de Paris en 1889." *Archipel* vol. 43, 1991.
- Mainardi, Patricia. *Art and Politics of the Second Empire-The Universal Exposition of 1855 and 1867*. New Haven: Yale University Press, 1987.

- Mattie, Erik. *World's Fairs*. New York: Princeton Architectural Press, 1998.
- Monod, Emile. *L'Exposition Universelle de 1889*. Paris: Tome Illeme, 1890.
- Mrazek, Rudolf. *Engineers of Happy Land-Perkembangan Teknologi dan Nasionalisme di Sebuah Koloni*. Jakarta: Yayasan Obor Indonesia, 2006.
- Nas, J.M.Peter, and Pratiwo. "Jawa dan de Groote Postweg, La Grand Route, The Great Mail Road, Jalan Raya Pos" in Nas, J.M.Peter (ed) *Kota-Kota Indonesia: Bunga Rampai*. Gajah Mada University Press, 2007.
- New York Times*. "Indonesia Halts Plans for Pavilion at Fair." March 12, 1965.
- Niel, Robert van. *Sistem Tanam Paksa di Jawa*. Jakarta: LP3ES, 2003
- . *The Emergence of The Modern Indonesian Elite*, The Hague: Van Hoeve Publisher, 1970.
- Pemberton, J. "Recollections from 'Beautiful Indonesia (Somewhere Beyond the Postmodern)'" *Public Culture* vol.6 [1994].
- Picard, M., and Woods, R.E (eds). *Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Ricklefs, M.C. *Sejarah Indonesia Modern*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press, 2005.
- Rydel, W.Robert. *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*. University of Chicago Press, 1984.
- Shapin, Steven., Barnes, Barry., "Science, Nature and Control: Interpreting Mechanics' Institutes". *Social Studies of Science* 7(1), 1977: 31-74.
- Sekretariat Negara. "Pidato Presiden pada Pembukaan Rumah Sakit Pertamina Tanggal 6 Januari 1972."
- Something For Everyone: The 1964-1965 New Yorks World's Fair* . Catalogue, Flushing Council on Culture and Arts, 1995.
- Stoklund, Bjarne, 'The Role of the International Exhibitions in the Contruction of National Cultures in the 19th Century', *Ethnologia Europaea* 24, 1994: 35-44.
- Sutherland, Heather. "The Priyayi." *Indonesia* , Cornell University Southeast Asia Program Publications No. 19, 1975.
- Tallis, John., Strutt, J. G. (ed)., *History and Description of the Crystal Palace And*

- The Exhibition of the World's Industry in 1851*, London: J.Tallis and Co., 1852.
- Tseng, Y.Alice. *The Imperial Museum of Meiji Japan-Architecture and the Art of Nation*. University of Washington Press, 2008.
- Vaart, RobVan Der. Pater, Ben De. Oost, Katie. 'Geography in The Netherlands', *Belgeo 1*, 2004: 1-12. (URL: <http://belgeo.revues.org/10076>)
- Weber, Andreas *Hybrid Ambitions: Science, Governance, and Empire in the Career of Caspar G.C. Reinwardt (1773-1854)*. Leiden University Press, 2012.
- 青木豊、内川隆志「和歌山県博物館史」『國學院大學博物館学紀要』第14輯、1990年：61-86
- 秋田茂『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』、中公新書、2018年
- 芦崎瑞樹「19世紀オランダの植民地政策—植民地科学者としてのシーボルト」『パブリック・ヒストリー』14巻、西洋史学研究室大阪大学、2017年：51-69
- 阿部純一郎「帝国期日本のネーション形成と人種・民族研究の学知形成に関する移動論的研究—日本と台湾の博覧会事業および観光政策に注目して—」博士論文、名古屋大学環境学研究科、2010年
- 荒俣宏「博物学」『現代思想』第13巻2号、1985年
- アンダーソン、ベネディクト『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』書籍工房早山、2011年
- 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年
- 井上章一「日本館のエキゾチスム」、吉田光邦（編）『図説万国博覧会史 1851—1945』思文閣出版、1985年：157-158
- 大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』研究者出版、1993年
- 奥出直人「1893年シカゴ博のミッドウェイファーストフード・レストランのデザインの文化的起源」『アメリカ研究』22号、アメリカ学会、1988年：89-112
- 大貫涼子「地方博覧会の変容(序論)—明治前期を中心として」『國學院大學博物館学紀要』第37輯、2012年：1-16
- 大島清次『ジャポニズム—印象派と浮世絵の周辺』美術公論者、1980年

- 大橋庸子「博覧会と日本に自画像・世界像」『別冊太陽日本のこころ 133-日本の博覧会寺下勅コレクション』2005 年
- オールティック、R.D. 『ロンドンの見世物 II』図書刊行会、1990 年
- 海野弘『万国博覧会の二十世紀』平凡社、2013 年
- 笠原雅史「明治期博覧会と物産会」『岩手県博物館だより』2014 年 3 月: 2-3
- 金子淳『博物館の政治学』東京:青弓社、2001 年
- 木畑洋一、南塚信吾、加納格（著）「帝国と帝国主義」『シリーズ「21 世紀歴史学の創造」第 4 巻』有志舎、2012 年
- 清川雪彦「殖産興業政策としての博覧会・共進会の意義—その普及促進機能の評価—」『経済研究』39(4)、1988 年: 340—359
- 楠元町子「セントルイス万国博覧会における日本の展示品と評価」『現代社会研究科研究報告』2、2007 年: 135-147
- 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究—殖産興業・不平等条約・「内国」の意味」『日本史研究』375 号、1993 年: 54-68
- 『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』岩田書院、2005 年
- 『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010 年
- 久米邦武(編)、田中彰（校注）『特命全権大使米欧回覧実記 5』岩波書店、1985 年
- 久保田稔男「絵葉書『平和記念東京博覧會原色写真版』」『国立科学博物館研究報告』39、2016 年:97-107
- 栗原福也編『シーボルトの日本報告』平凡社、2009
- 黒沢文貴「日露戦争への道—三国干渉から伊藤の外遊まで—」『外交資料官報』第 28 号、2014 年: 34-57
- クンチャラニングラト(編)剛加藤(訳)『インドネシアの諸民族と文化』めこん、1980 年
- 小林丈広『明治維新と京都公家社会の解体』臨川選書、1998 年
- 近藤和彦『文明の表象英国』山川出版社、1998 年
- 近藤和彦（編）『西洋世界の歴史』山川出版社、2005 年
- 佐々本和博「宮城県博物館史」『國學院大學博物館學紀要』第 14 輯、1990 年: 28-39

- 坂上考『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会、2003年
- サイード、エドワード・W. 『オリエンタリズム』平凡社、1997年
- サイード、エドワード・W. (著)、大橋洋一 (訳)、『文化と帝国主義 1』、みず書房、1998年
- 重富公生「19世紀なかばイギリスの商品世界—1851年ロンドン万国博展示品を中心に—」『ヴィクトリア朝文化研究』第1号、2003年：5-23
- スロト、シテイスマンダリ(著)、舟知恵、松田まゆみ (訳)『民族意識の母カルティニ伝』井村文化事業社、1982年
- 園田英弘「日本イメージの演出」吉田光那(編)『図説万国博覧会史 1851-1942』、思文閣出版、2004年
- 「博覧会の背景」、吉田光邦(編)『万国博覧会の研究』京都:思文閣出版、1986年
- 竹内有子「水晶宮の展示：1851年大博覧会とヘンリー・コール」『表象文化研究』第4巻2号、2005年:47-68
- 田村貞雄『殖産興業』教育社、1977年
- 田中秀夫「ヨーロッパ啓蒙—共和主義と世界市民主義を中心に—」『調査と研究：経済論叢別冊』京都大学、第34号、2010年：1-17
- 田淵晋也「フローベールとゴンクール兄弟の見た万国博覧会:19世紀後半期におけるヨーロッパ文明の一樣相」『大阪府立大学紀要』第39号、1991年
- 土屋健治「インドネシアの社会統合」、平野健一郎・達味岡部・山影進・土屋健治 (著)『アジアにおける国民統合』、東京大学出版会、1988年
- 「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』 22巻-1号 1984年：53-74
- 「ジョクジャカルター中部ジャワにおける「みやこ」の成立と展開—」『東南アジア研究』 21、1983年:17-28
- 『インドネシア—思想の系譜』 経書書房、1994年 a
- 『インドネシア民族主義研究—タマン・シスワの成立と展開—』、創文社、1982年
- 「ナショナリズムと国民国家時代」、土屋健治 (編)『講座現代アジア 1—ナショナリズムと国民国家』東京大学出版会、1994年 b

- 寺本敬子『パリ万国は博覧会とジャポニズムの誕生』、思文閣出版、2017年
- デ・ヨセリン・デ・ヨング P.E.他（著）、宮崎恒二(訳)『オランダ構造人類学』せりか書房、1987年
- 土居平「台湾高砂族の研究—高砂族の研究史と分類（一）」『九州大学医療技術短期大学部紀要』13、1986年：59-65
- 戸田清子「近代日本における博覧会の産業振興的意義と役割—ウィーン万国博覧会を中心に—」『奈良県立大学研究季報』20(3)、2010年：157-183
- 「万国博覧会と産業振興—明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察—」『研究季報』奈良県立大学、第18巻、第3・4号併合、2008年
- 「明治前期における中等工業教育の展開—開成学校制作学中等工業教育—」『研究季報』奈良県立大学、第18巻、第1・2号併合、2007年：57-66
- 戸田貞三『家族構成』新泉社、1982年
- 戸津正勝「インドネシア共和国憲法とパンチャシラ（建国五原則）」『国士舘大学教養論集』第18号、1984年：95-98
- 「インドネシア、ジャワ島、ジョグジャカルタ特別州、コタゲデの伝統工芸」『宗教・文化研究所紀要』第11号、1993年：25-97
- 「インドネシアにおける民族文化と国民統合—BATIKの変容過程を中心として—」『教養論集』第28号、1989年：51-83
- 戸津正勝、カルティカハンダヤニ「インドネシアにおける国語の形成過程—ムラユ語からインドネシア語へ—」『国士舘教養論集』第63号、2008年
- 中山治一『帝国主義の展開』東京：講談社、1990年
- 中村恵三『1900年パリ万国博覧会の建築』足利工業大学、1987年
- 中村孝志「オランダの東南アジア研究」『東南アジア研究』京都大学、第2巻第1号、1964年：94-106
- 長島武之、柳澤伸一、大津正道（共編）『新考・西洋の歴史』、南窓社、1998年
- 永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、1980年、
- 永渕康之「パリにきたバリ—1931年パリ国際植民地博覧会オランダ館—」『季刊民族学』1994年：44-54
- 西山清「変貌する社会構造と万国博覧会」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第21号、2011年：197-206

- 西川智之「ウィーンのジャポニズム（前編）1873年ウィーン万博博覧会」『言語文化論集』2006年：175-187
- 西村三郎『文明のなかの博物学-西欧と日本(上)』紀伊国屋書店、1999年
- 橋爪紳也「日本に博覧会がやってきた」橋爪紳也（監修）『別冊太陽：日本のこころ 133-日本の博覧会寺下コレクション』平凡社、2005年
- 橋爪紳也（監修）『別冊太陽日本のこころ 133-日本の博覧会寺下勅コレクション』平凡社、2005年
- 原武史『可視化された帝国』みすず書房、2001年
- 樋口いづみ「日本の万国博覧会参加における「実演」とその役割に関する一考察—1878年パリ万国博覧会を事例として—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』16-1、2008年：197-206
- 平井茜「1893年シカゴ万国博覧会に於ける日本館について」『博物館学紀要』國學院大學、39輯、2014年：91-102
- 日野栄一「万国博覧会と日本の『美術工芸』」吉田光邦（編）『万国博覧会の研究』京都：思文閣出版、1996年
- 平野繁臣『国際博覧会歴史事典』内山工房、1999年
- 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成』岩波書店、2005年
- 福井庸子「わが国における博物館成立過程の研究—展示空間の教育的特質—」博士論文、早稲田大学、2009年
- 福士純「1886年「植民地・インド博覧会」とカナダ」『社会経済史学』第72巻、5号、2007年：611-632
- 「1886年「植民地・インド博覧会」と植民地間の競争意識」『駿台史学』第131号、2007年：45-68
- 布野修司「カンポンの歴史的形成プロセスとその特質—インドネシア都市の生活空間に関する研究（1）」『日本建築学会計画系論文報告集』第433号、1992年3月：85-94
- フーコー、ミッシェル『監獄の誕生—監視と賞罰—』新潮社、1977年
- フジタニ、T. 『天皇のページェント』NHKブックス、1994年
- 増田義郎「大航海時代の構図」『亜細亜大学国際関係紀要』第7-2、1998年：5-

- 松田京子『帝国の視線—博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2007年
- 松宮秀治「明治前期の博物館政策」西川長男・松宮秀治編『幕末・明治期国民国家形成と文化変容』新曜社、2002年：253-276
- 『ミュージアムの思想』白水社、2009年
- 松村昌家『ロンドン万国博覧会 1851年新聞雑誌記事集成』、第1巻、本の友社、1996年
- 松本彰、石博高（編）『国民国家と帝国—ヨーロッパ諸国民の創造』出川出版社、2005年
- 三島雅博「明治期の万国博覧会日本館に関する研究」博士学位論文、神戸大学、1993年
- 村上直次郎、原徹郎『蘭領印度史』東亜研究所、1942年
- 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社、1994年
- 村田麻里子「ミュージアムの受容—近代日本における「博物館」の射程」『京都精華大学紀要』第35号、2009年：84-122
- 宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社、2006年
- 間壁忠彦「明治初期に中国地方小田県で開催された展覧会」『博物館学雑誌』第24巻第2号、全日本博物館学会、1999年：91-97
- マクニール、ウィリアム・H・（著）、増田義郎、佐々木昭夫（訳）『世界史（下）』中央公論新社、2012年
- 『世界史（上）』中央公論新社、2012年
- マーシャル P.J.、ウィリアムス G.、大久保桂子（訳）『野蛮の博物学誌—18世紀イギリスが見た世界』平凡社、1989年
- 宮本謙介『概説インドネシア経済史』有斐閣、2003年
- 三好信浩『日本工業教育発達史の研究』風間書房、2005年
- モルトン、パトリシア（著）長谷川章（訳）『パリ植民地博覧会—オリエンタリズムの欲望と表象』東京：ブリュッケ、2002年
- 保本野夢「「古都」京都と天皇制の可視化」『空間・社会・地理思想』第9号、2004年：19-53
- 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年
- 山影進「ナショナリズムと国民国家」『民族に関する基礎研究』総合研究開発機

構、1993 年

山田俊、安田政彦「幸絵葉書に見る大正時代の博覧会」『帝塚山學院大学研究論集』 42 号、2007 年:35-62

山本有造「近代日本帝国における植民地支配の特質」『経済志林』第 73-4、2006 年：97-110

山崎信子「近代日本における〈家庭教育〉—明治期にみられる「主婦」の位置づけの変遷—」『創価大学大学院紀要』28 号 2006 年:173-192

横山秀樹「新潟県における明治時代の博覧会・博物館史」『國學院大學博物館学紀要』第 5 輯、1980 年:14-18

吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店、1999 年

吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851—1942』思文閣出版、2004 年

——『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986 年

吉田信「オランダ植民地統治と法の支配—統治法 109 条による「ヨーロッパ人」と「原住民」の創出」『東南アジア研究』40 卷 2 号 2002 年：115-140

吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社、1992 年

——「博覧会の政治—明治国家形成と内国勸業博覧会—」『都市問題』、東京市政調査会、第 79 卷 11 号、1988 年：39-54

レッグ、ジョン D. 『インドネシア歴史と現在』サイマル出版会、1984 年

ウォーラーステイン（著）I、川北稔（訳）『近代世界システム：農業資本主義と『ヨーロッパ世界経済』の成立 I』岩波書店、1981 年

ウィニッチャクン、トンチャイ（著）、石井米雄（訳）『地図からつくったタイ—国民国家誕生の歴史』明石書店、2003 年

付録

付録 1

西欧博覧会年表

開催年	博覧会名	開催地	開催国
1760	Society of Artists of Great Britain Exhibition	London	Great Britain
1761	Society of Arts Exhibition	London	Great Britain
1761	Society of Artists of Great Britain Exhibition	London	Great Britain
1769-1780	Royal Academy Exhibition	London	Great Britain
1780-1836	Royal Academy Exhibition	London	Great Britain
1789	Products of Industry Exhibition	Geneva	Switzerland
1790	Products of Industry Exhibition	Hamburg	Germany
1791	Products of Industry Exhibition	Prague	Czechoslovakia
1797	National Exhibition	Forecourt of the Louvre, Paris	France
1798	French National Exhibition (1)	Champs de Mars, Paris	France
1801	French National Exhibition (2)	Louvre Courtyard, Paris	France
1802	French National Exhibition (3)	Louvre Courtyard, Paris	France
1806	French National Exhibition (4)	Esplanade des Invalides, Paris	France
1818	National Exhibition	Munich	Germany
1819	French National Exhibition (5)	Inside the Louvre, Paris	France
1820	National Exhibition	Ghent	Belgium
1823	French National Exhibition (6)	Inside the Louvre, Paris	France
1823	National Exhibition	Stockholm	Sweden
1824	National Exhibition	Tournai	Belgium
1825	National Exhibition	Haarlem	Belgium
1826	National Exhibition	Dublin	Ireland
1827	French National Exhibition (7)	Inside the Louvre, Paris	France
1827	National Exhibition	Nantes	
1827	National Exhibition	Madrid	Spain
1828	National Exhibition	New York	USA
1829	National Exhibition	Moscow	Russia
1829	National Exhibition	St Petersburg	Russia
1830	National Exhibition	Brussels	Belgium
1834	French National Exhibition (8)	Place de la Concorde, Paris	France
1835	National Exhibition	Lille	France

1835	National Exhibition	Bordeaux	France
1836	National Exhibition	Toulouse	France
1836	National Exhibition	Dijon	France
1837	Models of Machinery, Philosophical Instruments, Works in Fine and Useful Arts, Objects in Natural History and Specimens of British Manufacturers, etc	Manchester	Great Britain
1837–1868	Royal Academy Exhibition	London	Great Britain
1839	French National Exhibition (9)	Champs Elysees, Paris	France
1844	French National Exhibition (10)	Champs Elysees, Paris	France
1845	National Exhibition	Bordeaux	France
1847	Society of Arts Exhibition	London	Great Britain
1849	French National Exhibition (11)	Champs Elysees, Paris	France
1849	National Industrial Exhibition	Birmingham	Great Britain
1850	La Exposicion publica	Madrid	Spain
1851	The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations	London	Great Britain
1852	National Exhibition	Cork	Ireland
1853	Great Industrial Exhibition	Dublin	Ireland
1853–1854	World's Fair of the Works of the Industry of All Nations (New York's World Fair)	New York	USA
1855	Exposition Universelle (First Paris World Exhibition)	Paris	France
1857	The Art Treasures Exhibition	Manchester	Great Britain
1862	London International Exhibition of Industry and Art	London	Great Britain
1865	International Exhibition of Arts and Manufactures	Dublin	Ireland
1865	New Zealand International Exhibition	Dunedin	New Zealand
1866–1867	Intercolonial Exhibition of Australasia	Melbourne	Australia
1866	Yorkshire Fine Art and Industrial Exhibition	York	Great Britain
1867	Exposition Universelles de Paris	Paris	France
1868	National Exhibition of Works of Art	Leeds	Great Britain
1869	Exposition des Beaux-Arts Appliqués à l'industrie	Paris	France
1869	Royal Academy Exhibition	London	Great Britain
1870	International Exhibition	Sydney	Australia
1871	1st Annual International Exhibition	London	Great Britain
1872	2nd Annual International Exhibition	London	Great Britain
1873	Polytechnic Exhibition	Moscow	Russia
1873	3rd Annual International Exhibition	London	Great Britain
1873	Welt-Ausstellung in Wien (World	Vienna	Austria

	Exhibition in Vienna)		
1874	4th Annual International Exhibition	London	Great Britain
1875	Exposicion Internacional de 1875	Santiago	Chile
1876	Exposition Internationale	Brussels	Belgium
1876	Centennial Exhibition of Arts, Manufacturers and Products of the Soil and Mine	Philadelphia	USA
1877	South African International Exhibition	Cape Town	South Africa
1878	Exposition Universelle de Paris	Paris	France
1879	Garden Palace Exhibition (Sydney International Exhibition)	Sydney	Australia
1880	International Exhibition of Arts, Manufactures and Agricultural and Industrial Products of All Nations	Melbourne	Australia
1881	Adelaide International Exposition	Adelaide	Australia
1881	Colonial Exhibition	Perth	Australia
1882	Colonial Exhibition	Christchurch	New Zealand
1883	The International Colonial and Export Trade Exhibition	Amsterdam	Netherland
1883	The American Exhibition of the Products, Art and Manufacturers of Foreign Nations	Boston	USA
1883-1884	Calcutta International Exhibition	Calcutta	British India
1883-1887	Southern Exhibition	Louisville	USA
1884-1885	World's Industrial and Cotton Centennial Exhibition	New Orleans	USA
1885	Exposition Universelles d'Anvers	Antwerp	Belgium
1886	Edinburg International Exhibition	Edinburgh	Scotland
1886	Colonial and Indian Exhibition	London	Great Britain
1887-1888	Jubilee International Exhibition	Adelaide	Australia
1888	Exposicion Universal de Barcelona	Barcelona	Spain
1888	International Exhibition of Industry, Science and Art	Glasgow	Scotland
1888	Grand Concours International des Sciences et de l'Industrie	Brussels	Belgium
1888-1889	Centennial International Exhibition	Melbourne	Australia
1889	Exposition Universelle de Paris	Paris	France
1889-1890	New Zealand and South Seas Exhibition	Dunedin	New Zealand
1891	International Exhibition		Jamaica
1891-1892	Tasmania International Exhibition	Launceston	Australia
1892	South Africa and International Exhibition	Kimberley	South Africa
1893	World's Columbian Exposition	Chicago	USA
1894	California Midwinter International Exposition	San Fransisco	USA

1894	Exposition Internationale d'Anvers	Antwerp	Belgium
1894-1895	Tasmania International Exhibition	Hobart	Australia
1895	Atlanta Cotton State and International Exposition	Atlanta	USA
1897	Exposicion Centro-Americana		Guatemala
1897	Queensland International Exhibition	Brisbane	Australia
1897	Exposition Internationale de Bruxelles	Brussels	Belgium
1897	Tennessee Centennial and International Exposition	Nashville	USA
1897	General Art and Industrial Exposition of Stockholm	Stockholm	Sweden
1898	The Trans-Mississippi and International Exposition	Omaha	USA
1900	Exposition Universelle et Internationale de Paris	Paris	France
1901	Pan-American Exposition	Buffalo	USA
1901	Glasgow International Exhibition	Glasgow	Scotland
1901-1902	South Carolina Interstate and West Indian Exposition	South Carolina	USA
1902	Esposizione Internazionale d'Arte Decorativa Moderna	Turin	Italy
1902-1903	Exposition Francaise et Internationale	Tonkin (Hanoi)	Vietnam
1904	Louisiana Purchase Exposition	St Louis	USA
1905	Exposition Universelle et Internationale de Liege	Liege	Belgium
1905	The Lewis and Clark Centennial Exhibition	Portland	USA
1906	Esposizione Internazionale del Sempione	Milan	Italy
1906-1907	New Zealand International Exhibition of Arts and Industries	Christchurch	New Zealand
1907	Irish International Exhibition	Dublin	Ireland
1907	Jamestown Tercentennial Exhibition	Hampton Roads	USA
1908	Franco-British Exhibition	London	Great Britain
1909	Alaska-Yukon Pacific Exposition	Seattle	USA
1910	Exposition Universelle et Internationale de Bruxelles	Brussels	Belgium
1910	Japan-British Exhibition	London	Great Britain
1911	Esposizione Internazionale d'Industria e del Lavoro	Turin	Italy
1913	Tentoonstelling de Vrouw 1813-1913	Amsterdam	Netherland
1913	Exposition Universelle et de Gand/Wereldtentoonstelling Gent	Ghent	Belgium

1914	Koloniale Tentoonstelling	Semarang	Netherlands East Indies
1915	Panama-Pacific International Exposition San Francisco	San Francisco	USA
1915-1916	Panama-California International Exposition	San Diego	USA
1924-1925	British Empire Exhibition	Wembley	Great Britain
1924-1926	New Zealand and South Seas Exhibition	Dunedin	New Zealand
1925	Exposition Internationale des Arts Decoratifs et Industriels Modernes	Paris	France
1926	Sesqui-Centennial Exposition	Philadelphia	USA
1929	Exposicion Internacional de Barcelona	Barcelona	Spain
1930	Exposicion Ibero-Americana	Seville	Spain
1930	Exposition Internationale, Colonial, Maritime, et d'Art Flammand	Antwerp	Belgium
1930	Exposition Internationale de la Grande Industrie, des Sciences et Applications de l'Art Wallon	Liege	Belgium
1930	Stockholm International Exhibition	Stockholm	Sweden
1931	Exposition Coloniale Internationale	Paris	France
1933-1934	A Century of Progress, International Exposition	Chicago	USA
1935	Exposition Universelle et Internationale de Bruxelles	Brussels	Belgium
1935	California Pacific International Exposition	San Diego	USA
1936	Great Lake Exposition	Cleveland	USA
1937	Exposition Internationale des Arts et Techniques dans la Vie Moderne	Paris	France
1938	Empire Exhibition	Glasgow	Scotland
1939	New York World's Fair	New York	USA
1939	Exposition Internationale de la Technique de l'Eau	Liege	Belgium
1939	Deutsche Kolonial Ausstellung	Dresden	Germany
1939-1940	Golden Gate International Exhibition	San Francisco	USA
1939-1940	New Zealand Centennial Exhibition	Wellington	New Zealand

參考資料：

Anna Jackson, "Expo-International Expositions 1851-2010", V&A Publishing, London, 2012.

Paul Greenhalgh, "Ephemeral Vistas: The Expositions Universelles, Great

Exhibitions, And World's Fair, 1851-1939", Manchester Univ. Press, Manchester, 1988.

Robert W. Rydell, "All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916", Univ. of Chicago Press, Chicago, 1984.

付録 2

明治・大正期 日本国内博覧会一覧表

(空欄はデータ不明)

	開催時期		博覧会名	開催地	主催	入場者数 (人)
1	1871	10月10日～11月11日	京都博覧会	京都府	京都博覧会社	11,455
2	1872	3月10日～5月30日	第1回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	39,404
3		3月10日～4月30日	湯島聖堂博覧会	東京都・湯島聖堂大成殿	文部省博物局	192,878
4		5月16日～5月29日	額田博覧会	愛媛県・岡崎専福寺		49,705
5		5月20日～6月10日	和歌山博覧会	和歌山県		
6		6月10日～7月10日	広島博覧会	広島県	広島県	
7		9月16日～10月16日	金沢博覧会	石川県	加賀 金沢市	
8	1873	3月～4月	琴比羅博覧会	香川県・琴比羅神社	金比羅宮	
9		3月13日～6月10日	第2回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	43,457
10		3月15日～5月15日	伊勢山田博覧会	三重県	度会県庁神社庁	
11		3月15日～3月30日	茨城博覧会	茨城県	三木隆助	
12		4月15日～7月31日	山下御門内博覧会	東京都	内務省博覧会事務局	
13		11月10日～12月24日	松本博覧会	長野県	松本博覧会社	
14	1874	6月1日～7月4日	新潟博覧会	新潟県	新潟県	
15		3月16日～6月10日	山下御門内博覧会	東京都	内務所博覧会事務局	
16		4月1日～6月8日	第3回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	281,219
17		5月1日～6月10日	名古屋勸業博覧会	愛知県	愛知県下博覧会社	300,000
18			奈良博覧会	奈良県・東大寺大仏殿		
19	1875	2月15日～	新吉原博覧会	東京都・江戸町金瓶桜		
20		3月1日～6月8日	第4回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	337,542
21		4月1日～6月19日	第1回奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会社	
22		6月17日～7月1日	新潟博覧会	新潟県		
23	1876	3月15日～6月22日	第5回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	241,764
24		3月15日～6月25日	第2回奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会	
25		4月1日～6月10日	堺博覧会	大阪府・堺 南宗寺	堺博物館	
26		4月15～6月25日	宮城県博覧会	宮城県・仙台、桜ヶ丘公園	宮城県	
27	1877	2月1日～5月1日	第3回奈良博覧会	奈良県・東大寺大仏殿	奈良博覧会社	
28		3月10日～6月22日	第6回京都博覧会	京都市	京都博覧会社	63,782
29		4月10日～6月8日	堺博覧会	大阪府	堺博物館	
30		5月15日～6月15日	第1回秋田博覧会	秋田県		10,000
31		8月21日～11月30日	第1回内国勸業博覧会	東京都	政府	454,168
32	1878	3月15日～6月22日	第7回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	167,287
33		3月20日～5月8日	松山全国物産博覧会	愛媛県	松山博覧会社	
34		4月1日～7月1日	第4回奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会社	
35		9月15日～11月3日	名古屋博覧会	愛知県	名古屋博覧会社	30,000
36	1879	3月1日～6月30日	高松博覧会	香川県	琴平博覧会社	
37		3月10日～5月4日	第5回奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会社	
38		3月15日～6月12日	長崎博覧会	長崎県		

39		3月15日～6月22日	第6回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	186,148
40		3月15日～6月22日	大阪博覧会	大阪府	大阪府	
41		4月1日～4月14日	岡山博覧会	岡山県	岡山県	
42		4月10日～8月9日	筑波博覧会	茨城県	民間人	
43		10月11日～10月15日	農業博覧会	北海道		
44	1880	3月10日～5月1日	奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会社	
45		3月15日～6月15日	琴平博覧会	愛媛県	愛媛県	
46		3月1日～6月8日	第9回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	176,538
47		4月1日～6月10日	長崎博覧会	長崎県	長崎県博覧会本部	
48		4月1日～5月20日	第2回愛知県博覧会	愛知県	愛知県	
49		4月10日～6月28日	茨城博覧会	茨城県		
50		4月10日～6月12日	大分博覧会	大分県	大分県	
51		4月15日～6月13日	秋田博覧会	秋田県		22,700
52		8月10日～10月8日	宮城県博覧会	宮城県	宮城県	
53	1881	3月1日～6月8日	第10回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	188,584
54		3月1日～6月30日	第2回内国勸業博覧会	上野東京都	政府	823,094
55		3月10日～5月28日	奈良博覧会	奈良県	奈良博覧会社	118,584
56	1882	3月1日～6月8日	第11回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	135,722
57	1883	3月1日～6月8日	第12回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	117,039
58		3月1日～6月8日	第1回水産博覧会	東京都	農商務省	230,000
59	1884	3月1日～6月8日	第13回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	91,515
60	1885	3月1日～6月8日	第14回京都博覧会	京都府	京都博覧会社	54,948
61	1890	4月1日～7月31日	第3回内国勸業博覧会	東京都・上野公園	政府	1,023,693
62		4月2日～6月1日	京都美術博覧会	京都府御苑	京都博覧会社	63,846
63	1893	3月1日～5月28日	第17次奈良博覧会(美術工芸博覧会)	奈良県	奈良博覧会社	
64	1894		富山市設博覧会	富山県		
65	1895	4月1日～7月31日	第4回内国勸業博覧会	京都府岡崎公園	政府	1,136,695
66	1897	4月1日～5月20日	創立25周年記念博覧会	京都府岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	157,200
67		9月1日11月30日	第2回水産博覧会	兵庫県	農商務省	
68	1898	4月11日～5月15日	第1回婦人製品博覧会	京都・御苑内旧博覧会館	京都博覧協会	60,486
69	1899	4月1日～5月20日	全国意匠工芸博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	129,973
70	1900	4月1日～5月20日	全国貿易品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	127,674
71	1901	4月1日～5月20日	全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	129,674
72	1902	4月1日～5月20日	第2回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	10,174
73	1903	3月1日～7月31日	第5回内国勸業博覧会	大阪・天王寺今宮	政府	4,350,693
74	1904	4月1日～6月9日	第3回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	152,493
75	1905	4月1日～5月31日	第4回内国勸業博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	184,617
76	1906	3月15日～5月31日	戦勝記念博覧会	大阪・天王寺今宮	大阪府	
77		2014/9/1	汽車博覧会	国内各地(京都、大阪、神戸、東北、信越、北陸、中央各線)	大阪時事新報社	
78		9月10日～11月	巡航船博覧会	国内各地	報知新聞社	
79		10月1日～11月5日	こども博覧会	東京・上野公園	同文間	
80		11月1日～12月1日	こども博覧会	大阪・府立博物館		

81	1907	3月20日～7月31日	東京勸業博覧会	東京・上野公園	東京府	6,802,768
82		4月1日～7月31日	東京婦人博覧会	東京・芝公園（東京勸工場）	婦人博覧会協会	
83		6月24日～7月23日	郵便博覧会	東京・芝公園		
84	1908	4月1日～5月31日	第5回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	215,685
85	1909	4月1日～5月20日	第1回発明品博覧会	東京・上野公園	帝国発明協会	184,965
86		4月1日～5月31日	第6回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	216,690
87		4月1日～	第1回児童博覧会	東京・三越呉服店		
88	1910	4月1日～5月31日	第7回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	175,893
89		4月1日～5月31日	第1回日本産業博覧会	大阪	日本産業協会	
90		4月1日～5月31日	第1回貿易品博覧会	東京・上野公園	東京勸業協会	30,493
91		5月1日～10月15日	東京実演博覧会	東京・芝浦埋立地・ロゼッタ丸		
92			北海道汽車博覧会	北海道	小樽新聞社	
93	1911	3月15日～6月8日	第2回こども博覧会	大阪・府立博物場		
94		4月1日～5月31日	京都博覧協会創立40年記念・全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	265,979
95		4月1日～5月31日	第2回日本産業博覧会	大阪	日本産業協会	
96		6月～8月	第1回納京博覧会	東京・上野公園	東京勸業協会	
97		7月11日～8月31日	納京博覧会	大阪・天王寺公園	大阪日報社	
98		10月10日～10月29日	山林こども博覧会	大阪・箕面動物運動場	大阪・箕面有馬電鉄	
99	1912	4月1日～5月31日	第3回日本産業博覧会	大阪	日本産業協会	
100		4月1日～5月31日	第8回全国製産品博覧会	京都・岡崎公園博覧会館	京都博覧協会	201,249
大正期						
102	1912	10月1日～11月29日	明治記念拓殖博覧会	東京・上野公園	北海道出品協会	616,315
103			山陰鉄道開通記念全国特産品博覧会	鳥取県		
104			第2回東京勸業博覧会	東京		
105	1913	2月15日～3月28日	旅行博覧会	大阪・府立博物場	旅行博覧協会	
106		4月1日～5月31日	第4回日本産業博覧会	大阪	日本産業協会	
107		4月1日～	第7回全国特産製品博覧会	広島県		
108		4月20日～5月15日	舞鶴築港記念全国物産博覧会	京都府	京都府・舞鶴港	
109		4月21日～6月19日	明治記念拓殖博覧会	大阪府	大阪商工会	161,427
110		6月25日～8月31日	明治記念博覧会	東京都	やまと新聞社	
111			第8回全国特産品博覧会			
112			婦人博覧会	兵庫県		
113	1914	3月15日～5月13日	第二回発明博覧会	大阪府	帝国発明協会、大阪事業協会	307,573
114		3月20日～7月31日	東京大正博覧会	東京都	東京府	7,463,400
115		4月1日～5月31日	全国美術工芸博覧会	京都府	京都博覧協会、京都美術協会	100,069
116		4月1日～5月31日	第6回日本産業博覧会	大阪	日本産業協会	
117		4月1日～	婚礼博覧会	兵庫県		
118		7月1日～	戦勝記念博覧会	東京・上野公園	やまと新聞社	
119		7月11日～	第二回納涼博覧会	大阪府	大阪日報社	

120		9 月 15 日～12 月 15 日	第 2 回明治記念博覧会	大阪府・天王寺公園	中国民報社	
121		10 月 1 日～11 月 29 日	大典記念神戸博覧会	兵庫県	神戸新聞社	
122	1915	1 月 20 日～	戦捷記念博覧会	東京都・上野公園	毎日新聞社	
123		4 月 1 日～5 月 21 日	戦捷記念博覧会	京都府・岡崎公園勸業館	京都博覧会協会・京都美術協会	184,026
124		4 月 1 日～5 月 31 日	第 7 回日本産業博覧会	大阪府	日本産業協会	307,064
125		7 月 10 日～10 月 10 日	江戸記念博覧会	東京都	中央新聞社	
126		7 月 15 日～8 月 30 日	大阪衛生博覧会	大阪府	大阪衛生組合連合会	
127		10 月 1 日～12 月 3 日	大札記念大阪博覧会	大阪府	大阪商業会議所・大阪実業協会	135,522
128		10 月 10 日～12 月 19 日	大典記念京都博覧会	京都府	京都市	861,155
129			第 2 回発明品博覧会	東京都	帝国発明協会	
130			大札記念交通電気博覧会			
131			家庭博覧会	東京都・上野公園	国民新聞社	
132	1916	9 月 1 日～11 月 30 日	海事水産博覧会	東京都・上野公園	帝国海事協会	
133		9 月 15 日～11 月 26 日	婦人子供博覧会	東京都・上野公園	読売新聞社	
134		10 月 15 日～11 月 15 日	通俗教育こども博覧会	京都府・岡崎公園第 2 勸業館		
135			大正製菓博覧会			
136			第 2 回国産食料品博覧会			
137			内国特産飲食品博覧会			
138	1917	3 月 20 日～5 月 31 日	奠都 50 年記念博覧会	東京都・上野公園	読売新聞社	
139		4 月 1 日～6 月 7 日	第 8 回日本産業博覧会	大阪府	日本産業博覧会	
140		4 月 1 日～5 月 31 日	京都博覧会	京都府・岡崎公園勸業館	京都博覧会協会・京都美術協会	239,245
141		4 月 20 日～5 月 19 日	津山産業博覧会	岡山県・津山		
142		9 月 20 日～11 月 18 日	第 1 回化学工業博覧会	東京都・上野公園	化学工業協会	
143			神戸市衛生博覧会	兵庫県		
144			福山市制記念全国特産品博覧会	広島県	福山市	
145	1918	3 月 20 日～5 月 20 日	電気博覧会	東京都・上野公園	電気協会	1,146,369
146		4 月 1 日～5 月 31 日	第 16 回京都博覧会	京都府・岡崎公園勸業館	京都博覧会協会・京都美術協会	186,796
147		4 月 15 日～6 月 15 日	大阪化学工業博覧会	大阪府・天王寺公園	大阪商業会議所	417,926
148		7 月 11 日～9 月 8 日	第 2 回婦人子供博覧会	東京都・上野公園	読売新聞社	
149		8 月 1 日～9 月 19 日	開道 50 年記念北海道博覧会	北海道	北海道農友会	
150			宝塚こども博覧会	兵庫県		
151			高岡産業博覧会	富山県		1,000,000
152	1919	3 月 18 日～5 月 31 日	畜産工芸博覧会	東京都・上野公園	中央畜産会	502,848
153		4 月 1 日～5 月 31 日	全国染織工業博覧会	京都府・岡崎公園勸業館	京都博覧会協会・京都美術協会	142,908
154		4 月 20 日～5 月 20 日	上海日華貿易博覧会	上海	上海日華貿易博覧会	
155		7 月 5 日～8 月 31 日	戦捷記念全国衛生博覧会	京都府・岡崎勸業館	京都市連合衛生組合	564,201
156		9 月 1 日～12 月 10 日	貿易博覧会	大阪府・府立商品陣列所	大阪府	

157			全国特産品博覧会			
158	1920	3月21日～	新聞博覧会			
159		4月1日～5月20日	全国勧業博覧会	京都府・岡崎公園勧業館特設館	京都博覧会社協会・京都美術協会	332,387
160		4月20日～5月31日	生活改造博覧会	大阪府・大阪商品陳列所	桜楓会大阪支部	100,000
161		11月	万国婦人生活品展覧会	東京都		
162			福岡工業博覧会	福岡県		
163	1921	3月2日～4月20日	大正衛生博覧会	東京都・両国国技館	大日本衛生普及会	
164		3月20日～5月22日	内外産業博覧会	京都府・岡崎公園勧業館特設館	京都博覧会協会	252,129
165		3月21日～5月1日	児童衛生博覧会	大阪府・府立商品陳列所	大阪府衛生会	
166		7月5日～9月5日	戦後発展全国工業博覧会	京都府・岡崎公園		
167		10月12日～11月10日	伊賀文化産業城落成記念全国博覧会	三重県・上野白鳳公園	伊賀上野町	
168		10月	工作機械博覧会	大阪府		
169		11月	大正衛生博覧会	広島県		
170			北海道拓殖博覧会	北海道		
171			戦後発展全国商工博覧会	広島県・府中町		
172			コドモ博覧会	福岡県・西公園		
173	1922	3月10日～7月31日	平和記念東京博覧会	東京都・上野公園	東京都	11,032,584
174		3月20日～5月31日	第1回家庭博覧会	京都府・岡崎公園勧業館	京都博覧協会	212,838
175		4月1日～4月30日	大阪計量博覧会	大阪府・府立商品陳列所	計量革新会	
176		9月21日～10月20日	住宅改造博覧会	大阪府	日本建築協会	68,000
177			平和記念全国商工業美術博覧会			
178	1923	3月20日～5月18日	第3回発明品博覧会	東京都・上野公園	帝国発明協会	425,824
179		3月20日～5月20日	第2回家庭博覧会	京都府・岡崎公園勧業館	京都博覧協会	206,838
180		4月1日～5月10日	裏日本鉄道開通 新舞鶴開港記念博覧会	京都府・舞鶴		
181		10月20日～11月30日	大阪市電気軌道開業満20年交通博覧会	大阪府・天王寺公園勧業館	大阪市	358,070
182			大牟田産業博覧会	福岡県		
183			熊本産業博覧会	熊本		
184			電気工業博覧会	愛知県・名古屋		
185	1924	3月20日～5月20日	東京殿下御成婚奉祝万国博覧会参加50年記念博覧会	京都府・岡崎公園	京都市	1,217,927
186			子供衛生博覧会	長崎県		
187	1925	3月10日～5月18日	第2回畜産工芸博覧会	東京都・上野公園	中央畜産会	273,617
188		3月15日～4月30日	大大阪記念博覧会	大阪府・天王寺公園	大阪毎日新聞社	1,878,468
189		3月20日～5月25日	優良国産博覧会	京都府・岡崎公園勧業館	京都博覧会社	310,812
190		3月21日～5月10日	新農業博覧会	三重県・宇治山田市	名古屋新聞社	
191		4月10日～5月28日	日本絹業博覧会	兵庫県・神戸港海岸埋立地、湊川公園	兵庫県博覧会協会	1,000,000
192		6月15日～7月10日	コドモの趣味と衛生博覧会	兵庫県・湊川公園		
193		8月10日～9月18日	市制10周年記念大連勧業博覧会	上海・上海西公園	大連市	360,524
194		10月	電気博覧会	東京都・上野公園		

195	1926	1 月 13 日～2 月 14 日	皇孫御誕生記念こども博覧会	東京都・上野公園	東京日日新聞社	500,000
196		1 月 20 日～5 月 18 日	大日本勸業博覧会	岡山県・岡山市		
197		3 月 19 日～5 月 21 日	第 2 回化学工業博覧会	東京都・上野公園	化学工業協会	
198		3 月 20 日～5 月 23 日	国際発展博覧会	京都府・岡崎公園勸業館	京都博覧協会	198,903
199		3 月 20 日～5 月 31 日	電気代博覧会	大阪府・港区 八番町天王寺公園	社団法人電気協会大阪支部	2,900,682
200		4 月 1 日～5 月 10 日	全国産業博覧会	兵庫県・姫路城南棟兵場	姫路商業会議所	440,416
201		5 月 1 日～6 月 10 日	こども教育博覧会	大阪府	大阪朝報社	
202		5 月 1 日～6 月 20 日	衛生大博覧会	大阪府・天王寺公園勸業館	大阪新報社	
203		5 月 13 日～6 月 11 日	朝鮮大博覧会	朝鮮・景福宮	朝鮮新聞社	
204		6 月 11 日～7 月 20 日	新潟築港記念博覧会	新潟県・新潟新公園	新潟市	
205		7 月 1 日～8 月 20 日	皇孫御誕生記念こども博覧会	京都府・岡崎公園	大阪毎日新聞社・東京日日新聞社	1,509,544
206		8 月 1 日～8 月 30 日	国産振興博覧会	北海道・札幌中島公園、北海道商品陳列所	北海道タイムス社	513,051
207		10 月 1 日～10 月 31 日	名古屋衛生博覧会	愛知県・名古屋	名古屋市総合衛生会	
208		10 月 1 日～	国産振興汽車博覧会	大阪府・東京等7大都市		

出所：

橋爪紳也、寺下勲、「日本の博覧会 寺下勲コレクション」『別冊太陽：日本のこころ 133』平凡社、2005 年。

橋爪紳也、中谷作次、『博覧会見物』、学芸出版社、1990 年。

山本光雄、『日本博覧会史』、理想社、1973 年。